

第3章 6区の調査成果

第1節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

今年度の調査では竪穴住居跡6棟、段状遺構4基、掘立柱建物跡1棟、方形土坑7基、土坑3基、溝2条を新たに確認した。昨年度調査区にまたがるSI20を加えると竪穴住居跡は7棟となる。

遺構の時期は、本遺跡の中心である弥生時代中期後葉のものが多数を占めるが、後期前葉や後期中葉、さらに後期末の遺構もわずかながら存在する。西側斜面部は昨年調査した4区西尾根の続きであり、西に向かい傾斜していく緩斜面に竪穴住居跡や方形土坑などが築かれている。調査地南側は南北方向を示すグリッド数字でいうと36ラインまでは弥生時代の遺構は存在せず、南側の調査地外へ遺構が広がる可能性はあるが、遺構の分布がそれほど密ではない印象を受ける。(湯村)

(2) 竪穴住居跡

SI20(第15・16図、PL.2・77)

L26グリッド、尾根平坦部から西に向かう緩斜面に位置する。およそ2/3を昨年度調査しており、ピットや土層の番号は昨年度調査の報告を踏襲している。

径3.5mのやや不整な円形を呈し、深さは最大で43cmを測る。床面積は7.87㎡である。壁溝は断面U字形で幅6～15cm、深さは最大で4.6cmを測る。床面を全周せず、北側で途切れる。

支柱穴はP1・P2・P4・P8の4本で、支柱間距離はP1-P2間が1.7m、P2-P8間が2.0m、P8-P4間が1.8m、P4-P1間が1.4mを測る。今年度検出したP8はやや壁際に近く、上面に貼床が施されていたこともあり、住居が建て替えられた可能性もあるが、他の支柱穴や壁溝のあり方からはそれを裏付けることはできない。P3は中央ピットと考えられる。

昨年度の調査では床面が広く被熱していたり、床面に近い位置で焼土塊や炭化材が出土したこともあり、焼失住居と想定した。今年度の調査でも同じような様相が確認できた。ただ炭化材はほとんどが小片で部材の状態を示すものはなかった^(註)。

SI20は昨年度調査の結果から弥生時代後期中葉(V-2)と考えられる。今回出土した土器で同じ時期を示すものはなく、壺または甕の体部下半から底部である87は弥生時代中期後葉に属する可能性が高い。SI20は弥生時代中期後葉のSK153を切っているの、混入したものであろう。(湯村)

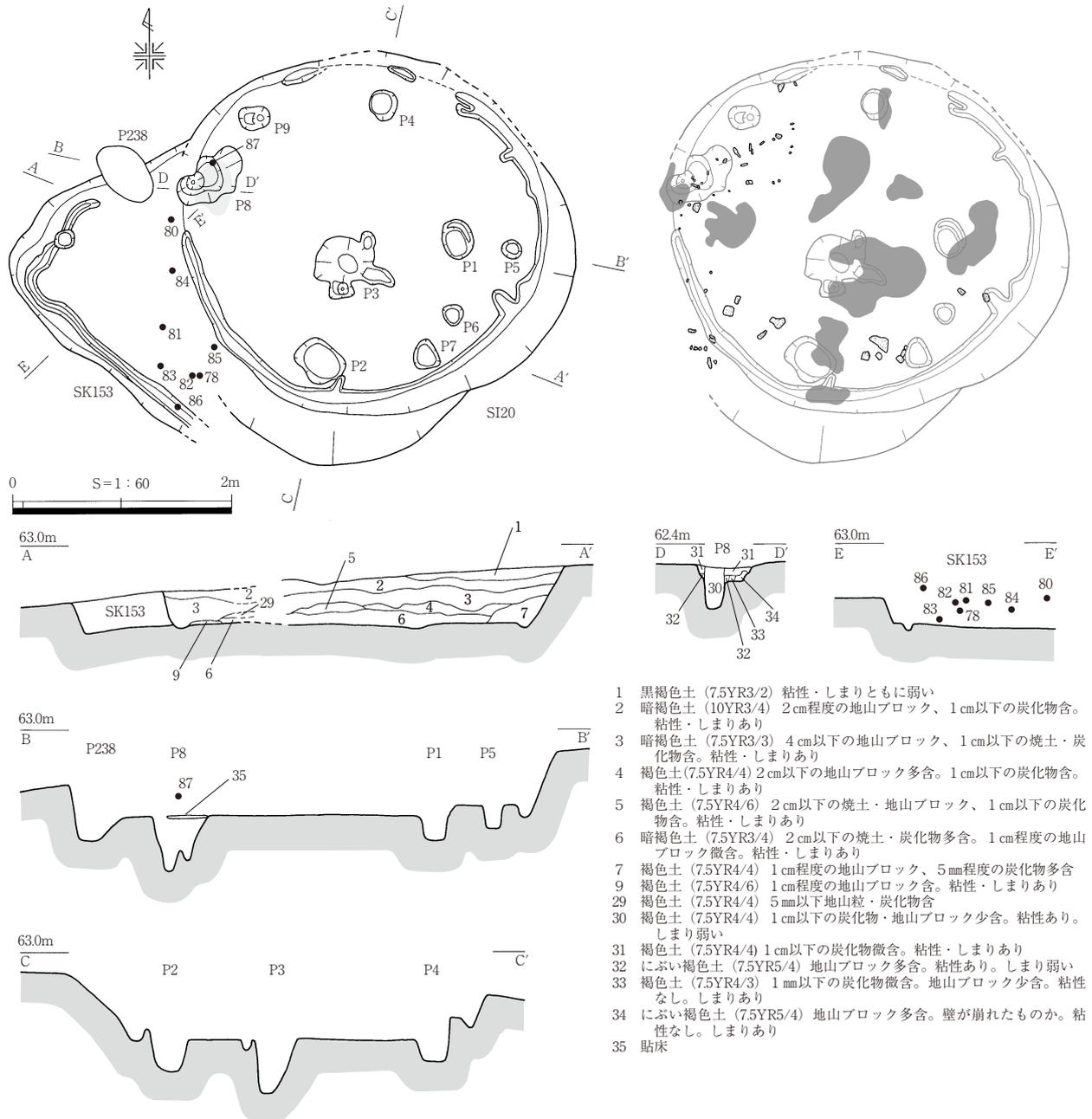
(註)昨年度調査で出土した炭化材3点について樹種同定を行った結果、1点がシイノキ属、2点がアカガシ亜属であることが判明している。

SI40(第17・18図、PL.3・78・104)

調査区北端に近いK21からK22グリッドにかけて位置する。西側に向かう斜面の傾斜が強まるあたりに築かれている。

斜面下方側が流出しているが、径3.6m程の円形または隅丸方形と思われる。残りのよい斜面上方側で深さ40cmを測る。床面積は推定で9.87㎡である。

住居の中央に位置するP2が中央ピットと考えられるが、それ以外は東壁際にP1が認められるのみで、これも深さが最大で15cmと浅く、支柱穴の配置等は明らかでない。P1とP2は幅13cm、深さ



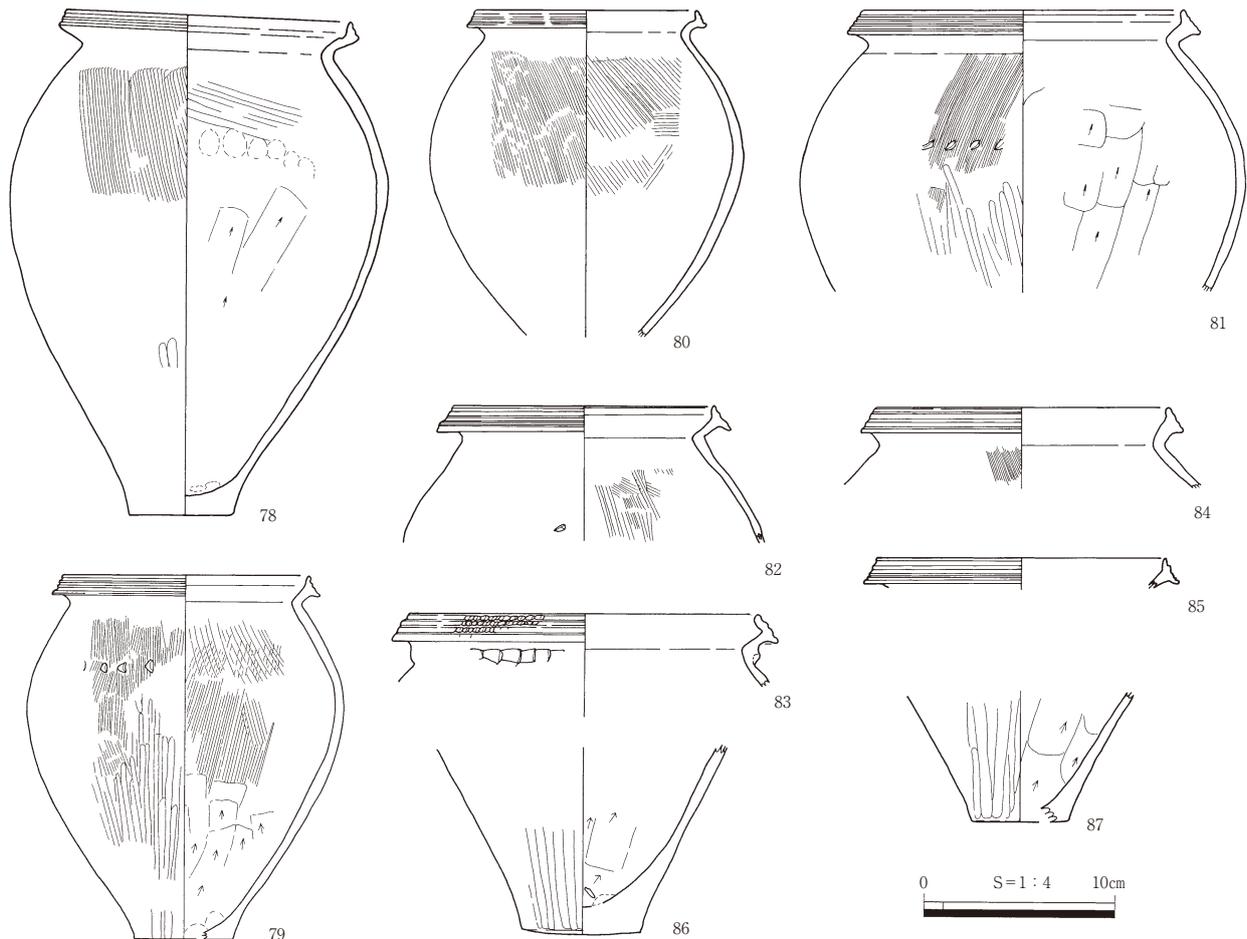
第15図 SI20、SK153

5 cm程度の床溝で結ばれている。壁溝は壁の検出範囲全体に見られ、幅7 cm程度、深さ5 cm程度を測る。P2の南東側には床面から若干高い位置で焼土の集中範囲が認められた。

埋土は斜面の傾斜に沿うように堆積しており、住居廃絶後に斜面上方からの自然堆積により埋没したものと考えられる。

本住居の特徴として、斜面上方側である住居東側を中心に周堤溝が伴うことが挙げられる。住居を囲むように、1.2mから1.7m離れてコ字状に巡っている。幅は最小で27cm、最大で97cmと開きがあるが、おおむね50cm程度であり、深さは最大で10cmと浅い。この周堤溝は住居の外側に盛られた周堤に伴うものと考えられるが、周堤そのものは流失したものか検出できなかった。住居の埋土には周堤に由来するものがあると思われる。

遺物は住居および周堤溝から出土した。88は住居床面と周堤溝から出土したものが、89は住居床面



第16図 SI20、SK153出土遺物

とP1から出土したものがそれぞれ接合している。92も住居床面出土。敲石S1・S2は厚手の棒状礫の上下両端に敲打痕を残す。石錘S3・S4はともに住居床面出土。

住居床面出土土器の特徴から、SI40は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられる。(湯村)

SI42(第19図、PL.4・79・104)

L26グリッドで検出された。西に向かう緩やかな斜面に築かれた竪穴住居跡である。

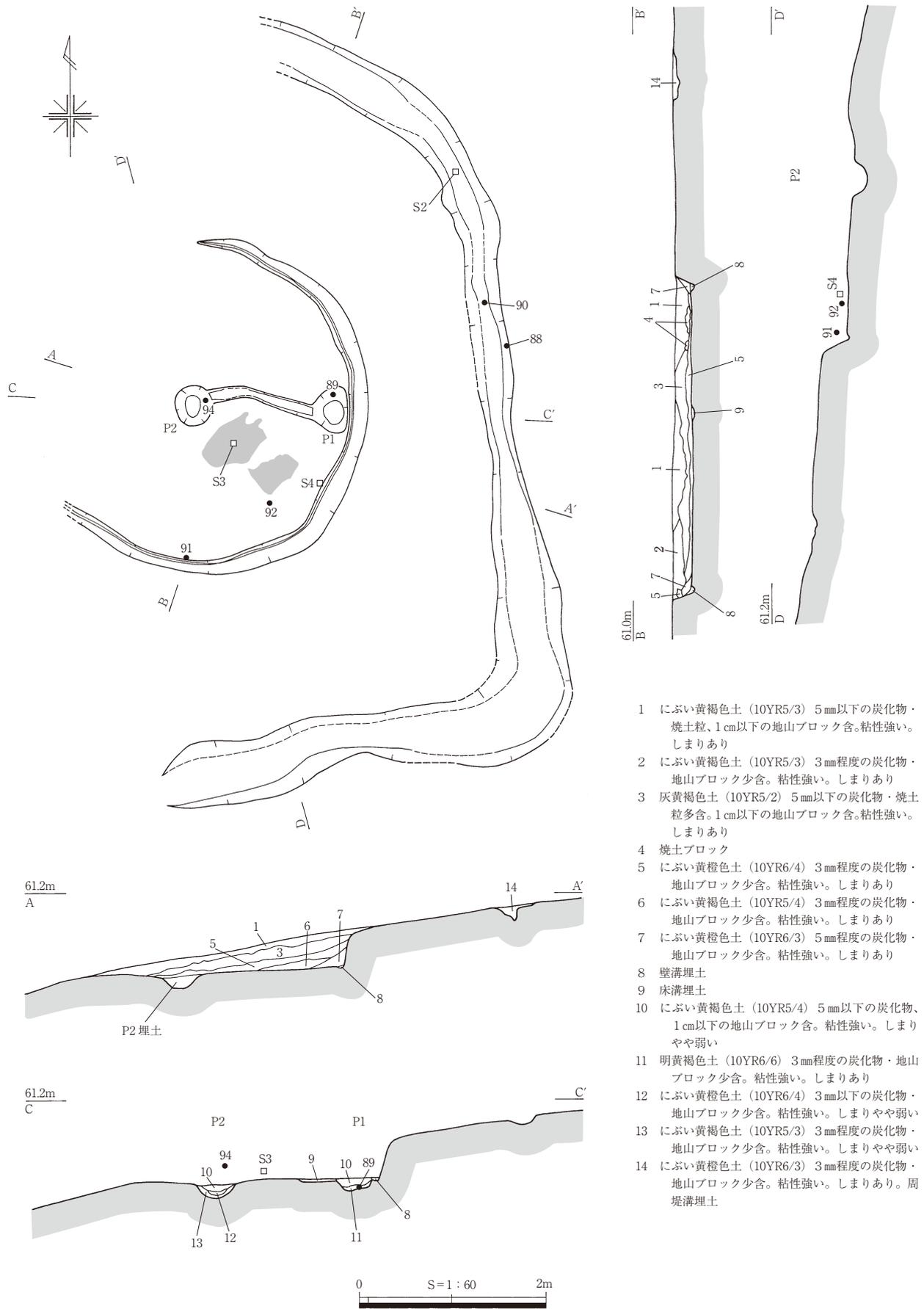
平面形は隅丸方形を呈し、長軸、短軸ともに3.1m、深さは最大で0.6mを測る。床面積は5.53㎡である。

床面には10基のピットが認められた。径は20~36cmであるが、深さはほとんどが10cmに満たないもので、埋土の観察でも柱痕跡は認められず、主柱穴の配置等は不明である。P6は住居の中央にあるものの、規模は他のピットと変わらず、積極的に中央ピットと位置づけられない。これらのピットは床面東側を中心に施された貼床の上面から掘られたものがほとんどで、P10のみ貼床下から検出された。

住居の東壁から西壁の一部にかけて幅、深さともに7cm程度の壁溝が認められる。住居南西部では木の根の攪乱により途切れがちな検出となった。

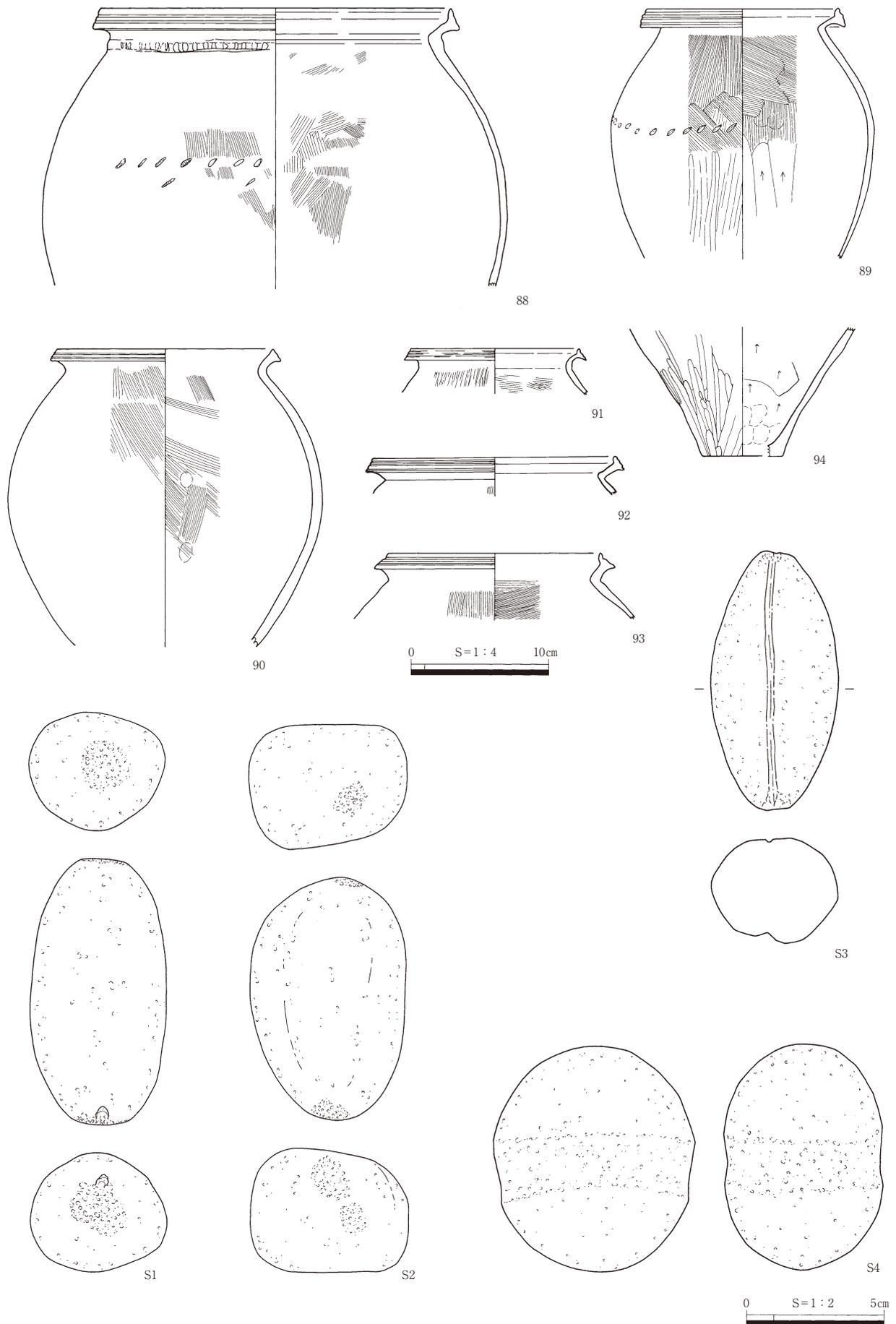
埋土は住居全体を覆う1・5・7・14層と周囲からの埋没を示す他の土層に分けられる。これらは住居廃絶後に自然堆積したものと思われる。

遺物は床面出土のものがなく、埋土上層から中層にかけて出土した。遺構の時期を決定する根拠としてはやや弱いですが、遺物の出土層位としては最も下位の7層から出土している102の特徴から、SI42

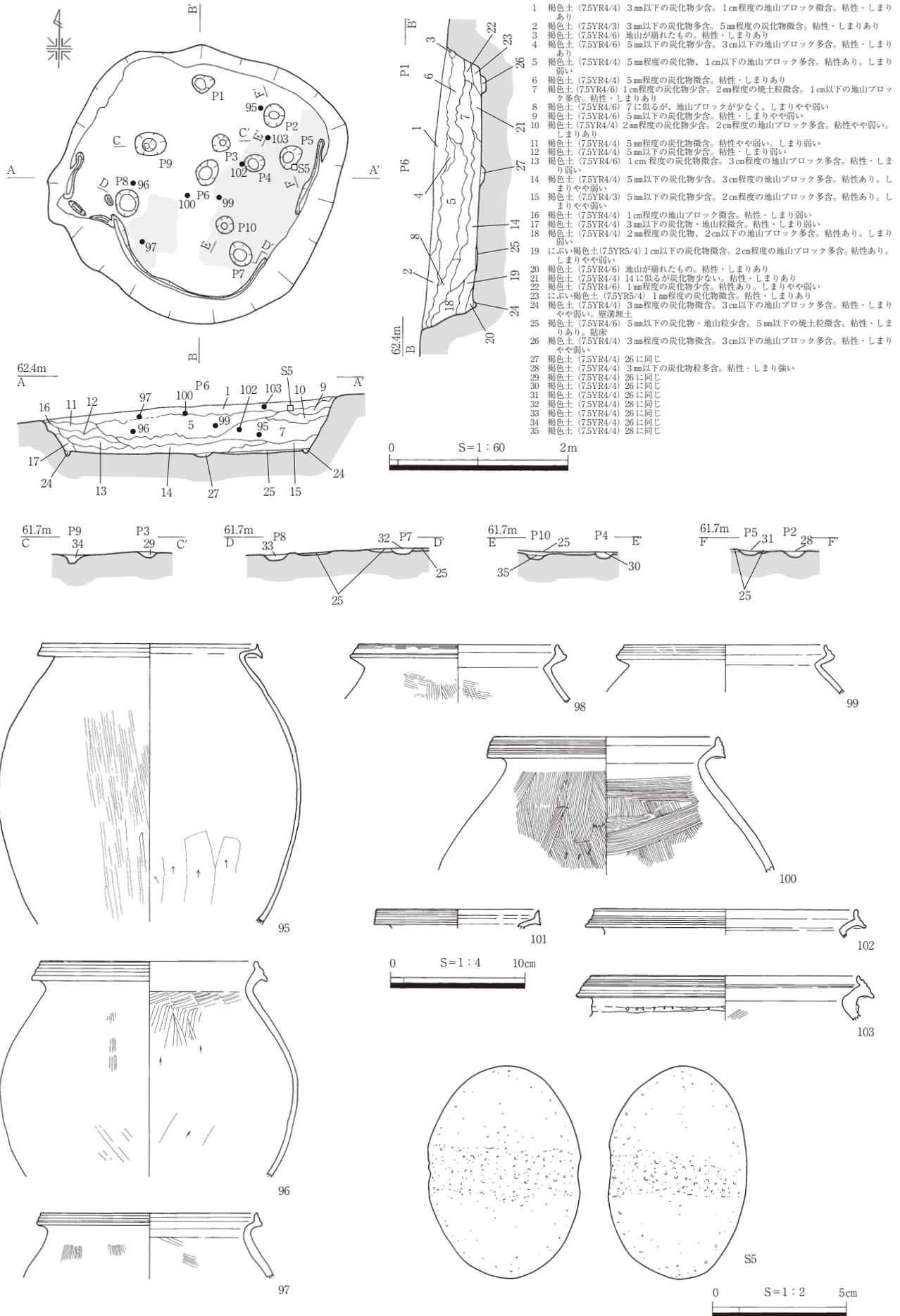


- 1 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒、1cm以下の地山ブロック含。粘性強い。しまりあり
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり
- 3 灰黄褐色土 (10YR5/2) 5mm以下の炭化物・焼土粒多含。1cm以下の地山ブロック含。粘性強い。しまりあり
- 4 焼土ブロック
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 5mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり
- 8 壁溝埋土
- 9 床溝埋土
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 5mm以下の炭化物、1cm以下の地山ブロック含。粘性強い。しまりやや弱い
- 11 明黄褐色土 (10YR6/6) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり
- 12 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 3mm以下の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりやや弱い
- 13 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりやや弱い
- 14 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 3mm程度の炭化物・地山ブロック少含。粘性強い。しまりあり。周堤溝埋土

第17図 SI40



第18図 SI40出土遺物



第19図 SI42および出土遺物

は弥生時代中期後葉(Ⅳ-2~3)の住居と考えられる。

(湯村)

SI43(第20図、PL.5・80・103・104)

M39グリッドの西端、標高66.3m付近に位置し、南側約4mにはSI52が隣接する。

隅丸方形を呈し、長軸4.8m、短軸4.4m、検出面から床面までの深さは西側で最大55cmを測る。東から南東にかけての壁と床の一部が根攪乱によって失われている。床面積は15.05㎡である。

壁溝は断面U字形で、幅7~28cm、深さは最大7cmを測る。床面の原形が保たれていない東側の一部を除き全周し、北から東部分は壁際から離れやや内側を巡る。主柱穴はP1からP4の4本柱で、P1-P2間が2.7m、P2-P3間が2.3m、P3-P4間が2.4m、P4-P1間が2.2mである。柱穴はいずれも60~70cmの深さがある。柱痕跡、裏込土が認められることから、住居廃絶時には柱材が柱穴中に残された状態だったと考えられる。中央ピットはP5で、下層には炭化物が多量に含まれ、その南側床面には薄い炭化物層も認められた。炭化物層直下の床面には、赤変や硬化などの痕跡は認められなかった。床面は西側から南側にかけてホーキ・ホワイトローム・ハードロームブロックが入り混じる貼床が認められた。

埋土は大きく3層に分けられる。根攪乱の影響を受けてはいるものの、西から東へ概ね斜面の傾斜に沿うように堆積しており住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は埋土上層からの出土が多く、下層あるいは床面出土のものは少なかった。壁溝南側埋土中からは砥石S7が出土している。出土した土器は壺、甕の破片で、拡張された口縁部外面に凹線文を施すものが主体であるが、108~110のように、内面頸部までヘラケズリが及ぶものがある。このうち108はP5埋土中から出土している。

以上の出土遺物から、本遺構は弥生時代後期前葉(V-1)に位置づけられる。

(原田)

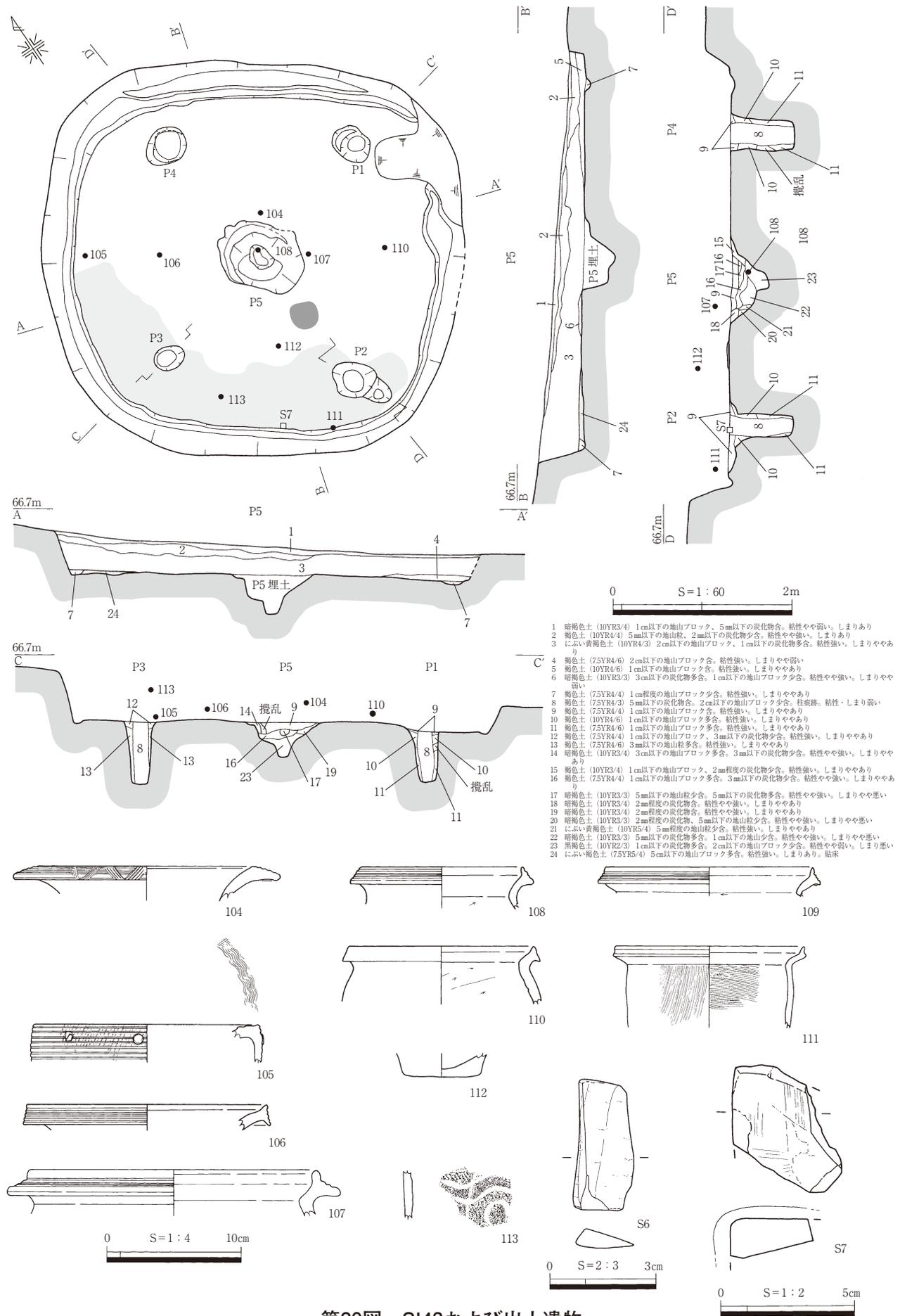
SI49(第21・22図、PL.6・80・81)

M37グリッド、調査区南西の緩斜面地に位置する平面円形の竪穴住居跡である。検出面での標高はおよそ65.0mである。本住居は、時期不明の落とし穴であるSK185、古墳時代の住居であるSI48と重複しており、SK185の南側の上層部分を切り、本住居南側1/4ほどがSI48によって切られる。

本住居の規模は径6.10mである。検出面から床面までの深さは20cmで、床面積は推定で26.52㎡を測る。検出面から床面までの埋土は13層に分けられるが、主として下層に灰黄褐色土の6・9層、その上に黒褐色土の1層が堆積する。また、本住居は検出の段階で6層中に長さ95cm、幅10cmの炭化材が認められたことから、焼失住居の可能性が考えられたが、埋土中には他に目ぼしい炭化材や焼土は認められなかったことから、堆積過程の混入と判断した。

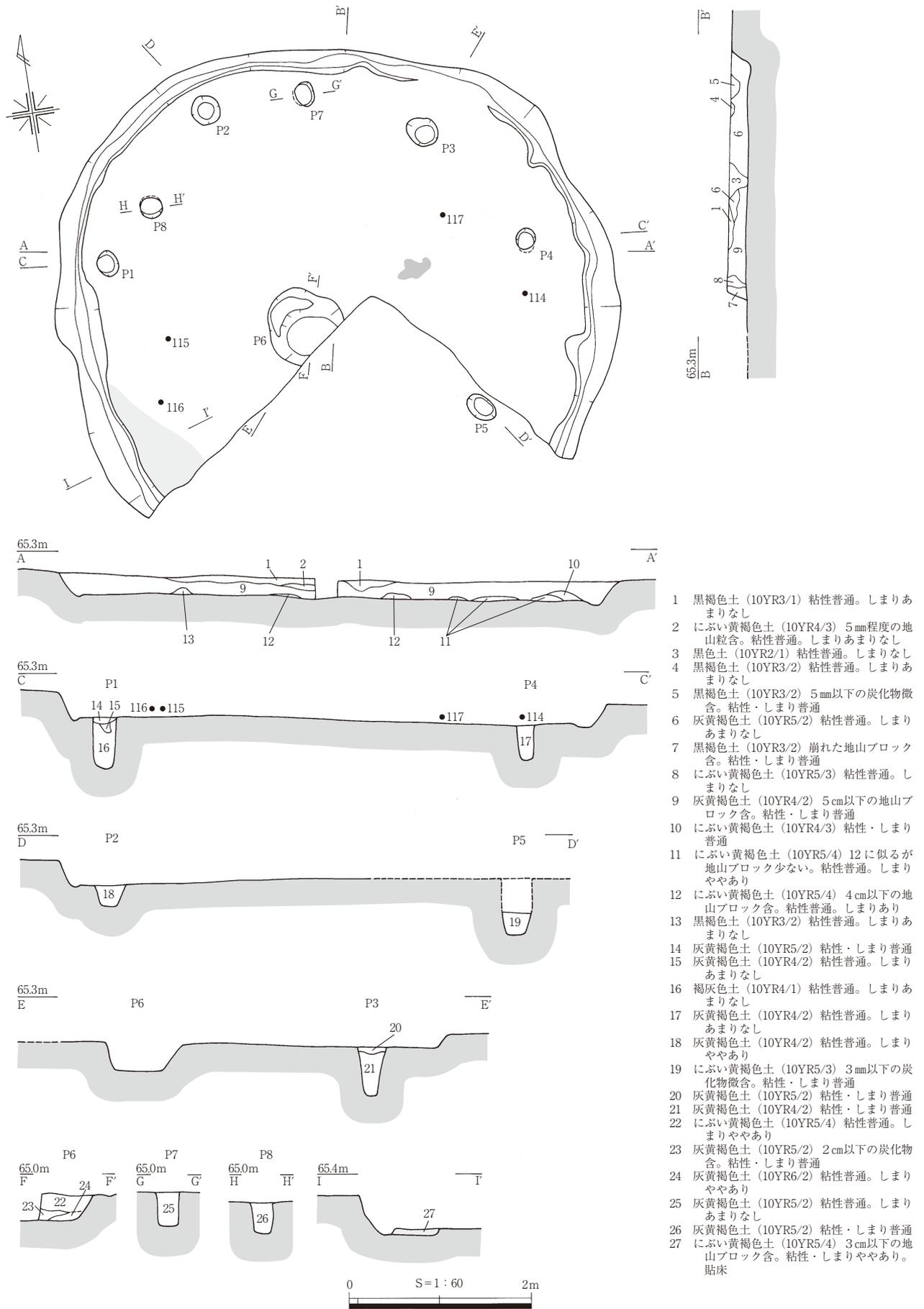
残存する範囲での床面の状況は、白色粘質土にAT、ホーキブロックを混ぜた貼床を南西側の一部に施す。壁溝は、北西の一部に不明瞭になる範囲が認められるが、不明瞭な範囲もわずかに周囲の床面に比べ低い高さであることから本来は全周したものと思われる。

柱穴はP1~4とSI48の貼床除去後に検出したピットであるP5が考えられる。柱配置から6本柱の竪穴住居であったと思われるが、南西側にあったと思われる柱穴はSI48に破壊されたためか確認することはできなかった。P6は中央ピットと考えられ、径87cm、深さ30cmを測る。また、住居中央からやや東側の地点では20~30cmの範囲で焼土面も認められる。

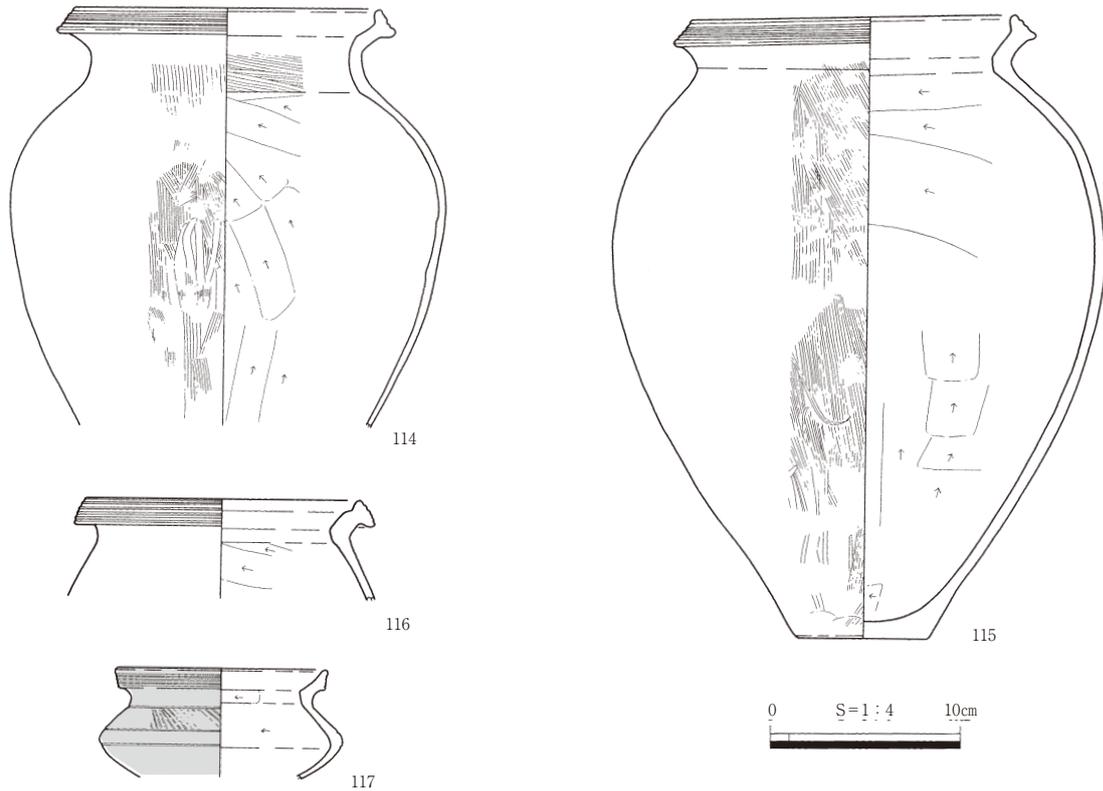


- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物多含。粘性やや弱い。しまりあり
- 2 褐色土 (10YR4/4) 5mm以下の地山粒、2mm以下の炭化物少含。粘性やや強い。しまりあり
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 2cm以下の地山ブロック、1cm以下の炭化物多含。粘性強い。しまりややあり
- 4 褐色土 (7.5YR4/6) 2cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりやや弱い
- 5 褐色土 (10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりややあり
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) 3cm以下の炭化物多含。1cm以下の地山ブロック少含。粘性やや強い。しまりやや弱い
- 7 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック少含。粘性強い。しまりややあり
- 8 褐色土 (7.5YR4/3) 5mm以下の炭化物多含。2cm以下の地山ブロック少含。柱状跡。粘性・しまり弱い
- 9 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりややあり
- 10 褐色土 (10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりややあり
- 11 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりややあり
- 12 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の地山ブロック、3mm以下の炭化物少含。粘性強い。しまりややあり
- 13 褐色土 (7.5YR4/6) 3mm以下の地山粒多含。粘性強い。しまりややあり
- 14 暗褐色土 (10YR3/4) 3cm以下の地山ブロック多含。3mm以下の炭化物少含。粘性やや強い。しまりややあり
- 15 褐色土 (10YR3/4) 1cm以下の地山ブロック、2mm程度の炭化物少含。粘性強い。しまりややあり
- 16 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の地山ブロック多含。3mm以下の炭化物少含。粘性やや強い。しまりややあり
- 17 暗褐色土 (10YR3/3) 5mm以下の地山粒少含。5mm以下の炭化物多含。粘性やや強い。しまりやや悪い
- 18 暗褐色土 (10YR3/4) 2mm程度の炭化物多含。粘性やや強い。しまりややあり
- 19 暗褐色土 (10YR3/4) 2mm程度の炭化物多含。粘性やや強い。しまりややあり
- 20 暗褐色土 (10YR3/3) 2mm程度の炭化物、5mm以下の地山粒少含。粘性やや強い。しまりやや悪い
- 21 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 5mm程度の地山粒少含。粘性強い。しまりややあり
- 22 暗褐色土 (10YR3/3) 5mm以下の炭化物多含。1cm以下の地山少含。粘性やや強い。しまりやや悪い
- 23 暗褐色土 (10YR2/3) 1cm以下の炭化物多含。2cm以下の地山ブロック少含。粘性やや弱い。しまり悪い
- 24 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 5cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまりあり。粘床

第20図 SI43および出土遺物



第21図 SI49



第22図 SI49出土遺物

本住居の出土遺物には、床面から5～10cmほどの高さから弥生土器が見られた。壺114、甕115・116は内面のケズリ調整が頸部まで施され、V-1様式に相当する。壺117は口縁部から体部下半までの破片のため遺存はしないが、台部が付く可能性がある。肩部には2条の沈線で区画された範囲に斜め方向の沈線が施される。口縁の立ち上がりからV-2様式に相当する。

さて本遺構の時期であるが、出土遺物の壺117から、弥生時代後期中葉(V-2)頃と思われる。

(野口)

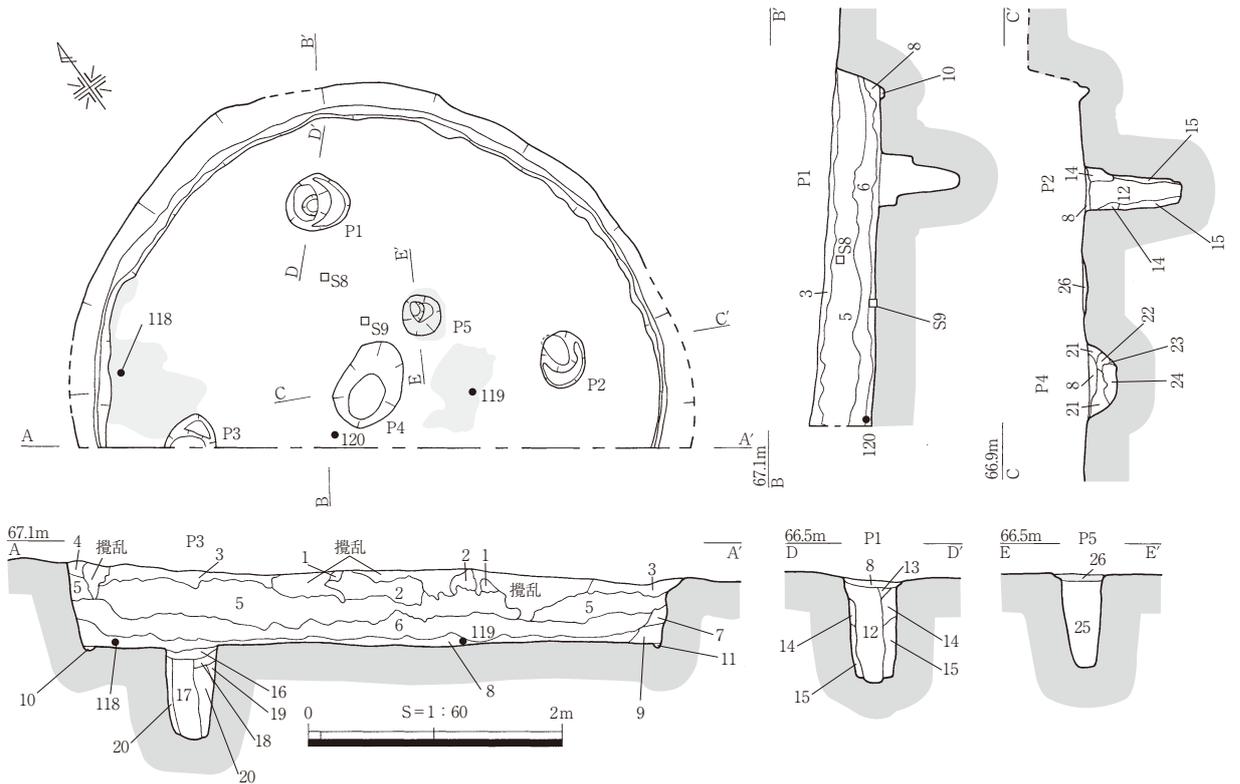
SI52(第23図、PL.6・80・104)

調査区南側境界にかかるM40グリッドの西端、標高66.8m付近に位置する。北側約4mにはSI43が隣接する。

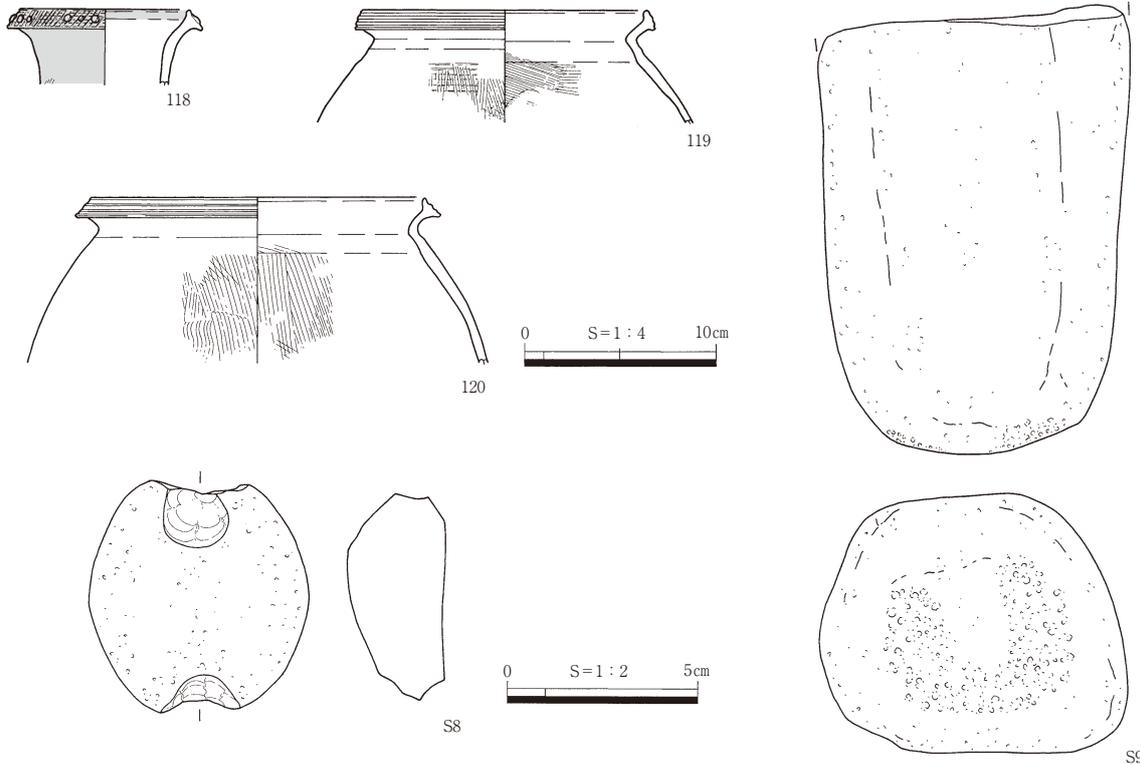
本遺構の半分近くは調査区外になるため、推定になるが円形を呈するものと思われる。径4.9m、検出面から床面までの深さは北西側で最大66cmを測る。床面積は調査部分で9.86㎡、推定復元部分も加えると15.44㎡である。

壁溝は断面U字形で、幅5～16cm、深さは最大7cmを測る。検出範囲では途切れることなく壁際を巡っており、全周するものと思われる。

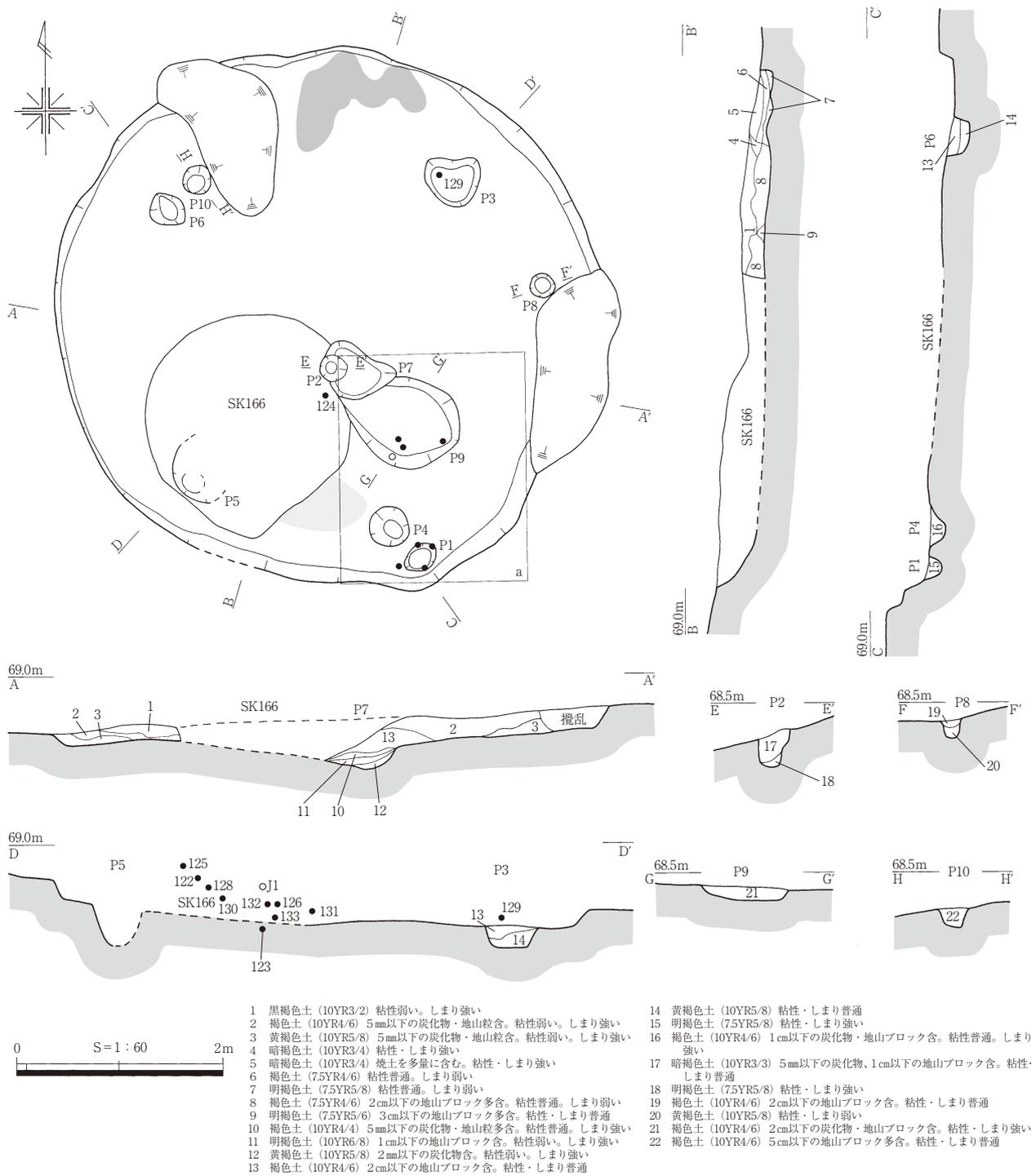
確認できた支柱穴はP1～P3の3つだが、P1の対角にもう1つ柱穴があることが想定できるので4本柱であったと考えられる。柱穴間距離は、P1-P2間が2.3m、P2-P3間が3.1m、P3-P1間が2.2mである。柱穴の深さはP1が82cm、P2が75cm、P3が73cmである。いずれも柱痕跡、裏込土が確認できることから、住居廃絶時には柱材は柱穴中に残された状態だったと考えられる。中央ピットはP4で最下層に炭化物を多く含む。床面はP3から北西側壁面の間と、P5上面及びその



- 1 におい黄褐色土 (10YR4/3) 3mm以下の炭化物微含。粘性強い。しまりやや強い
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 3mm以下の炭化物含。粘性・しまりやや弱い
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 2cm以下の地山ブロック、1cm以下の炭化物少含。粘性・しまり強い
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) 3mm以下の炭化物少含。粘性強い。しまりやや強い
- 5 暗褐色土 (7.5YR3/4) 3cm以下の地山ブロック多含。1cm以下の炭化物少含。粘性・しまり強い
- 6 暗褐色土 (7.5YR3/3) 5cm以下の地山ブロック多含。2cm以下の炭化物含。粘性強い。しまりやや強い
- 7 灰褐色土 (7.5YR4/2) 5mm程度の地山粒少含。粘性やや強い。しまりやや弱い
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 3cm以下の地山ブロック、1cm以下の炭化物少含。粘性・しまりやや強い
- 9 暗褐色土 (7.5YR3/3) 5mm程度の地山粒少含。粘性・しまり強い
- 10 暗褐色土 (10YR3/4) 3cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物少量含。粘性・しまりやや強い。壁溝埋土
- 11 暗褐色土 (7.5YR3/3) 5mm程度の地山粒少量含む。粘性・しまり強い。壁溝埋土
- 12 暗褐色土 (10YR3/3) 1cm以下の地山ブロック、3mm程度の炭化物含。粘性やや弱い。しまり弱い
- 13 褐色土 (7.5YR7/4) 3mm程度の地山粒微含。粘性やや強い。しまりやや弱い
- 14 褐色土 (10YR4/6) 3mm程度の地山粒多含。粘性・しまりやや強い
- 15 褐色土 (7.5YR4/4) 3cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまり強い
- 16 褐色土 (7.5YR4/3) 1cm以下の地山ブロック含。粘性強い。しまりやや強い
- 17 暗褐色土 (10YR3/3) 5cm以下の地山ブロック少含。粘性やや強い。しまり弱い
- 18 褐色土 (7.5YR4/6) 2cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまり強い
- 19 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまり強い
- 20 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm地山ブロック少含。粘性やや強い。しまりやや弱い
- 21 におい黄褐色土 (10YR4/3) 1cm以下の地山ブロック含。粘性強い。しまりやや弱い
- 22 暗褐色土 (10YR3/3) 1cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまりやや強い
- 23 褐色土 (7.5YR4/4) 5mm程度の地山粒少含。粘性強い。しまりやや強い
- 24 暗褐色土 (10YR3/3) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物含。粘性やや強い。しまりやや弱い
- 25 褐色土 (7.5YR4/3) 1cm以下の地山ブロック含。粘性・しまりやや弱い
- 26 におい褐色土 (7.5YR5/3) 3cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまり強い。貼床



第23図 SI52および出土遺物

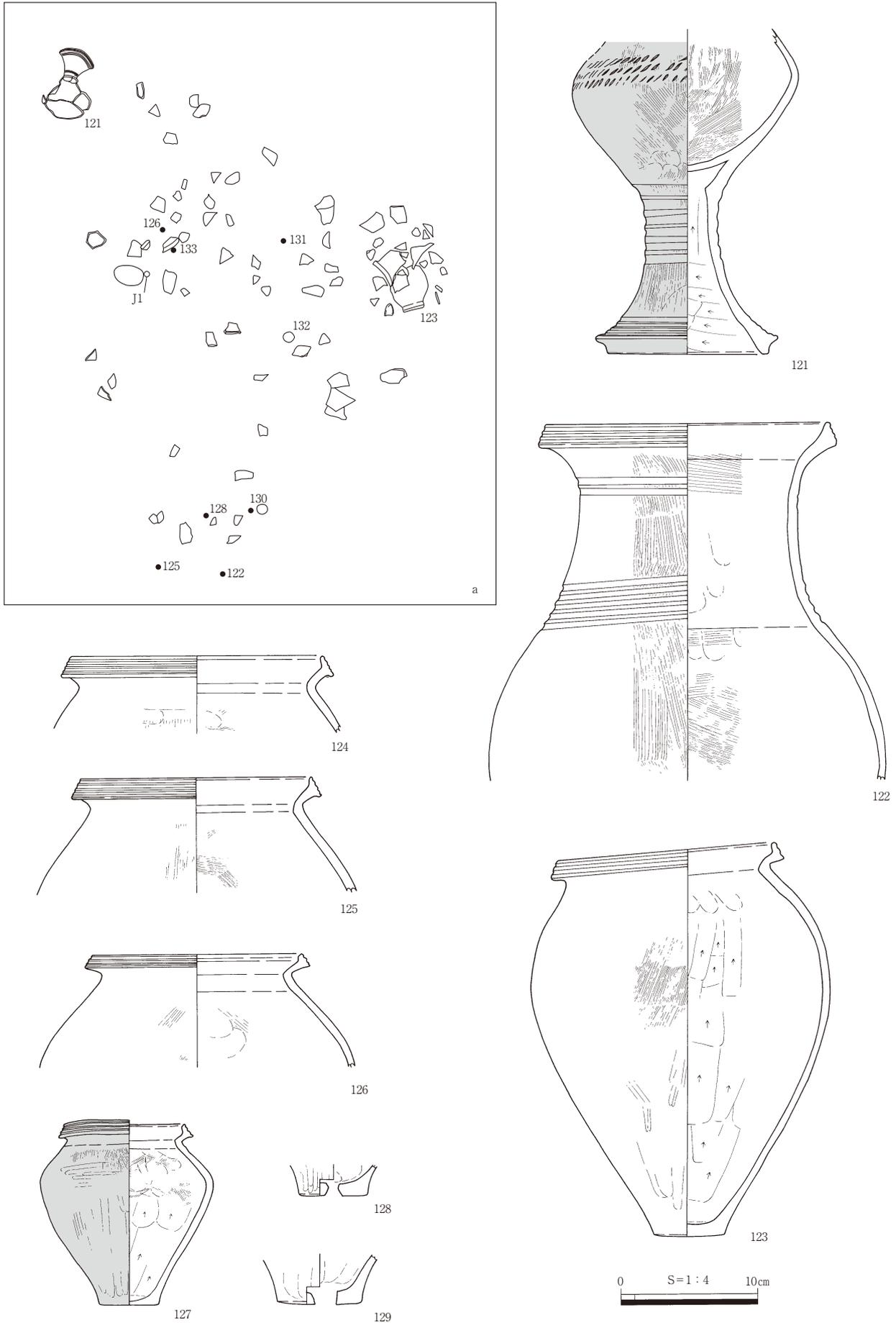


第24図 SI53(1)

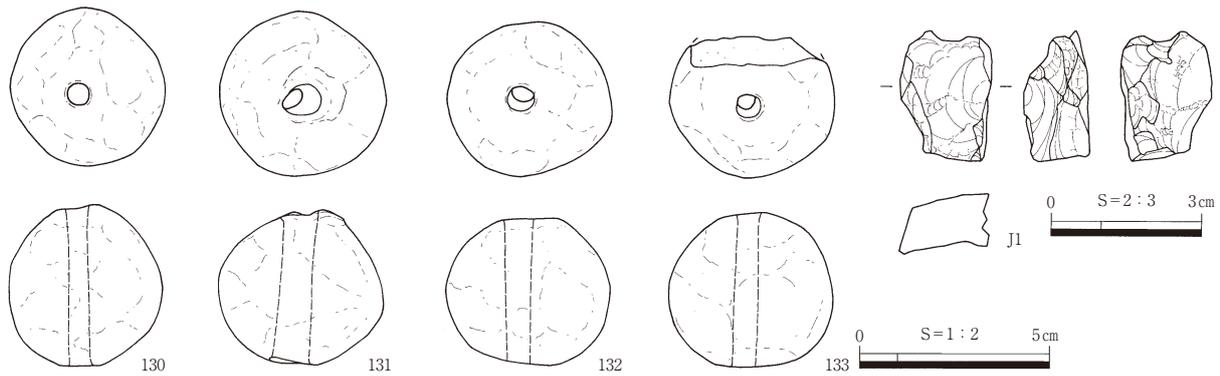
周辺にわたりホーキ・A T・ホワイトローム・ハードロームブロックが入り混じる貼床が認められた。貼床除去後に確認できたピットはP5のみで、柱痕跡はないが規模、形状などから柱穴と考えられる。別の壁溝が掘られたり、主柱穴の位置を動かしたりした痕跡は見られないが、建て替えや小規模な改築が行われた可能性が考えられる。

埋土は大きく4層に分けられる。著しく根攪乱の影響を受けてはいるものの、西から東へ概ね斜面の傾斜に沿うように堆積しており住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は上下層通じてそれほど多くは出土しなかった。土器は壺、甕の破片が中心である。118は口



第25図 SI53(2)および出土遺物(1)



第26図 SI53出土遺物(2)

縁部外面を凹線文のほかキザミと円形浮文で飾る壺。外面は赤色塗彩される。119・120の甕はともに口縁部外面に3条の凹線を巡らせ、内面頸部以下はハケ調整である。119の外面肩部にはハケ調整以前に施されたタタキ痕が残る。石器は床面から敲石S9が出土している。

以上の出土遺物から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられる。(原田)

SI53(第24~26図、PL.7・81・82・109)

I~J41グリッド南端、標高約68~69mの斜面に位置する。南西側の一部をSK166に切られる。平面形は径約5mの円形を呈し、床面積は19.80㎡である。深さは残りの良い南壁で検出面から約40cm、北壁は約10cmである。当初は土坑と認識して調査を進めたが、平面規模が土坑としては大きいこと、平坦な床面を有すること、後述するように本遺構の焼失に伴うと考えられる焼土が北縁で検出され、焼失住居の可能性が考えられたことなどから竪穴住居跡と判断した。

ピットは10基検出したが、P2、P5を除き、いずれも床面からの深さが20cm程度と浅い。なお、P5はSK166によって大半が破壊されている上、SK166の調査時にSK166の埋土と誤認して掘り進めてしまったため、正確な規模は不明である。

これらのピットのうち、位置や埋土の土色から支柱穴と考えられるものは、P3・4・5・10である。柱穴間距離はP3-4から順に時計回りに3.5m、2.0m、2.9m、2.6mである。現況では4本柱という判断であるが、P4はややP5側に寄った位置にあるため、P4-5間の距離は他の柱穴間に比べて狭く、柱穴の配置はやや歪になっている。本遺構の東側の一部が後世の耕作等によって攪乱を受けており、本来はこの部分にもう1基ピットがあり、5本柱であった可能性もある。P4とP5の間の床面には貼床を施していた。

本遺構の北縁には、検出段階から東西1.3m×南北0.7mの範囲で焼土が認められた。土層断面の観察では、この焼土は本遺構のほぼ全体を覆う1層(黒褐色土)にパックされており、住居廃絶後に焼失した際、被熱赤化して崩落した土屋根の可能性が考えられる。ただし、埋土中に微細な炭化物は含まれていたが、床面や埋土中に住居の構造材と考えられる炭化材は遺存していなかった。

遺物の出土は住居南半分に偏っており、北側からの出土は希薄であった。121は脚付壺である。口縁部は欠損しているが、床面直上からの出土で、ほぼ南北方向に軸を揃え、原形を保った状態で出土した。脚部外面を凹線文で飾り、外面は赤彩を施す。122は長頸壺である。南東側の壁際からまとまって出土し、一部はP1の埋土中からも出土した。124~126は甕の口縁部である。127は小型の甕で、ほぼ完形に復元できた。外面はハケ、内面はケズリを施し、外面は赤彩されている。128・129は甕の

底部でどちらも焼成後穿孔を施しているが、129が底部外面から内面に向けた打撃によって穿孔しているのに対し、128は錐状工具によって穿孔をしており、両者の手法は異なる。なお、128の穿孔であるが、断面を観察すると内外面の開口端部が最も広く、中程に向かうにつれて径がすぼまる形状を呈しており、かつ両端面に研磨の痕跡が認められることから、内側と外側の両方から錐状工具の回転によって穿孔されたと考えられる。

土玉は4点出土しているが、131を除いて穿孔用具を抜き取った後に丁寧に土の盛り上がりを整形した痕跡が認められる。近接して切り合い関係にあるSK166でも土玉が5点出土している(第48図)が、こちらは穿孔用具を抜き取った後の孔周辺の土の盛り上がりを整形した痕跡は認められない。穿孔用具の径は130、132、133が概ね6mm程度にまとまるが、131は9mmとやや太い。この径がSK166出土土玉の孔径に近似することから、131の作成時期は他の3点と異なりSK166出土土玉の時期に近いが、もしくはSK166の土玉の製作と関連するものである可能性が考えられる。J1は水晶の玉素材である。1層からの出土で、出土レベルも高いことから本遺構に伴うものではなく、混入の可能性も考えられる。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉(Ⅳ-2~3)と考える。

(濱本)

(3) 段状遺構

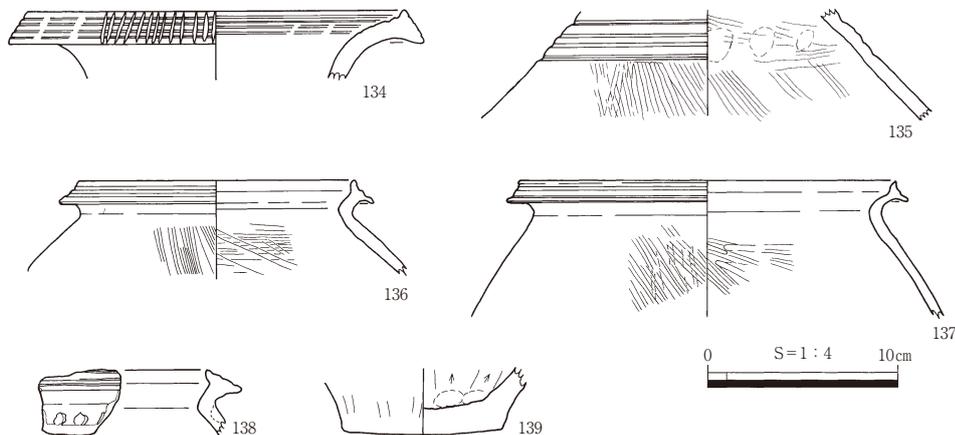
SS12(第27・28図、PL.8・83)

L25グリッド、標高62m付近の緩斜面に位置し、南西側にSI42が、西側にSK146がそれぞれ近接する。

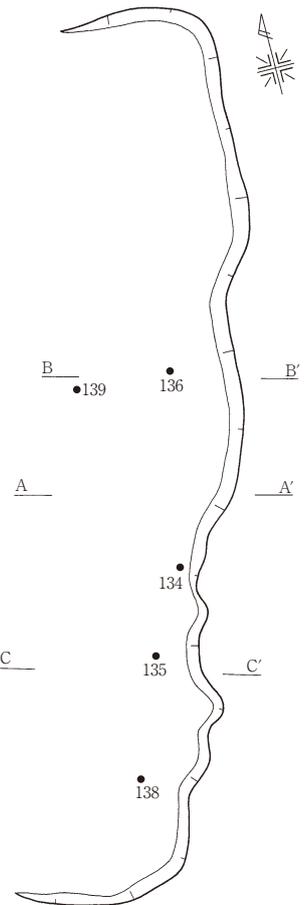
遺構検出過程で、南北に細長い歪な長方形プランを検出した。このため長軸に直交する東西のトレンチを設定し掘り下げたところ、底面及び壁の立ち上がり確認されたため、段状遺構として調査を行った。

長軸9.6m、短軸0.8m、深さは中央部東側で最大0.14mを測る。底面西側は斜面下方側が流出したためか、はっきりしない。埋土は灰黄褐色土の単層である。

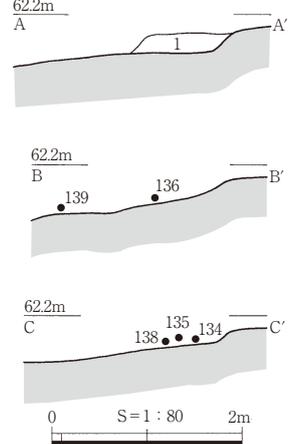
埋土中から出土した土器6点を図化した。壺134は大きく開く口縁部外面



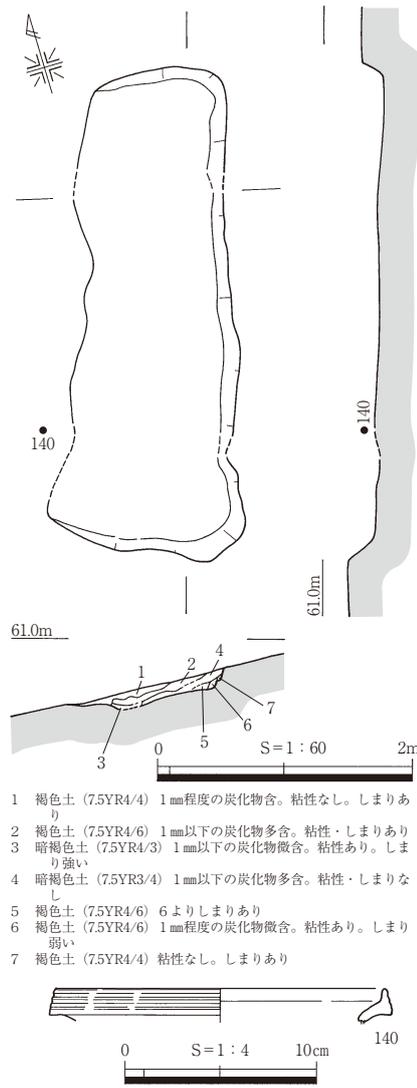
第27図 SS12出土遺物



1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性普通。しまりあり



第28図 SS12



第29図 SS13および出土遺物

に4条の凹線文のほかキザミを施している。135は壺の頸部から肩部にかけての破片で、頸部には4条の凹線文を巡らせる。甕136・137はともに拡張した口縁部外面に2条の凹線文が認められる。138は頸部に貼付突帯を巡らせた後、ナデている。

これらの出土遺物はIV-2~3様式に比定されることから、本遺構は弥生時代中期後葉に位置づけられる。(前田)

SS13(第29図、PL.8・83)

K・L23グリッドにまたがる標高60.6m付近の尾根西側斜面に位置する。南側は本遺構が切るかたちでSK155が近接し、更に南側約2mにSD5が隣接する。北側約8mにはSI40が築かれている。

平面は長方形で南部分がやや膨らむ。長軸3.9m、短軸1.2m、検出面からの深さは東側が最大で0.22mを測る。斜面下部となる西側は一部流失している可能性がある。床面及び周辺部において本遺構に伴うピット、溝等は認められない。

埋土は大きく3層に分けられる。斜面上方から流れ込むような自然堆積で埋没している。

遺物は検出面から埋土上層のものがほとんどで、甕140が横から押しつぶされた状態で出土しているが復元するには至らず、口縁部を示した。外面は3条の凹線文、内面はナデ調整が施されている。

出土遺物の特徴から本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられる。(原田)

SS14(第30図、PL.8・82・83・104)

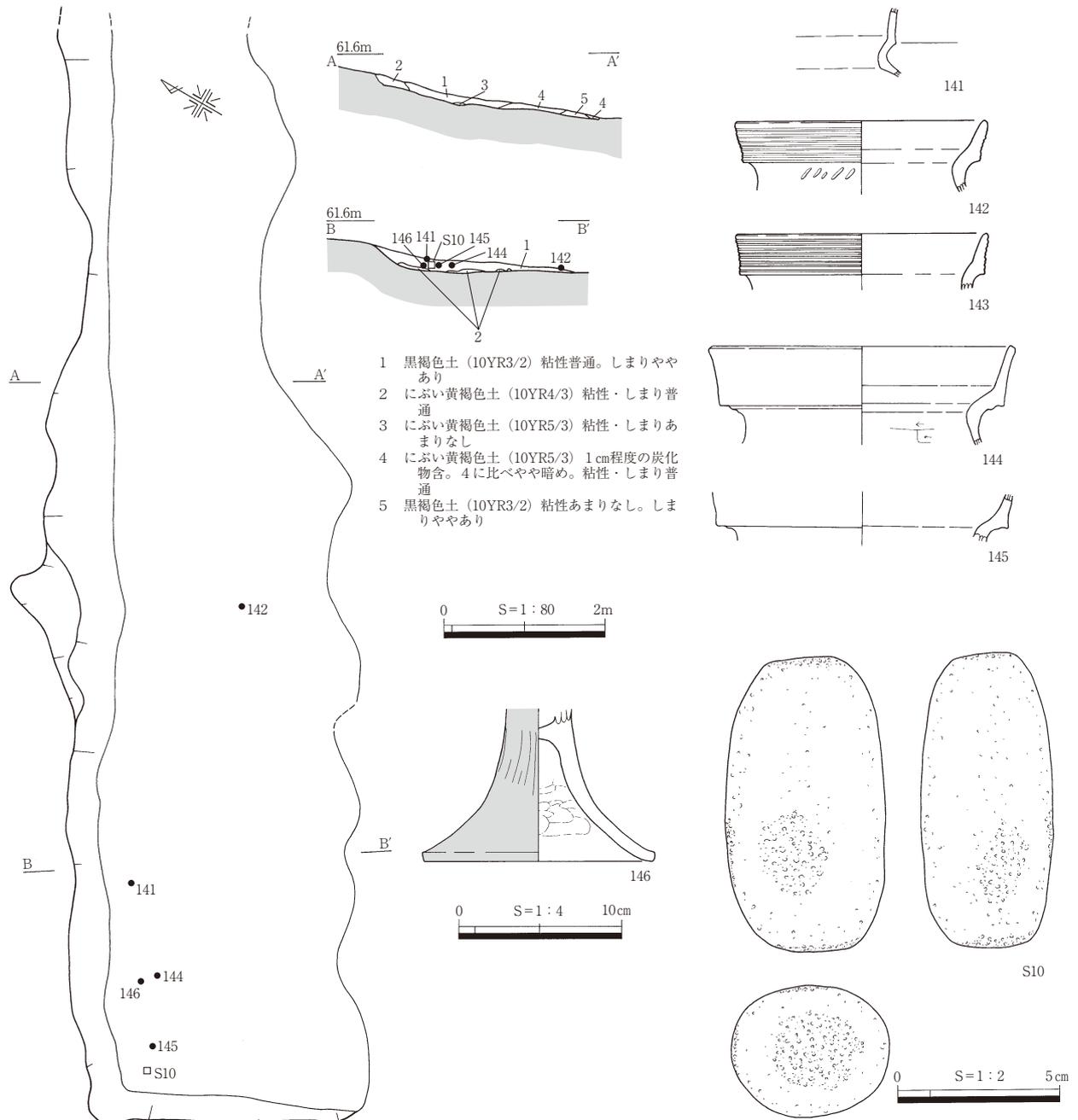
E37、F37グリッド、標高60.8~61.4mの東向きに下る谷地形の最深部に近い場所に位置し、SS15を切る。南向きの急な斜面の傾斜がやや緩やかになる傾斜変換付近で、コンターラインに沿って広がる黒褐色土のプランとして検出した。短軸方向に2本のサブトレンチを設定し掘り下げたところ、壁面の立ち上がり平坦面を確認したため、段状遺構と判断して調査を行った。

遺構の東側は調査区外に延びるため、正確な規模は不明であるが、現状では長軸14m、短軸3.5m、深さは検出面から約0.2mを測る。底面にピットや壁溝、焼土面等は認められなかった。

先述のように傾斜の急な地形に位置しているために埋土はほとんど流失していると考えられ、遺構埋土の遺存状況は良くないが、残存する埋土は黒褐色土を主体として6層に分層できた。

遺物は概ね遺構の中央から西寄りが多く出土する状況が認められた。土器はほとんどが細片で、掲載しているものは6点である。弥生時代後期後葉のものが多く、141は新しい様相を示し、薄い器壁で口縁部内外面ともナデで仕上げる甕である。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代終末期(VI-1)と考えられる。(濱本)



第30図 SS14および出土遺物

SS15(第31図、PL.8)

E37グリッド、調査区東側の谷部傾斜地に位置する段状遺構である。同じ段状遺構であるSS14と切り合い関係にあり、上半部分はSS14によって削平される。またSK178とも重複しており、SK178の上半の一部を掘削する。検出した高さは標高およそ60.7mである。

本遺構の東側は調査区外にのびるため、規模等は明らかでないが、調査できた範囲で長軸(南北)3.75m、短軸(東西)2.90mである。壁面および底面の状況は、確認面からの深さ4~20cmを測り、遺構長軸の半分くらいのところに傾斜変換点がある。埋土は9層に分けられるが、傾斜の高い北側から埋まっていたようである。出土遺物はない。

本遺構の性格は、本遺構に伴う他の遺構等も確認されなかったため不明である。時期についても出土遺物が認められなかったことから詳らかでないが、弥生時代後期末のSS14に切られることから弥生時代後期末以前の遺構である。(野口)



- 1 褐色土 (10YR4/4) 2mm程度の炭化物微含。粘性あり。しまりややあり
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性・しまり普通
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR7/3) 粘性普通。しまりややあり
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性普通。しまりややあり
- 5 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粘性普通。しまりややあり
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性・しまり普通
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 2mm程度の炭化物微含。粘性普通。しまりややあり
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 2mm程度の炭化物微含。粘性普通。しまりややあり
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性普通。しまりややあり

第31図 SS15

柱間距離はP 1 - P 2間から順に2.25m、1.9m、2.15mとなる。

埋土はいずれも柱痕跡と裏込土からなり、裏込土は粘性が強く、固くしまる。

遺物は弥生時代と思われる土器小片がP 1から出土している。時期を決定できる根拠に乏しいが、古墳時代以降の遺構埋土上層に見られる黒色系の土の堆積が見られないことから、弥生時代に遡るものと考えておく。
(湯村)

(5) 方形土坑

SK145(第33図、PL.10・84・103)

K21グリッドに位置し、SI40の北に近接する。

長軸3.3m、短軸2.5mを測り、北側の肩が丸みを帯びるものの、それ以外はやや隅丸の方形を呈する。斜面上方の東壁で深さ50cmとなる。底面積は5.0㎡である。底面は比較的平坦で、壁溝およびピットは認められない。

遺物は埋土上層から中層を中心に出土している。土器のうち出土レベルが比較的低いものは147・148・155で、155は完形に復元できた。拡張された口縁端部に3条の凹線文を施し、肩部には刺突文を2段に巡らす。体部下半からすぼまり平底へ続く器形である。体部内面下半はケズリ調整による。底面付近からは焼成された粘土塊156が出土している。

出土遺物の特徴から、SK145は弥生時代中期後葉(IV - 2 ~ 3)に位置づけられる。
(湯村)

SK146(第34図、PL.10・83)

L25グリッド南西端、標高61.0m付近の尾根西側斜面に位置し、東側約3mにSS12が、南側約4m

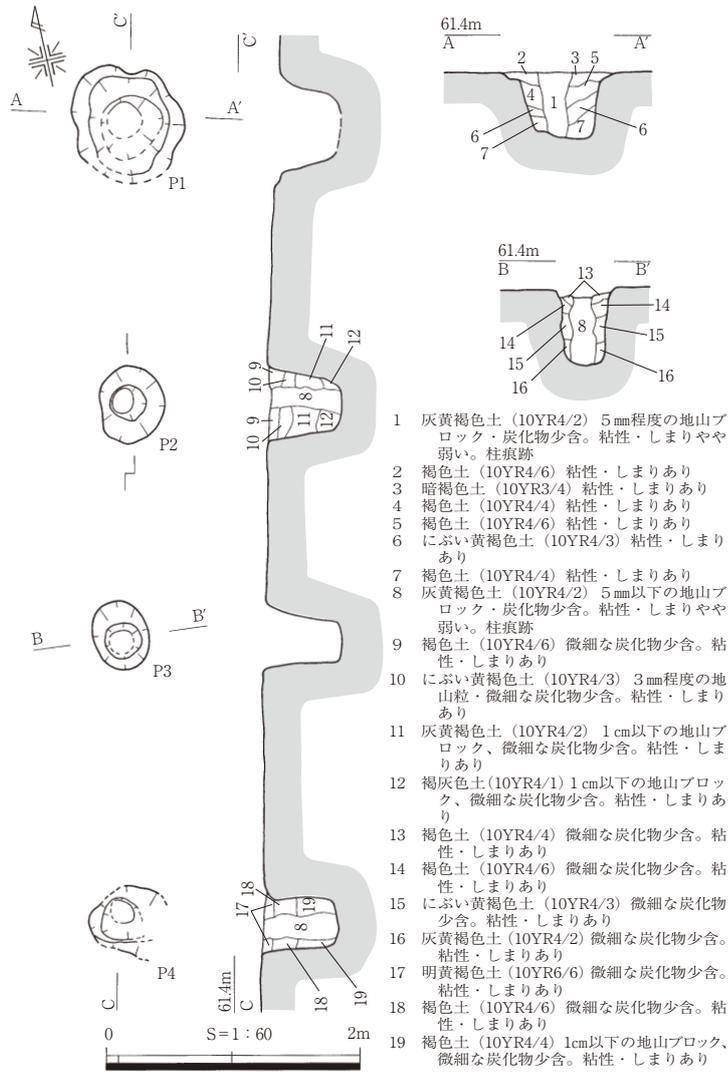
(4) 掘立柱建物跡

SB6(第32図、PL.9)

調査区北端に近いK21グリッドを中心に検出された。この周辺で確認された弥生時代の遺構は西に向かう斜面に築かれているが、本遺構は比較的平坦なところに位置する。

南北に並ぶ4基のピットで構成され、いずれの土層観察でも明瞭な柱痕跡が確認されており、柱穴列と判断できる。周辺でこの4本に対応する他の柱穴は確認されていないが、建物跡として報告する。

柱穴の規模は最大がP 1の長軸82cm、短軸64cmで、最小がP 3の長軸55cm、短軸43cmである。深さはP 1が52cmで他は60cmを測る。P 1のみ浅いように思えるが、掘り込まれた面の標高が若干低いことで、これら4基の柱穴の底面レベルは一定である。



第32図 SB6

- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 5mm程度の地山ブロック・炭化物少含。粘性・しまりやや弱い。柱痕跡
- 2 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりあり
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりあり
- 4 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりあり
- 5 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりあり
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまりあり
- 7 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりあり
- 8 灰黄褐色土 (10YR4/2) 5mm以下の地山ブロック・炭化物少含。粘性・しまりやや弱い。柱痕跡
- 9 褐色土 (10YR4/6) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 3mm程度の地山粒・微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 11 灰黄褐色土 (10YR4/2) 1cm以下の地山ブロック、微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 12 褐灰色土 (10YR4/1) 1cm以下の地山ブロック、微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 13 褐色土 (10YR4/4) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 14 褐色土 (10YR4/6) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 16 灰黄褐色土 (10YR4/2) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 17 明黄褐色土 (10YR6/6) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 18 褐色土 (10YR4/6) 微細な炭化物少含。粘性・しまりあり
- 19 褐色土 (10YR4/4) 1cm以下の地山ブロック、微細な炭化物少含。粘性・しまりあり

にSI42が、西側約5mにSK149が隣接する。

平面形は南側の一部がテラス状にやや張り出すが概ね長方形を呈する。規模は長軸2.84m、短軸1.98mで、検出面からの深さは南側が最大で0.51mを測る。底面積は3.71㎡である。

壁溝は部分的に逆台形となるものの、断面U字形を呈し、幅5～11cm、深さは最大で6cmを測る。北側と西側で一部途切れる。底面から多数のピットが認められたが、深さは全てが4～9cmの間に収まり、掘り込みが浅いことから、主柱穴と呼べるものは存在しなかったものと考えられる。しっかりとした上屋構造物が存在しなかったことが想定でき、用途も不明である。

埋土は、ホーキ・ホワイトローム・ハードロームブロックが混入する地山由来の褐色土が主で、斜面の傾斜に沿うような堆積が認められることから廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は埋土上層からのものが多く、下層あるいは底面からのものはわずかである。甕157～161を図示した。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2～3)に位置づけられる。(原田)

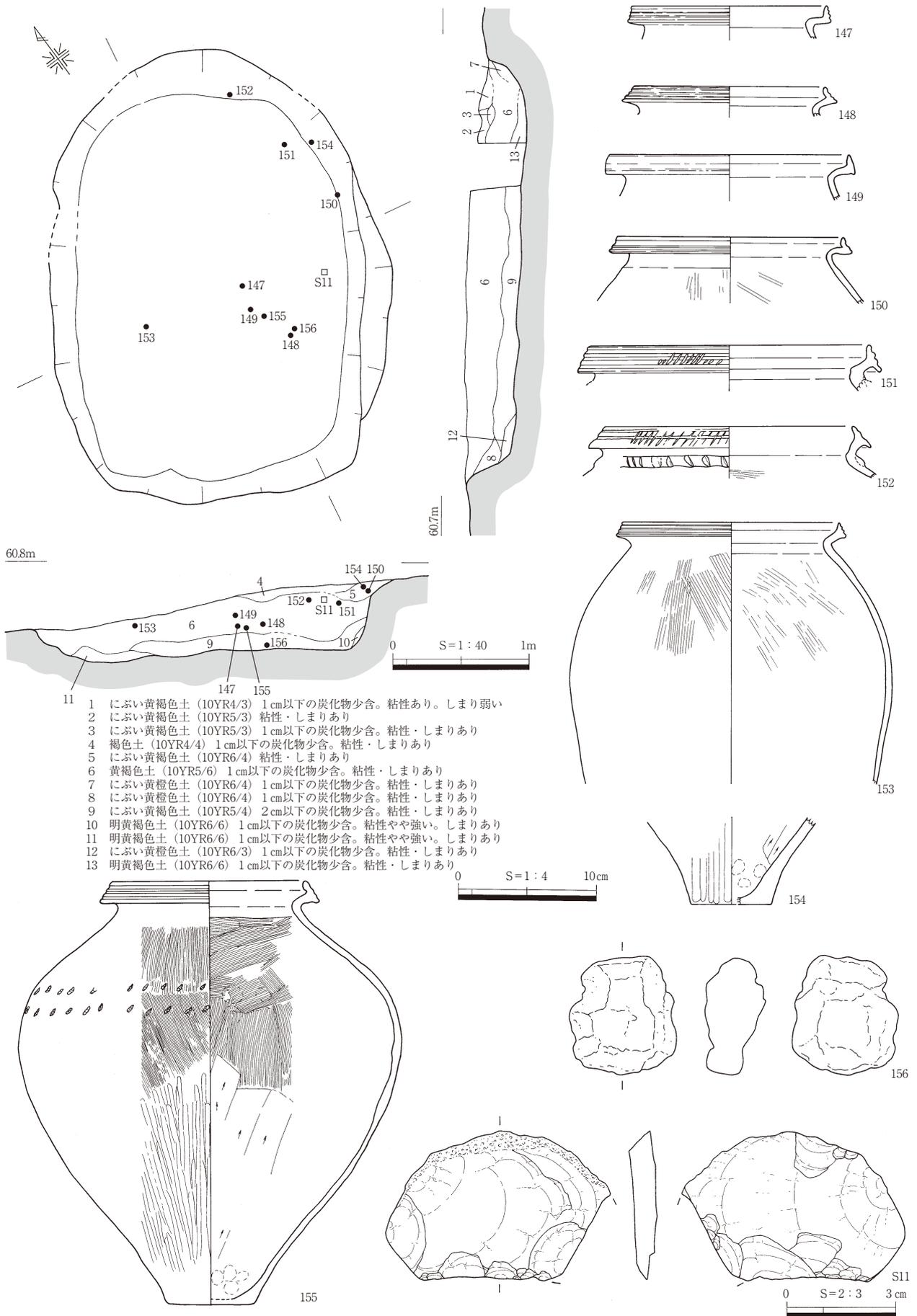
SK147(第35・36図、PL.11・83・104)

調査区北端のK20グリッドに位置する。北にSD6が、南西にSK145が近接し、SD6の一部を切っている。

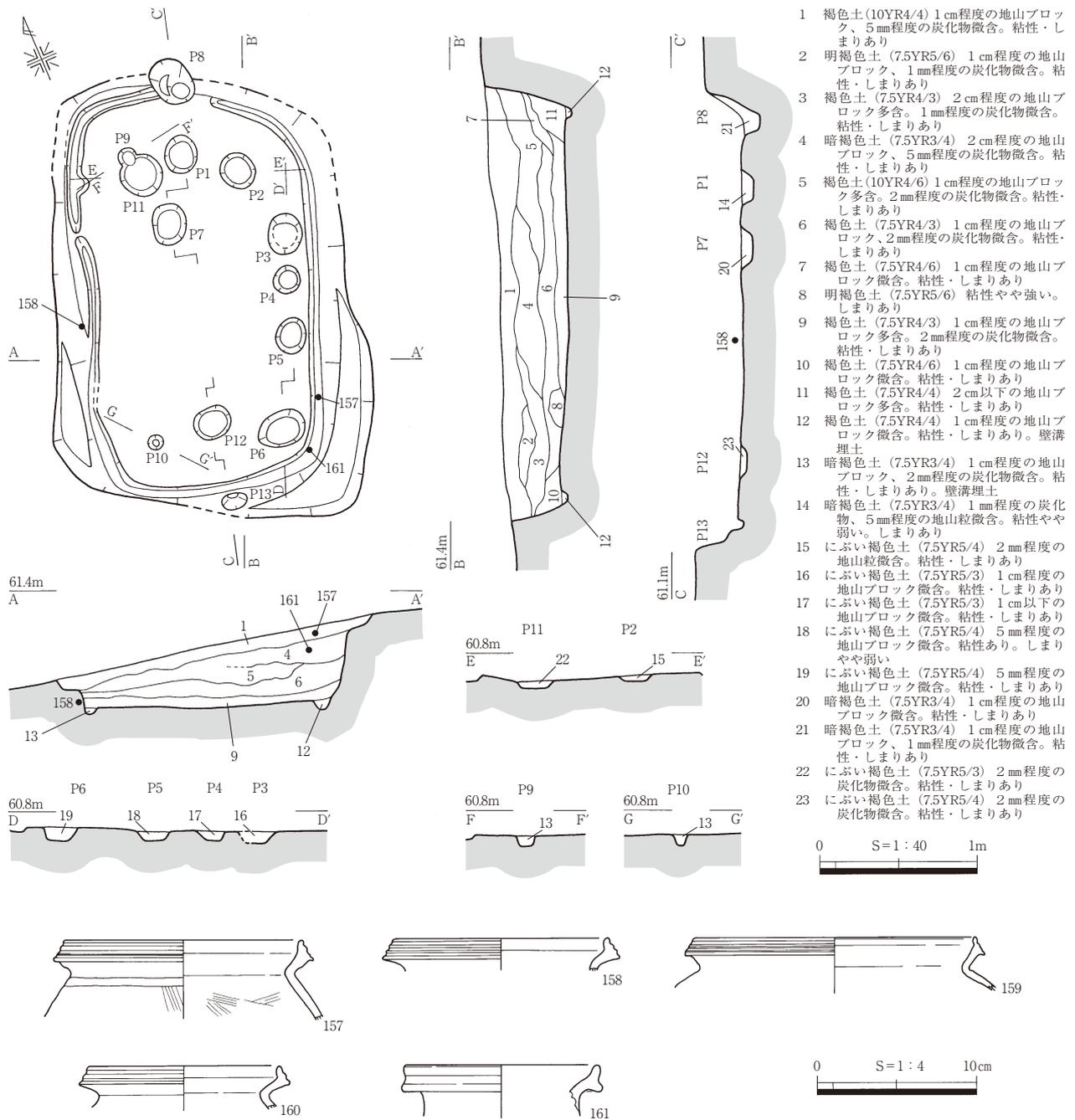
長軸2.0m、短軸1.6mの不整形を呈し、深さは最大で52cmを測る。底面積は2.1㎡である。SK145と同様に底面は比較的平坦で、壁溝およびピットは認められない。

遺物は埋土上層から中層にかけて出土しており、底面付近のものはない。162は上方に拡張された口縁端部に凹線文を施す。163の口縁端部にはキザミが認められる。S12は扁平な円礫の上下両端を打ち欠いた石錘。S13は刃部側を欠失した伐採石斧である。研磨が行き届いており、整形のための敲打痕を残さない。

時期を決定する根拠に乏しいが、出土遺物の特徴から、SK147は弥生時代中期後葉(IV-2～3)のものとしておく。(湯村)



第33図 SK145および出土遺物



第34図 SK146および出土遺物

SK152(第37図、PL.11・83)

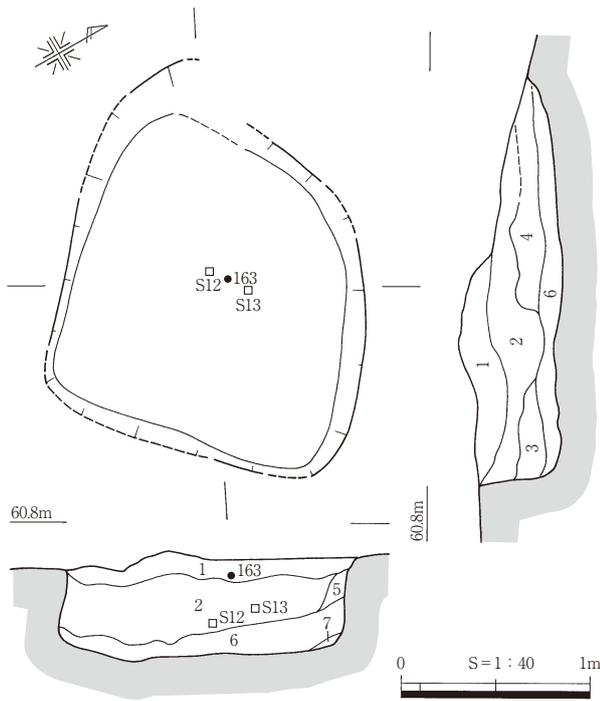
L23グリッド南端、標高60.1m付近の尾根西側斜面に位置する。北側約2mにSD5が、3~4mにSK155とSS13が隣接する。

長方形を呈し、長軸2.60m、短軸1.88m、深さは東側で最大60cmを測る。底面積は3.16㎡である。

壁溝は断面U字形、幅5~10cm、深さは最大で5cmを測り全周する。底面西側にいくつかの根攪乱による窪みは確認できたが、柱穴等は見つからなかった。

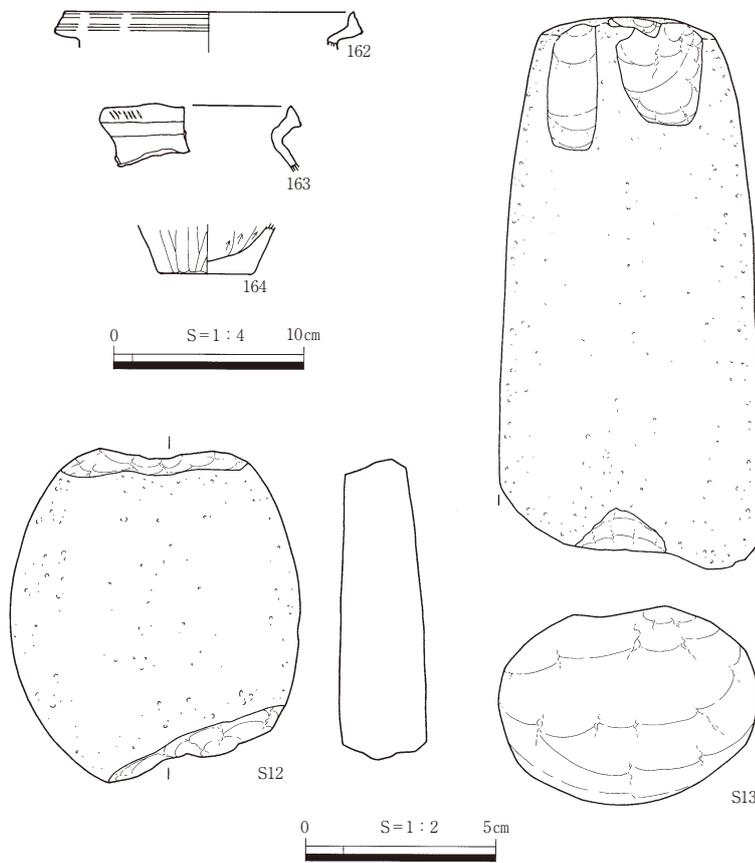
埋土は地山由来の褐色系粘質土からなり大きく3層に分けられる。斜面の傾斜に沿うように東側から流れ込んだと思われる堆積が見られ、本遺構廃絶後に自然堆積したものと考えられる。

遺物は検出面から埋土上層の出土が多く、遺構の東寄りに集中している。下層あるいは底面からの出土は少なかった。底面近くからは壺頸部の破片が出土している。



- 1 明黄褐色土 (10YR6/6) 1cm以下の炭化物少含。粘性あり。しまり弱い
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 1cm以下の炭化物少含。粘性・しまりあり
- 3 明黄褐色土 (10YR6/6) 1cm以下の炭化物、1cm程度の地山ブロック微含。粘性やや強い。しまりあり
- 4 明黄褐色土 (10YR6/6) 1cm以下の地山ブロック微含。粘性やや強い。しまりあり
- 5 明黄褐色土 (10YR6/8) 1cm以下の炭化物微含。粘性・しまりあり
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 1cm以下の炭化物微含。粘性・しまりあり
- 7 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性やや強い。しまりあり

第35図 SK147



第36図 SK147出土遺物

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられ、用途は不明である。(原田)

SK153(第15・16図、PL.2・77)

L26グリッドに位置する。SI20に切られていることもあり、2.5m×2.1mの範囲しか確認できてない。

検出した形状が方形を呈すること、壁溝を伴うが支柱穴が認められないことから方形土坑と判断した。検出面から底面までの深さは最大で30cmを測る。壁溝は幅8~15cm、深さ7cm程度で北東方向へ延びる途中で途切れている。西側の壁際に径20cm、深さ5cmのピットが確認された。

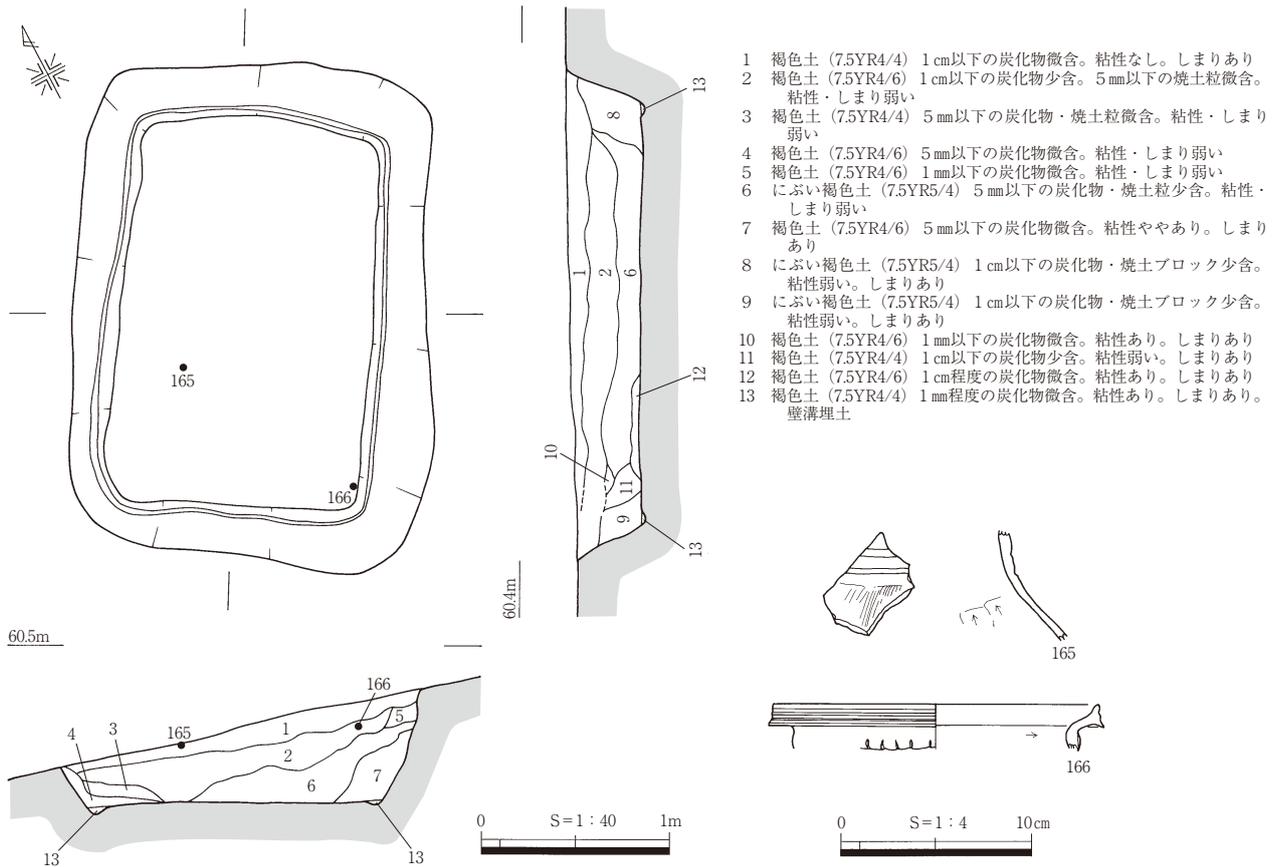
遺物は埋土上層および中層から出土した。完形あるいはそれに近い状態に復元できるものが数点ある。図示できたものはいずれも甕で、拡張された口縁端部に凹線文を施し、平底となる底部に向かいすぼまる形態のものである。肩部に刺突文を巡らせた

り、83のように口縁端部にキザミを加え、頸部に貼付突帯を施すものもある。78を除き、口縁端部が上下に拡張され凹線文も多条化しており、81のように体部内面のケズリが肩部付近まで達しているものもあるので、SK153は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられる。(湯村)

SK155(第38・39図、PL.11・83)

L23グリッドの東端、標高60.5m付近の尾根西側斜面に位置する。北側は本遺構が切られるかたちでSS13が、南側1m以内にSD5が近接する。

平面形は、南西から西側の壁面がやや丸みを帯びるが、概ね方形を呈する。長軸2.16m、短軸1.96m、深さは東側で最大0.50mを測る。底面積は2.78㎡である。



第37図 SK152および出土遺物

壁溝は断面U字形で、北東から南西にかけて尾根寄りをほぼ半周するように巡っており、谷寄りの部分には認められない。底面にはピット状の窪みが多数あったが、ほとんどは根攪乱であった。北東壁際で検出された径15cm、深さ8cmを測るP1は形状からピットと判断したが、ピットの規模、位置等から考えて柱穴かどうかは疑問である。

埋土は地山由来の褐色系の粘質土からなり、全体的に炭化物、地山ブロックを含み、粘性、しまりともに強い。斜面の傾斜に沿って土が流れ込んだような堆積が見られ、本遺構廃絶後自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は検出面から埋土上層を中心に甕の口縁部167・168を含む破片がまばらに出土している。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられ、用途は不明である。

(原田)

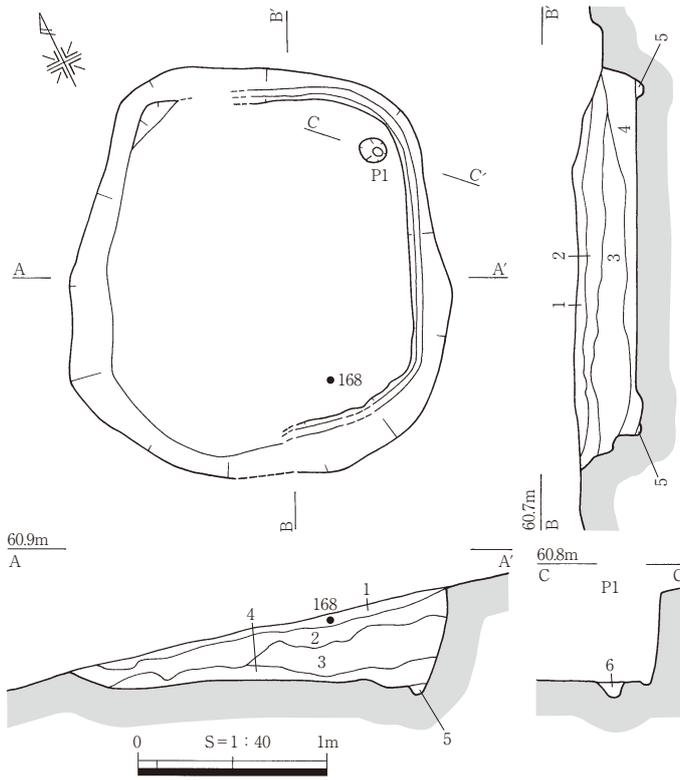
SK171(第40~43図、PL.12・85・104・106)

141グリッド、標高68.2~68.6mの北向き緩斜面に位置する方形土坑である。長軸3.2m、短軸2.4m、深さは最も残りの良い南壁で検出面から約40cmを測る。底面積は6.03㎡である。

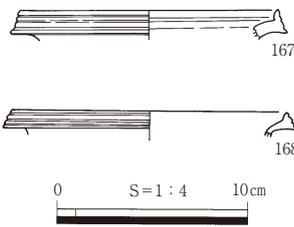
壁溝は断面U字形で、南東隅から東側の半分程度まで途切れながら巡る。柱穴は認められなかった。底面中央よりやや東壁寄りに、長軸1.9m、短軸1.0mで、平坦な底面をした隅丸方形の落ち込みが認められた。

埋土は暗褐色土と褐色土の2層に分けられる。いずれも地山ブロック、炭化物を含んでいた。

出土遺物であるが、1・2層とも多量の土器片が出土している(第41図)。169は壺の口縁部、170~173は甕である。170は口縁部から肩部が一部欠損している他はほぼ完形に復元できた。いずれも



第38図 SK155



第39図 SK155出土遺物

胴部外面はハケ、内面は上半ハケ、下半はハラケズリを施している。174は器台である。174は、南東隅の底面直上からほぼ完形で直立した状態で出土しており、埋没時の原位置を保っていると思われる。口縁部は5条の凹線を巡らせた後、キザミを施し3個単位の円形浮文を貼り付ける。頸部、脚部は凹線で飾る。175も脚部。

176は分銅形土製品である。現状では表面の外縁に刺突具による3列の列点紋様を巡らせているのが認められるのみである。表裏面とも、線刻などの意匠は認められず、小孔等の穿孔もなされていない。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉(IV-2~3)と考える。(濱本)

(6)その他の土坑

SK149(第44図、PL.12)

M25グリッドの南端、標高60.4m付近の尾根西側斜面に位置し、西側約2mにSK151、東側約5mにSK146、南東側約8mにSI42が隣接する。

平面形は北西方向にやや長い不整形円形を呈し、推定で長径1.18m、短径1.05m、検出面から底面最深部までの深さは55cmである。西側部分は壁面から底面に至るまで根攪乱によって失われている。

底面にピット、溝等は認められず、最深部周辺は掘り鉢状の形態を有する。

埋土は3層からなり、いずれも炭化物を含み粘性がありしまりもよい。斜面の傾斜に沿って堆積しており、地山由来の粘質土が流れ込み埋没したものと考えられる。

遺物は埋土上層から弥生時代の土器片が出土している。

本遺構は、古墳時代以降の遺構埋土上層に見られる黒色土の堆積が見られないこと、周辺の遺構の時期、出土遺物から判断して、弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけておく。(原田)

SK151(第45図、PL.12・86)

N25グリッド南東端、標高60.0m付近の尾根西側斜面に位置し、東側約2mにSK149が隣接する。

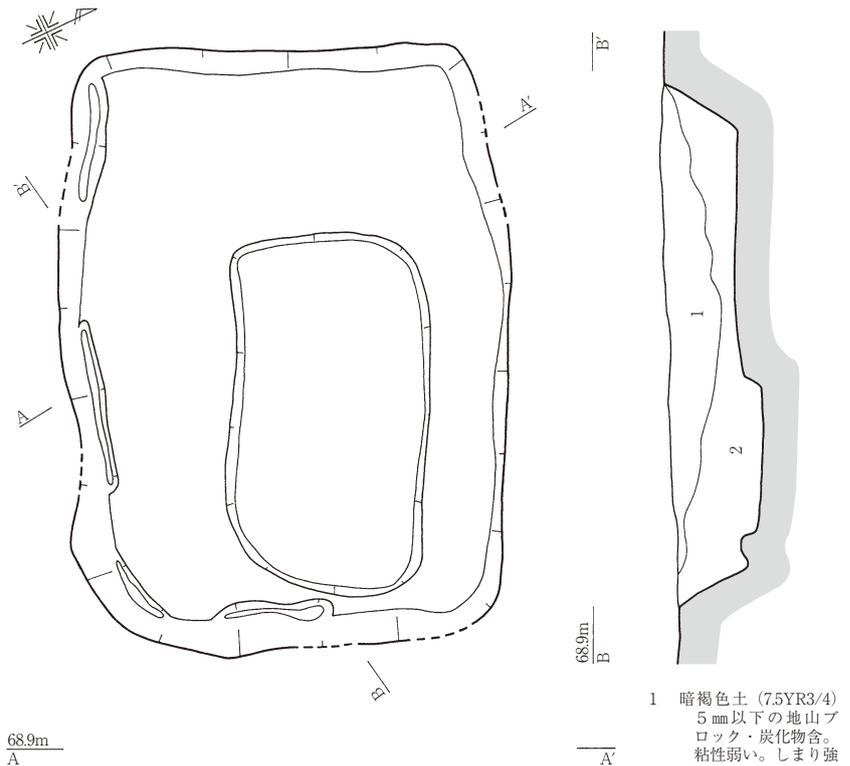
平面形は北側東西方向を長辺とする不整形台形を呈し、長軸3.80m、短軸3.12m、検出面からの深さは最大83cmを測る。東側テラス状部分の一部から壁面にかけて根の攪乱によって失われている。

底面は東側でテラス状部分から中心部に向かって落ち込み、西側では2段のテラス状部分を経て落ち込む形態を有する。ピット、溝等は認められない。

埋土は地山由来の褐色系の粘質土が中心でホーキブロックの混じりが多い。概ね斜面の傾斜に沿った堆積で、廃絶後の流れ込みによる自然堆積と考えられる。

遺物は検出面から埋土上層でのものが多く遺構の東寄りに集中している。甕の破片が多く、散乱するようなかたちでの出土が目立った。

検出面付近で口縁部外面に多条沈線を施す181が出土しているが、他の出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2~3)に位置づけられる。(原田)



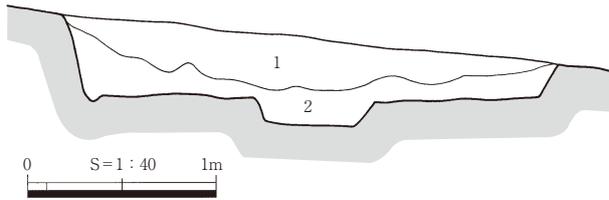
- 1 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5mm以下の地山ブロック・炭化物含。粘性弱い。しまり強い
- 2 褐色土 (10YR4/6) 3mm以下の地山ブロック・炭化物含。粘性弱い。しまり強い

SK166(第46~48図、PL.13・86~88・106・109)

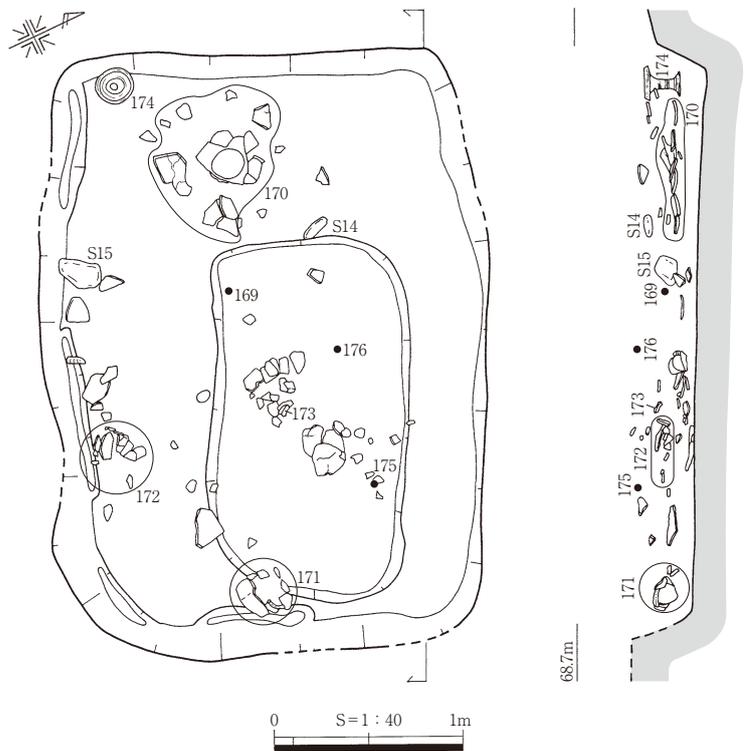
J41・42グリッド東側、標高68.7mに位置し、SI53を切る。検出プランの平面形は長軸2.6m、短軸2.3mの歪な楕円形を呈していたが、検出面から約40cm程下がると長軸1.7m、短軸1.1mの平面方形の掘方となる。深さは検出面から1.5mを測る。

埋土は7層に分層できる。方形掘方部分の埋土は5~7層であるが、このうち5・6層から壺を中心とする多量の土器、土玉、鉄製品等の遺物が出土した(第47・48図)。出土した土器のうち、ほぼ完形かそれに近い状態に復元できたもの数点について、平面分布、垂直分布の状況を概観してみる。

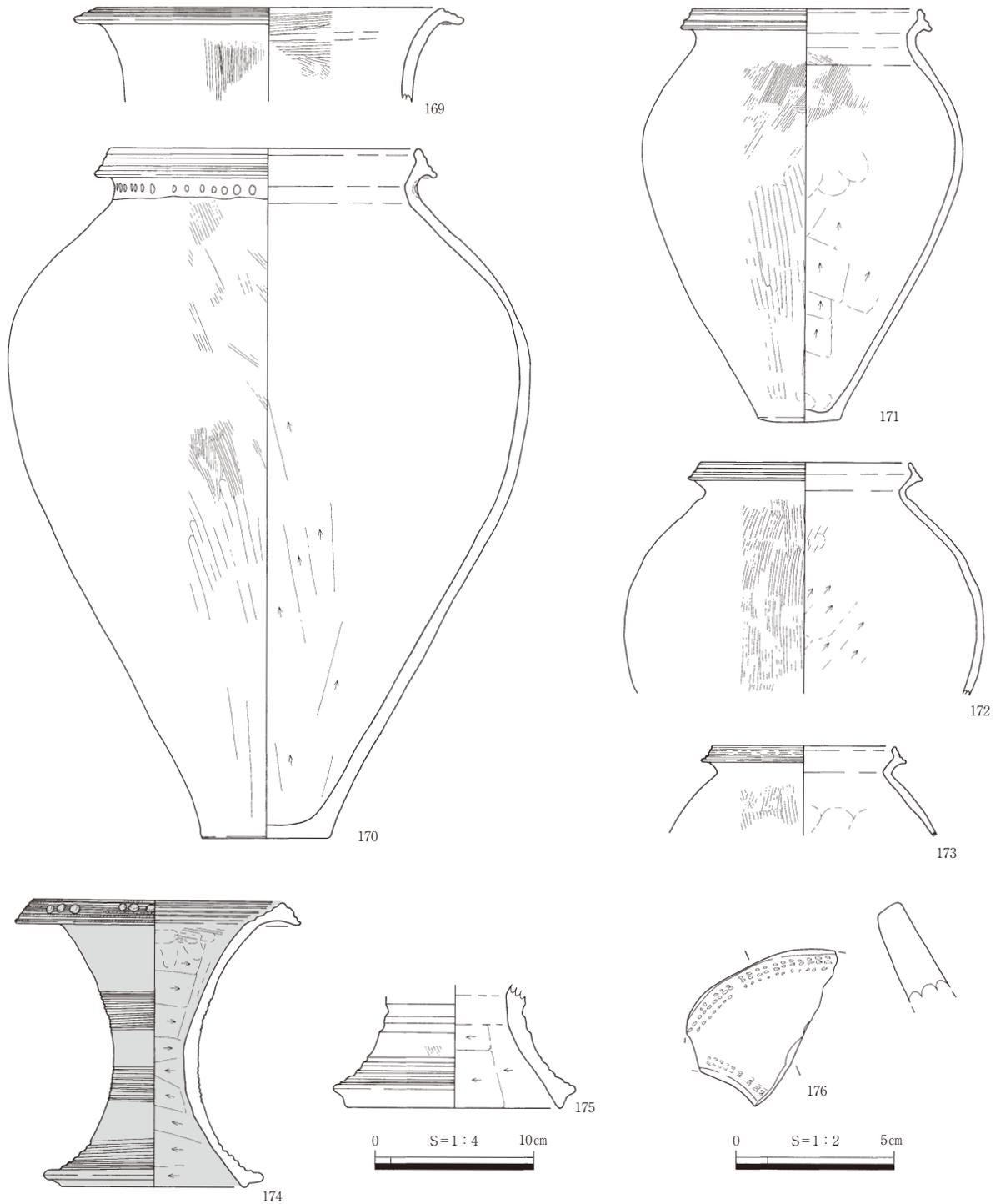
まず平面的な破片の分布であるが、同一個体の破片が局所的にまとまっているのではなく、SK166



第40図 SK171(1)



第41図 SK171(2)



第42図 SK171出土遺物(1)

内に広い範囲で散在している状況が認められた。これは土器が土坑内に投棄された当初は原形を保っていて、後に堆積した土の土圧によって潰れたというわけではなく、土器が投棄された衝撃で破壊したか、もしくは意図的に破壊した土器を廃棄したためと考えられる。

次に破片の垂直分布をみってみる。5・6層出土の土器の出土量が密になってくるのは、底面から約30cmほど高いレベルからである。調査時は、このレベルを1面として、出土遺物を出土レベルによって3面に分けて出土状況図・出土状況写真等の記録をとった。3面目はほぼ底面直上の出土状況である。この出土状況と破片の分布を見てみると、1～3面にそれぞれ異なる土器が分布するのではなく、同一個体の破片が1～3面をまたいで深さ30cmほどの空間に積み重なっている状況が認められた。こ

のことから、これらの土器は、破損等で不要となった土器の廃棄とSK166の埋没が時間的な幅をもって繰り返されたのではなく、極めて短い期間に廃棄を繰り返されたか、もしくは一括して廃棄されたものと考えられる。また、底面直上から土器が密に分布することから、これらの出土遺物は、本遺構が使用されなくなった後にある程度流入土が堆積した後に廃棄されたものではなく、SI53を掘り込んで本遺構が掘削されて間をおかずに廃棄されたものとする。

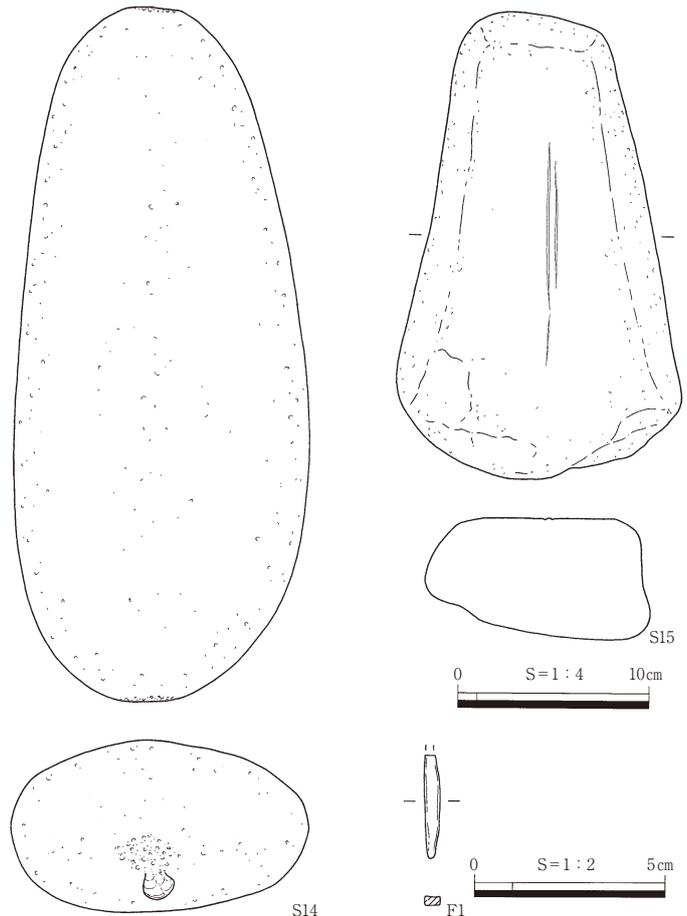
以上のことから、このSK166は、土器やその他の遺物の一括廃棄を意図して掘削された土坑である可能性が高く、出土した土器の特徴からも何らかの祭祀儀礼に関する土坑と思われるが、その詳細は明らかでない。また、先述のように本遺構は検出面からの深さが1.5mもある。先行するSI53が完全に埋没していない段階で掘り込まれたとしても、SI53の床面からの深さが約1mであることを考えると、土器を廃棄するためになぜこのような深さにまで掘り込む必要があったのかは不明である。破碎した土器を地中深く埋めることになんらかの意味があったのであろうか。

次に出土遺物について述べる。5・6層出土土器で接合・復元できたものの器種構成を見ると、壺9点、器台2点、壺または器台等の脚部2点、壺または甕の底部1点であり、壺の出土数が突出している。

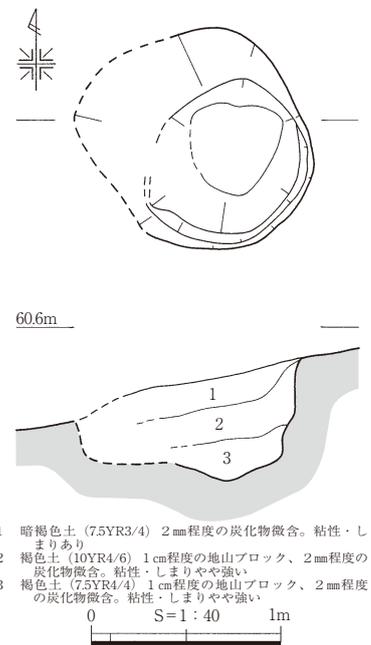
182～184は脚付壺で、算盤玉状の扁平な体部に細長い脚部が付くものである。185～188は長頸壺。186～188がほぼ完形に復元できた。189は形態的には甕に似るが、口縁部径より大きく張る体部を持ち、赤彩されることから壺と判断される。190は甕。192・193は器台である。192は脚筒部に施した凹線の間隙を貫通しない三角透し孔で飾る。193は口縁部に4条の凹線とキザミを施した後、3個単位の円形浮文を貼り付ける。194・195は脚付壺または器台等の脚裾部で、外面に凹線文が巡る。

これらとは別に、SK166埋土上層から出土した土器が196～199である。このうち196・197は内面のケズリが頸部にまで達しており、5・6層出土土器より新しい様相を示す。下層への土器の一括廃棄を経て、SK166が埋没していくまでには一定の時間が経過したものと思われる。

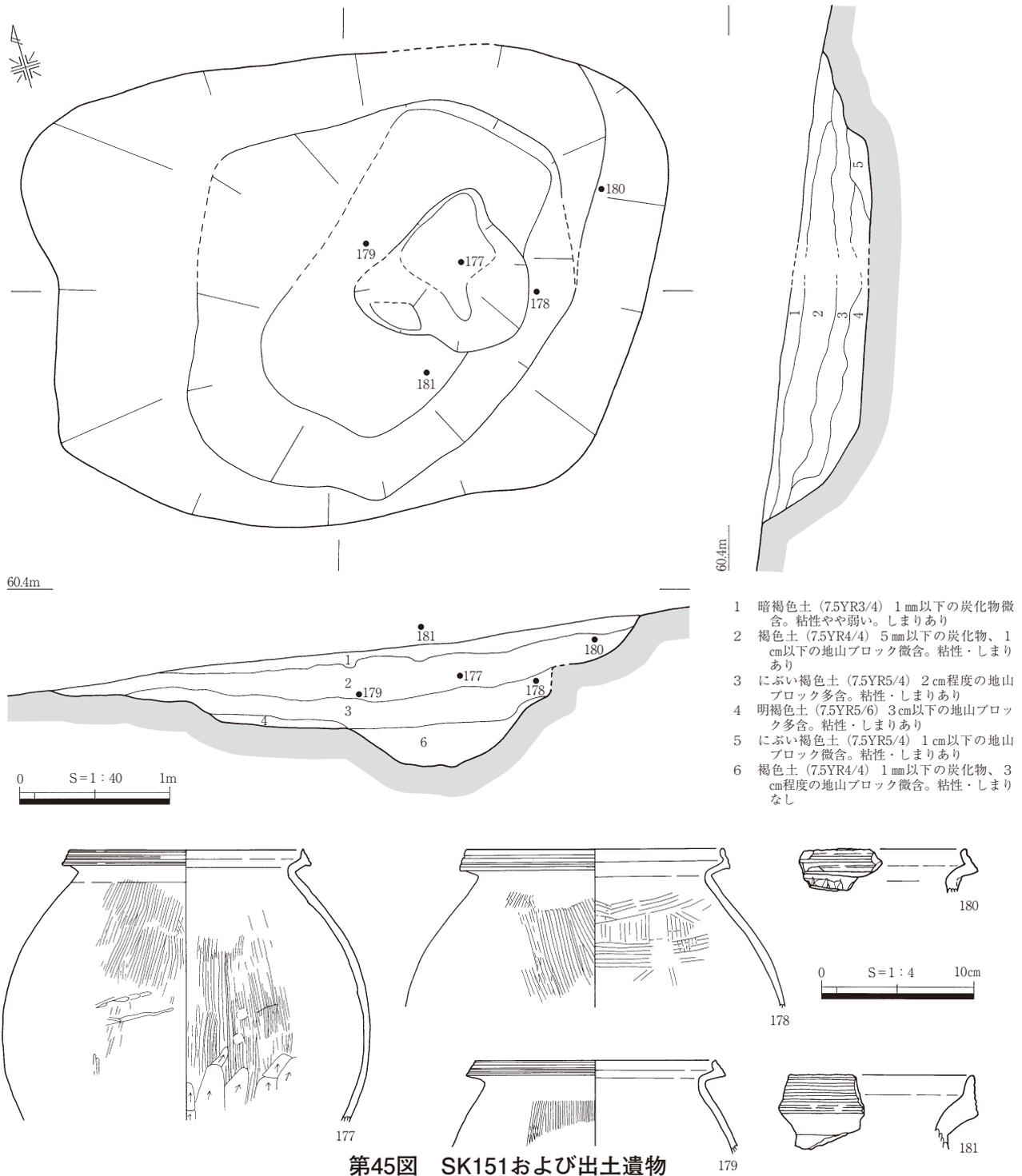
土玉は5点(200～204)出土している。本遺構と切り合い関係にあるSI53でも土玉が4点出土して



第43図 SK171出土遺物(2)



第44図 SK149

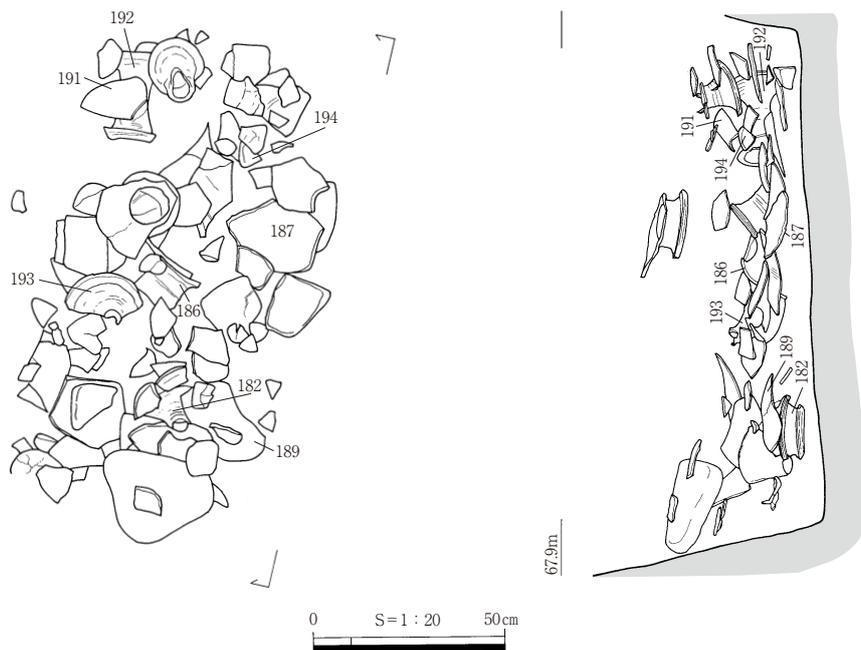
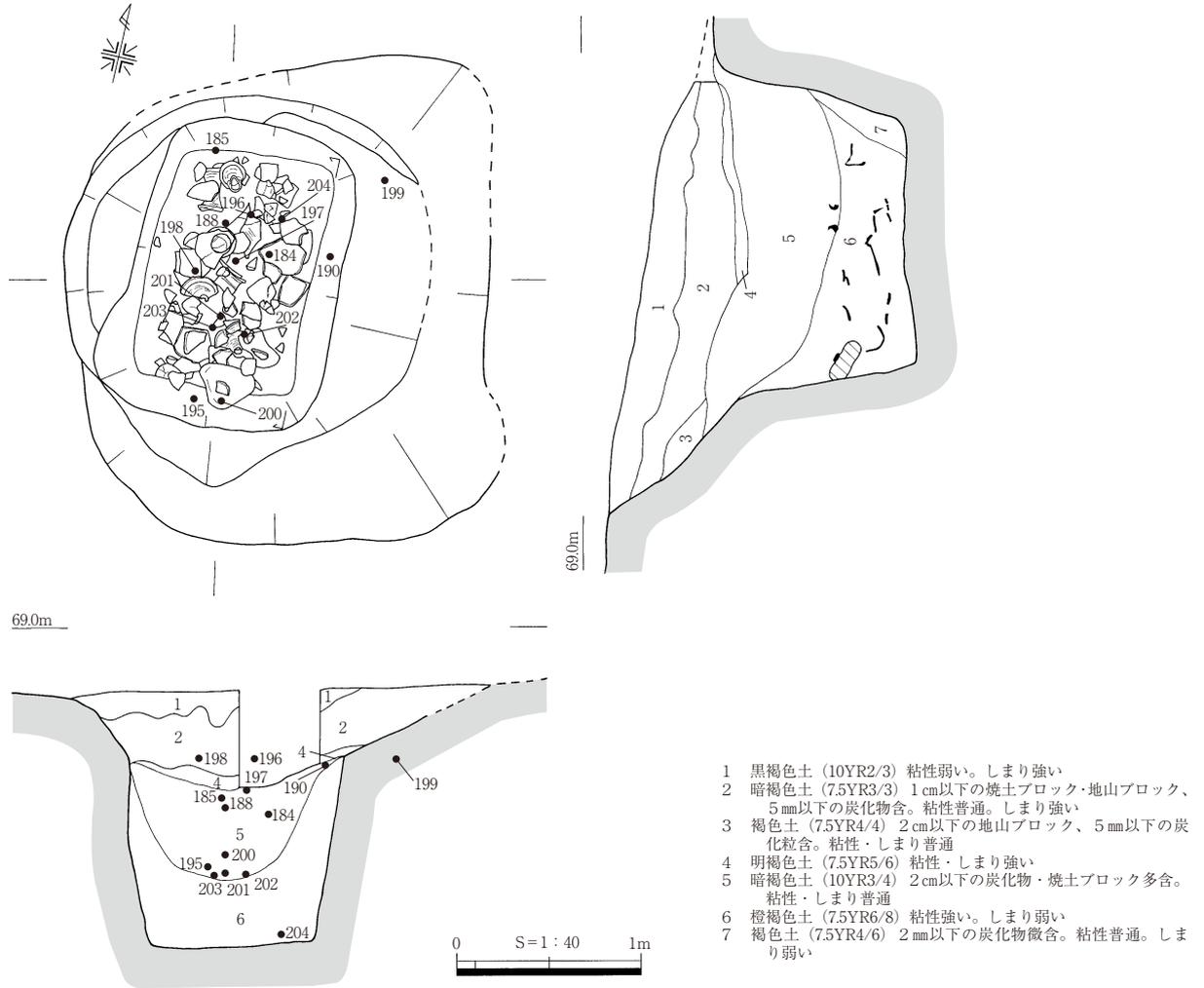


いるが、本遺構出土の土玉は、棒状工具を刺して穿孔し、抜き取った後に抜き取り方向に盛り上がった土を削ったりナデたりするなどの調整を施しておらず、玉葱のように中心部分が盛り上がった形状を呈している。本遺構より時期的に先行するSI53から出土した土玉は、131を除きいずれも抜き取り後に丁寧に土の盛り上がりを整形した痕跡が認められることから、時期が下るにつれてつくりがやや粗雑になる傾向がうかがわれる。

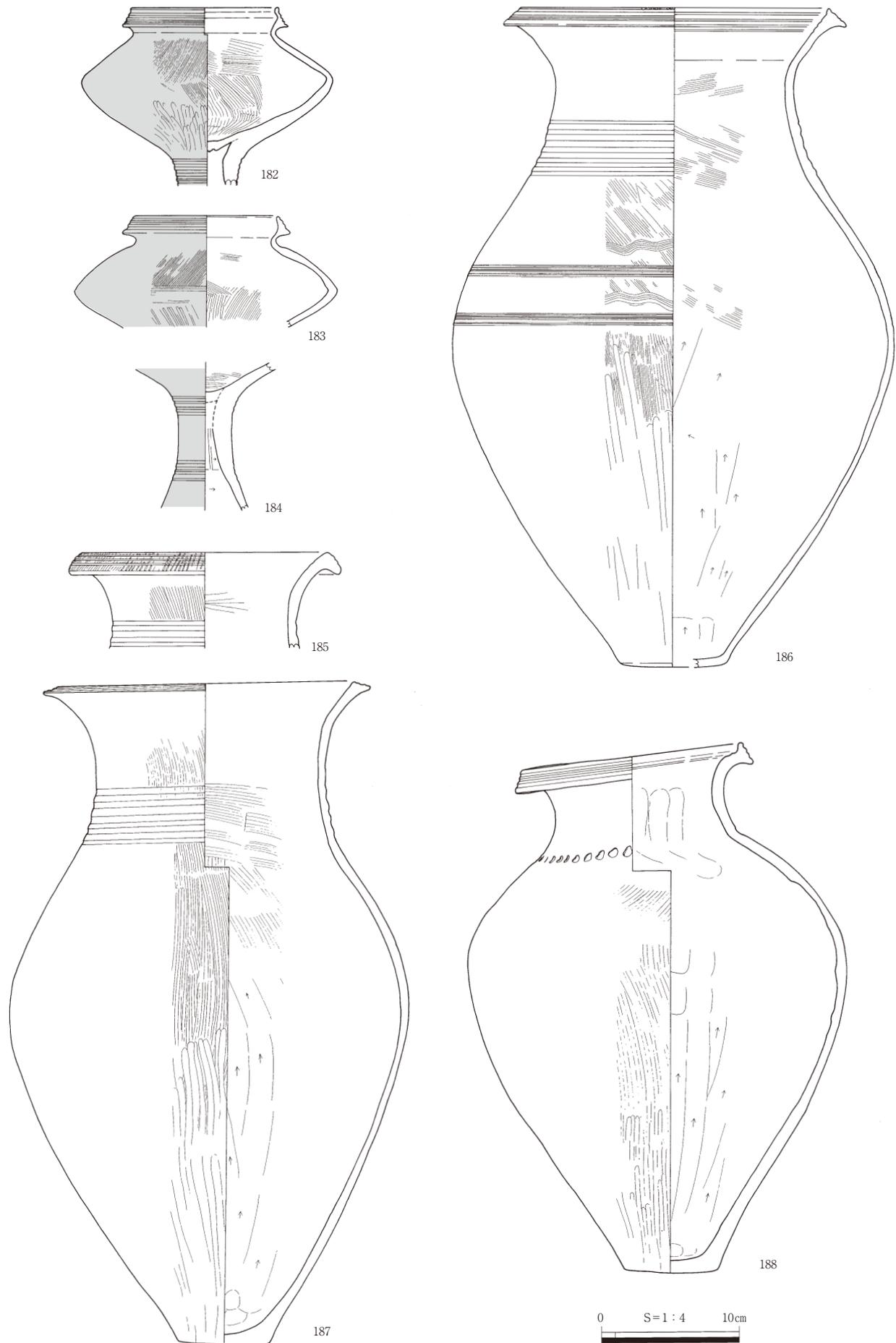
鉄製品はF 2・3の2点出土した。いずれも鉈である。

本遺構の時期であるが、出土遺物から弥生時代中期後葉(IV-2~3)と考える。

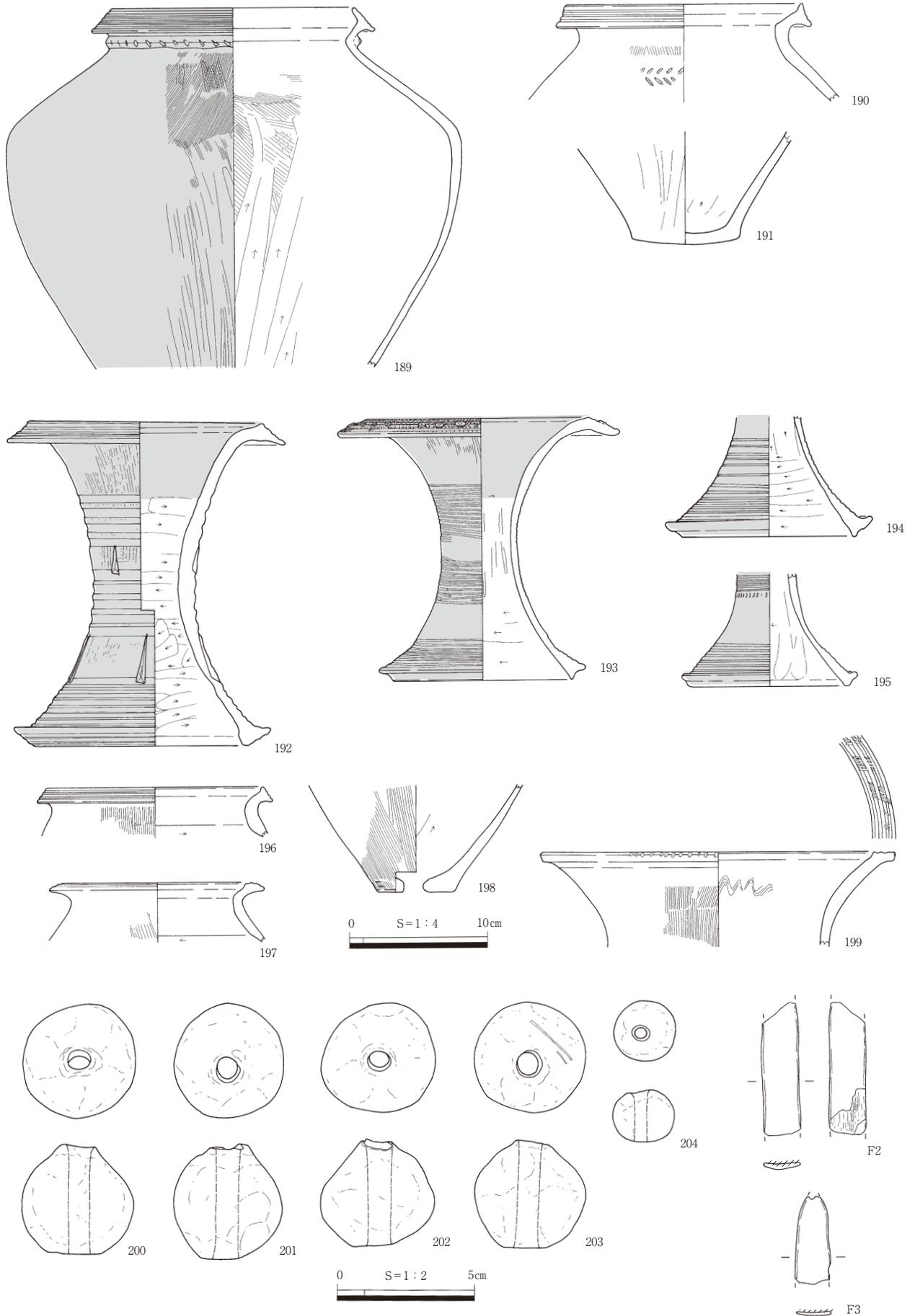
(濱本)



第46図 SK166



第47図 SK166出土遺物(1)



第48図 SK166出土遺物(2)

(7)溝

SD5 (第49図、PL.9・89)

K・L23グリッドにまたがり、標高59.1～61.5mの尾根西側斜面を等高線に直行するように位置する。北側2m以内にSK155、SS13が、南側約2mにSK152が近接する。

長さ4.98m、幅0.65～1.25m、深さは最大で0.57mを測る。主軸はほぼ東西方向であり、最大幅を測る辺りにはテラス状部分を有し、その西側部分からやや北に湾曲しながら幅が徐々に狭くなる。断面形は、逆台形状で中央部が一部やや袋状を呈し、掘方は斜面の傾斜に沿って西側に傾く。

埋土は炭化物をまばらに含み焼土粒も目立つ褐色土がほとんどである。中央付近上層では部分的にまとまったかたちで焼土塊が混じっており、埋没途中段階で人為的に投棄された可能性がある。

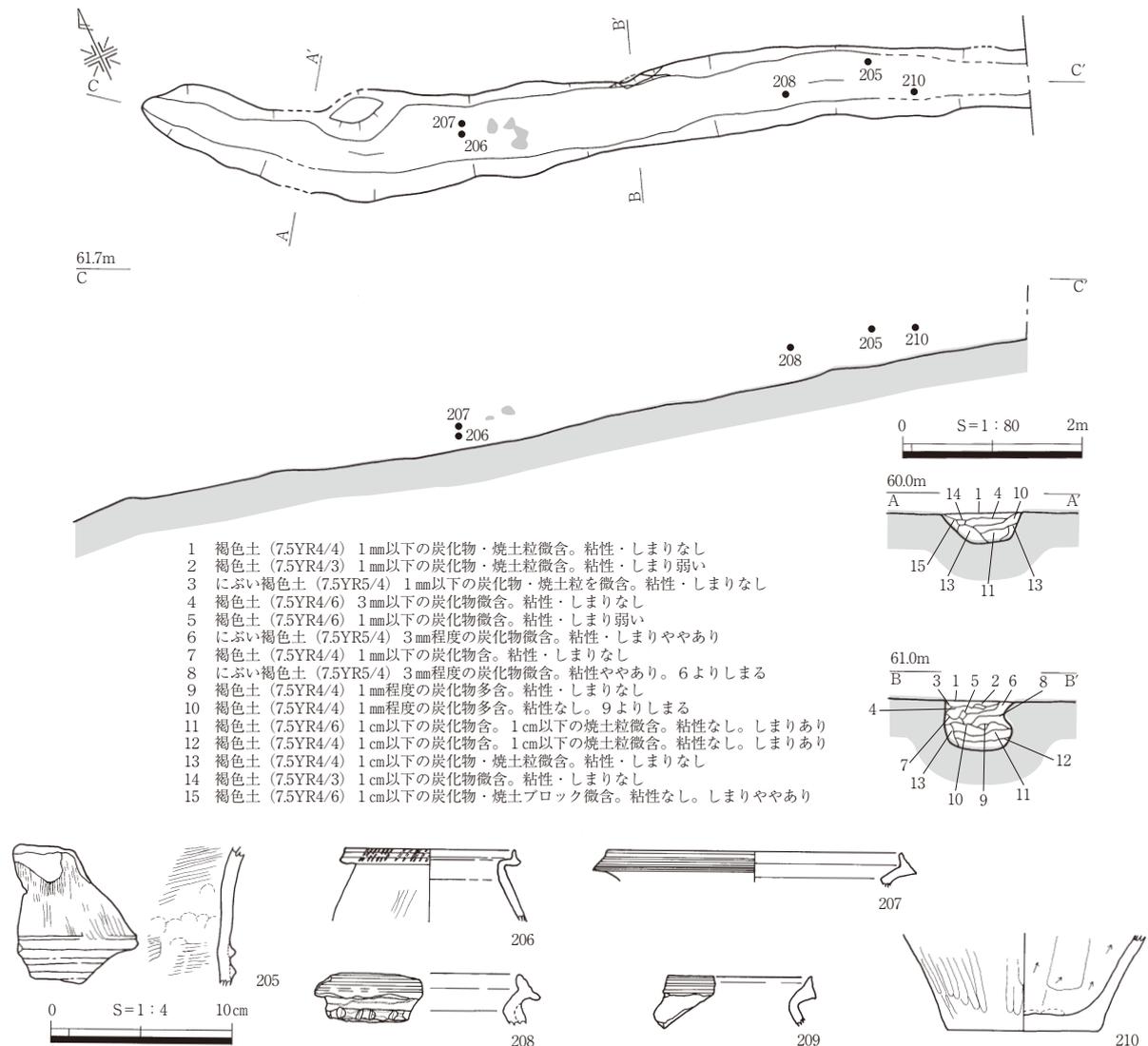
遺物は遺構の東寄りと中央やや西寄りからの出土が目立ち、上層からのものが多い。

出土遺物から本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2～3)に位置づけられる。用途は不明である。(原田)

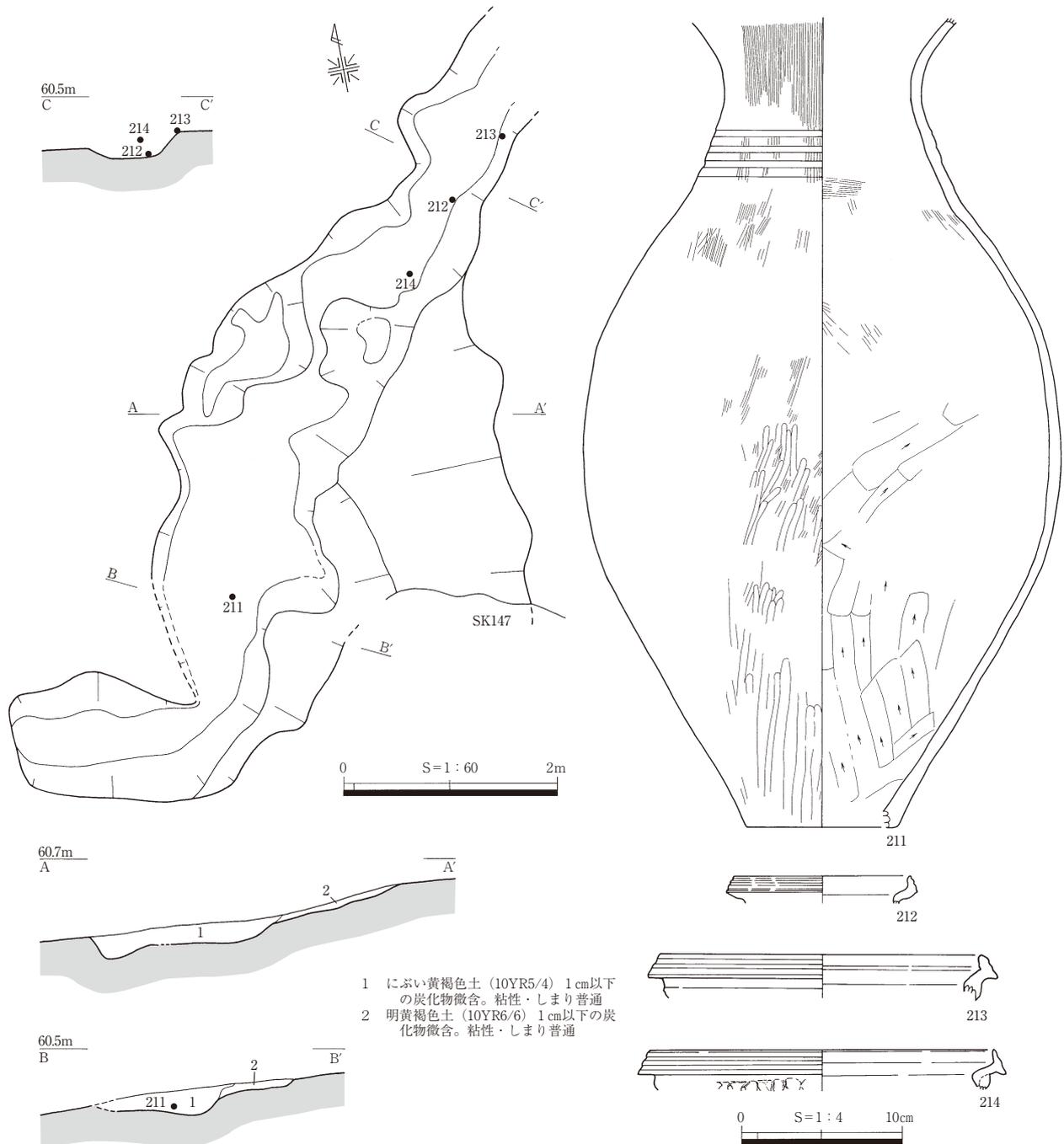
SD6 (第50図、PL.9・89)

K20グリッド南東寄り、標高60.5m付近の尾根西側斜面を等高線に沿うように位置する。南東側は本遺構を切るかたちでSK147が、南側約2mにはSK145が近接する。

長さは8.05m、幅0.72～3.88m、深さは最大で0.43mを測る。主軸は北東-南西方向で、中央付近東



第49図 SD5 および出土遺物



第50図 SD6および出土遺物

側はテラス状に大きく広がる。南西側の一部がくびれるように狭まりながら西側へ大きく曲がる。断面は、北西付近では掘方東側が段状に近い状態でやや深く、中央付近以南では掘方東側は浅いテラス状で途中から落ち込む。底面は北東付近ではたわみがあるが、中央付近以南はなだらかである。

埋土は2層に分けられ、1層が2層を切るかたちでの堆積が認められた。よって2層部分が掘り込まれ埋没後、1層部分が再度掘り込まれたものと考えられる。1層は地山由来の粘質土が東側から流れ込んだ自然堆積と考えられるが、2層については人為的に埋め戻した可能性も残される。

遺物は全て1層からのもので、北東付近からは甕の口縁部212～214が、南西付近からは壺の頸部から底部まで残存した211が出土している。

出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(IV-2～3)に位置づけられる。(原田)

第2節 古墳時代の遺構と遺物

(1)概要

平成19年度調査の4区に引き続き、古墳時代の遺構を検出した。調査区西側では4区調査時に確認したSI16を追加調査したほか、新たに竪穴住居跡8棟、土坑5基を確認した。新たに確認した遺構は調査区西側に集中するが、この傾向は4区調査の状況と同様で、梅田萱峯遺跡では同時代の遺構は遺跡西側の尾根、およびその延長上に分布する。

今回確認された竪穴住居跡の時期は、古墳時代中期後半から後期前半頃に帰属するが、中期の竪穴住居跡は調査区中央の谷頭付近に、後期のものはその周辺に築かれたようである。このことを4区調査の状況と合わせると西尾根北側に前期、中ほどに中期前半、南側に中期後半ならびに後期と居住地の時期的な変遷が窺える。(野口)

(2)竪穴住居跡

SI16(第51・52図、PL.14・90・91)

L28・M28グリッド、標高63.5～64.0mの斜面地に位置する。主軸をN-35°-Eにとり、古墳時代中期中葉の、方形を呈する竪穴住居跡である。本遺構は昨年度の調査においてその大半を調査・報告している。本年度は未調査であった範囲の周堤および竪穴部分の調査を引き続き行ったので、その結果を報告する。

壁溝は、昨年度の調査で住居をほぼ全周するものと、床面北西部にのみ残る拡張前のものが検出されている。今回の調査では拡張後の壁溝は住居床面を全周することが確認できた。住居西側に残る拡張前の壁溝は、住居南西隅の手前1mで途切れている。西壁から住居中央に向かって延びる床溝は、2条の壁溝を切って構築されていた。

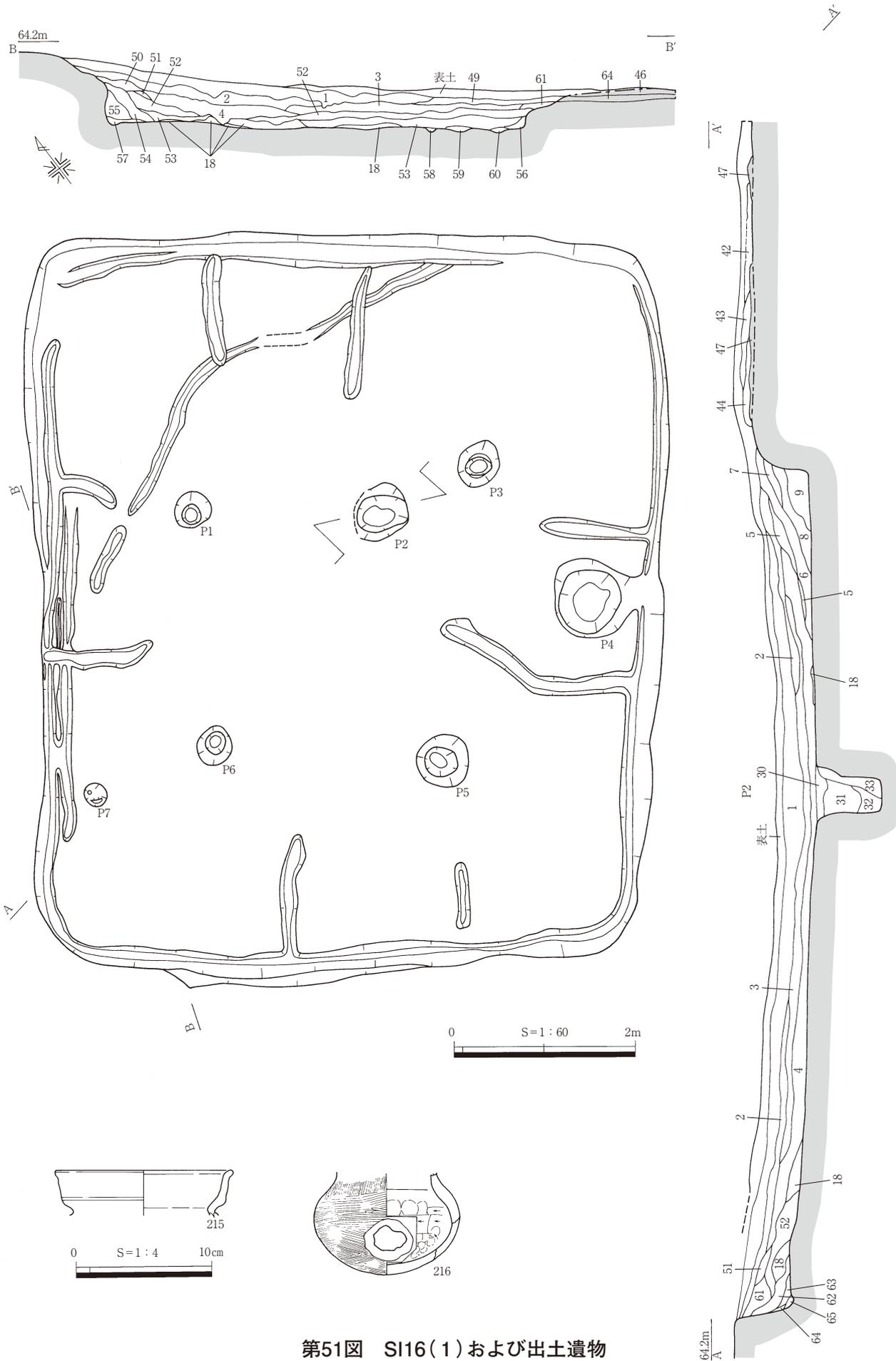
床面にピットが新たに1基確認できたが、深さが約20cmと浅く掘り鉢状の底面であるため、柱穴とは考えにくい。床面に貼床や焼土面は認められなかった。昨年度調査範囲と併せると床面積は51.35㎡である。

昨年度の調査において周堤と考えられていた土手状の高まりは、本年度の調査範囲にも及んでいる。今回の調査範囲では、東西方向の最大幅3.7mで、住居北西隅から西壁沿いを南向きに約6.2mにわたって認められた(第52図)。

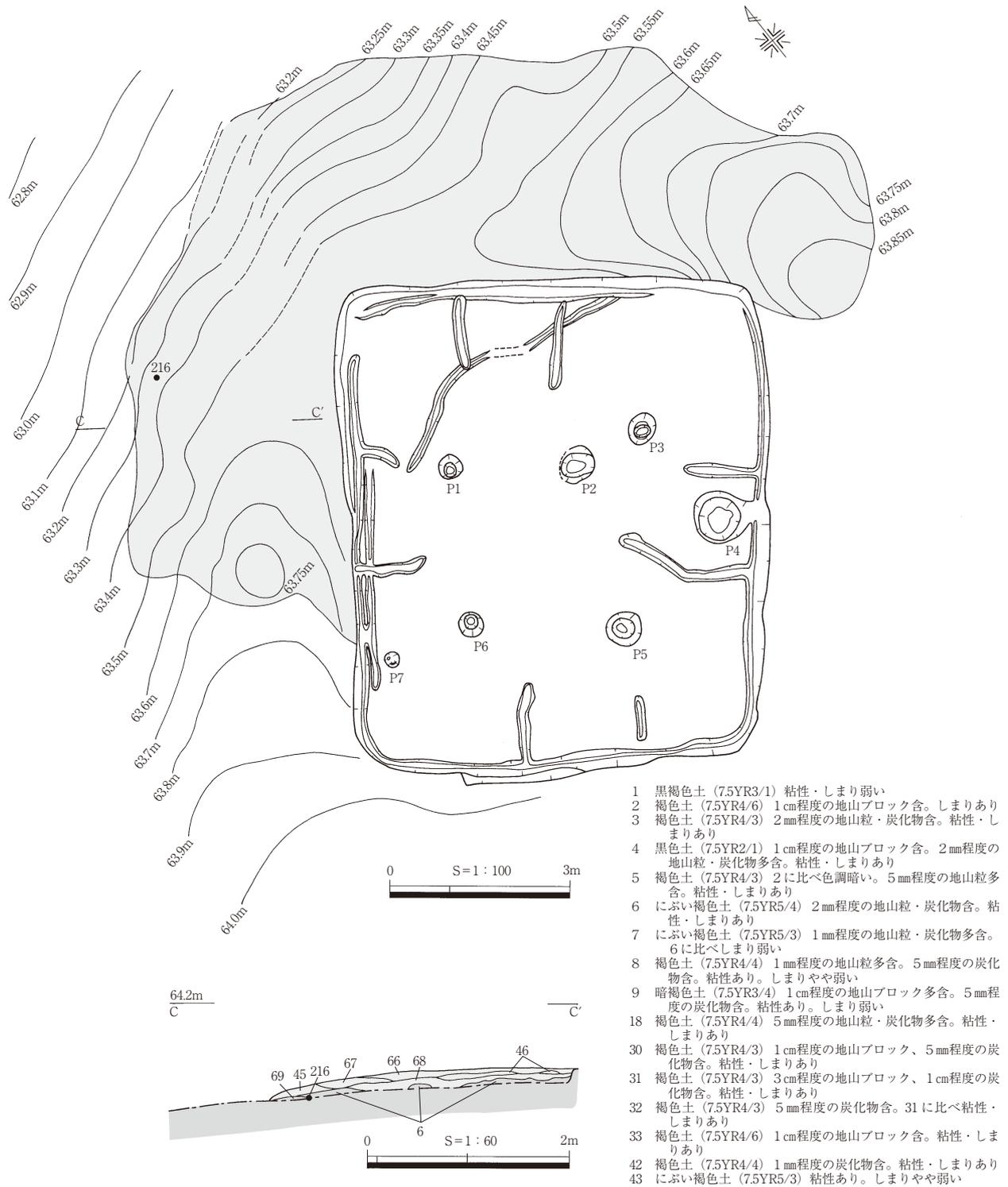
昨年度の調査で南北方向に設定したトレンチによる土層の観察では、地山面の褐色土層の上に黒褐色土、褐色土が堆積し、表土にパックされている状況が窺えた。本年度新たに東西方向に設定したトレンチによる土層断面(C-C')の観察によると、地山面の褐色土層の上に黒褐色土・暗褐色土(46層)が堆積し、その上に褐色土(45層)が堆積しており、ほぼ近似した堆積状況が窺える。地山面から周堤上面までの高さは、約17cmである。

なお、この西側の周堤には、褐色土層の上層に東西方向の周堤では確認できなかった明褐色土の堆積(67層)があり、この明褐色土層からは直口壺216が出土した。

出土遺物は2点掲載している。215は土師器の甕の口縁部である。216は直口壺。外面は斜め方向のハケ、内面はヘラケズリおよび指頭圧痕によって成形されている。胴部に1箇所焼成後の穿孔があるが、破面から判断すると内側から外側に向けて穿たれており、意図的な穿孔であることが窺える。口縁部も破損しているが、これも意図的に打ち欠かれたものと思われる。いずれも古墳時代中期中葉(天



第51図 SI16(1)および出土遺物



- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性・しまり弱い
- 2 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm程度の地山ブロック含。しまりあり
- 3 褐色土 (7.5YR4/3) 2mm程度の地山粒・炭化物含。粘性・しまりあり
- 4 黒色土 (7.5YR2/1) 1cm程度の地山ブロック含。2mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性・しまりあり
- 5 褐色土 (7.5YR4/3) 2に比べ色調暗い。5mm程度の地山粒多含。粘性・しまりあり
- 6 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 2mm程度の地山粒・炭化物含。粘性・しまりあり
- 7 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 1mm程度の地山粒・炭化物多含。6に比べしまり弱い
- 8 褐色土 (7.5YR4/4) 1mm程度の地山粒多含。5mm程度の炭化物含。粘性あり。しまりやや弱い
- 9 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1cm程度の地山ブロック多含。5mm程度の炭化物含。粘性あり。しまり弱い
- 18 褐色土 (7.5YR4/4) 5mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性・しまりあり
- 30 褐色土 (7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック、5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 31 褐色土 (7.5YR4/3) 3cm程度の地山ブロック、1cm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 32 褐色土 (7.5YR4/3) 5mm程度の炭化物含。31に比べ粘性・しまりあり
- 33 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
- 42 褐色土 (7.5YR4/4) 1mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 43 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 粘性あり。しまりやや弱い

- 44 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 1cm程度の炭化物多含。粘性あり。しまりやや弱い
- 45 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりやや弱い
- 46 黒褐色土 (7.5YR3/1) 3cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 47 褐色土 (7.5YR4/6) 5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 49 にぶい褐色土 (7.5YR5/3)
- 50 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 5mm程度の地山粒含。炭化物微含。粘性・しまりあり
- 51 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 5mm程度の地山粒含。炭化物微含。粘性・しまりあり
- 52 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 1cm以下の地山ブロック、5mm程度の炭化物含。粘性やや強い。しまりあり
- 53 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック、5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり。18より

- りやや暗い
- 54 褐色土 (7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック・炭化物含。粘性・しまりあり
- 55 褐色土 (7.5YR4/3) 1cm以下の地山ブロック、1cm程度の炭化物含。粘性・しまりあり。54よりやや明るい。
- 56 褐色土 (7.5YR4/6) 炭化物微含。壁の崩落土か。粘性・しまりあり
- 57 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック含。壁溝埋土。粘性・しまりあり
- 58 褐色土 (7.5YR4/3) 2mm程度の炭化物含。壁溝埋土。粘性・しまりあり
- 59 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック含。壁溝埋土。粘性・しまりあり
- 60 褐色土 (7.5YR4/4) 2cm程度の地山ブロック含。壁溝埋土。粘性・しまりあり
- 61 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 1cm以下の地山ブロック、5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり

- 62 褐色土 (7.5YR4/6) 1cm以下の地山ブロック含。粘性・しまりあり
- 63 褐色土 (7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
- 64 褐色土 (7.5YR4/6) 2cm以上の地山ブロック多含。壁の崩落土か。粘性・しまりあり
- 65 褐色土 (7.5YR4/6) 64に似るがやや明るい。壁溝埋土。粘性・しまりあり
- 66 暗褐色土 (10YR3/4) 2mm程度の炭化物含。粘性弱い。しまりやや強い
- 67 明褐色土 (7.5YR5/8) 3cm程度の地山ブロック多含。2cm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
- 68 暗褐色土 (10YR3/3) 1cm程度の地山ブロック、1mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
- 69 褐色土 (7.5YR4/6) 2mm程度の炭化物含。47より色調明るい。粘性・しまりあり

第52図 SI16(2)

神川VI期)ごろと考えられる。

(瀨本)

SI41(第53・54図、PL.15・90・91・104・106)

O37グリッド杭を中心として、調査区西側の平坦面に立地する平面やや長方形の堅穴住居跡である。主軸はN-39°-Eをとり、検出面での標高はおよそ64.8mである。付近には東側にSI44、48と近い時期の住居跡が存在する。

本住居跡の規模は、長軸5.37m、短軸4.77mを測る。検出面からの深さは0.45～1.02mで、床面積は18.61㎡である。埋土堆積の状況は、南東側が主に住居壁際から埋もれ、その後、住居中央部の窪地ににぶい黄褐色土(2層)、褐灰色土(1層)がレンズ状堆積する。

床面の状況は、全面に厚さ3～10cmほどの貼床が施されるが、南西側に比べ、北東側が厚い。柱穴はP1～4で、住居平面形状と同じくやや長方形に配置される。このうちP1・4からは柱痕跡が認められる。中央には地床炉(P5)が設けられ、長軸100cm、短軸80cm、深さ8cmほどの窪みのなかに、長軸48cm、短軸42cmの範囲で焼土面が形成される。また住居壁際には幅10～25cm、深さ10cmほどの壁溝が全周するが、北東側には幅15cm、10cmほどの溝が内側に認められた。

さて本遺構から出土した遺物は、台付埴221など床面から近い高さで出土したのもあったが、その多くは2層を中心に認められる。しかしながら各層で認められる遺物の多くは、大きな型式差は認められず、ほぼ同時期のものと判断されることから、本住居が廃絶した後、比較的早い期間で埋まった可能性が高い。217～219が須恵器、220～226が土師器、F4・5は鉄製品、S16・17が石器である。217・218は坏で、いずれも口唇部内面の段は見られない。217の口縁部の立ち上がりは内傾する。219は須恵器坏蓋で、天井部と口縁部の境はわずかな段を持つ。また口唇部内側の段もわずかに認められる。220・221は台付埴で、いずれも脚部は失われているが、口縁部から体部にかけてはほぼ遺存する。脚部接合面はきれいに剥離していることから、脚部破損後に埴として利用された可能性がある。220には口縁部外側に鈍い稜の段と、口唇部内側に浅い段が見られる。222は坏の体部破片であるが、風化のため調整等不明瞭である。ナデによる調整を主体とすると思われる。223～226は土師器甕で、口縁部が残存するものは、いずれも単純口縁の甕である。223・224の口縁部立ち上がりは上方にのびた後外反する形態をとるが、226は頸部から外反する奈良時代などに見られる形態をとる。鉄製品では曲刃鎌F4、刀子F5、石器では、砥石S16、敲石S17などが出土している。

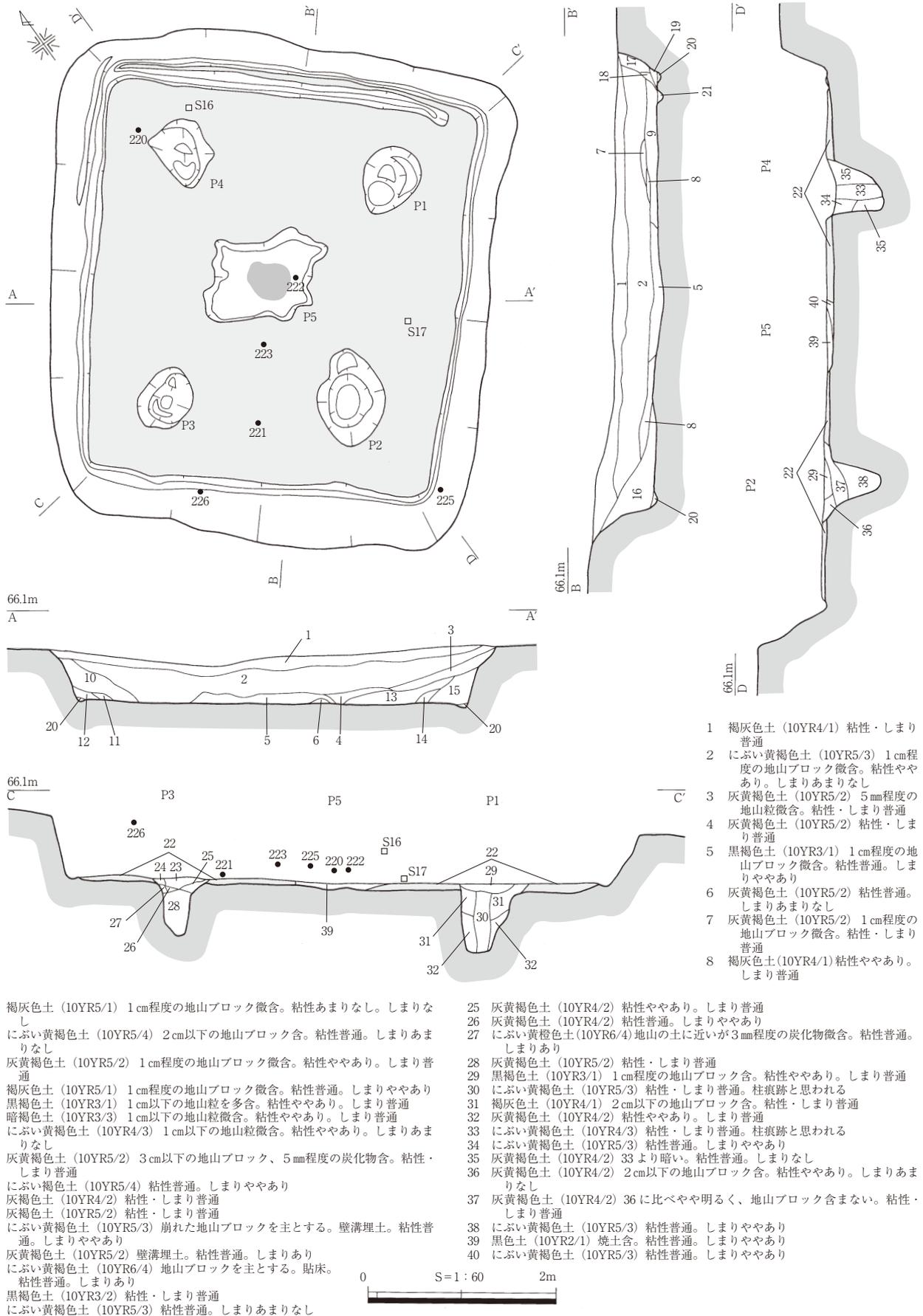
さて、本住居の時期であるが、須恵器坏、坏蓋の特徴から陶邑編年のMT15～TK10に併行するものと思われる。土師器についてはこの時期の様相があまり具体的でないため詳らかにできないが、226の甕が新しい様相を呈する以外は、ほぼ古墳時代中期後半～後期にかけて認められる形態であることから、須恵器による年代と大きな矛盾はないと思われる。このことから古墳時代後期前半、6世紀前半頃と思われる。

(野口)

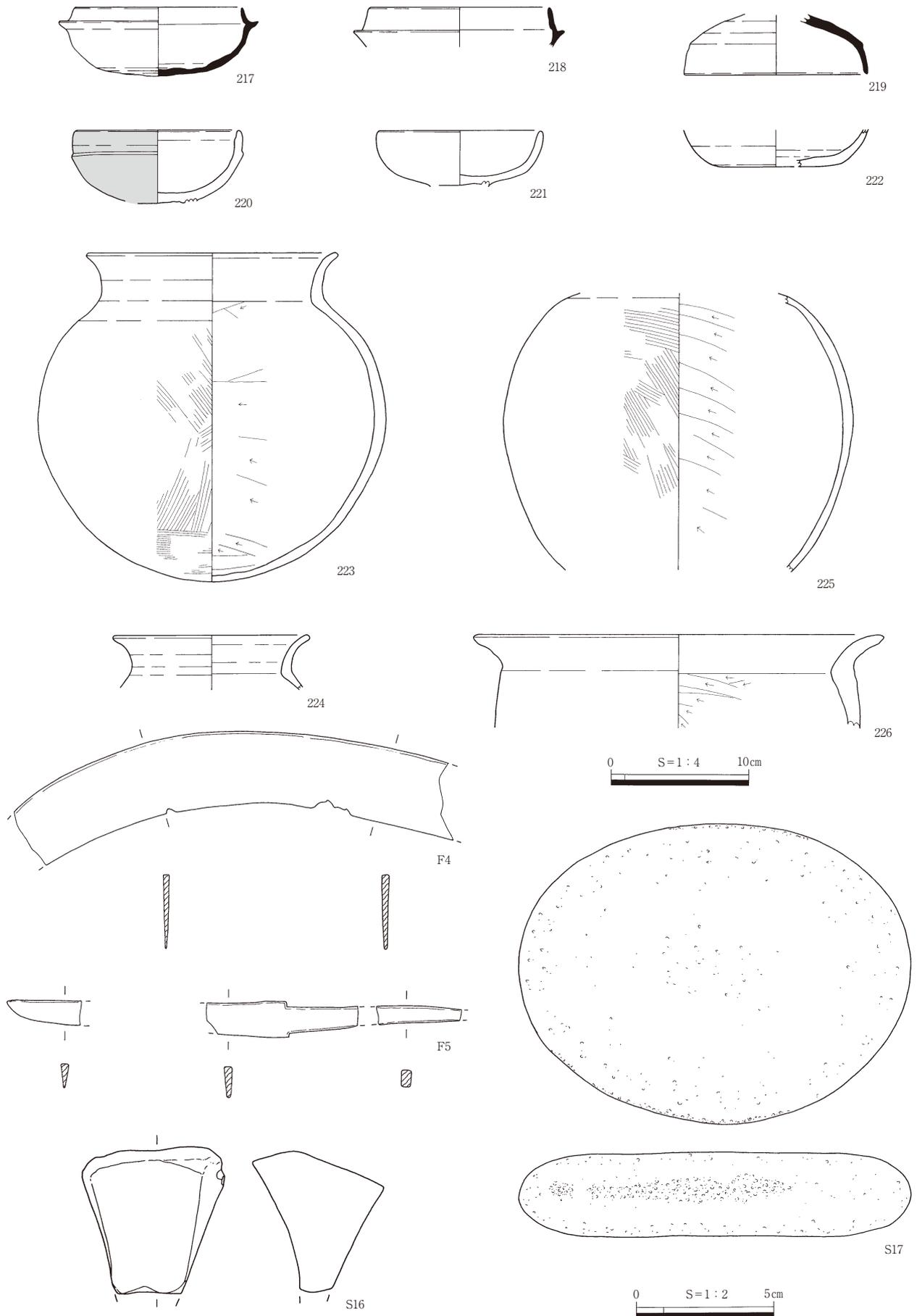
SI44(第55図、PL.16・92)

M・N36・37グリッドにまたがる標高65.0m付近に位置する。約3m南東にSI48が、西側約4mにはSI41がそれぞれ隣接する。

主軸をN-35°-Eにとった平面長方形を呈し、長軸4.4m、短軸3.6m、検出面から床面までの深さは西側で最大0.3mを測る。壁面、床面ともに根攪乱の影響を受けて失われている部分が多く、特に



第53図 SI41



第54図 SI41出土遺物

北側から東側にかけて著しい。

床面積は13.43㎡である。

壁溝は断面U字形で、幅7～30cm、深さは最大6cmを測る。壁際を全周していたものと思われるが、部分的に途切れている。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。柱穴間距離はP1－P2間が3.3m、P2－P3間が2.2m、P3－P4間が2.9m、P4－P1間が2.3mである。柱穴の深さはP1が39cm、P2が30cm、P3・P4が20cmである。長軸東側寄りのP1・2は西側寄りのP3・4よりやや深めになっている。いずれも明瞭な柱痕跡は認められない。中央にピットはないが、やや北東寄りにP5が確認できた。床面のほぼ中央には焼土面が見られる。

埋土は大きく2層に分けられる。著しく根攪乱の影響を受けて堆積状況の確認が困難な部分はあるものの、西から東へ概ね斜面の傾斜に沿うように堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は検出面付近から埋土上層の出土が多く、下層から床面出土のものは少なかった。土師器甕の破片が中心だが、須恵器も多少混じる。須恵器坏蓋227、土師器甕口縁部228の2点を図化した。

出土遺物の特徴から、本遺構は古墳時代後期中葉に位置づけられる。(原田)

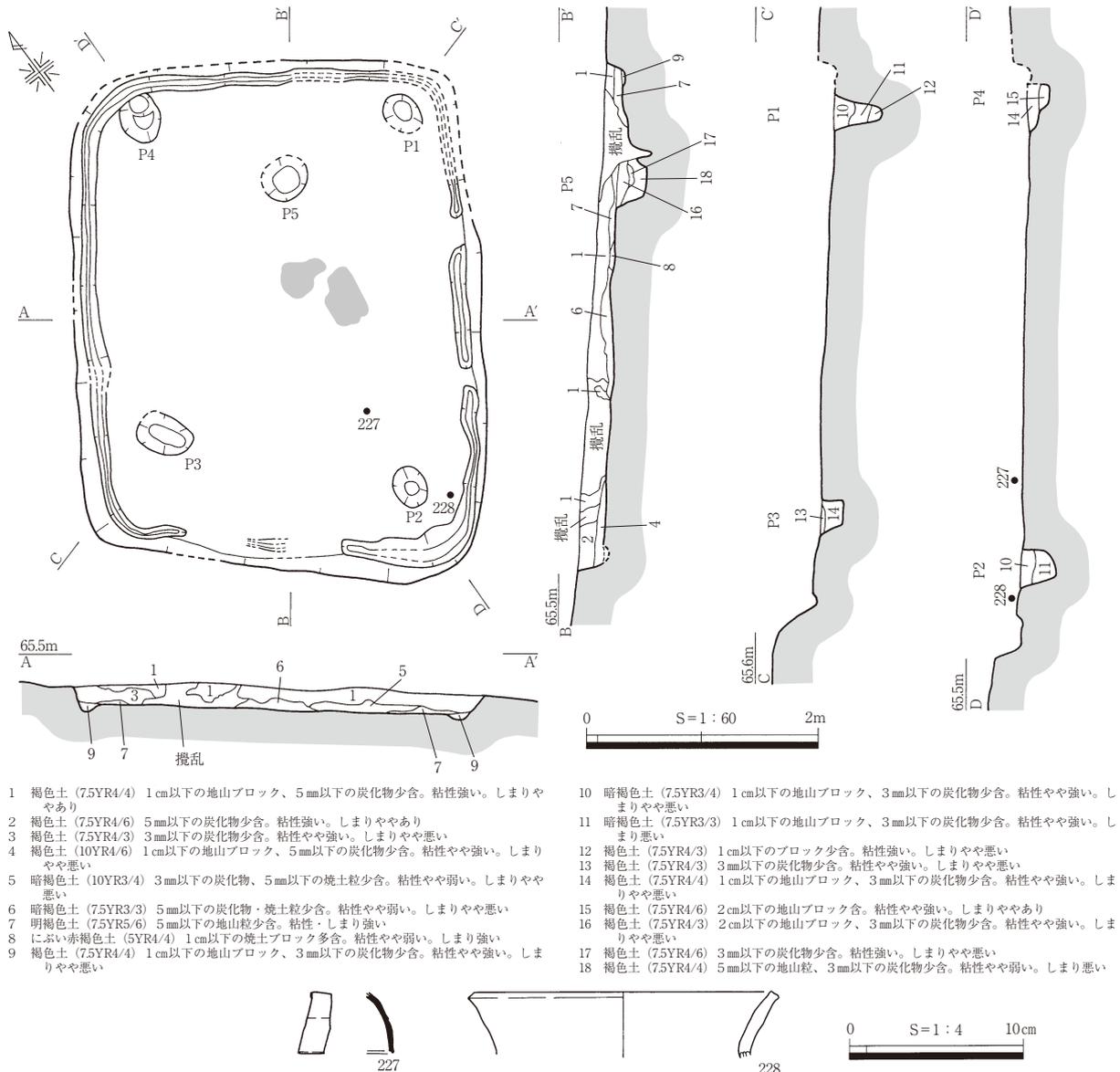
SI45(第56～58図、PL.17・91・92・104・109)

L37グリッド杭を中心に位置する平面方形の堅穴住居跡で、調査区南側に東西方向にのびる谷の谷尻付近の平坦面に立地する。主軸はN-34°-Wをとり、検出面での標高はおよそ64.1mである。付近には北側にSI46、西側にSI48と同時期、もしくは近い時期の住居跡があり、本住居貼床除去後には、時期不明の落とし穴であるSK174が検出された。

本住居跡の規模は、長軸5.02m、短軸4.84mを測る。検出面から床面までの深さは20～45cmで、床面積は19.48㎡である。検出面から床面までの埋土の状況は、下層の4層中に多くの炭化材が認められた。南西壁際には炭化材が壁と直交する方向で出土し、焼土なども検出される状況であった。このことから本住居跡は焼失住居であったと考えられるが、埋土堆積の状況としては、まず壁際から屋根焼失などにより堆積し、その後住居中央部の窪みに堆積したものと考えられる。

床面の状況は、西・南東部を除き、厚さ8cmほどの貼床が施されるが、床面は平坦に作られず、南側が住居中央部など低いところに比べ、10cmほど高く作られる。しかし、ベッド状遺構のような明確な範囲の段は認められなかった。中央部には長軸70cm、短軸36cmほどの範囲で焼土面が認められた。壁溝は、住居北東壁際の一部を除き、およそ幅15cm、深さ5cmのものが巡るが、北西・南西側にはさらに内側に幅18cm、深さ3cmほどの溝が一条巡る。柱穴はP1～4が考えられ、支柱穴4本柱の建物であったと思われる。さらに貼床除去後には、P1に壊されるP5やP6・7などが確認された。壁溝や貼床除去後に検出されたP5～7などの状況から、本住居はP4～7を柱穴とする住居からP1～4を柱穴にする住居に建て替えに伴う拡張があったと考えられる。

出土遺物には、床面よりも若干高い位置であったが、炭化材とともに土器や土錘、敲石が見られる。須恵器坏229は、口径11.8cm、高さ5.3cmで、口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。口唇部には内側に段が認められ、陶邑編年のTK23併行のものと考えられる。土師器230、231は単純口縁の甕、232は複合口縁の甕で、232の甕は、口縁部の形態から天神川編年のⅨ期ころのものと思われる。出土炭化材に関しては遺存の良いものを樹種同定分析し、試料1がアカガシ亜属、2～4がスダジイ、5がクヌギ節の結果を得た(第5章)。



第55図 SI44および出土遺物

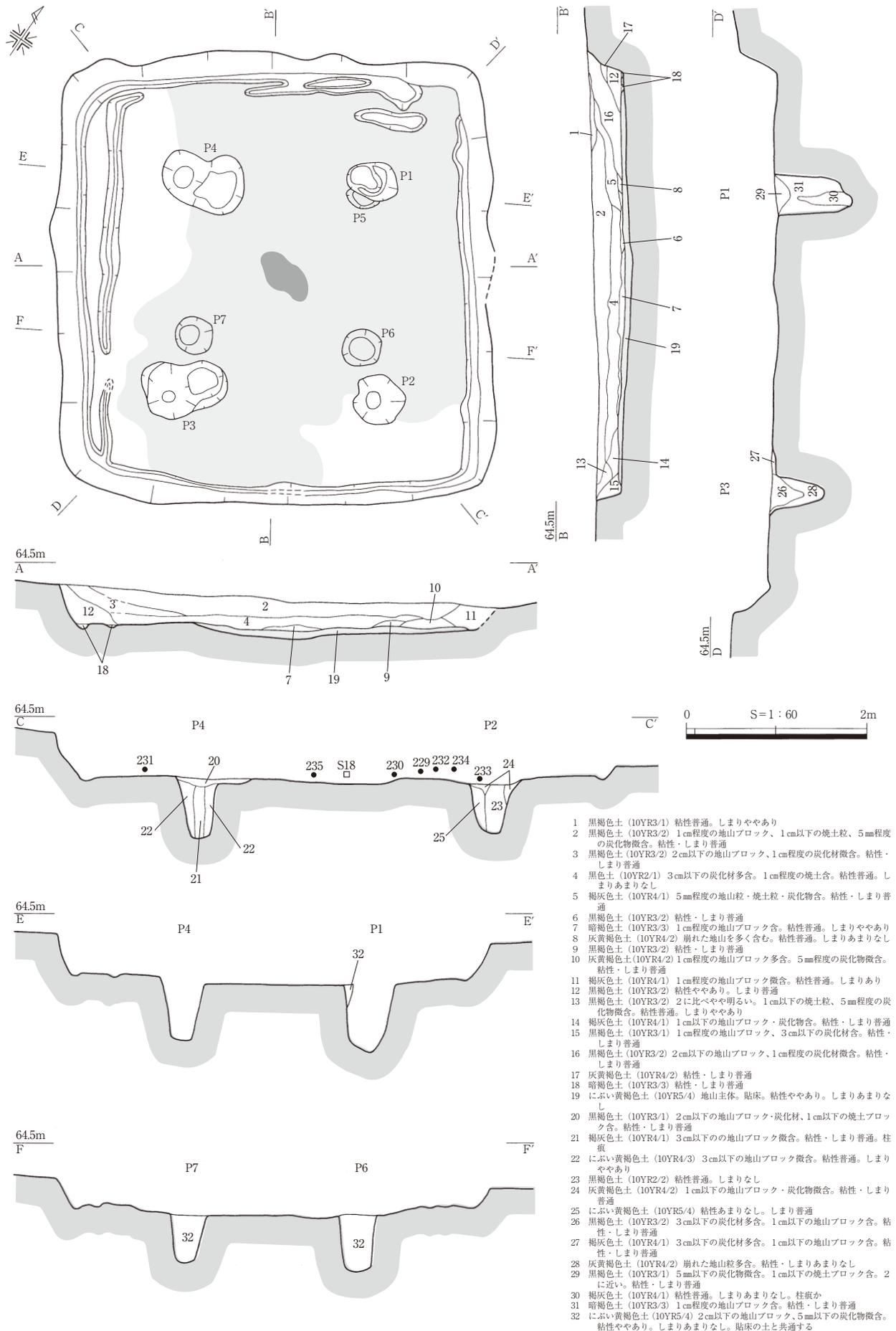
本住居の時期であるが、出土遺物である須恵器229、土師器232から古墳時代中期後半、5世紀後葉頃の時期が考えられる。(野口)

SI46(第59・60図、PL.18・93・94・104・109)

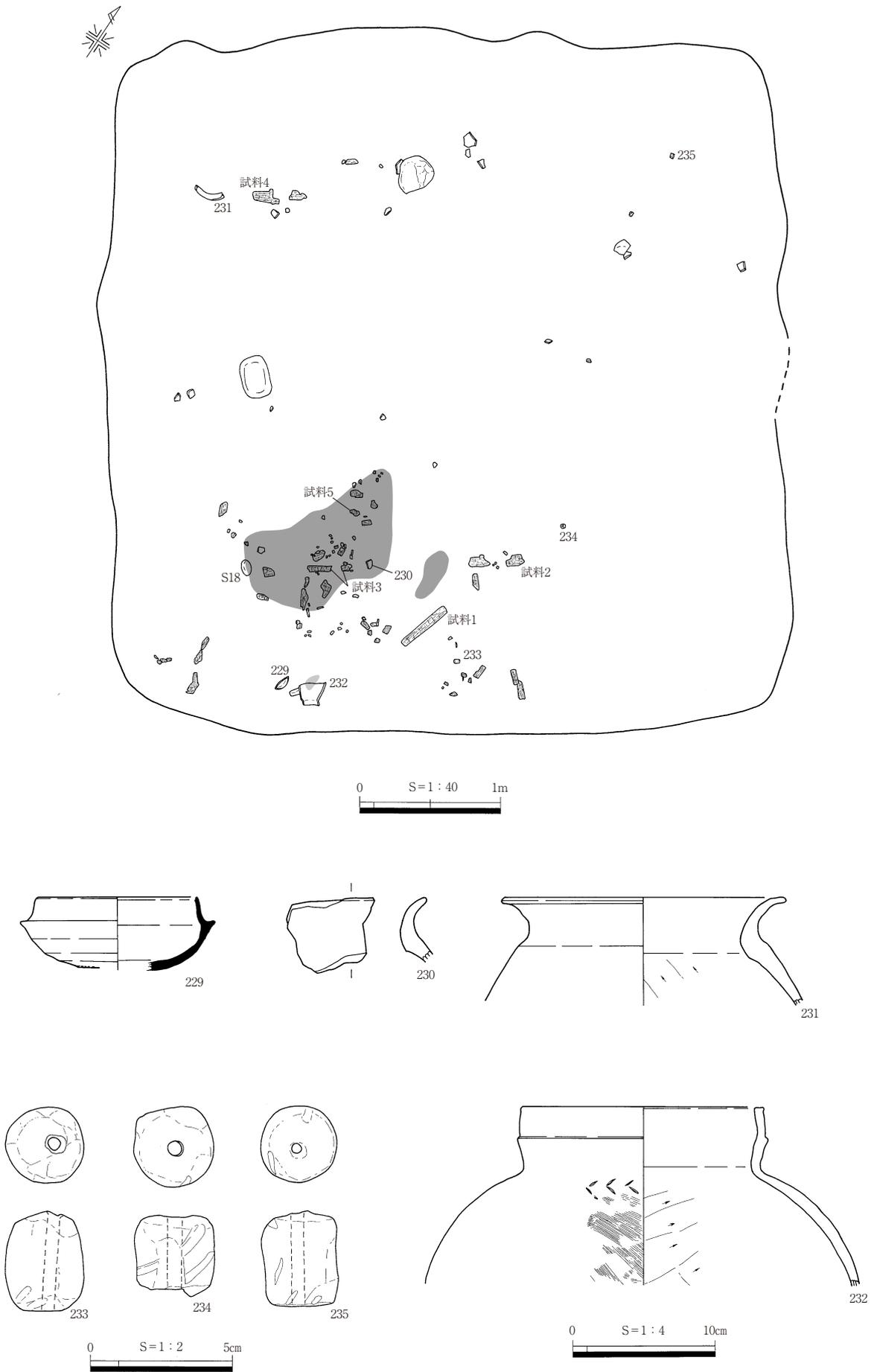
K35グリッドの平坦地に立地する平面方形の堅穴住居跡である。主軸はE-3°-Sと、ほぼ東西方向をとり、検出面での標高はおよそ64.1mである。付近には南側にSI45、北西側にSI50と、同時期もしくは近い時期の住居跡がある。

本住居跡の規模は、長軸4.08m、短軸3.96mを測る。検出面から床面までの深さはおよそ50cmで、床面積は12.11㎡である。検出面から床面までの埋土は21層に分けられるが、壁際より16～19層などが堆積したのち、10層上層からはレンズ状堆積をする。このことから自然堆積によって埋没したものと思われる。

床面の状況は、北西・南西部を中心に厚さ6cm程度の貼床が施され、中央部には径60cm、深さ20cm



第56図 S145(1)

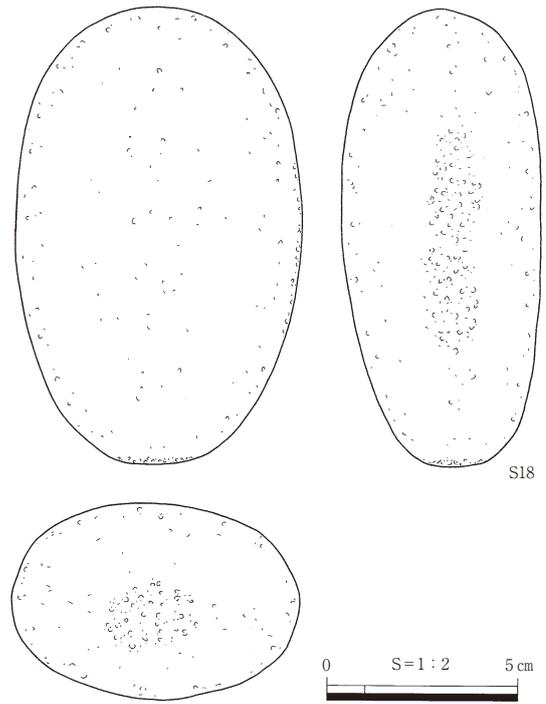


第57図 SI45(2)および出土遺物(1)

ほど地床炉(P1)が作られる。壁溝は、住居西側半分と北東壁の一部に、幅6～24cm、深さおよそ10cmのものが巡る。柱穴に関しては床面精査の結果、検出することはできなかった。この状況は貼床を除去したのちも同じであったことから、本住居跡は柱穴を伴わない堅穴住居であったと判断される。

出土遺物には土師器壺236・237、高坏238、甕239～246、土錘247～249、敲石S19～S21などが見られる。このうち甕は複合口縁の239～241、単純口縁の242～246に分けられるが、複合口縁の甕239～241などの形態は天神川編年のⅨ期に相当するものと思われる。

本住居の時期であるが、出土遺物から古墳時代中期後半、5世紀後葉頃の時期が考えられる。(野口)



SI47(第61図、PL.19・92・109)

K39グリッド杭の地点、調査区南側尾根の北側斜面から谷部にかけての緩やかな傾斜地に立地する。平面方形、主軸をN-34°-Wとし、検出面での標高はおよそ64.6mである。

本住居跡の検出面での規模は、長軸4.44m、短軸4.35mを測る。検出面から床面までの深さは南側で75cm、北側で40cmで、床面積は13.84㎡を測る。検出面から床面までの埋土は16層に分けられるが、主として下層より15・12・10・3層と自然堆積の状況を呈し堆積する。

床面の状況は、中央部を中心に貼床が施され、壁溝、柱穴、焼土面が検出された。壁溝はおよそ幅15cm、深さ5cmのものが北東壁部分の一部を除いてめぐる。柱穴はP1～4の4本柱、P5・6の2本柱が考えられるが、P5の掘方上層に貼床が施されることから2本柱から4本柱への建て替えがあったものと考えられる。焼土面は中央に長軸50cm、短軸40cm、深さ2～3cmほどの浅い凹凸が見られる範囲で確認された。

また、貼床除去中の状況であるが、中央やや西側に径60cmの土坑掘方を確認した。落とし穴のような形態を示すが、貼床中で検出されたことから、2本柱建物建設前後に掘られたものと判断され、柱穴の配置を間違えた可能性がある。

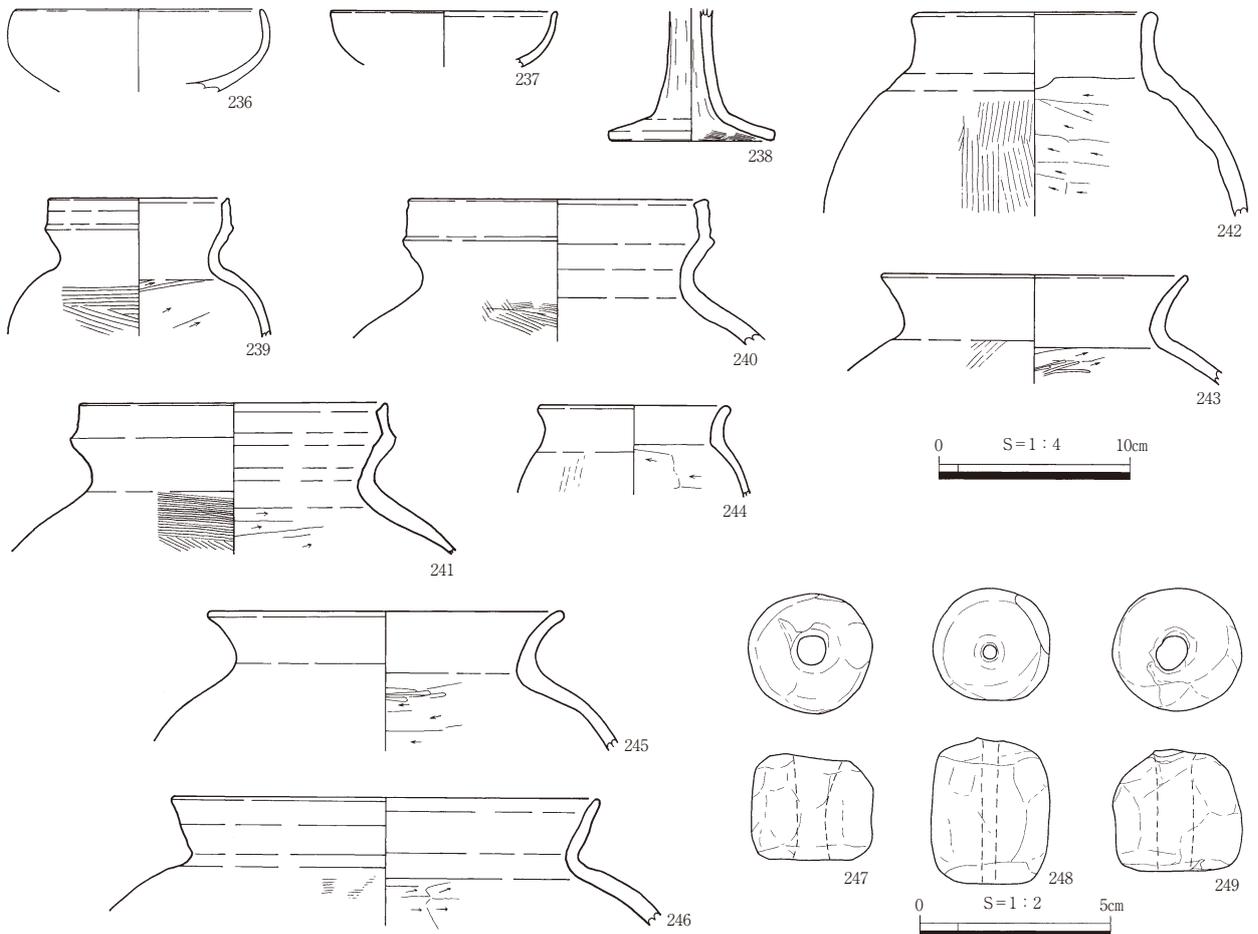
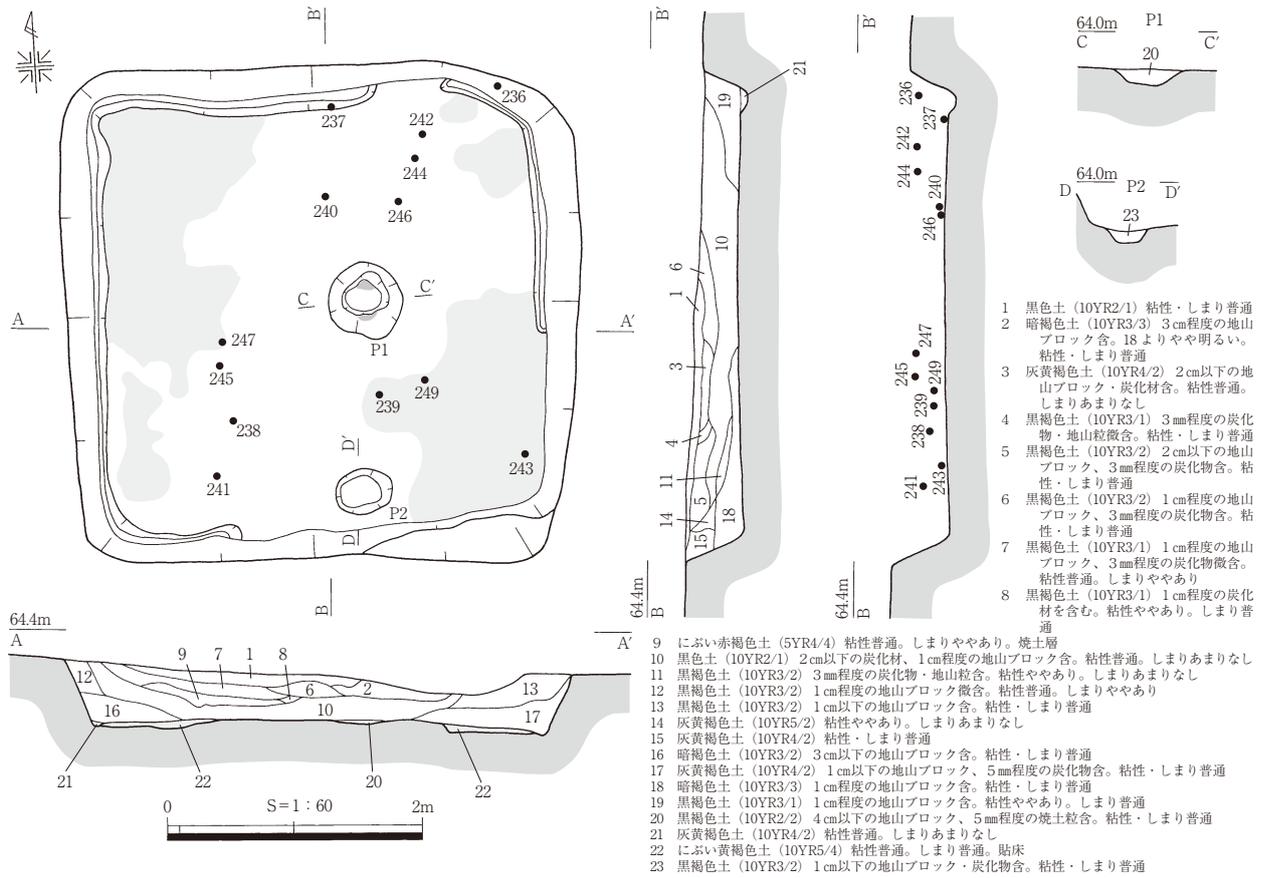
出土遺物には須恵器坏蓋250、土師器甕251・252、土錘253などが見られる。250は天井部から口縁部にかけての破片で、天井部と口縁部の境には明瞭な段がつけられる。また、口唇部内側も段がつけられる。251は複合口縁の甕口縁部の破片で、口縁部下端の段の稜は鈍く、丸みをおびる。

本遺構の時期であるが、250の須恵器坏蓋が陶邑編年のTK23～TK47、251の土師器甕が天神川編年のⅨ期に相当すると思われることから古墳時代中期後半、5世紀後葉頃の年代が考えられる。(野口)

SI48(第62～65図、PL.20・91・94～96・104・109)

M37グリッド、調査区南西の緩斜面地、標高およそ65.2mの高さに立地する平面方形の堅穴住居跡である。主軸はN-40°-Eをとる。本住居跡は、弥生時代の住居であるSI49と切り合い関係にあ

第58図 SI45出土遺物(2)



第59図 SI46および出土遺物(1)

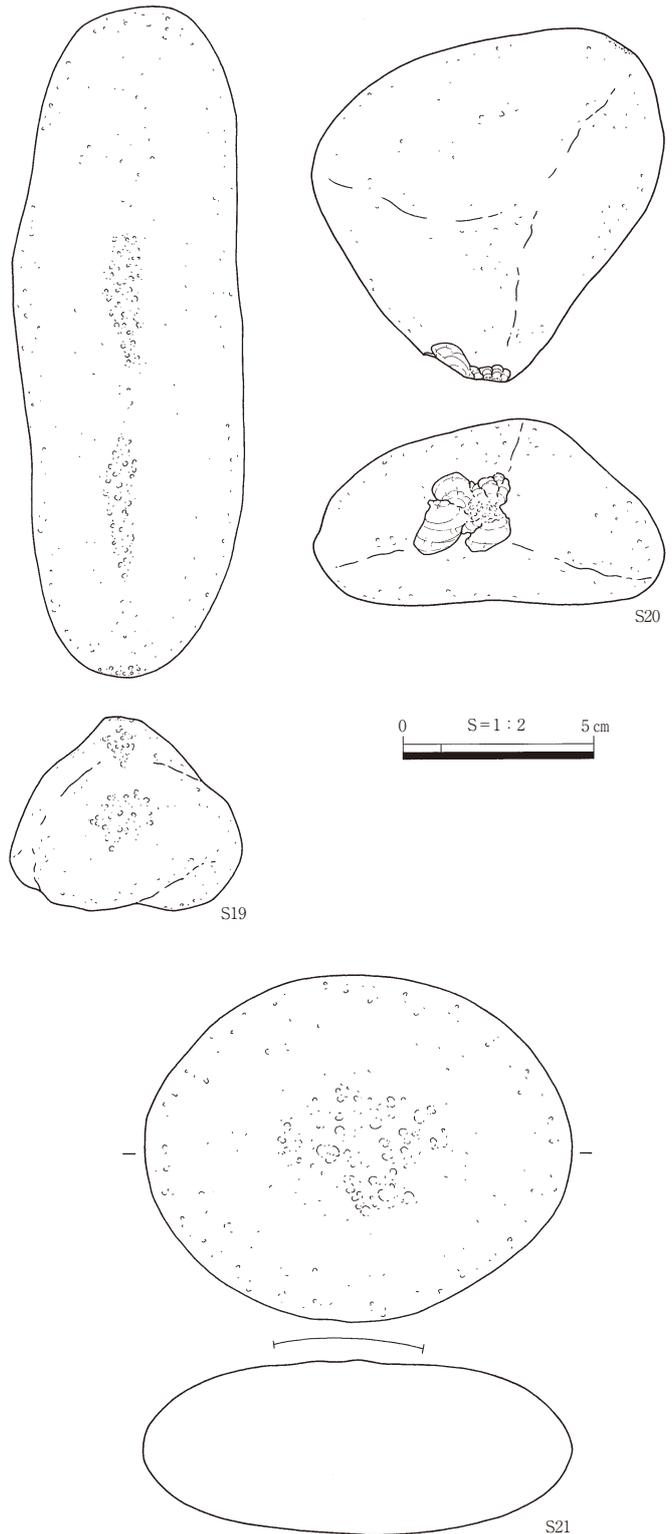
るほか、西側には近い時期の住居であるSI41・44、東側には同時期のSI45が存する。

本住居跡の規模は、長軸4.41m、短軸4.29mを測る。検出面からの深さは40～70cmで、床面積は14.83㎡である。床面までの埋土の状況は、細かく48層に分けられるが、壁際の堆積の後、中央部が堆積するといった自然堆積の様相を呈する。また、本住居跡の遺物の出土状況は、41層中やその上面から本遺構に伴う遺物が非常に多く、遺存状況が良い状態で確認された(第63図)。このうち床面付近から出土した須恵器229は東側に近接するSI45から出土した須恵器229と接合した。

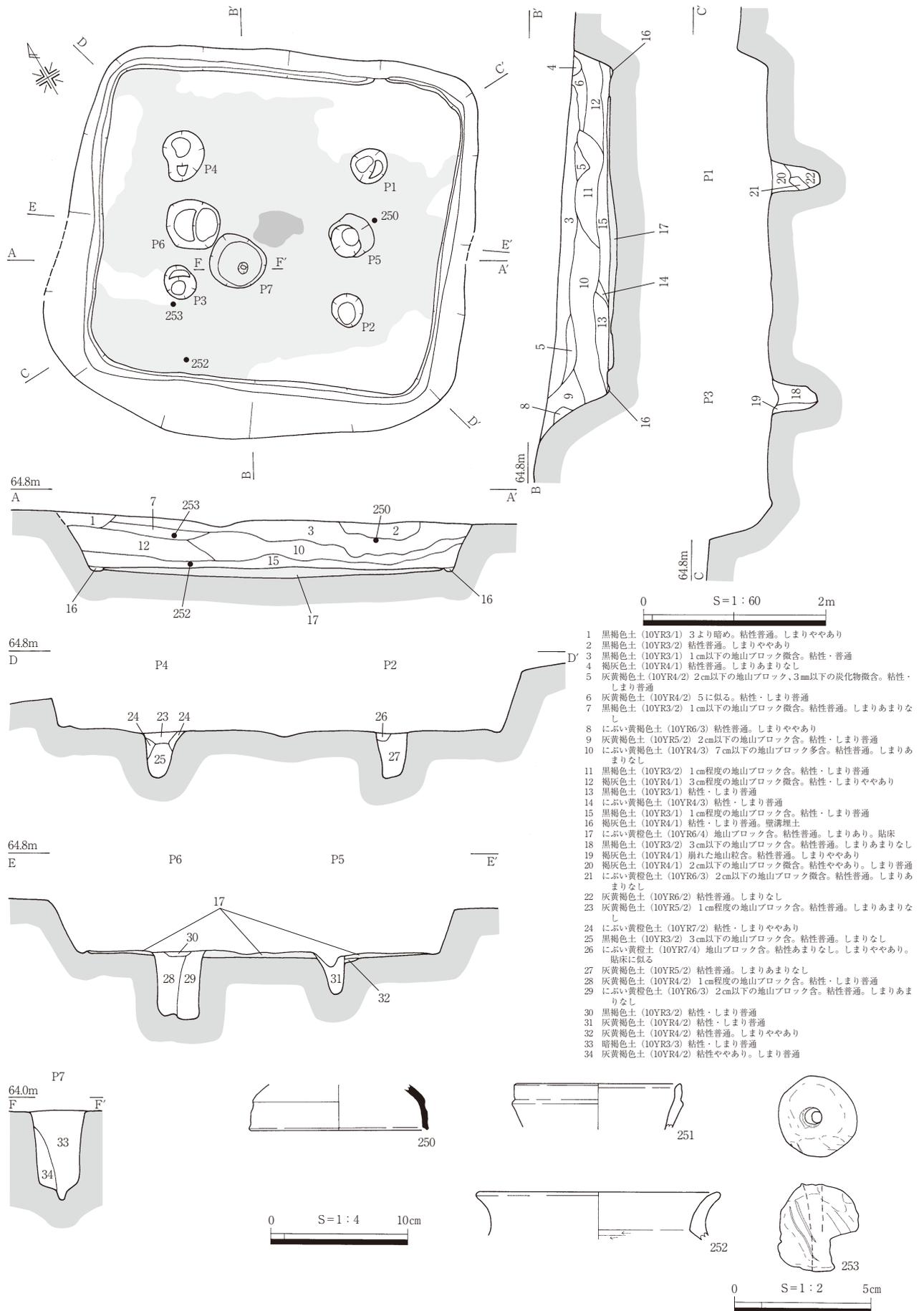
床面の状況は、北側の壁付近、および中央南側の一部を除き、厚さ4cmほどの貼床が施される。柱穴はP1～4が認められ、中央部には長軸66cm、短軸40cmの範囲の焼土面を伴う、長軸80cm、短軸60cm、深さ7cmほどの地床炉(P5)が作られる。壁溝は、住居南側の壁沿いを中心に認められたが、北側にはほとんど巡らない。貼床除去後の状況としては、北東壁付近にSI49の柱穴と考えられるピットが確認された。

遺物は縄文土器、弥生土器などが若干出土したが、多くは古墳時代の土器である。254～264は土師器甕で、254～257は複合口縁、258～264は単純口縁である。単純口縁の甕は、さらにその口縁部形態から、頸部からの立ち上がりが上方に向けてから外反する258～260、口唇部に段を持ち、断面「く」の字状に頸部で屈曲させる261・262、立ち上がりが頸部から直に外反する263・264に分けられる。これらの甕は口縁部形態を除き、調整等に大きな差は見られないが、口縁部形態の違いが何によったかについては不明である。265は胴部に二本の取っ手が付いた土師器甕、266は赤彩された土師器の台付壘である。229は須恵器坏でSI45出土のものと接合する。口縁部形態などから陶邑編年のTK23併行のものと思われる。267は体部片で、「↑」状の線刻が見られる。268は縄文土器で、磨消縄文が施される。269は土錘、S22は敲石である。

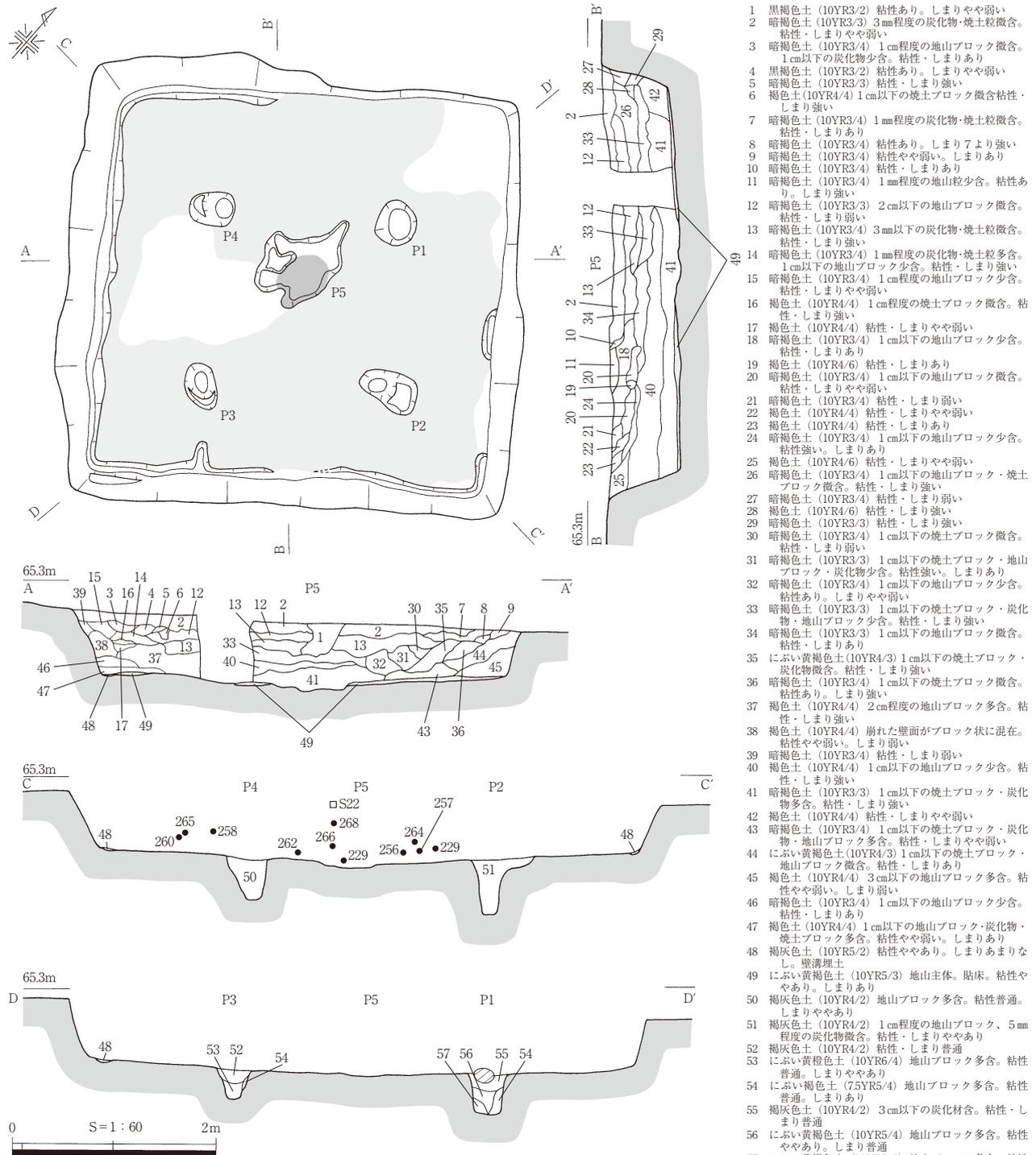
本遺構の時期であるが、出土遺物である須恵器坏229や土師器甕254～257がいずれも古墳時代中期後半、5世紀後葉頃のものと考えられることから、おおよそその頃の年代が考えられる。(野口)



第60図 SI46出土遺物(2)



第61図 SI47および出土遺物



第62図 SI48(1)

SI50(第66～68図、巻頭図版2-1、PL.21・97・104・106・109)

L33からL34グリッドにかけて位置し、北東にSI51が近接する。

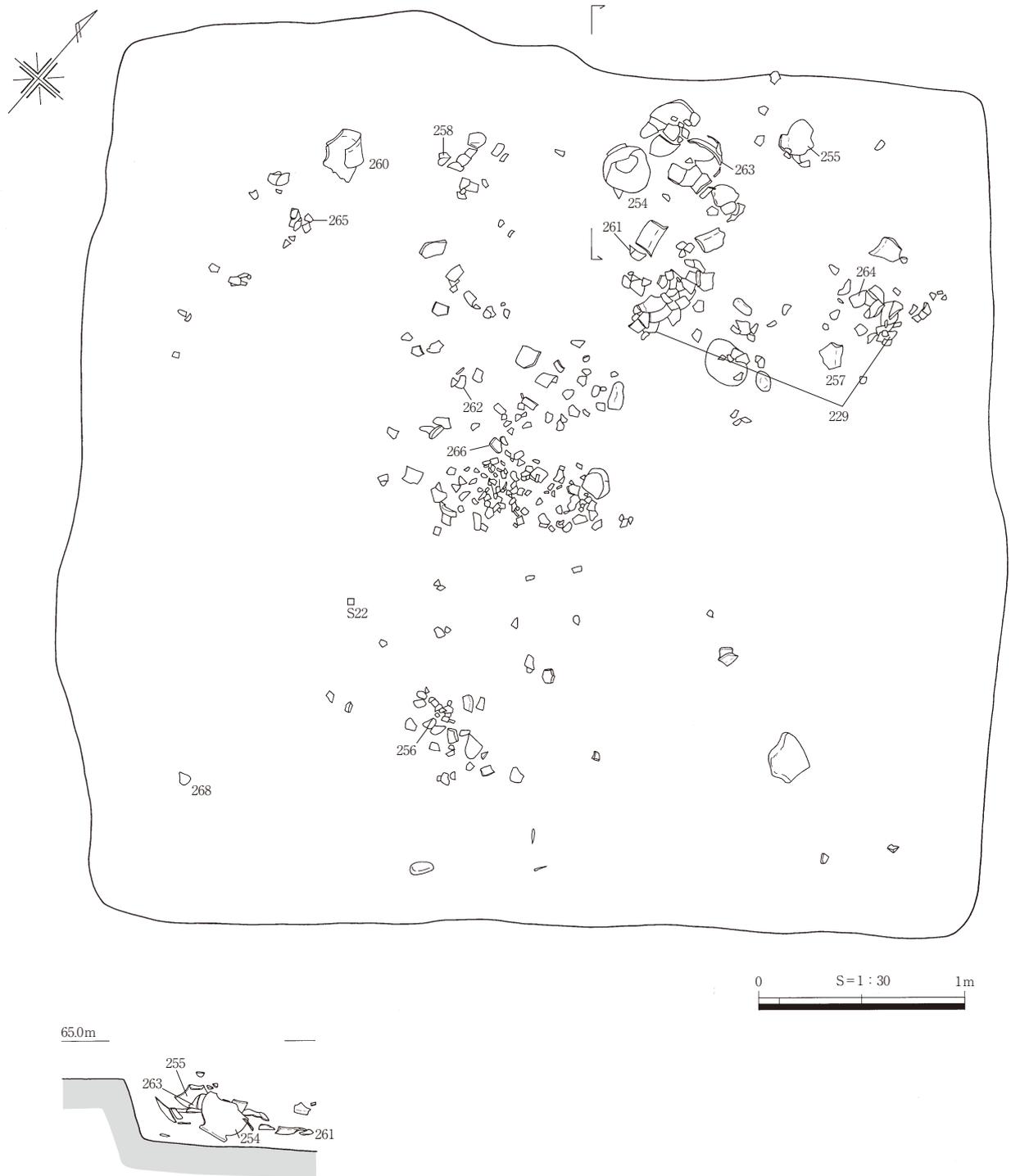
平面形は長軸8.3m、短軸6.6mの方形を呈し、主軸をN-28°-Wにとる。床面までの深さは中央付近が最も深く0.54mを測る。壁面に向かい緩やかに床が高くなっているが、特に南北方向が顕著である。床面積は41.02㎡であった。

南壁際を除き幅10～15cm、深さ6cm程度の壁溝が巡る。主柱穴はP1～P6で、P2・P3・P5の土層観察では柱痕跡が確認された。いずれも径は40cm、深さは50cm程度である。主柱間距離は住居長軸方向ではP1-P2間が2.8m、P2-P3間が2.7m、P4-P5間が2.85m、P5-P6間

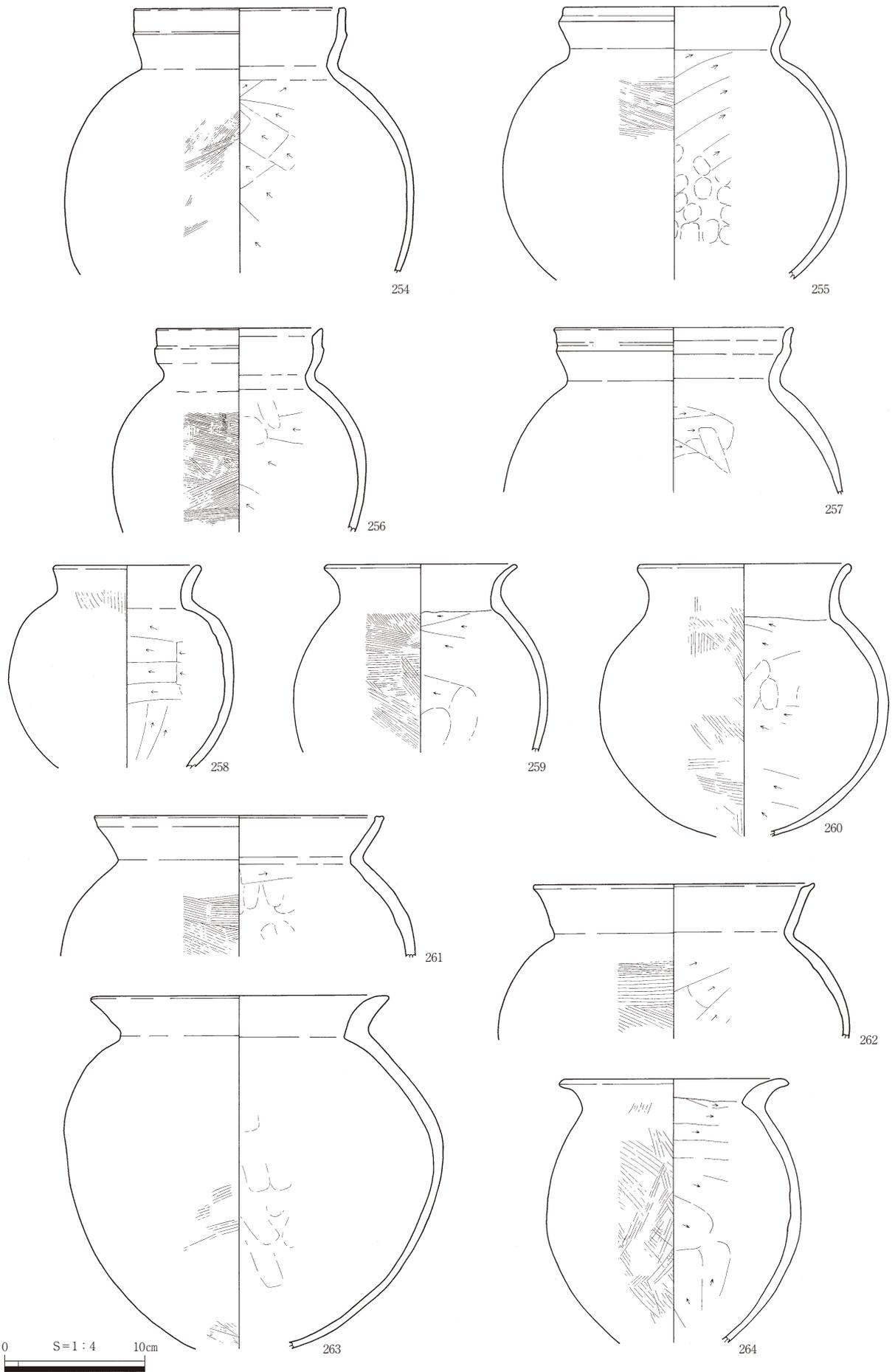
が2.65mであり、住居短軸方向ではP 1 - P 4 間が3.4m、P 3 - P 6 間が3.2mであった。これらの主柱穴とは別に南側を除く壁際にP 7 ~ P 18のピットが検出された。検出した平面規模にはばらつきがあるが、床に掘り込まれた部分の径は20 ~ 30cmで、主柱穴よりひと回り小さい。床面からの深さはP 10・P 13・P 17が20cm以内であることを除き、30 ~ 50cmほどと主柱穴なみである。床面の北側半分程度に貼床が施されており、主柱穴やピットは貼床を施した後に掘り込まれている。

住居の北東隅に径1 m程度の掘り込みが3基検出された。P 19は貼床後に掘り込まれており、40cmほどの深さを持つ。P 20とP 21はやや浅い皿状の掘り込みで、貼床除去後に検出されたものである。

遺物は埋土上層から床面付近にかけて出土した。270 ~ 275は須恵器である。坏を見ると6世紀代



第63図 SI48(2)



第64図 SI48出土遺物(1)

から8世紀代までと時期幅が認められる。276・277は土師器甕。277は外面に赤彩が見られる。278～280は土師器甕で、いずれも単純口縁である。J2は管玉を製作する際の角柱状素材で、施溝分割を示す擦り切り溝が認められる。右側面には並列する細かな剥離面が見られるが、すべて浅く、稜を除去する意図があったものかは不明である。S23は敲石。棒状礫の先端と側縁に敲打痕を残すほか、鋭利な線状痕が残されている。F6～F10は鉄製品。F6は柳葉形の鉄鏃、F9は曲刃鎌である。F10は厚めの棒状製品で一端が尖り気味であることからタガネの可能性はある。

出土遺物全体としては時期幅が大きいですが、床面付近から出土した甕278・279の特徴から判断すると、SI50は須恵器坏270・271が示す6世紀代、古墳時代後期の遺構と考えられる。(湯村)

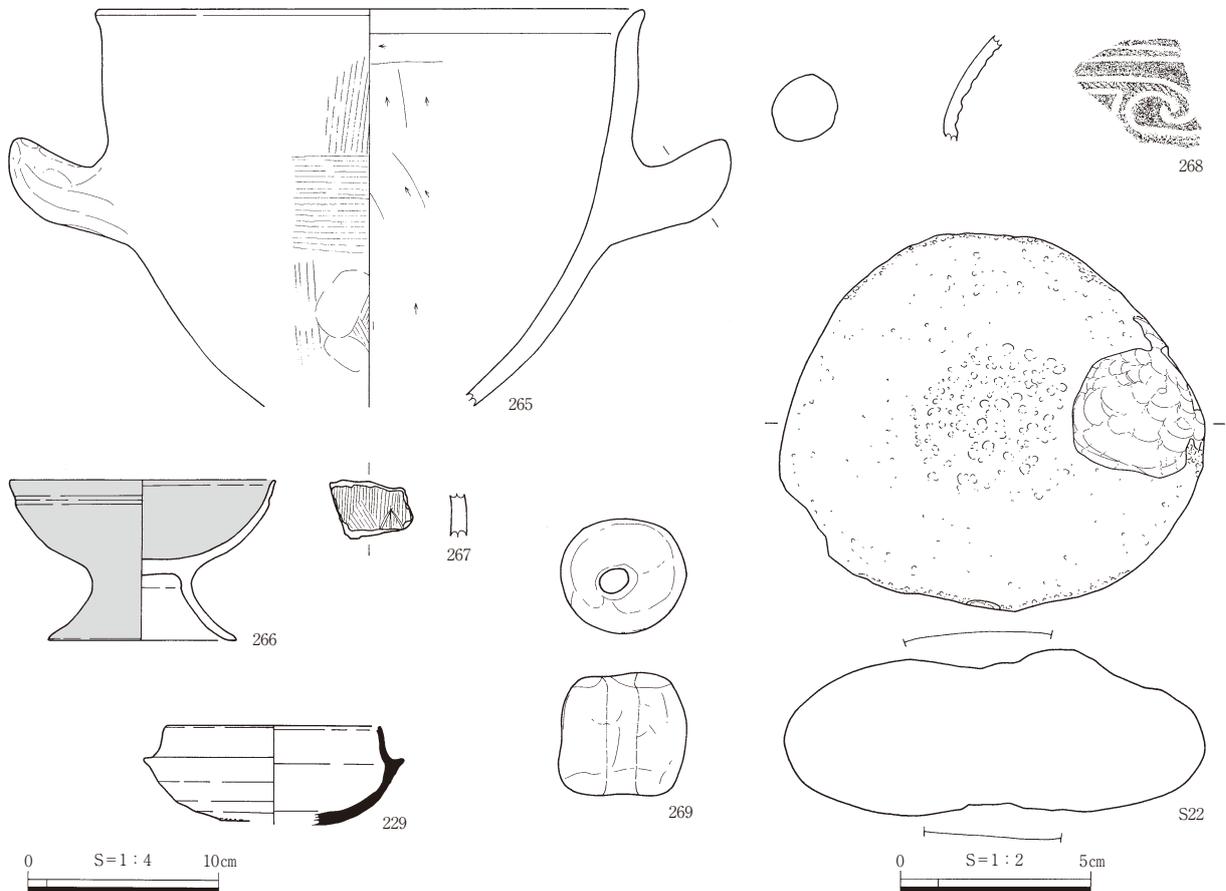
SI51(第69・70図、PL.22・97・98・106・107・109)

K33グリッド、標高64m付近の平坦地に位置し、南西側にSI50が近接する。遺構の中央部は東西に走るSD7に切られている。

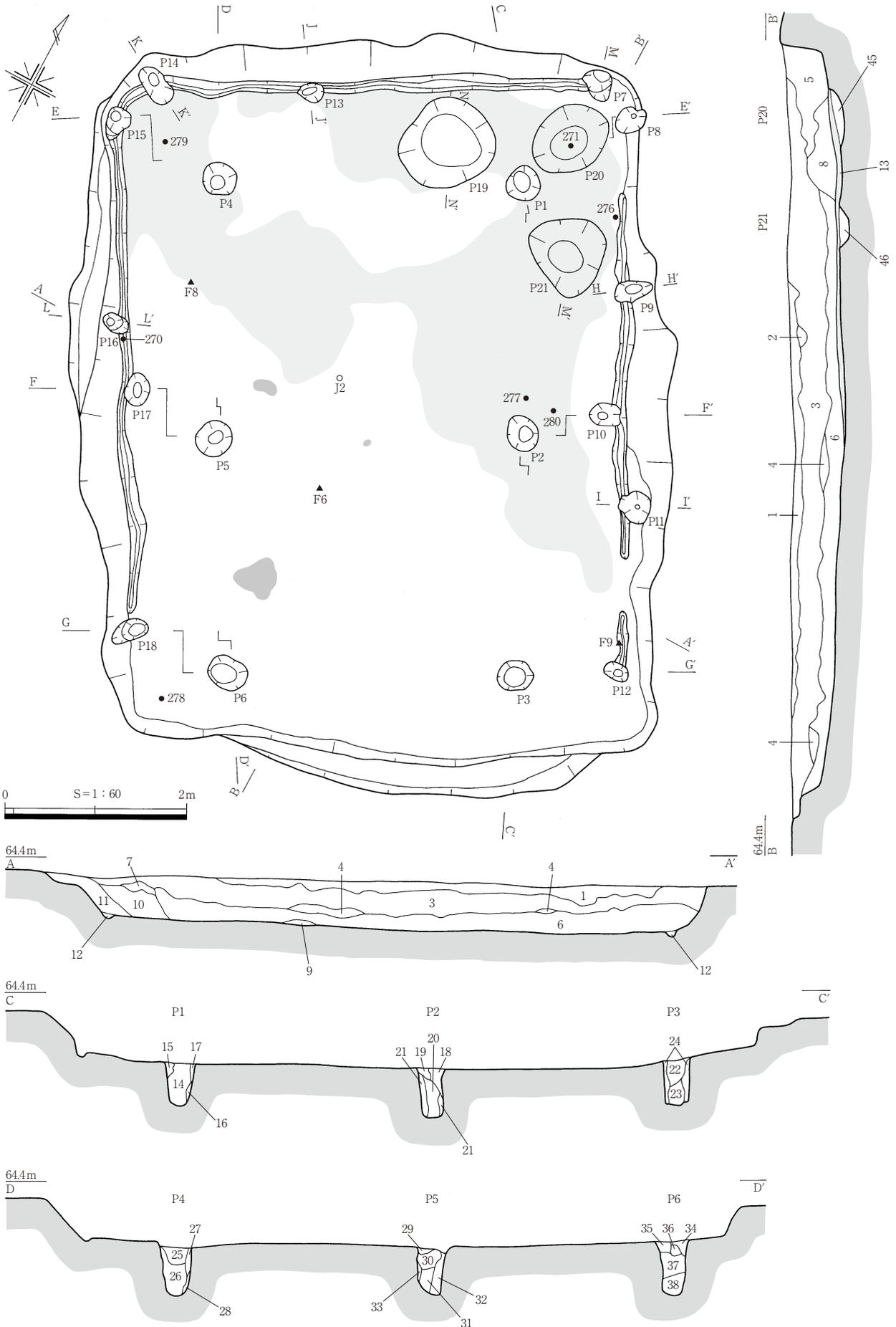
本住居周辺では鍛冶関連遺構の存在が予想されたため、鍛造剥片などの微細遺物を検出する目的で土壌採取を事前に実施していた。そのため本住居跡の北西側から南東側にかけての壁面を一部失う結果となった。

長軸6.1m、短軸6.0mの隅丸方形で、深さは北東側で最大0.68m、床面積は28.37㎡を測る。N-30°-Eに主軸をとる。

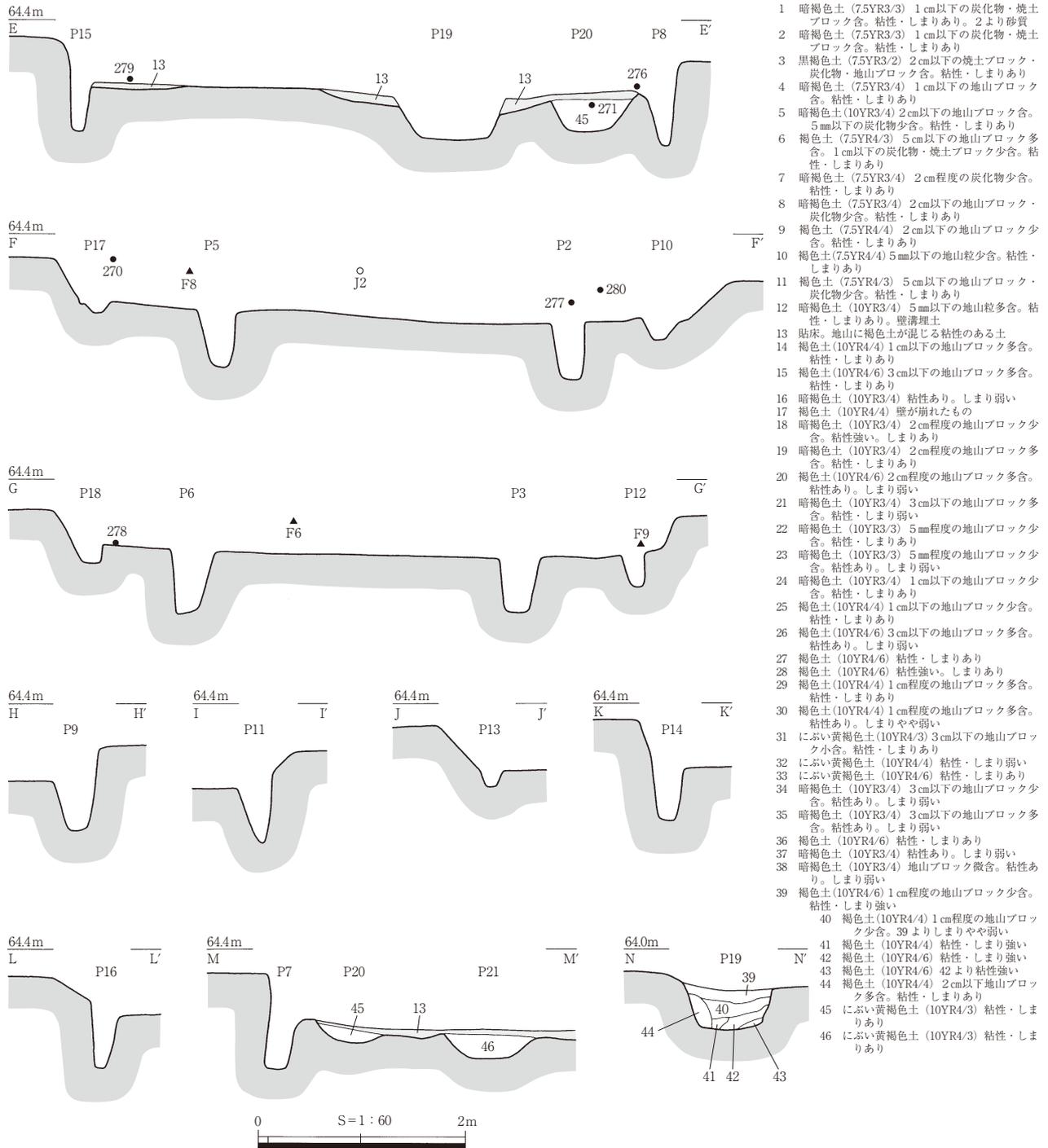
壁溝は断面U字形で、幅9～18cm、深さは最大6cmを測り、床面をほぼ全周している。支柱穴はP1～P4の4本柱で、柱穴間距離はP1-P2間が3.0m、P2-P3間が3.3m、P3-P4間が3.2



第65図 SI48出土遺物(2)



第66図 SI50(1)



第67図 SI50(2)

m、P 4 - P 1 間が3.2mを測る。柱穴の深さは50 ~ 70cm程度で、柱痕跡は認められなかった。長軸1.0m、短軸0.9mを測るP 5が中央ピットである。深さは最大9 cmと浅く、底面が被熱のため赤変していた。また床面中央付近を中心に貼床が施されている。

埋土は柱穴等も含めて、褐色土及び暗褐色土を主体とした56層が確認された。全体的に壁際から埋没し、レンズ状の堆積となっていることから、自然堆積によるものと考えられる。

埋土中からは土器のほか、石器、鉄製品等が多数出土した。須恵器坏281は口縁部が内傾して立ち上がる。282は底部に回転糸切り痕を残す。土師器甕283・284は単純口縁を持ち、体部は張らず長胴気味となる。285は複合口縁を呈する。286は土師器高坏。内面に放射状のミガキが見られ、赤色塗彩

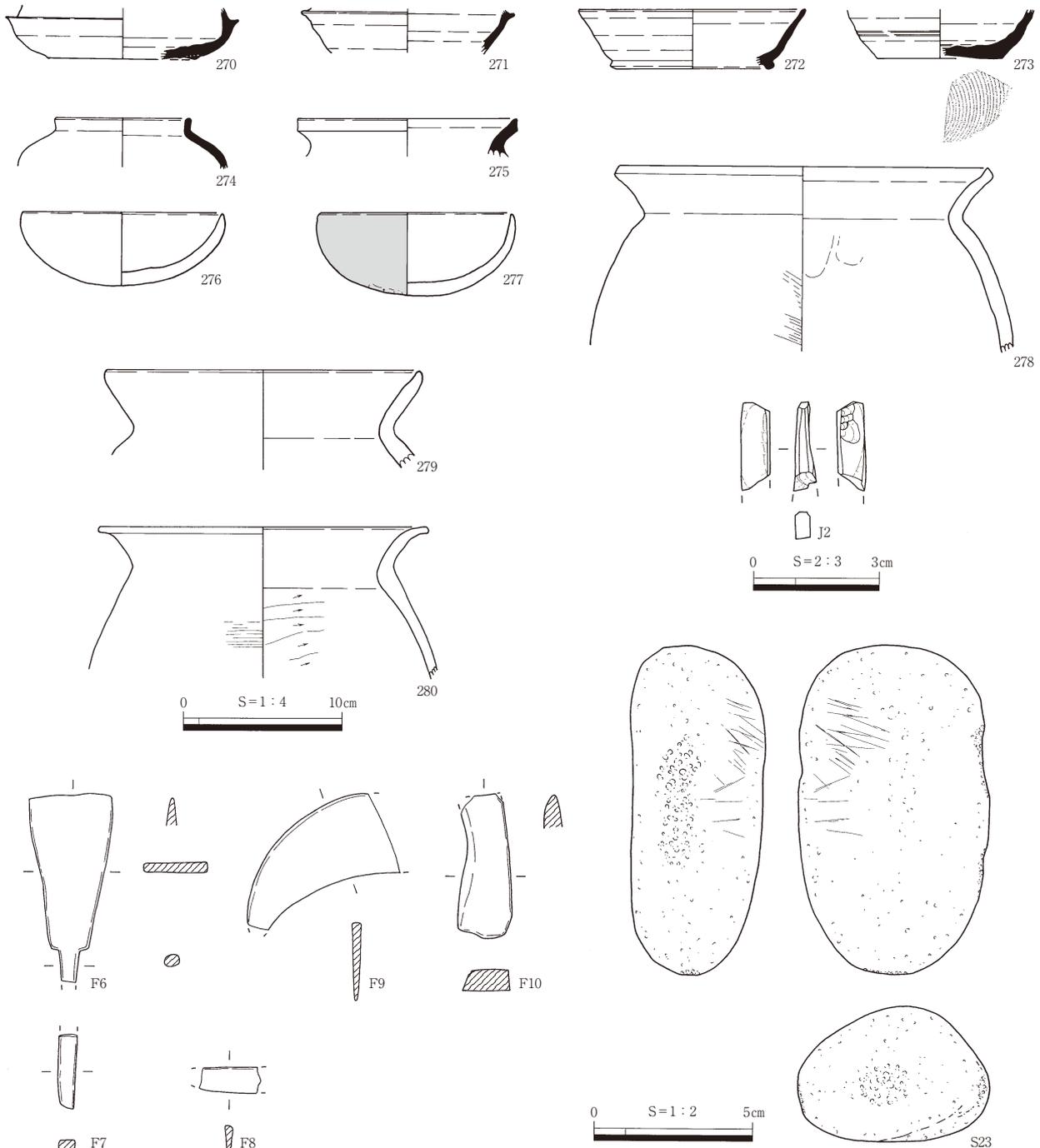
が施される。J 3は土製の玉。F11・12は棒状の鉄製品であるが、本来何であったか不明である。

床面付近から出土した須恵器坏281が陶邑編年のTK10併行とみられ、土師器甕の特徴とも矛盾しないため、本住居は古墳時代後期中葉と考えられる。(前田)

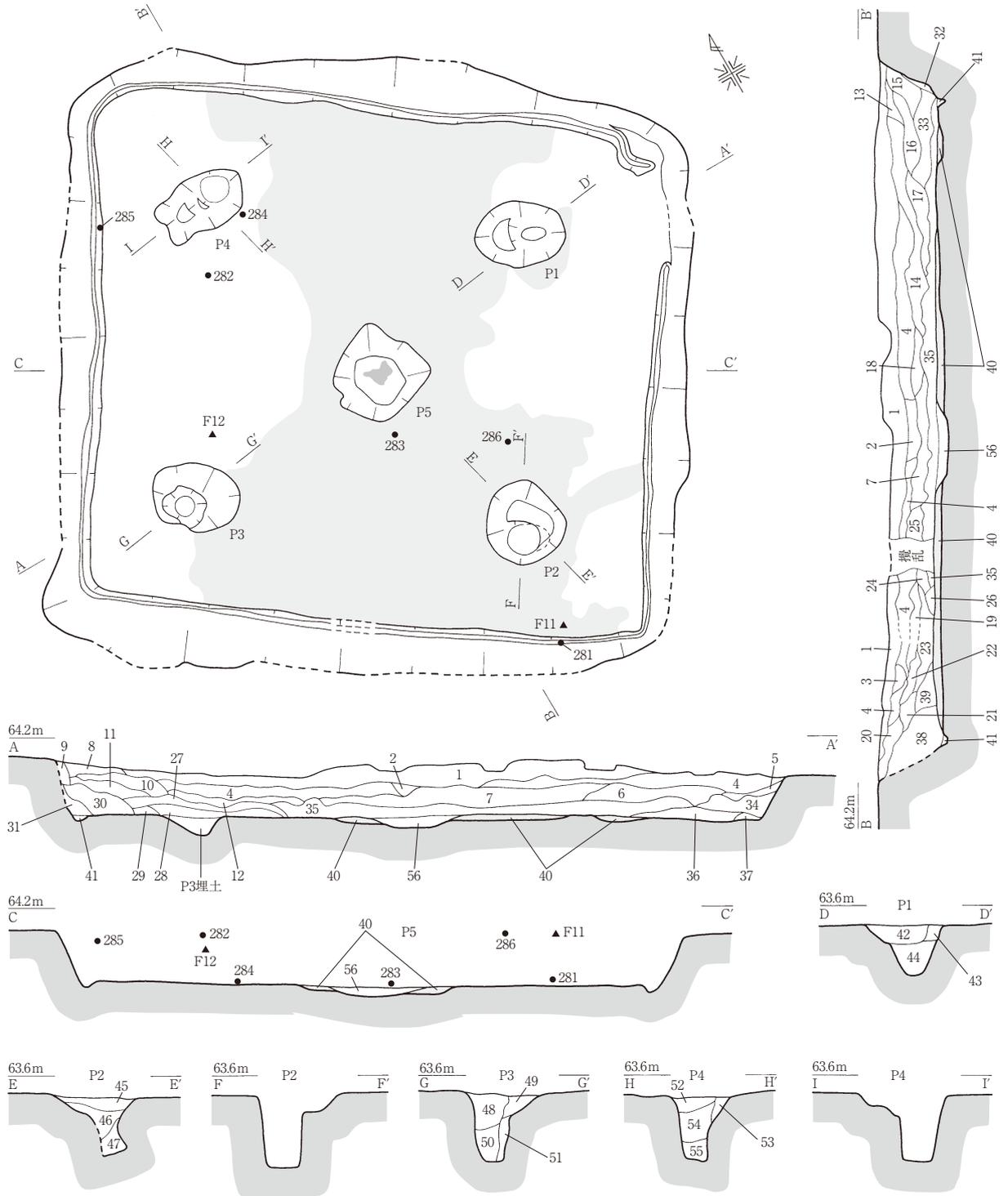
(3)土坑

SK162(第71図、PL.23・98)

O37グリッド、標高66m付近の緩斜面に位置し、北側にSI41が近接する。平面形は、長軸2.1m、短軸1.7mの不整な楕円形を呈する。断面形は底面が緩やかに落ち込む浅い逆台形で、検出面からの深さは最大30cmを測る。埋土は4層が確認できたが、大きくは地山ブロックをわずかに含む黒褐色土と暗褐色



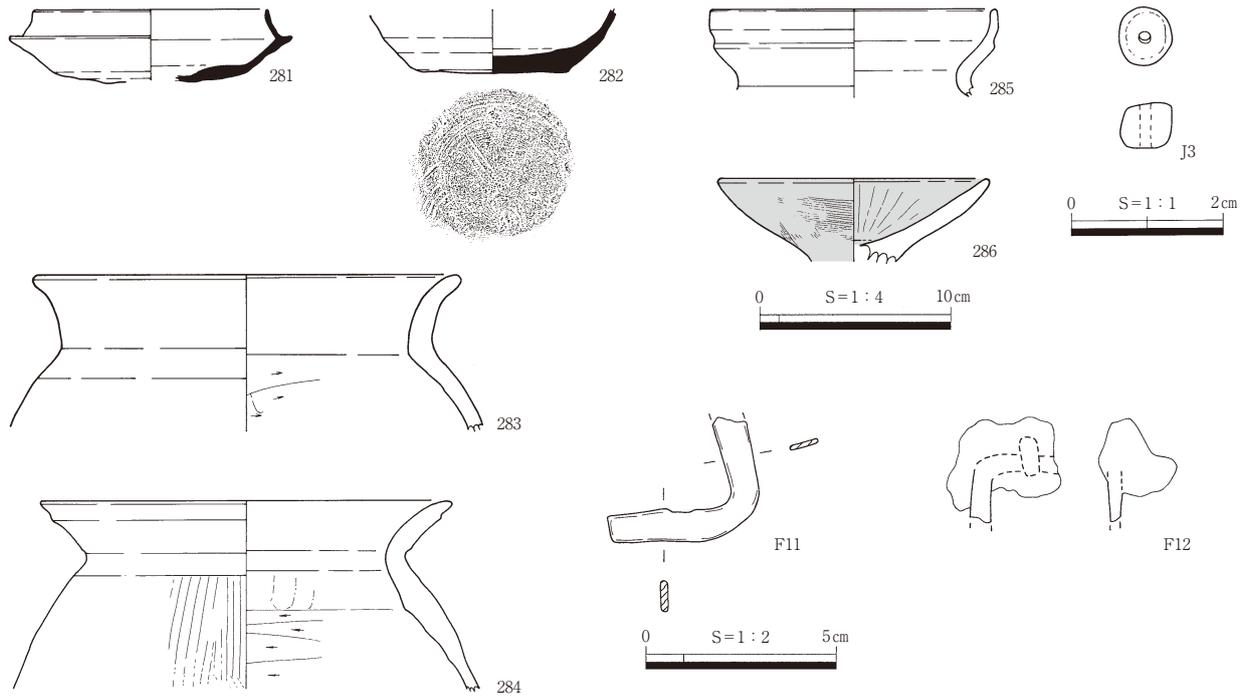
第68図 SI50出土遺物



- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 1 cm以下の焼土ブロック微含。粘性・しまりあり
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりあり
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりあり
- 4 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック・焼土ブロック・炭化物少含。粘性・しまりあり
- 5 褐色土 (10YR4/6) 5 mm以下の地山粒・炭化物微含。粘性あり。しまり4・6より弱い
- 6 褐色土 (10YR4/6) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 7 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下のホーキブロック・焼土ブロック・炭化物多含。粘性・しまり4より弱い
- 8 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりや弱い
- 9 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりや弱い
- 10 褐色土 (10YR4/4) 5 mm程度の地山粒・炭化物少含。粘性・しまりあり
- 11 褐色土 (10YR4/4) 5 mm程度の地山粒・炭化物微含。粘性あり・しまりやや弱い
- 12 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック少含。粘性あり。しまり4より少し弱い
- 13 暗褐色土 (10YR3/4) 5 mm程度の地山粒微含。粘性・しまりあり
- 14 褐色土 (10YR4/4) 2 mm程度の地山粒・焼土微含。粘性・しまり強い
- 15 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりあり。しまり13より強い
- 16 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性あり・しまりやや弱い
- 17 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりあり
- 18 褐色土 (10YR4/4) 5 mm以下の地山粒・炭化物少含。粘性・しまりやや弱い
- 19 暗褐色土 (10YR3/4) 3 cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまり弱い
- 20 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック・焼土ブロック微含。粘性・しまりあり
- 21 暗褐色土 (10YR3/4) 20に似るが、しまりは強い。粘性・しまりあり
- 22 暗褐色土 (10YR3/4) 5 mm以下の地山粒微含。粘性・しまりあり
- 23 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック少含。粘性あり。しまり弱い
- 24 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりあり。35よりしまり弱い
- 25 暗褐色土 (10YR3/4) 3 cm以下の地山ブロック多含。粘性あり。しまり弱い
- 26 褐色土 (10YR4/6) 1 cm以下の地山ブロック・炭化物微含。粘性あり。しまりやや弱い
- 27 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性あり。しまりやや弱い
- 28 暗褐色土 (10YR3/4) 5 mm程度の地山粒・炭化物微含。粘性・しまり弱い
- 29 褐色土 (10YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりあり

- 30 暗褐色土 (10YR3/4) 5 mm以下の地山粒・炭化物微含。粘性あり。しまりやや弱い
- 31 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック・炭化物微含。粘性あり。しまり弱い
- 32 暗褐色土 (10YR3/4) 2 mm程度の地山粒・炭化物微含。粘性あり。しまり弱い
- 33 褐色土 (10YR4/6) 2 mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性・しまり強い
- 34 褐色土 (10YR4/4) 5 mm以下の地山粒・炭化物微含。粘性あり。しまり強い
- 35 褐色土 (10YR4/4) 2 cm以下の地山ブロック・炭化物少含。粘性あり。しまり強い
- 36 褐色土 (10YR4/6) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 37 褐色土 (10YR4/4) 粘性あり。しまり36より少し弱い
- 38 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm以下の焼土ブロック・炭化物・地山微含。粘性あり。しまり強い
- 39 暗褐色土 (10YR3/4) 3 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまり弱い
- 40 粘土
- 41 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりあり。壁埋土
- 42 暗褐色土 (10YR3/4) 5 mm以下の地山粒・炭化物・焼土粒微含。粘性あり。しまりやや弱い
- 43 褐色土 (10YR4/4) 2 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 44 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック・炭化物・焼土ブロック少含。粘性・しまりあり
- 45 暗褐色土 (10YR3/3) 3 cm程度の地山ブロック少含。粘性・しまり強い
- 46 褐色土 (10YR4/4) 3 cm程度の地山ブロック少含。粘性・しまりやや弱い
- 47 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりあり
- 48 暗褐色土 (10YR3/3) 3 cm以下の地山ブロック多含。5 mm以下の炭化物少含。粘性・しまりやや弱い
- 49 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 50 褐色土 (10YR4/4) 3 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 51 暗褐色土 (10YR3/4) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまり弱い
- 52 暗褐色土 (10YR3/3) 2 cm以下の地山ブロック多含。5 mm程度の炭化物少含。粘性あり。しまりやや弱い
- 53 褐色土 (10YR4/4) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
- 54 暗褐色土 (10YR3/4) 3 cm程度の地山ブロック多含。粘性やや弱い。しまり弱い
- 55 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや弱い。しまり弱い
- 56 黒褐色土 (10YR2/2) 3 cm以下の地山ブロック・炭化物・焼土ブロック多含。粘性・しまりあり

第69図 SI51



第70図 SI51出土遺物

土の2層に分けられる。埋土がレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものと考えられる。

埋土中から出土した土師器甕287・288は天神川X期の特徴を示し、SK162は古墳時代後期の土坑と思われる。(前田)

SK168(第72図、PL.23・97)

J 35グリッド、調査区南側の中央の平坦地に位置する。検出面の標高はおよそ64.1mである。本遺構は、平面隅丸方形を呈し、長軸1.72m、短軸1.60mを測る。断面は台形で、検出面からの深さは最深部で50cmである。本遺構の埋土は3層に分けられ、最上層の1層中からは土師器甕289が出土した。

本遺構の性格については不明であるが、時期に関しては、出土遺物である土師器甕289が本遺構の時期を示すものであれば、古墳時代のものであったと思われる。(野口)

SK169(第73図、PL.23)

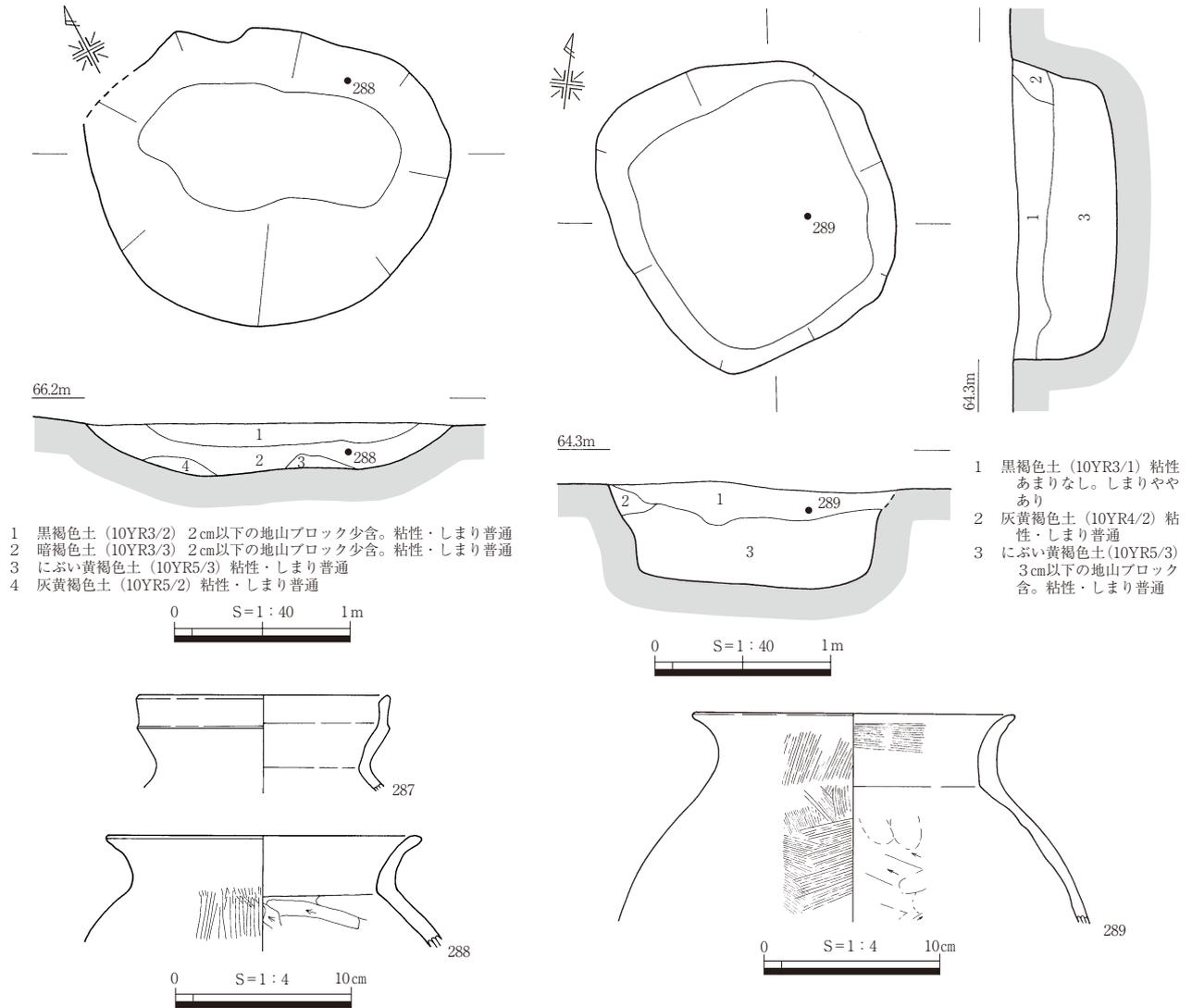
K 38グリッドの西端、標高64.8m付近の、東に谷を臨む緩斜面に位置し、東側6mにSI47が隣接する。

平面形は北西-南東を長軸としたほぼ長方形で、北西側の短辺のみがやや弧を描くような形状をしている。長軸1.97m、短軸1.12m、検出面からの深さは南西側で最大0.53mを測り、壁の立ち上がりは北西側でやや傾斜があるほかは、ほぼ垂直である。北東隅をはじめ、後世の耕作等によりかなり失われている。

底面はほぼ水平で、ピット等は認められない。

埋土は含まれる地山ブロック等のあり方などから24層に細分できた。人為的な埋め戻しの可能性も考えられたが、おおむねレンズ状に堆積することから、自然に埋没したものと理解しておきたい。

図化できなかったが、埋土中から土師器、須恵器の破片が出土しており、本遺構は古墳時代のものと思われる。遺構の性格ははっきりしないが、形態から土壙墓の可能性も考えられる。(原田)



第71図 SK162および出土遺物

第72図 SK168および出土遺物

SK170 (第74図、PL.23・98)

K35グリッド、調査区南側の中央の平坦地に位置し、検出面の標高はおよそ64.1mである。本遺構の平面形は、東側が方形、西側が円形の不整な形で、長軸2.20m、短軸1.98mの規模である。検出面からの深さは20cmほどであるが、底面北側には長軸72cm、短軸48cmの範囲でさらに20cmほどの落ち込みが認められる。本遺構の埋土は、5層に分けられ、遺構壁際から自然堆積した状況が窺える。

出土遺物には1層中から須恵器甕290、土師器甕291、高坏292などが認められる。このうち最も新しい須恵器甕290は、口唇部内側には弱い段が認められることから、陶邑編年のTK47もしくはMT15に併行するものと思われる。

本遺構の時期は、出土遺物の須恵器甕290から5世紀後葉から6世紀前葉の可能性がある。性格等是不明であるが、付近には西側に同時期、もしくは近い時期のSI46が位置することからSI46に関連した遺構であった可能性もある。

(野口)

SK177(第75図、PL.23・98)

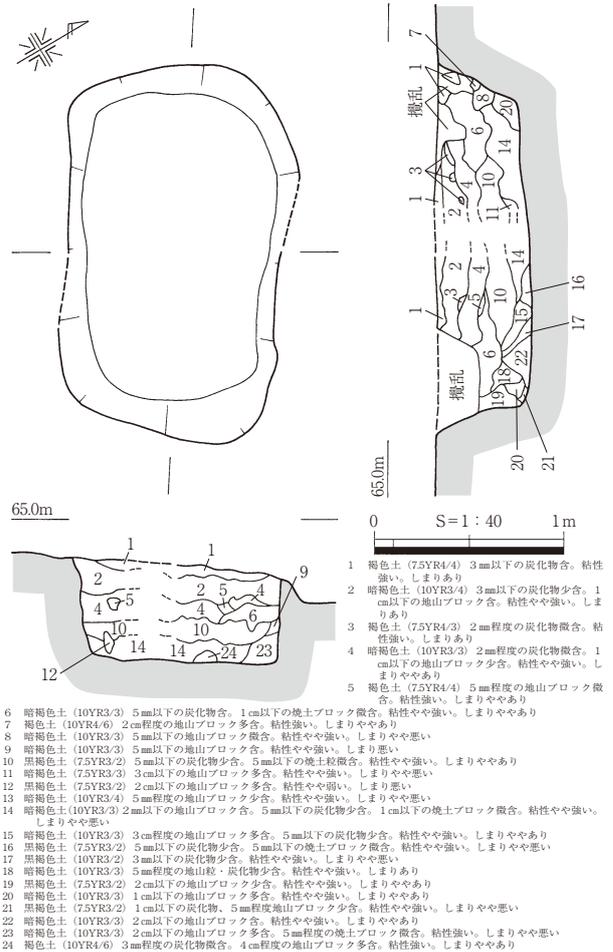
K35グリッドに位置し、南にSK170が、南西にSI46が近接する。

遺構検出時に縄文土器片が数点見られたため、精査を繰り返した結果、長軸3.3m、短軸2.8m、深さ0.25mの暗褐色土の単層からなる不整形な浅い皿状の落ち込みを検出した。遺構内からも縄文土器片や黒曜石の剥片が数点出土したため、縄文時代の遺構と考えていたが、293が出土したことによって、古墳時代の土坑と判断した。

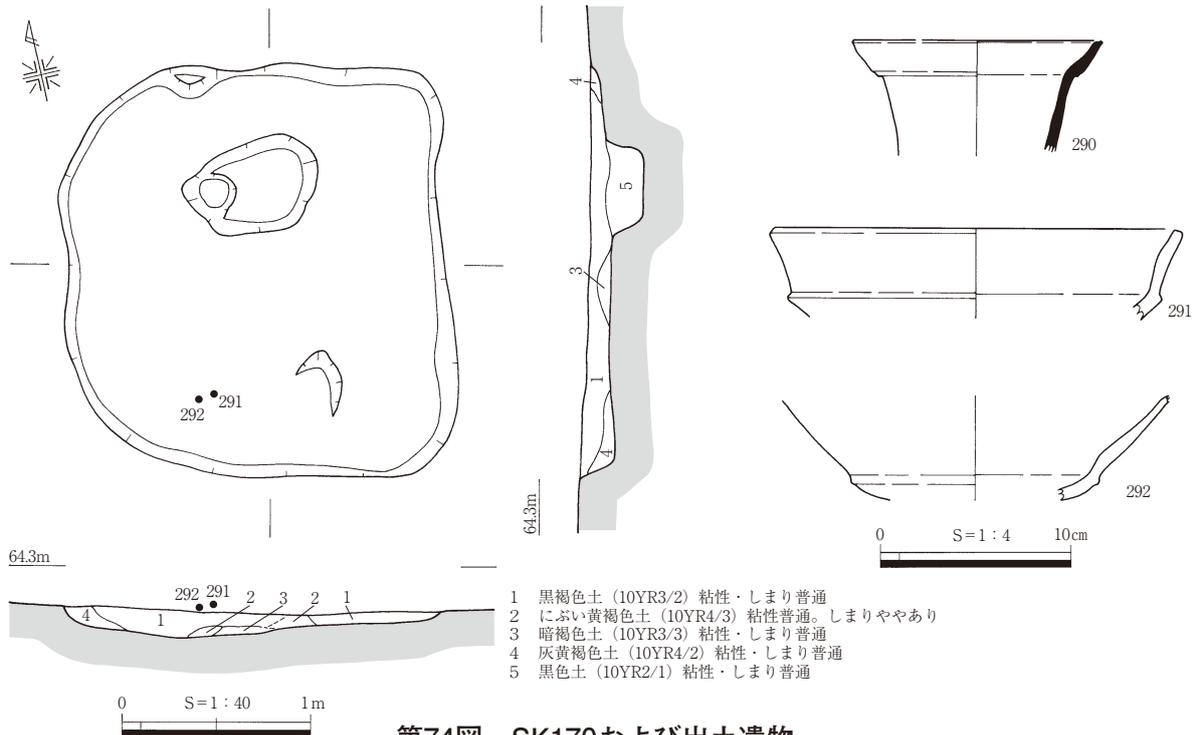
293は土師器甕の口縁部である。複合口縁で下端の突出は鈍い。天神川Ⅲ期にあたるものと思われる。294は縄文土器で、外面はミガキ調整され、沈線の一部が残っている。縄文時代後期前葉の福田KⅡ式と思われ、付近から出土した330と同一個体の可能性がある。

SK177はしっかりとした掘り込みではなく、性格は不明である。K35グリッド周辺は黒曜石の剥片などが多数出土しており、埋土中の縄文土器や黒曜石剥片は混入したものと思われる。棒状礫の先端を使用した敲石S24・25も、遺構の時期を示すものではない。SK177の時期は古墳時代前期中葉と考えられる。

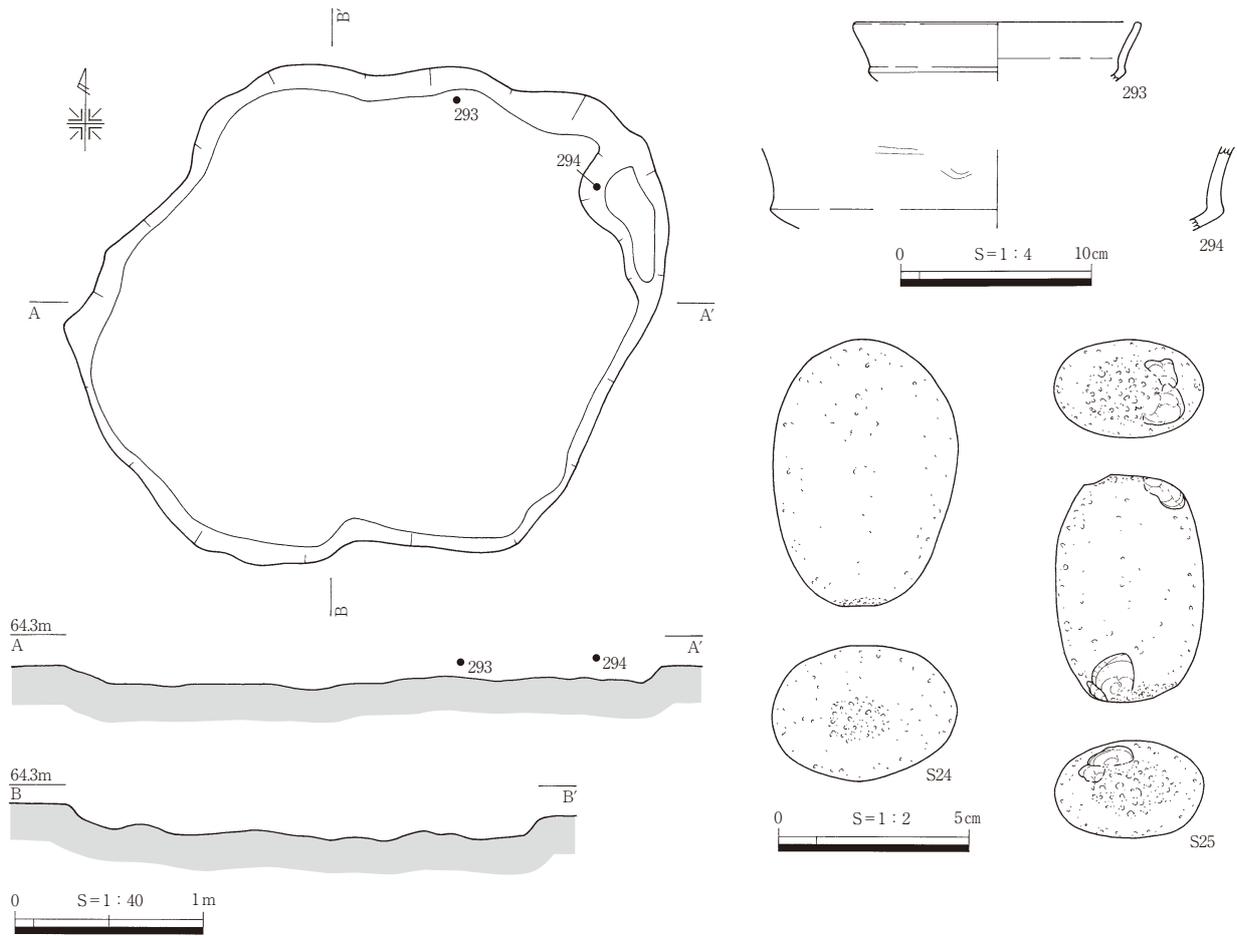
(湯村)



第73図 SK169



第74図 SK170および出土遺物



第75図 SK177および出土遺物

第3節 奈良時代の遺構と遺物

(1) 概要

奈良時代の遺構は竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡2棟、鍛冶炉2基を含む鍛冶関連遺構を検出した。昨年度の調査でも鍛冶関連遺構が見つかっており、一連のものと考えられる。これらは西尾根の平坦部にまとまっており、同時期の遺構は調査が行われた範囲では他に見つかっていない。(湯村)

(2) 竪穴住居跡

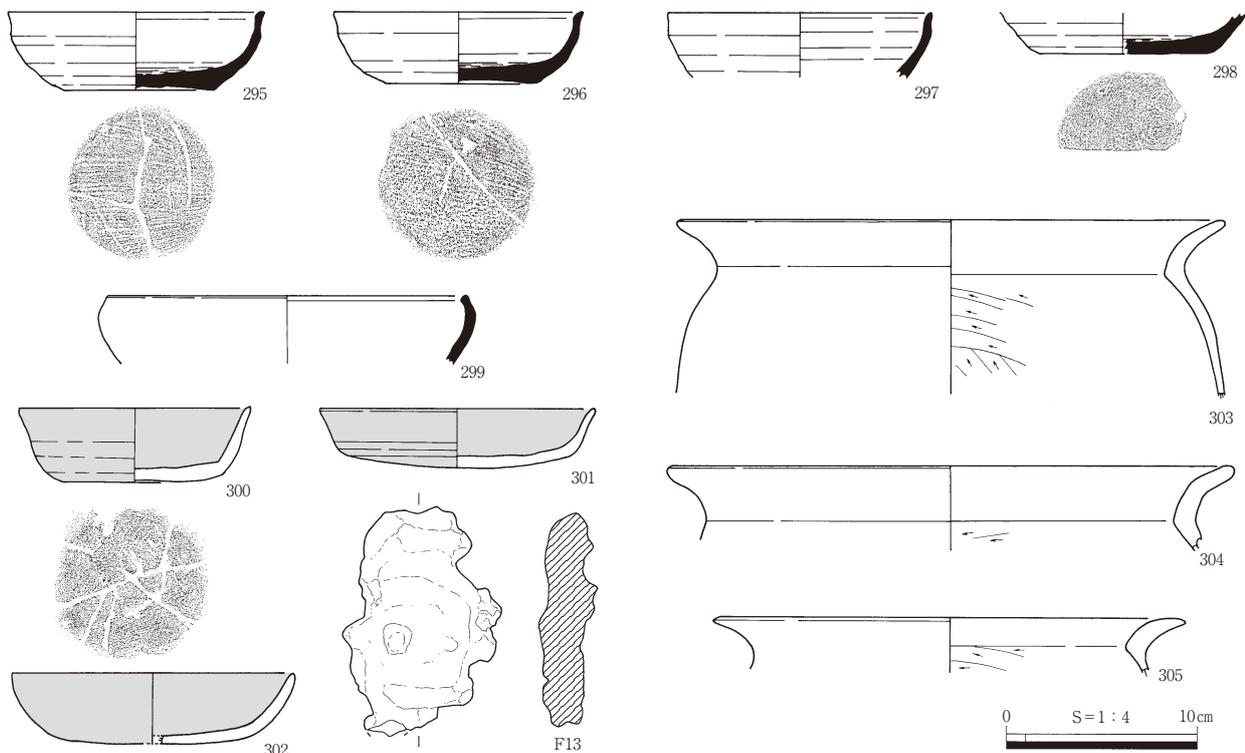
SI33(第76・77図、PL.24・25・99)

M32グリッドに位置する。昨年度の調査でおよそ半分を検出していたが、遺物が出土せず時期決定の決め手を欠いていた。奈良時代のSI30に切られることと、平面形が円形となるものと予想されたため、とりあえず弥生時代の可能性があるかと報告したが、今回の調査で出土した遺物から奈良時代の遺構と判断した。

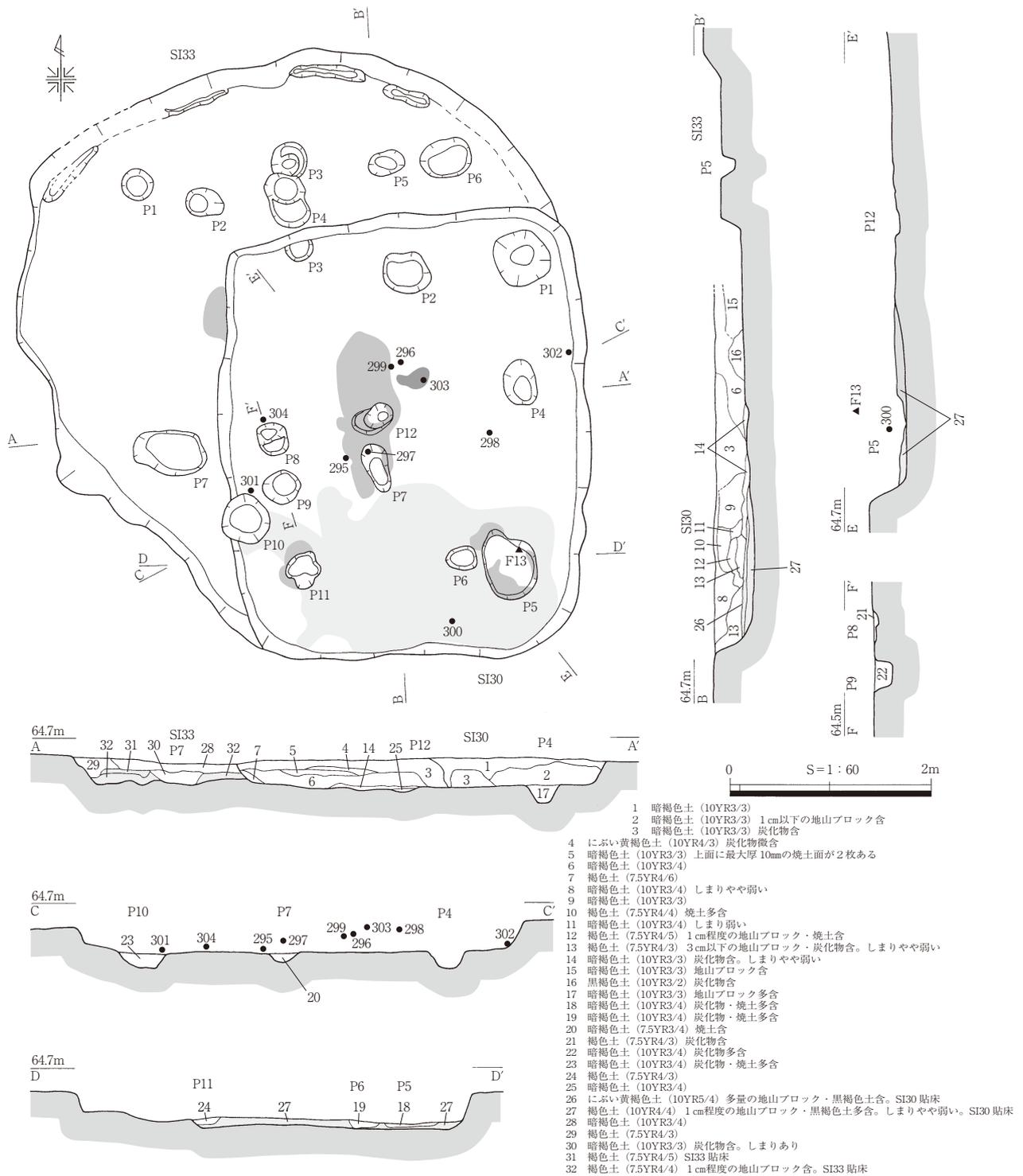
全体の形状は不明だが、長軸、短軸ともに5.5m程度のいびつな平面形と想定される。断面A-A'ラインの南側のみに貼床が施されており、北側はホーキの二次堆積土である基本土層3層を床面としている。貼床上面までの深さは10cmほどである。

北壁沿いには途切れがちな壁溝が認められ、床面の中央付近に焼土面がある。ピットは北側床面を中心に検出されたが、いずれも浅い。SI30の床面検出のピットを含めて検討しても規則的な配置は確認できない。

遺物の出土量は多くなく、305を図示したにすぎない。大きく開く単純口縁と体部が張らない形状から奈良時代の甕と思われる。(湯村)



第76図 SI30・33出土遺物



第77図 SI30・33

(3) 掘立柱建物跡

SB5 (第78図、PL.26・99)

N30グリッド中央やや東寄り標高64.3～64.7mの緩斜面に位置する。梁行2間、桁行2間で、中央にも1本の柱を持つ9本柱の掘立柱建物跡である。平面形はほぼ正方形であるが、柱穴間距離がP1-3間が3.3m、P3-5間が2.9m、P5-7間が3.3m、P7-1間が2.8mであることから、P3-5方向を梁行、P1-3方向を桁行と判断した。その結果主軸はN-2°-Eとなり、ほぼ真北を向く。

柱穴の深さは、東側および中央列のP1～3、P4、P8は検出面からの深さを45～50cmに揃えるが、西側柱列のP5～7は35cmとやや浅い。柱穴の底面レベルがほぼ揃うことから考えると、本来の柱掘

方は深さを揃えていたものの、旧表土が西側の谷部に流失した結果、西側柱列の深さが相対的に浅くなった可能性も考えられる。P1～P4の土層断面では明瞭な柱痕跡を確認できた。柱痕跡から想定される柱の直径は約18～24cmである。

出土遺物は4点掲載している。306・307は須恵器坏の口縁部片で、それぞれP7、P2から出土した。308はP5から出土した須恵器の坏の底部で回転糸切り後ナデ消した痕跡が認められる。309は竈の底部であろう。

本遺構の時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。(濱本)

SB9 (第79図、PL.26・99)

M34グリッド、標高64.7m付近の平坦面に位置する。約20m北にはSI30・33がある。梁行2間、桁行2間で、中央に1本の柱穴を持つ9本柱の建物である。主軸はN-4°-Eとなり、ほぼ真北を向く。

柱間距離はP1-P2間から時計回りに、1.5m、1.4m、1.3m、1.2m、1.5m、1.55m、1.35m、1.25mを測り、P6-P9間、P9-P2間ともに1.3mである。柱穴の規模は底面径がおおむね35～45cmの範囲に収まるが、深さは21～68cmと幅がある。P1・5・7・8の土層断面では柱痕跡が確認され、それから推定される柱の太さは22～29cmである。

P9の埋土途中で焼土が検出されたが、焼土面を形成するものではなく、二次的に堆積したものである。本遺構の北東を中心として鍛冶関連遺構が認められるが、SB9に伴う鍛冶関連遺物は出土していない。

遺物はP3埋土中から須恵器坏310が、P6埋土中から土師器皿311が出土した。311は内外面赤彩が施される。

出土遺物の特徴から、本遺構の時期は奈良時代と考えられる。(湯村)

(4) 鍛冶関連遺構

鍛冶炉3・4 (第80～82図、PL.26・27・108)

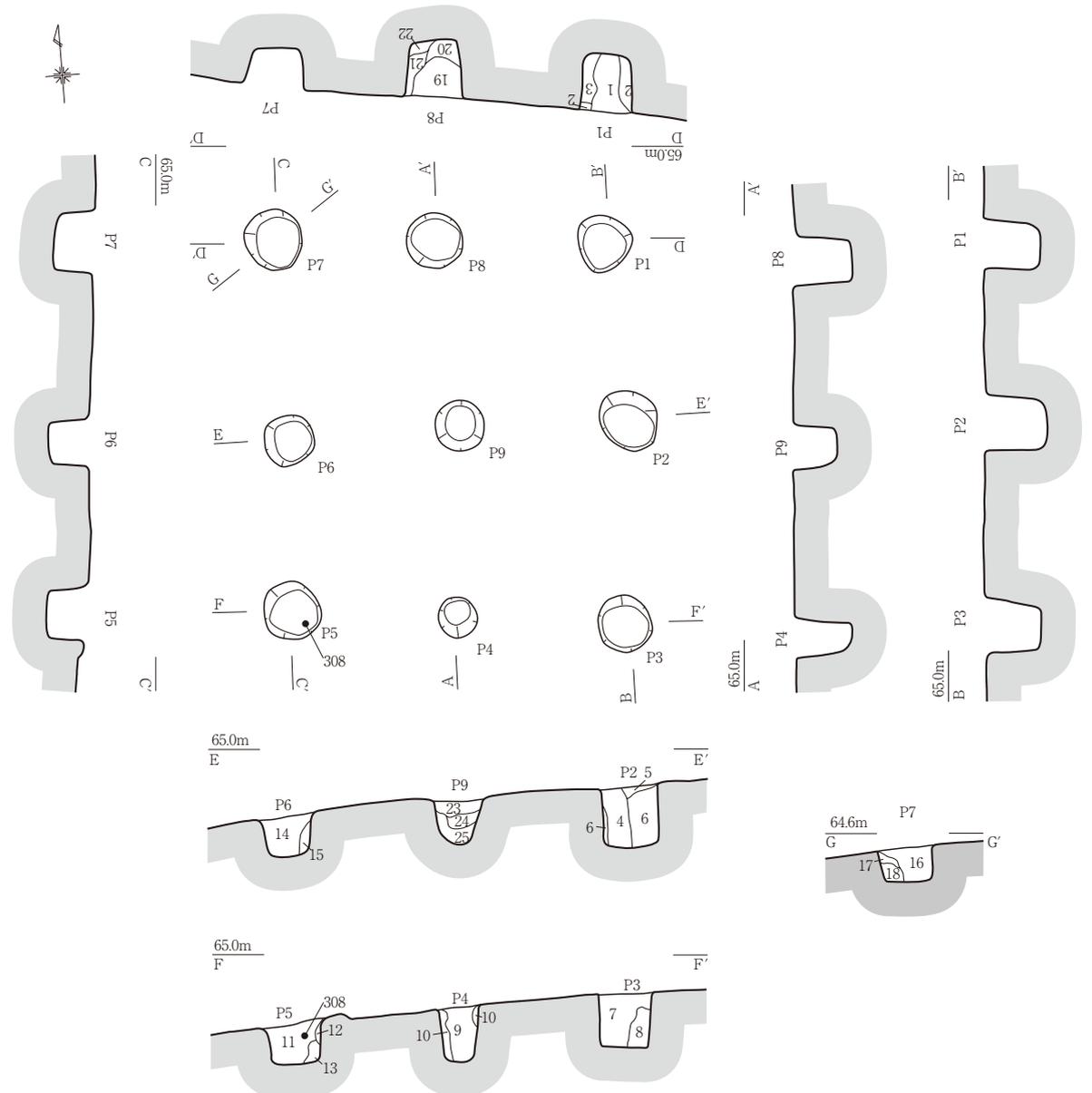
昨年度調査で検出した鍛冶炉を伴う建物SB3から南へ15mほど離れた、K33グリッドに位置する。表土除去及び遺構検出作業の段階から焼土粒や炭化物、鍛造剥片が見られたため、鍛冶関連遺構の存在が予想され、土壌サンプリングを行う過程で検出した。

鍛冶炉3は長軸37cm、短軸32cmの不整楕円形を呈する。底面までの深さ10cmの皿状の掘り込みで、固着というほどではないがカーボンベッドと思われる炭化物の集中が認められた。

鍛冶炉4は鍛冶炉3から30cm離れた位置にある。長軸40cm、短軸28cmの長楕円形を呈し、底面の平坦部までの深さ10cmを測る。底面の一部がピット状に落ち込む部分がある。鍛冶炉3同様カーボンベッドが施され、その上に椀形鍛冶滓F14が残っていた。椀形鍛冶滓とカーボンベッドの間には薄く粘土が認められ、炉床を形成していたものであろう。

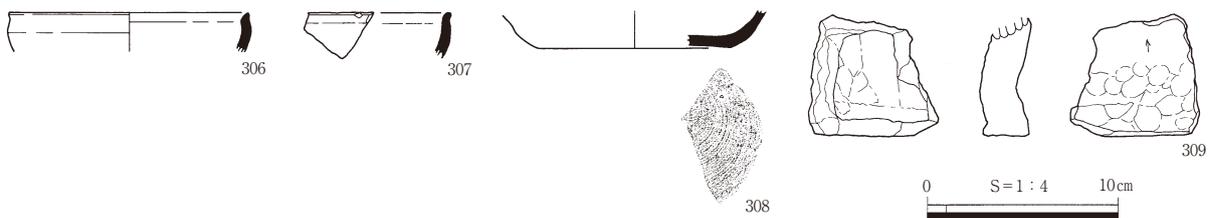
このふたつの鍛冶炉に伴う建物等がないか精査したが、確認できなかった。

上述のとおり鍛冶炉周辺には当初から鍛冶関連遺構の存在をうかがわせる様相が認められたため、K33からM33グリッド及びL32からM32グリッドを中心として、鍛冶関連遺構の検出と微細遺物の回収を目的として土壌サンプリングを行った。その方法としては、対象範囲に25cmメッシュを設定したうえで、東西南北それぞれ2m間隔で幅25cmのトレンチを掘る要領で遺構検出面まで掘り下げを行っ

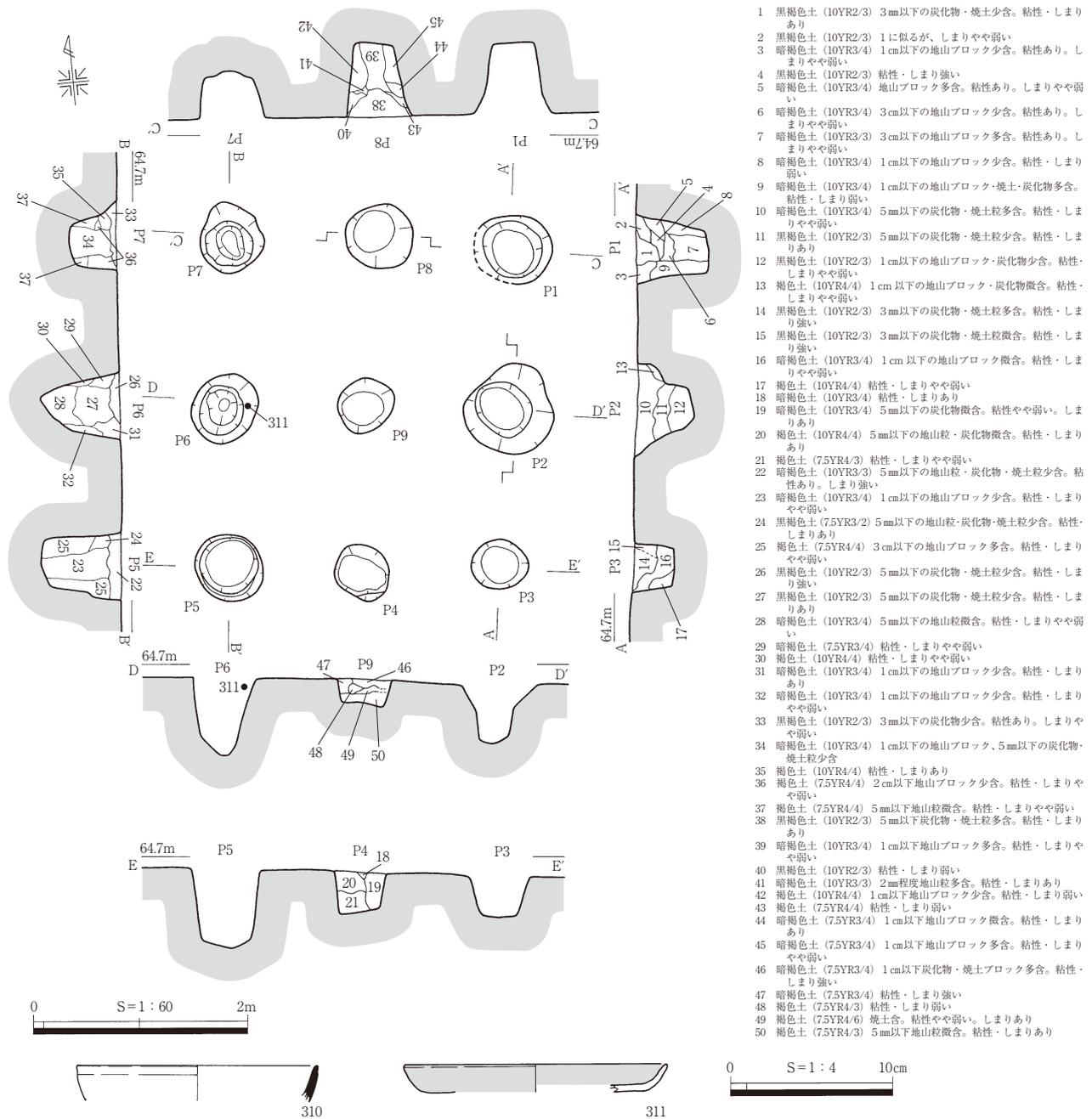


- | | |
|---|--|
| 1 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック、3 mm以下の炭化物多含。粘性・しまり強い | 15 褐色土 (7.5YR4/6) 1 cm以下の地山ブロック含。粘性・しまり強い |
| 2 橙色土 (7.5YR6/8) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまり強い | 16 褐色土 (7.5YR4/4) 5 mm以下の地山粒多含。3 mm以下の炭化物微含。粘性・しまり強い |
| 3 橙色土 (7.5YR6/6) 5 mm以下の地山粒・炭化物多含。粘性・しまり普通 | 17 褐色土 (7.5YR4/3) 5 mm以下の地山粒含。粘性・しまり強い |
| 4 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性強い。しまり普通 | 18 橙色土 (7.5YR6/6) 2 mm以下の炭化物含。粘性強く固く締まる |
| 5 明褐色土 (7.5YR5/8) 5 mm以下の炭化物含。粘性・しまり強い | 19 褐色土 (7.5YR4/4) 5 mm以下の炭化物多含。粘性・しまり普通 |
| 6 橙色土 (7.5YR6/8) 1 cm以下の地山ブロック多含。3 mm以下の炭化物含。粘性・しまり強い | 20 褐色土 (7.5YR4/6) 2 mm以下の炭化物含。粘性・しまり普通 |
| 7 褐色土 (7.5YR4/4) 5 mm以下の炭化物・地山粒多含。粘性強い。しまり普通 | 21 橙色土 (7.5YR6/8) 粘性強い。しまり普通 |
| 8 橙色土 (7.5YR6/8) 5 mm以下の地山粒多含。粘性・しまり強い | 22 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性普通。しまり弱い |
| 9 褐色土 (7.5YR4/4) 5 mm以下の炭化物・地山粒含。粘性・しまり強い | 23 褐色土 (7.5YR4/4) 5 mm以下の地山粒、2 mm以下の炭化物含。粘性強い。しまり普通 |
| 10 橙色土 (7.5YR6/8) 粘性・しまり強い | 24 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック、2 mm以下の炭化物含。粘性強い。しまり普通 |
| 11 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm以下の炭化物、5 mm以下の地山粒多含。粘性強・しまり普通 | 25 明褐色土 (7.5YR5/6) 5 mm以下の地山粒含。粘性強い。しまり普通 |
| 12 橙色土 (7.5YR6/8) 5 mm以下の地山粒含。粘性強い。しまり普通 | |
| 13 褐色土 (7.5YR4/3) 3 mm以下の炭化物・地山粒多含 | |
| 14 褐色土 (10YR4/4) 5 mm以下の炭化物・地山粒多含。粘性・しまり強い | |

0 S = 1 : 60 2m



第78図 SB5 および出土遺物



第79図 SB9および出土遺物

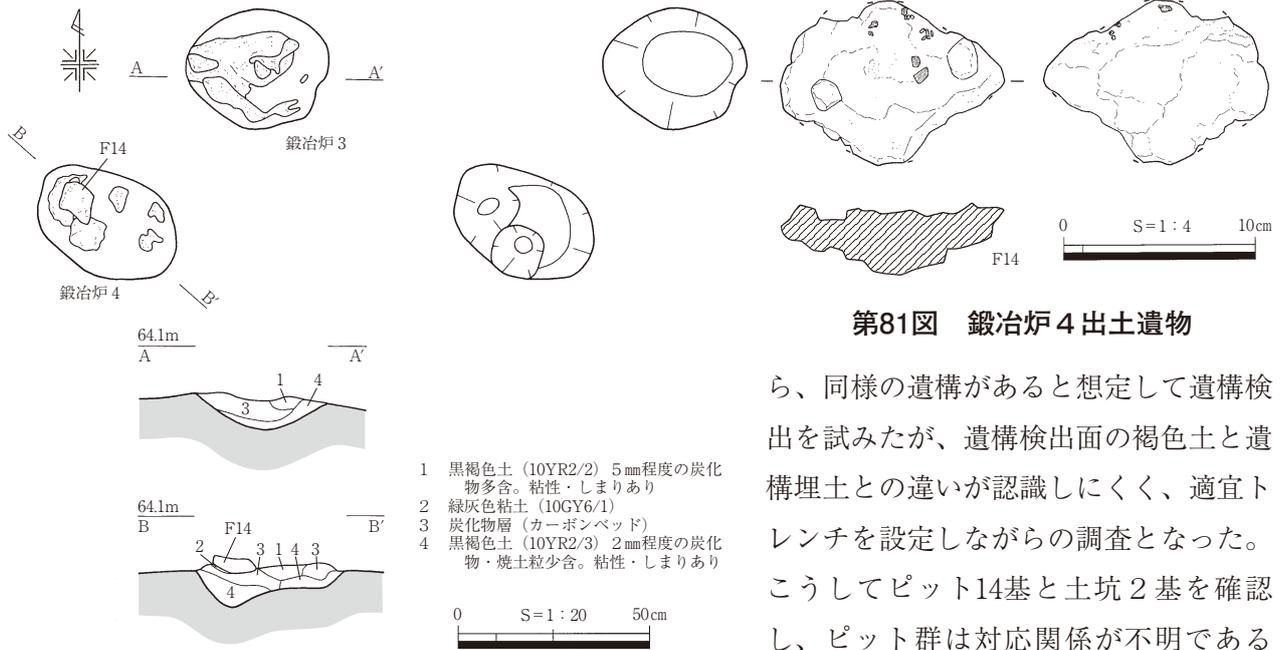
た。鍛冶関連遺構と思われるものが検出された段階で、その周囲のトレンチを1m間隔に狭め、遺構の規模等を把握し、遺構の周囲2mの土壌を水洗選別の対象とした。

こうした方法で検出した、鍛冶炉周辺の微細遺物出土状況を第82図に示した。サンプリング対象範囲すべてで総重量177.4gの微細遺物が検出されたが、鍛冶炉内はもとより、その東側、南側に多く認められた。この2箇所が作業空間となっていた可能性がある。とくに鍛冶炉3の東ではスポット的に密度の濃い箇所が認められている。(湯村)

SB11、SK158・173(第83・84図、PL.28・99・100・107・108)

L33グリッドに位置し、昨年度調査した被熱面を伴う建物SB4が10m北西に近接する。

表土除去段階から炭化物や焼土粒が散在していたところで、周囲に鍛冶関連遺構が存在することか



第80図 鍛冶炉3・4

第81図 鍛冶炉4出土遺物

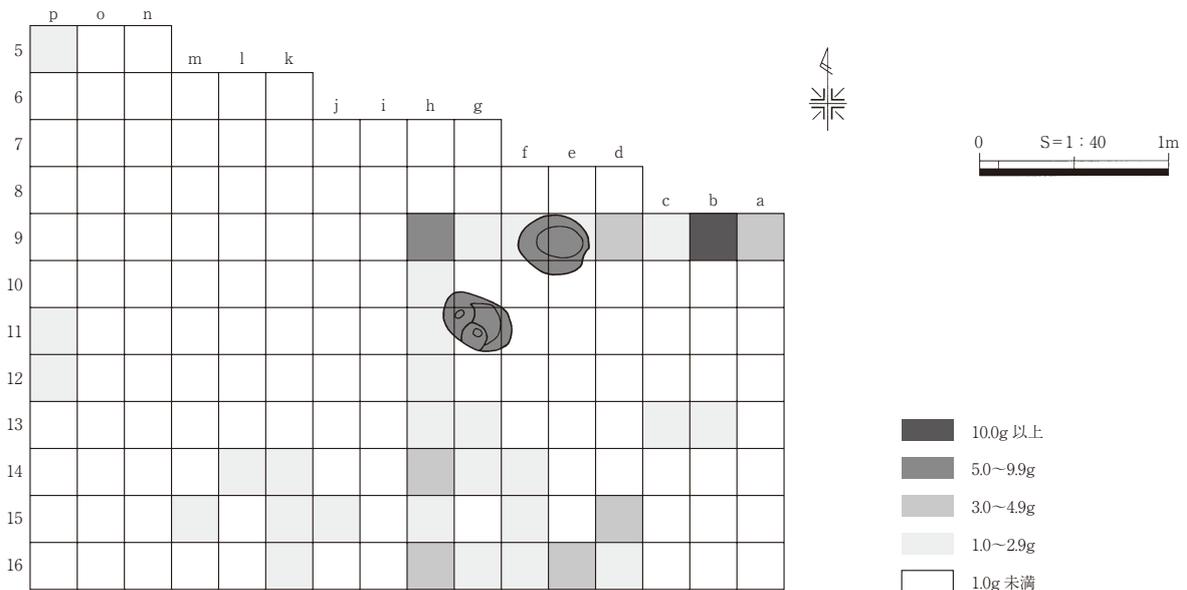
ら、同様の遺構があると想定して遺構検出を試みたが、遺構検出面の褐色土と遺構埋土との違いが認識しにくく、適宜トレンチを設定しながらの調査となった。こうしてピット14基と土坑2基を確認し、ピット群は対応関係が不明であるが、おおむね方形に配されることから掘立柱建物と判断した。

柱穴の配置は、西辺にP 2～P 8が数珠繋ぎ状に並び、東辺はP 12～P 14がそれぞれ2.25m、1.9mの間隔で並ぶ。北辺はP 1・P 9～P 11が存在し、P 1～P 9～P 11間はそれぞれ1.7m、1.55mである。こうした配置状況に加え、規模や深さが一定でないことから、建て替えが行われたものと思われる。主軸はN-5°-Eをとる。

柱穴に囲まれた範囲に3箇所の被熱面が存在する。

SK158はP 6の西0.7mに位置する。一部をトレンチにより失ったが、長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形を呈する、深さ0.2mほどの皿状の掘り込みである。埋土上層に焼土が密に含まれ、焼土を廃棄した土坑と思われる。

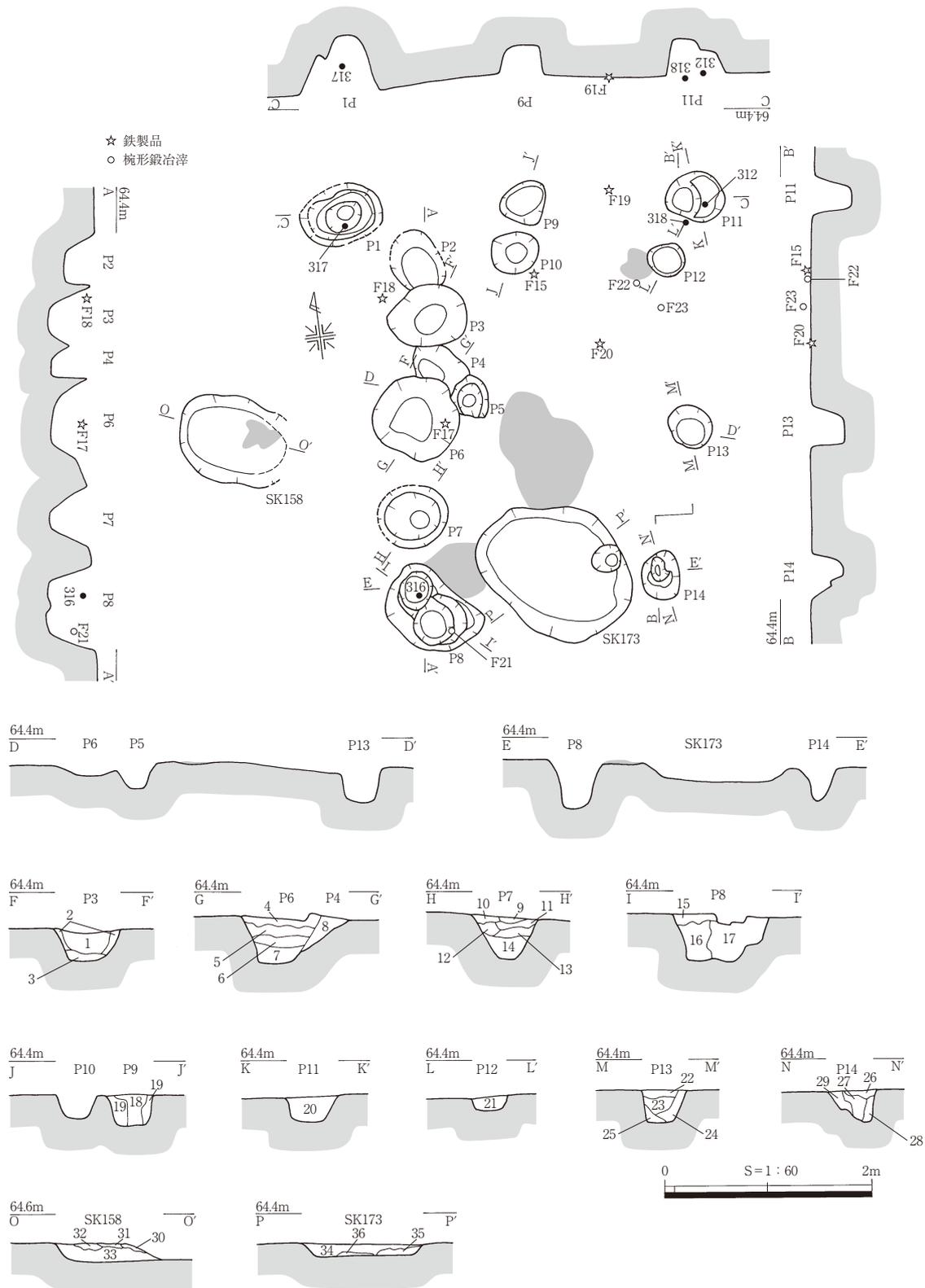
SK173はSB11のP 8とP 14間にあり、長軸1.6m、短軸1.3m、深さ0.1mの浅い楕円形を呈する。



第82図 鍛冶炉3・4周辺鍛冶関連微細遺物分布図

表3 鍛冶炉3・4微細遺物一覧表

出土位置	粒状滓(g)		鉄・鍛造剥片(g)				微細遺物合計(g)	出土位置	粒状滓(g)		鉄・鍛造剥片(g)				微細遺物合計(g)
	~20mm	合計	~0.8mm	0.8~20mm	20mm~	合計			~20mm	合計	~0.8mm	0.8~20mm	20mm~	合計	
a-9	0.1	0.1	3.0	0.3	0.8	4.1	4.2	j-7	0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	
a-10		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4	j-8	0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	
a-11		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	j-9	0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	
a-12		0.0	0.5	0.1		0.6	0.6	j-10	0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	
a-13		0.0	0.3	0.1	0.2	0.6	0.6	j-11	0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	
a-14		0.0	0.4	0.2		0.6	0.6	j-12	0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	
a-15		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	j-13	0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	
a-16		0.0	0.4	0.2		0.6	0.6	j-14	0.0	0.8	0.1		0.9	0.9	
b-9	0.2	0.2	6.3	6.9	10.9	24.1	24.3	j-15	0.1	0.1	1.0	0.4	0.2	1.6	1.7
b-10		0.0	0.5	0.2	0.1	0.8	0.8	j-16		0.0	0.4	0.2		0.6	0.6
b-11	0.1	0.1	0.5	0.2	0.1	0.8	0.9	k-6		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
b-12	0.1	0.1	0.4	0.2		0.6	0.7	k-7		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
b-13		0.0	0.9	0.1		1.0	1.0	k-8		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
b-14		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	k-9		0.0	0.2	0.1	0.2	0.5	0.5
b-15		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	k-10		0.0	0.1	0.1		0.2	0.2
b-16		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	k-11		0.0	0.4	0.2		0.6	0.6
c-9	0.1	0.1	1.4	0.4	0.4	2.2	2.3	k-12		0.0	0.2	0.2	0.2	0.6	0.6
c-10		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	k-13		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5
c-11		0.0	0.5	0.1		0.6	0.6	k-14		0.0	1.0	0.1	0.2	1.3	1.3
c-12		0.0	0.4	0.2	0.1	0.7	0.7	k-15		0.0	1.5	0.3	0.3	2.1	2.1
c-13		0.0	0.9	0.1	0.1	1.1	1.1	k-16		0.0	0.9	0.1		1.0	1.0
c-14		0.0	0.8	0.1		0.9	0.9	l-6		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
c-15		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	l-7		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
c-16		0.0	0.6	0.1	0.1	0.8	0.8	l-8		0.0	0.3	0.1	0.2	0.6	0.6
d-8		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4	l-9		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
d-9	0.1	0.1	3.5	0.6	0.7	4.8	4.9	l-10		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
d-10		0.0	0.3	0.1	0.2	0.6	0.6	l-11		0.0	0.5	0.1		0.6	0.6
d-11		0.0	0.6	0.1	0.1	0.8	0.8	l-12		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
d-12		0.0	0.5	0.1	0.1	0.7	0.7	l-13		0.0	0.4	0.1	0.1	0.6	0.6
d-13		0.0	0.7	0.1	0.1	0.9	0.9	l-14		0.0	1.0	0.4		1.4	1.4
d-14		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	l-15		0.0	0.6	0.2		0.8	0.8
d-15		0.0	1.9	0.2	0.9	3.0	3.0	l-16	0.1	0.1	0.6	0.1	0.1	0.8	0.9
d-16		0.0	1.7	0.1	0.1	1.9	1.9	m-6		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4
e-8	0.1	0.1	0.2	0.3	0.4	0.9	1.0	m-7		0.0	0.2	0.2	0.1	0.5	0.5
e-9	0.1	0.1	1.4	0.3	0.4	2.1	2.2	m-8		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
e-10		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	m-9		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
e-11		0.0	0.6	0.2		0.8	0.8	m-10		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
e-12		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	m-11		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
e-13		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	m-12		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5
e-14		0.0	0.8	0.1		0.9	0.9	m-13	0.1	0.1	0.6	0.1	0.2	0.9	1.0
e-15	0.1	0.1	2.2	0.2	0.2	2.6	2.7	m-14		0.0	0.6	0.1		0.7	0.7
e-16		0.0	2.6	0.3	0.1	3.0	3.0	m-15		0.0	1.0	0.3	0.2	1.5	1.5
f-8		0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	m-16		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
f-9	0.1	0.1	1.1	0.3	0.1	1.5	1.6	n-5		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
f-10		0.0	0.4	0.2	0.2	0.8	0.8	n-6		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
f-11		0.0	0.6	0.1		0.7	0.7	n-7		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
f-12		0.0	0.5	0.1	0.1	0.7	0.7	n-8		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
f-13		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4	n-9		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
f-14	0.1	0.1	0.9	0.2	0.2	1.3	1.4	n-10		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4
f-15		0.0	1.5	0.2		1.7	1.7	n-11		0.0	0.5	0.1	0.1	0.7	0.7
f-16	0.1	0.1	1.7	0.2	0.1	2.0	2.1	n-12		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5
g-7		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4	n-13		0.0	0.4	0.1	0.1	0.6	0.6
g-8		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	n-14		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
g-9	0.1	0.1	2.0	0.3	0.2	2.5	2.6	n-15		0.0	0.5	0.3		0.8	0.8
g-10		0.0	0.4	0.1	0.1	0.6	0.6	n-16		0.0	0.5	0.1		0.6	0.6
g-11		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4	o-5		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
g-12		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5	o-6		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
g-13		0.0	0.9	0.1	0.1	1.1	1.1	o-7		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
g-14		0.0	1.1	0.1	0.1	1.3	1.3	o-8		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
g-15		0.0	0.6	0.1	0.1	0.8	0.8	o-9		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
g-16		0.0	1.4	0.1		1.5	1.5	o-10		0.0	0.3	0.1	0.1	0.5	0.5
h-7		0.0	0.3	0.1	0.2	0.6	0.6	o-11		0.0	0.8	0.1		0.9	0.9
h-8		0.0	0.4	0.1	0.2	0.7	0.7	o-12		0.0	0.6	0.2		0.8	0.8
h-9		0.0	2.4	0.1	3.9	6.4	6.4	o-13		0.0	0.3	0.1	0.1	0.5	0.5
h-10		0.0	1.4	0.1	0.1	1.6	1.6	o-14		0.0	0.3	0.1	0.1	0.5	0.5
h-11		0.0	1.1	0.1	0.2	1.4	1.4	o-15		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
h-12		0.0	1.0	0.2		1.2	1.2	o-16		0.0	0.4	0.1		0.5	0.5
h-13		0.0	1.6	0.2	0.2	2.0	2.0	p-4		0.0	1.9	0.2	0.2	2.3	2.3
h-14	0.1	0.1	2.8	0.3	0.2	3.3	3.4	p-5		0.0	1.3	0.3	0.2	1.8	1.8
h-15	0.1	0.1	2.4	0.3	0.1	2.8	2.9	p-9		0.0	0.1	0.1		0.2	0.2
h-16	0.1	0.1	2.3	0.4	0.7	3.4	3.5	p-10		0.0	0.5	0.1	0.2	0.8	0.8
i-7		0.0	0.4	0.2	0.3	0.9	0.9	p-11		0.0	0.9	0.1	0.1	1.1	1.1
i-8		0.0	0.3	0.2	0.5	1.0	1.0	p-12		0.0	0.6	0.1	0.4	1.1	1.1
i-9		0.0	0.1	0.1		0.2	0.2	p-13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3
i-10		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	p-14	0.1	0.1	0.3	0.2	0.2	0.7	0.8
i-11		0.0	0.2	0.1	0.1	0.4	0.4	p-15		0.0	0.3	0.1		0.4	0.4
i-12		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	p-16	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.4	0.5
i-13		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	鍛冶炉3	0.1	0.1	2.8	1.7	3.2	7.7	7.8
i-14		0.0	0.2	0.1		0.3	0.3	鍛冶炉4		0.0	2.9	1.5	1.4	5.8	5.8
i-15		0.0	0.3	0.1	0.2	0.6	0.6								
i-16		0.0	0.4	0.2	0.1	0.7	0.7								
計										23				175.1	177.4



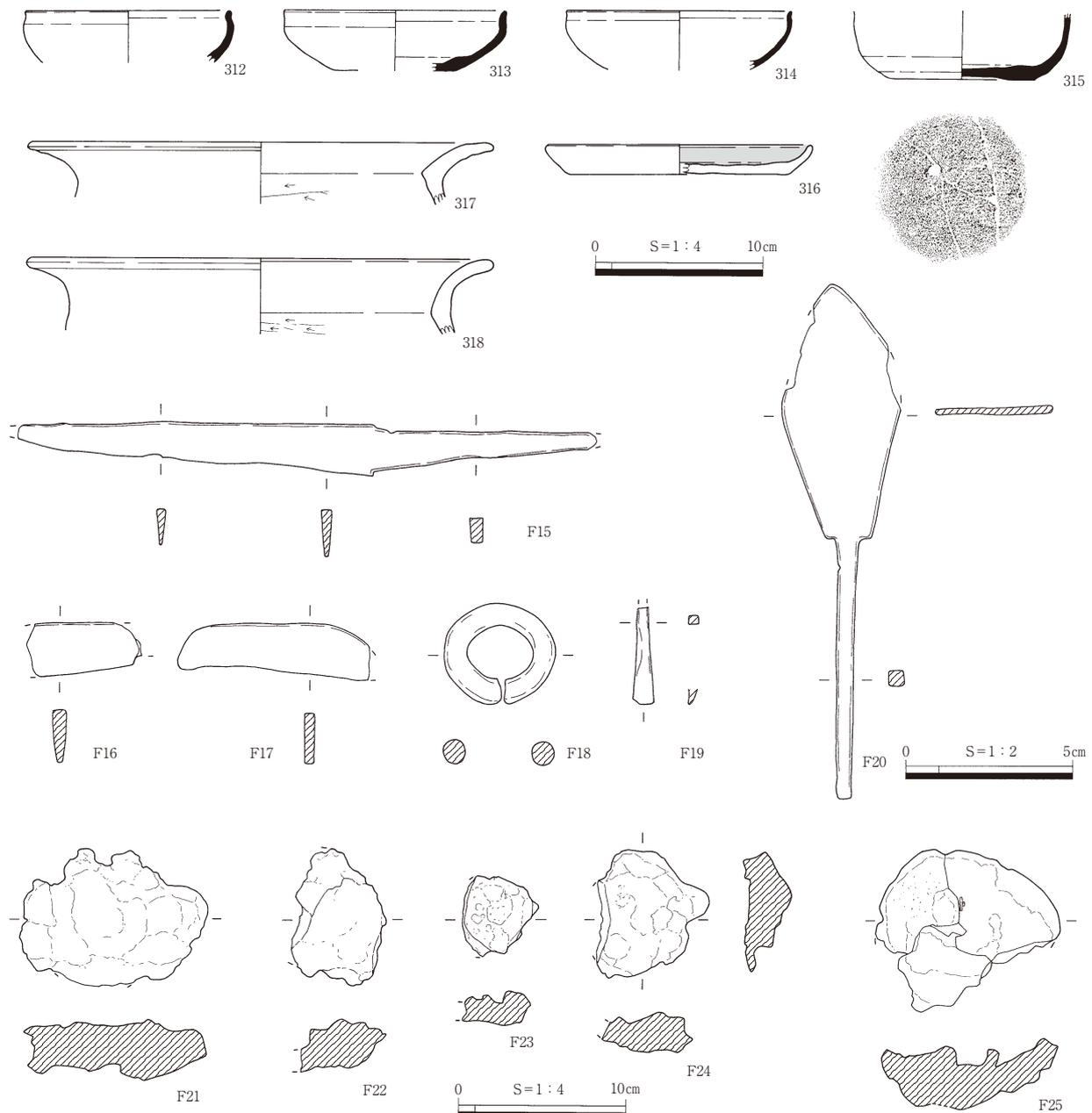
- | | | | |
|---|---|---|--|
| 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 10 ロック・炭化物多含。粘性・しまりあり | 19 暗褐色土 (7.5YR3/3) 2 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 28 暗褐色土 (7.5YR3/3) 5 mm程度の地山粒微含。粘性・しまりあり |
| 2 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 11 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性・しまりあり | 20 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性・しまりあり | 29 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5 mm以下の炭化物・焼土粒微含。粘性・しまりあり |
| 3 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 12 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性・しまりあり | 21 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1 cm以下の炭化物・焼土多含。粘性・しまりあり | 30 焼土。硬くしまる |
| 4 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5 mm以下の炭化物・焼土粒少含。粘性・しまりあり | 13 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 22 暗褐色土 (7.5YR3/3) 2 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 31 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土粒少含。粘性・しまりあり |
| 5 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性・しまりあり | 14 褐色土 (7.5YR4/4) 1 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 23 暗褐色土 (7.5YR3/3) 2 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりあり | 32 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土粒多含。粘性・しまりあり |
| 6 褐色土 (7.5YR4/4) 2 cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 15 黒褐色土 (7.5YR2/2) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりあり | 24 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりあり | 33 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性・しまりあり |
| 7 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5 mm程度の地山粒・炭化物少含。粘性・しまりあり | 16 暗褐色土 (7.5YR3/3) 3 cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまりあり | 25 黒褐色土 (7.5YR3/2) 1 cm以下の地山ブロック微含。粘性・しまりやや弱い | 34 暗褐色土 (7.5YR3/3) 5 mm以下の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまりあり |
| 8 褐色土 (7.5YR4/6) 3 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりやや弱い | 17 暗褐色土 (7.5YR3/4) 3 cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり | 26 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5 mm以下の炭化物・焼土粒少含。粘性・しまりあり | 35 暗褐色土 (7.5YR3/4) 5 mm以下の炭化物・焼土粒少含。粘性・しまりあり |
| 9 暗褐色土 (7.5YR3/4) 1 cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまりあり | 18 黒褐色土 (7.5YR2/2) 1 cm以下の地山ブロック少含。粘性・しまりあり | 27 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性・しまりあり | 36 暗褐色土 (7.5YR3/4) しまり強い |

第83図 SB11、SK158・173

SB11に伴う被熱面を切っている。埋土中から椀形鍛冶滓やガラス質滓が出土しており、SB11などと一緒に一連の遺構と考えられる。

遺物はSB11のピットやその周辺、SK173埋土中から出土した。312～315は須恵器坏である。315は口縁端部を欠くが、わずかにくびれを認める。底部は回転糸切り。317・318は土師器の甕で、大きく開く単純口縁を持つ。316は土師器皿。内面は赤色塗彩される。F15～20は鉄製品。F15は完形の刀子、F20は鉄鏃である。F21～25は椀形鍛冶滓で、F21～23がSB11ピットまたはその周辺から、F24・F25がSK173埋土中から出土した。F25は割れたものが接合したが、酸化土砂の付着状態が異なるので、廃棄段階ですでに割れていたものと思われる。

SB11、SK158・173は鍛冶関連遺構と考えられる。鍛冶炉は検出していないが、近接するSB4と同様に被熱面のみを伴う建物とそれに付随する土坑であろう。(湯村)



第84図 SB11、SK173出土遺物

SI30(第76・77図、PL.24・25・99・100・108)

M32グリッドに位置する。昨年度の調査で北東隅の一部を検出しており、SI33との切り合い関係等を確認していた。

長軸4.4m、短軸3.7mの方形を呈し、深さは0.3mを測る。床面積は13.7㎡である。壁溝は認められない。床面で12基のピットを検出したが、深さはP 2が50cm、P 4とP 9が20cmであったほかは、それ未満の浅いもので、配置を見ても主柱穴としての並びを確認できなかった。

床面南側にはしまりのやや弱い褐色土(27層)の堆積範囲が見られる。当初別の遺構との切り合いを想定していたが、褐色土の範囲が南壁に沿って収まることなどから、SI30に伴うものと判断した。しまりがやや弱いことなどから、いわゆる貼床としての意識があったかどうか不明だが、床面を形成するためのものと思われる。床面南側のピットは、この褐色土上面から掘り込まれている。P 5とP 11の間には褐色土上面に貼床(26層)が施されている。

床面中央には長軸1.7m、短軸0.7mの広い範囲に赤く変色し硬化した被熱面がある。ここには浅い皿状のP 7とP 12があるが、P 7のほぼ全体とP 12の中心部付近は被熱していない。それぞれに何かが据え置かれた状態で高温作業が行われたものか。床面南側にあるP 5とP 11の壁から底面も被熱している。

こうした被熱面のあり方に加えて埋土中から椀形鍛冶滓が出土したこともあり、SI30は鍛冶関連遺構である可能性が考えられたため、P 5、P 7、P 11及び床面中央の被熱面東側で検出した炭化物のまつまり付近の埋土を水洗選別し微細遺物の検出を試みたが、炭化物のまつまり付近に若干の鍛造剥片を認めたのみであった。

SI30では埋土中にも被熱面が確認されている。断面図A-A'に示した5層上面、床面からおよそ20cm上の位置にわずかな間隔を挟んで2面ある。明らかに被熱を受けて赤変硬化しており、遺構埋没過程においても何らかの高温作業が継続して行われたものと思われる。

遺物は床面付近から埋土中にかけて出土した。295～298は須恵器坏である。口縁部がくびれ、底部には回転糸切り痕を残す。299は須恵器の鉢。300～302は土師器坏で、いずれも内外面が赤色塗彩される。303・304は土師器甕。大きく開く単純口縁を有する。F13は椀形鍛冶滓である。これらのうち295・300～302・304が床面またはそれに近い位置で出土している。

SI30は出土遺物から8世紀代、奈良時代の遺構と考えられ、被熱面等のあり方から鍛冶作業に関連したものと考えられる。(湯村)

第4節 時期不明の遺構

(1) 掘立柱建物跡

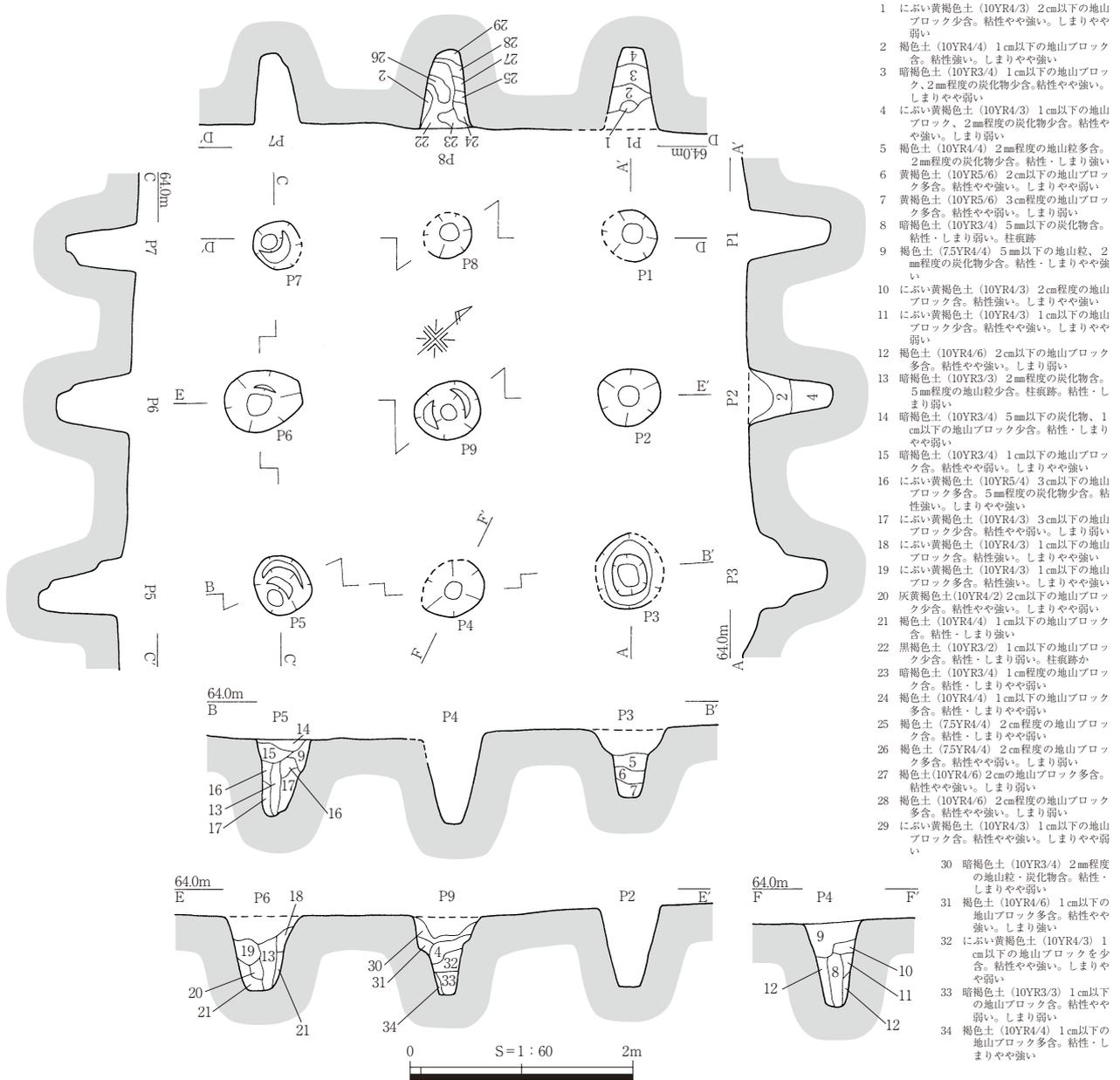
SB7 (第85図、PL.29)

I・J 36グリッドにまたがり、標高63.8m付近の、東に谷を臨む緩斜面に位置する。本遺構を切るように耕作痕が重なり、南側約4mにはSB8がある。

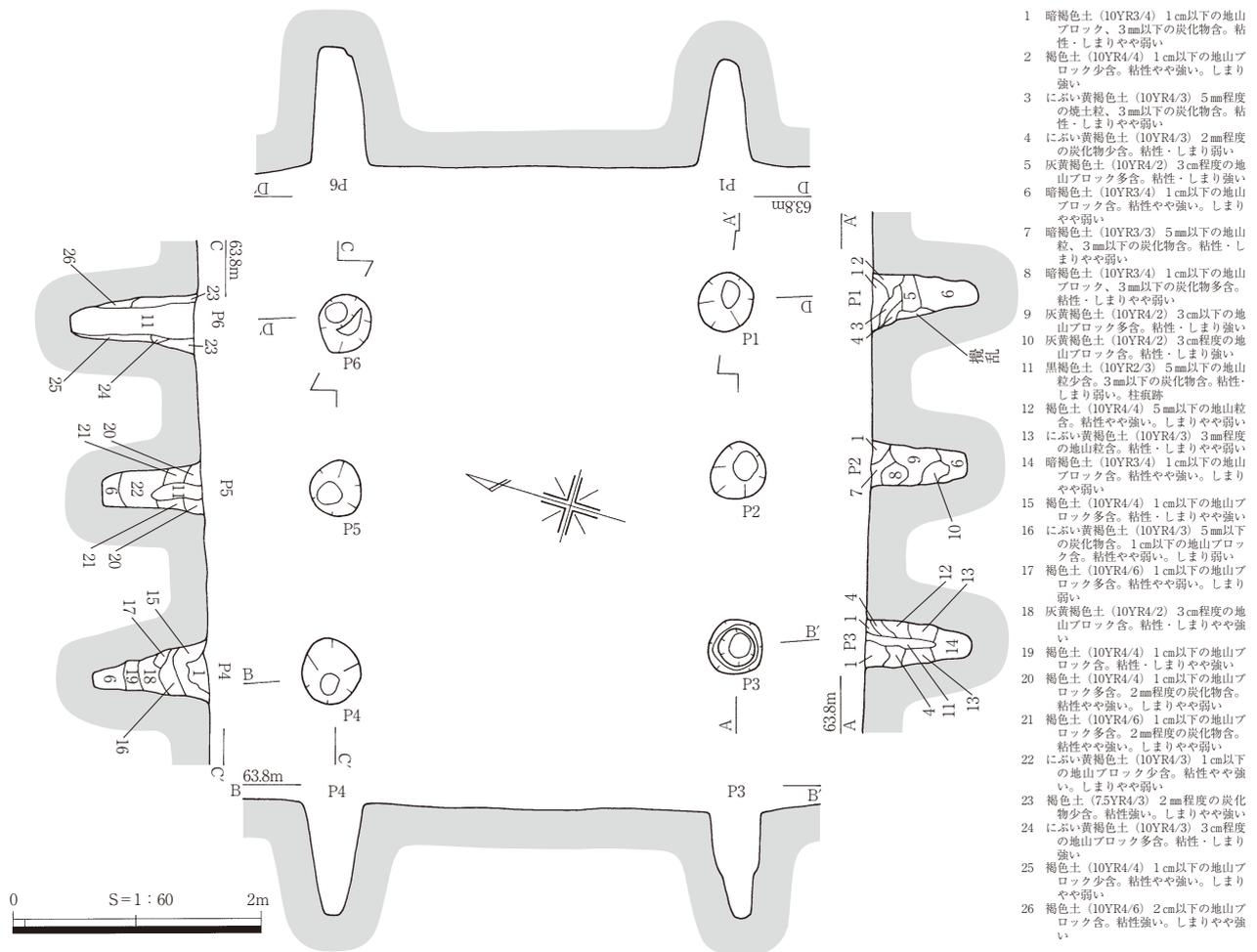
平面形は梁行2間、桁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。主軸はN-42°-Eにとる。柱穴間距離はP1-P2間から時計回りに1.50m、1.62m、1.60m、1.62m、1.72m、1.50m、1.65m、1.65m、P6-P9間が1.72m、P9-P2間が1.62m、P8-P9間が1.64m、P9-P4間が1.61mである。

柱穴の規模は最大がP6の長軸70cm、短軸56cmで、最小がP8の長軸46cm、短軸40cmである。深さはP4が最も深く77cm、P6が最も浅く68cmを測る。深さ、底面レベルとも大きなばらつきはない。

埋土はP4・5・6・8が柱痕跡と裏込土からなる。柱痕跡は粘性・しまりともに弱い暗褐色土、裏込土は地山ブロックを含む褐色土がほとんどで、全体的に粘性・しまりともに強い。その他の柱穴



第85図 SB7



第86図 SB8

埋土には柱痕跡が認められないが、傾向として下層では裏込土とよく似た特徴を持つ。後世の耕作の影響を受け、埋土確認が不可能な柱穴もあった。

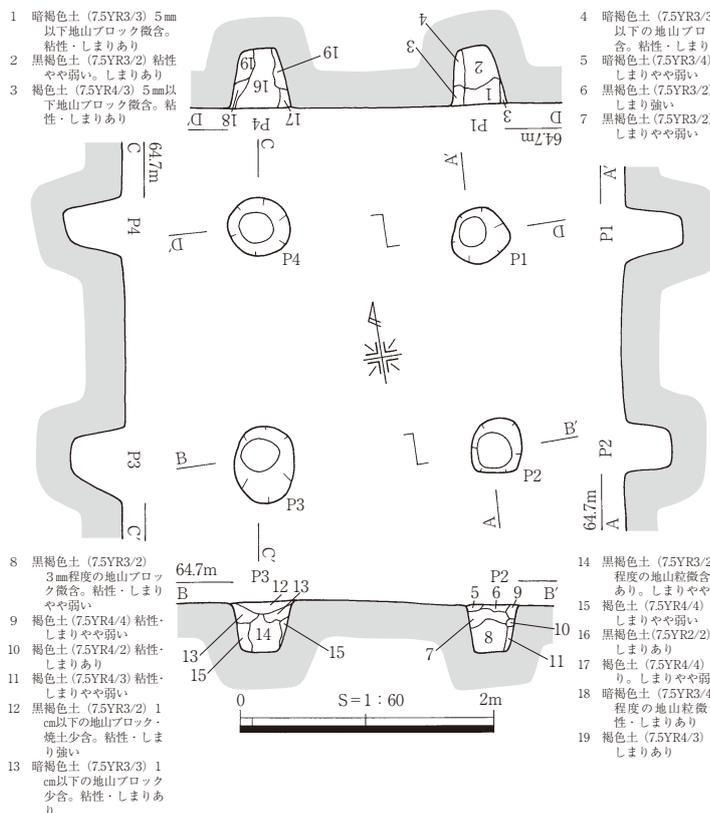
遺物が出土しておらず、本遺構の時期は不明である。(原田)

SB8 (第86図、PL.30)

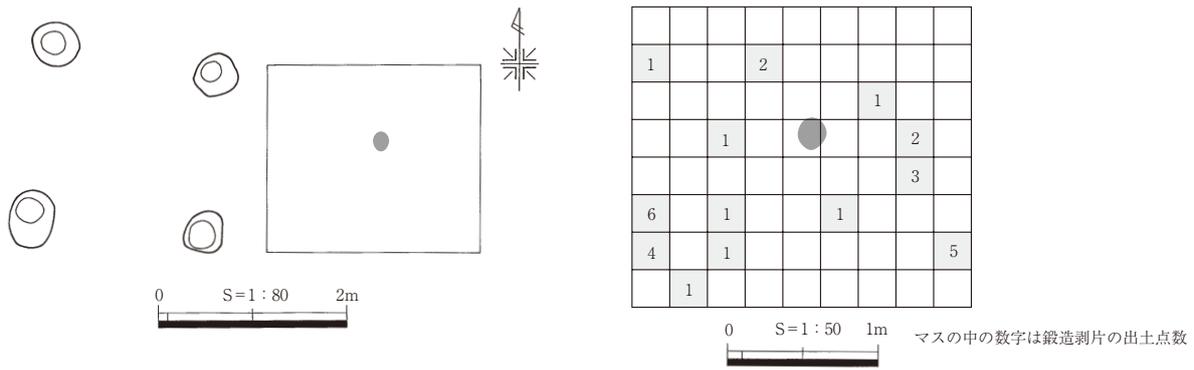
J 37グリッドの東端、標高63.6m付近の、東に谷を臨む緩斜面に位置する。北側約4mにSB7がある。

平面形は梁行1間、桁行2間の掘立柱建物跡である。主軸はN-72°-Eで、SB7とはかなり異なる。

柱穴間距離はP1-P2間から時計回りに1.45m、1.45m、3.30m、1.50m、1.50m、3.20mである。柱穴の規模は最大でP4の長軸54cm、短軸48cmで、最小がP3の



第87図 SB10



第88図 SB10東側の炭化物集中範囲と鍛冶関連遺物分布図

長軸43cm、短軸42cmである。深さはP 6が最も深く99cm、P 2が最も浅く79cmを測る。深さにやや差があるが、桁行で並んでいる3本の柱穴のうち真ん中にあたるP 2・5は、両側の柱穴に比べ多少浅い傾向にある。

埋土はP 3・5・6が柱痕跡と裏込土からなる。柱痕跡は粘性・しまりともに弱い黒褐色土、裏込土は地山ブロックを含む褐色土と黄褐色土がほとんどで、全体的に粘性・しまりともに強い。その他の柱穴埋土には柱痕跡は認められないが、上層は流入したと思われる暗褐色土、下層は裏込土とよく似た特徴を持つ粘質土を中心とした堆積になっている。

遺物は出土しておらず、本遺構の時期は不明である。

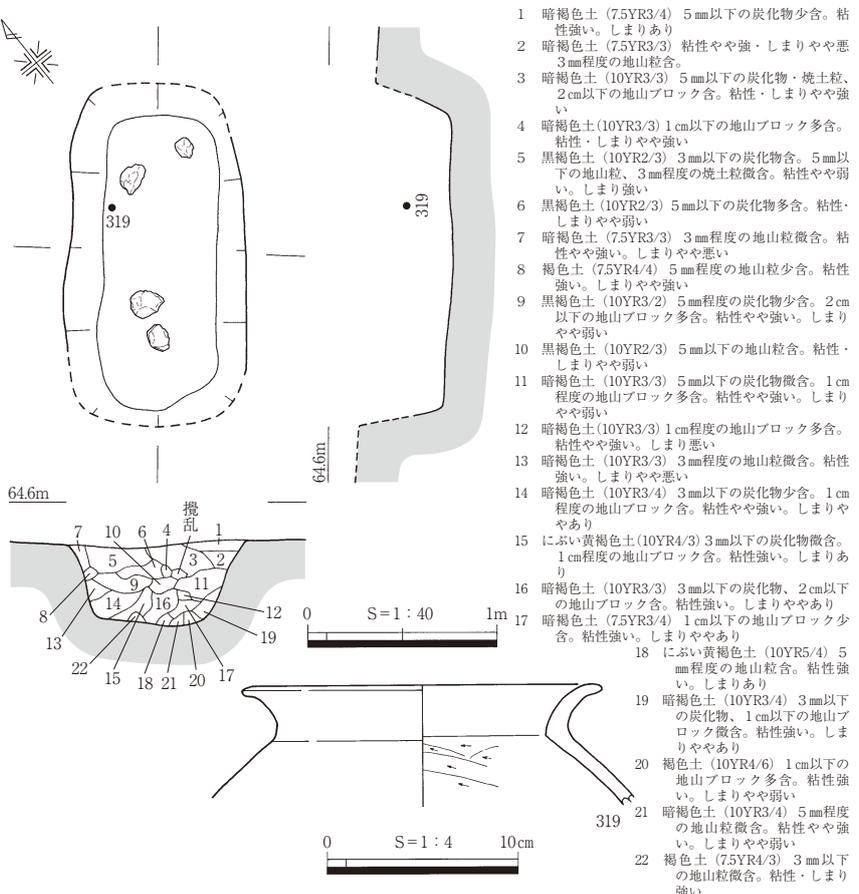
(原田)

SB10(第87・88図、PL.30)

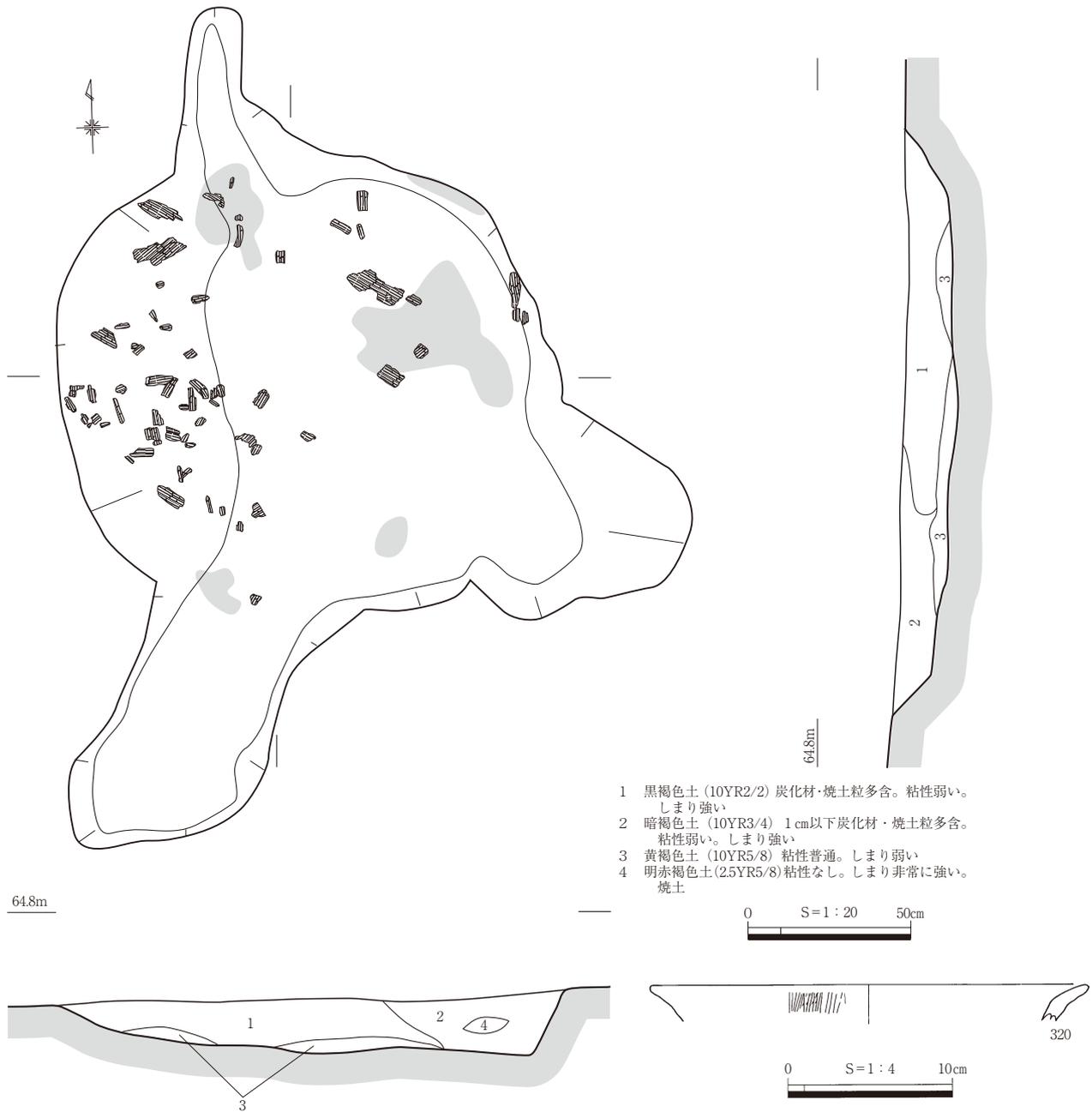
M33グリッドに位置する。径40～60cm、深さ35～50cmの4本の柱穴で構成される、1間×1間の建物跡である。主軸はN-7°-Eにとる。

柱間距離はP 1-P 2間から時計回りに、1.7m、1.75m、1.8m、1.8mを測る。P 1、P 4で柱痕跡を確認している。

P 1とP 2を結ぶ柱穴間の中心付近から東に1.4m離れて、径0.2mほどの炭化物の浅い集積が検出された。鍛冶炉と同様の方法で周囲2m四方の土壌を回収し水洗選別を行ったが、第88図に示した位置で鍛造剥片が数点ずつ検出されたのみで、鍛冶作業との関わりを積極的に示すとはいえない。位置的にSB



第89図 SX17および出土遺物



第90図 SK142および出土遺物

9との関連性も考えられるが、その性格も含めて明らかではない。

SB10に伴う遺物は出土していない。周辺に存在する奈良時代の掘立柱建物跡と主軸方向が共通することもあり、この時代に属する可能性もあるが確証はなく、時期、性格ともに不明である。(湯村)

(2) 土壇墓

SX17(第89図、PL.30・100)

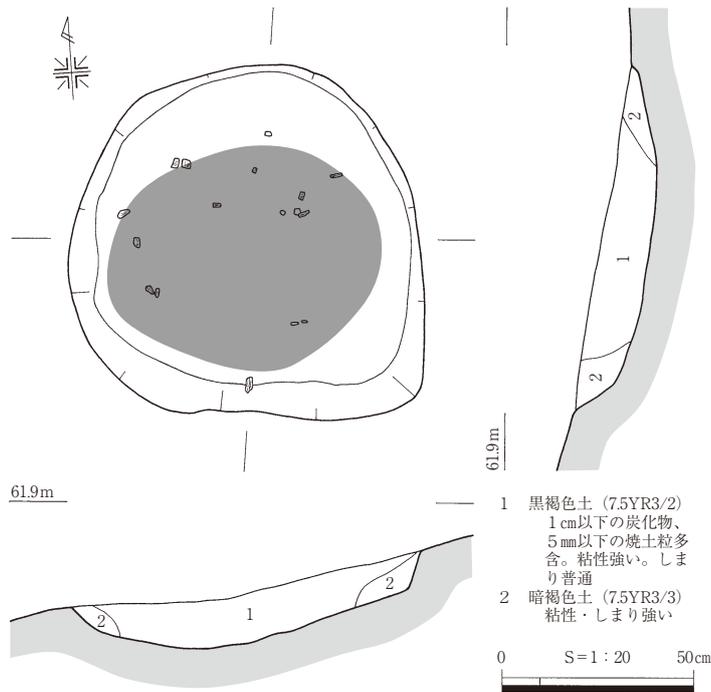
K37グリッドの南西端、標高64.4m付近の、東に谷を臨む緩斜面に位置する。北側約5mにSI45、南東側約7mにSI47、南側約5mにSK169がある。

平面長方形を呈し、長軸は推定1.80m、短軸0.95m、検出面からの深さは南西側が最大で0.44mを測る。壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。南西側の壁は根攪乱によって大きく失われている。底面にピット等は認められない。

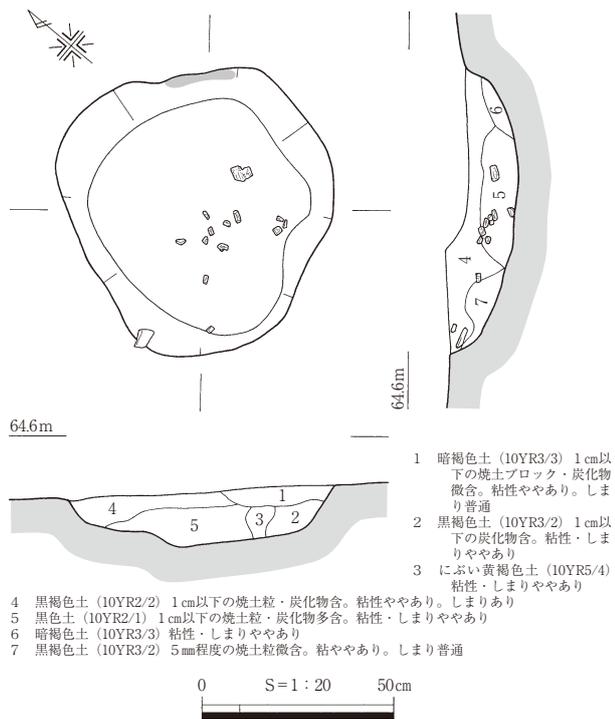
埋土は含まれる地山ブロック等のあり方から細分でき、壁際から埋没していった様相を示さないことから、人為的に埋められた可能性がある。

遺物は埋土上層から土師器の破片がまばらに出土している。319は単純口縁を持つ甕で、古墳時代のものと思われるが、出土状況からは必ずしも遺構の時期を示すとはいえない。

埋土上層に標石の可能性がある礫があり、遺構の形状からもSX17は土壙墓であると考えられる。(原田)



第91図 SK143



第92図 SK144

(3) 製炭土坑

SK142(第90図、PL.31・101)

N29グリッド南東、標高64.5mの西向き緩斜面に位置する。北西2mにSK156がある。形態は、中心部分が径1.5mの円形を基本としているが、縁辺に3箇所突出部分を持ち、全体として平面形はやや歪な形状を呈している。この突出部分は埋土の土色、土質、含有物とも円形部分の2層に酷似していることから、時期的に先行する別遺構を本遺構が切ったわけではなく、本遺構の構築・使用に伴うものであると考える。

本遺構は埋土中に多量の炭化材および焼土を含むことや、壁面に被熱赤化が認められたことなどから製炭土坑であると考え

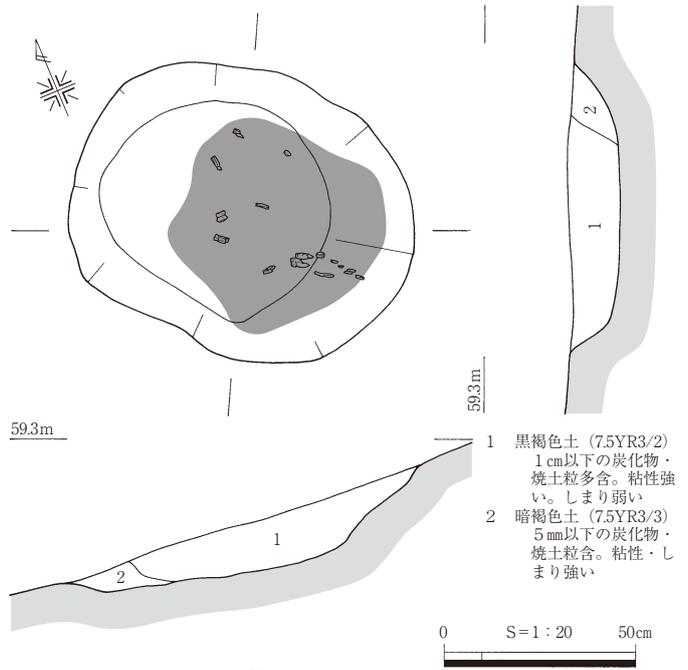
る。平面的に見ると、遺構東側を中心に埋土中に焼土が広く分布し、焼成された木炭と思われる炭化材も多量に出土している。これらの炭化材の出土レベルは検出面より8cm～10cm低い位置にあり、燃焼材と思われる径1～3cmの炭化材を除去した後に確認できた。木炭と考えられるこれらの炭化材は、概ね径5～8cm、長さ10～20cmを測る。これらの炭化材のうち3点について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施している(第5章)。樹種同定の結果、使用されていた樹種はクリ、ネムノキ、スダジイに同定され、単一の樹種ではなく、やや雑多な種類構成になっていた。また、放射性炭素年代測定を実施した結果、炭化材の年代は7世紀中頃から8世紀中頃との結果が得られた。

出土遺物であるが、南西側の突出部分から土師器の甕口縁部320が出土した。(濱本)

SK143(第91図、PL.31)

N27グリッド中央やや西寄り、標高61.6～61.7mに位置する土坑である。長軸93cm、短軸92cmで検出面からの深さは13cmを測る。平面形は南東部がやや張り出しているがほぼ円形である。底面は浅い播り鉢状を呈している。底面や壁面に被熱面は認められなかった。埋土は黒褐色土を主体とし、2層に分層できる。1層中には径1cm以下の焼土粒、炭化物を多量に含んでいた。

出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、埋土の状況および形態から製炭土坑と考える。(濱本)



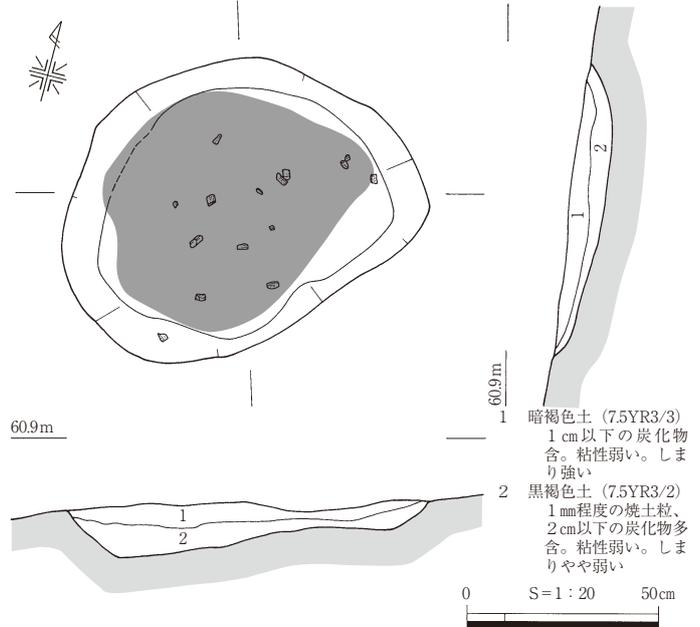
第93図 SK148

SK144(第92図、PL.31)

N32グリッド中央やや南寄り、標高64.5mに位置する。規模は長軸77cm、短軸69cm、深さ17cmを測る。平面形は歪な円形を、底面の形状は播り鉢状を呈している。

埋土は7層に分層できた。3・6層を除き埋土中に焼土粒や炭化物を含んでいる。北東壁には被熱面が認められた。

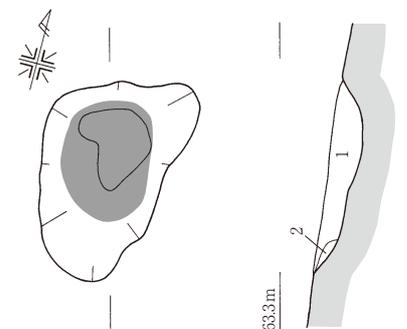
出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、埋土の状況および形態から製炭土坑と考える。(濱本)



第94図 SK150

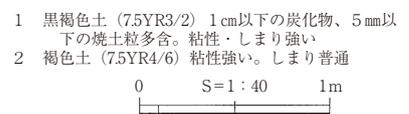
SK148(第93図、PL.32)

O26グリッド中央東寄り、標高58.9～59.2mの斜面上に位置する。埋土は2層で、微細な炭化物・焼土粒を含む黒褐色土もしくは暗褐色土である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸92cm、短軸73cm、深さは検出面から約13cmを測る。埋土中に多量の焼土粒を含むが、壁面、底面に被熱赤化した痕跡は認められない。規模、形態から製炭土坑と考える。出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。(濱本)

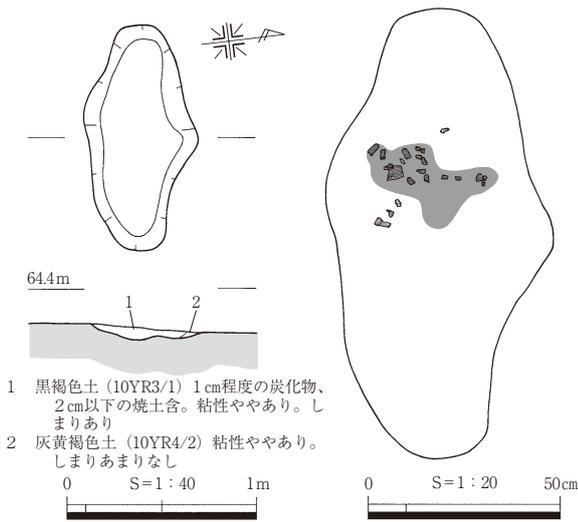


SK150(第94図、PL.32)

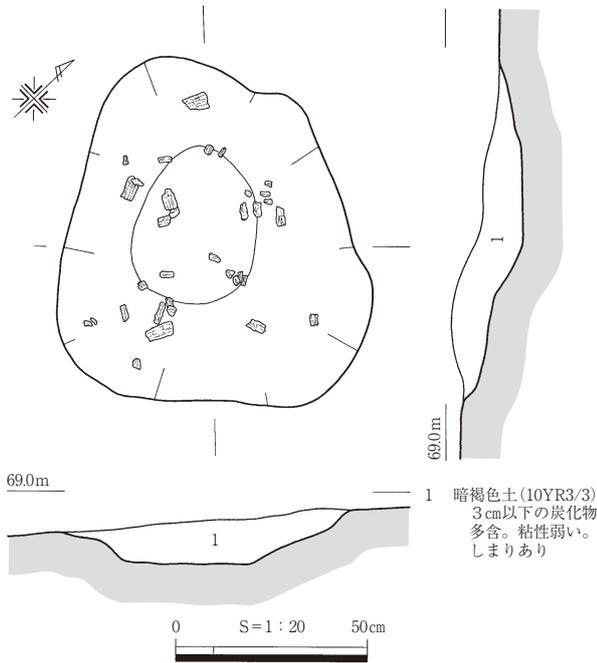
N26グリッド中央やや東寄り、標高約60.7m～60.8mの緩斜面上に位置する。長軸95cm、短軸80cmの楕円形のプランをした土坑であ



第95図 SK154



第96図 SK157



第97図 SK160

る。埋土は2層に分層でき、1層(黒褐色土)中に多量の炭化物、焼土粒を含んでいた。深さは検出面から最大13cmを測る。本来は東側より西側がやや深くなる播り鉢状の底面であったと思われるが、樹根による攪乱が著しく、底面の形状ははっきりしない。壁面や底面に被熱赤化した痕跡は認められなかった。規模、形態から製炭土坑と考える。

本遺構から出土した炭化材のうち3点について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施している(第5章)。その結果、炭化材の年代は11世紀中頃から13世紀初頭の年代が得られた。炭化材の樹種はいずれもクリであった。優良な木炭となる木材として選択的に利用された可能性がある。(濱本)

SK154(第95図、PL.32)

N28グリッド南西約50cm、標高63.0～63.1mに位置する。北東-南西方向に長軸を取り、平面プランは三角形に近い歪な楕円形を呈する。短軸方向南東側が幅広で北西方向に向かってややすぼまる。規模は長軸118cm、短軸68cm、検出面からの深さは最大約15cmを測る。底面の形状は浅い播り鉢状を呈する。

埋土は黒褐色土を主体とし、2層に分層できた。1層中には径5mm以下の炭化物粒、焼土粒を多量に含む。形態から製炭土坑と考えられ、木炭を焼成するために使用した燃焼材と思われる炭化材もわずかに認められたが、最大でも長さ2cm程度で遺存状態

は良くない。遺物は出土しておらず、本遺構の時期は不明である。

(濱本)

SK157(第96図、PL.33)

K37グリッド、調査区南側の中央に位置する。標高およそ64.2mの平坦面に立地する。本遺構は、平面歪な長楕円形、断面皿状を呈し、長軸120cm、短軸60cm、検出面からの深さは10cmを測る。

本遺構の埋土には、黒褐色土、灰黄褐色土の2層が認められるが、灰黄褐色土は北側にわずかに堆積するのみで、大半が黒褐色土である。また黒褐色土中には炭化材のほか、焼土の粒が認められる。

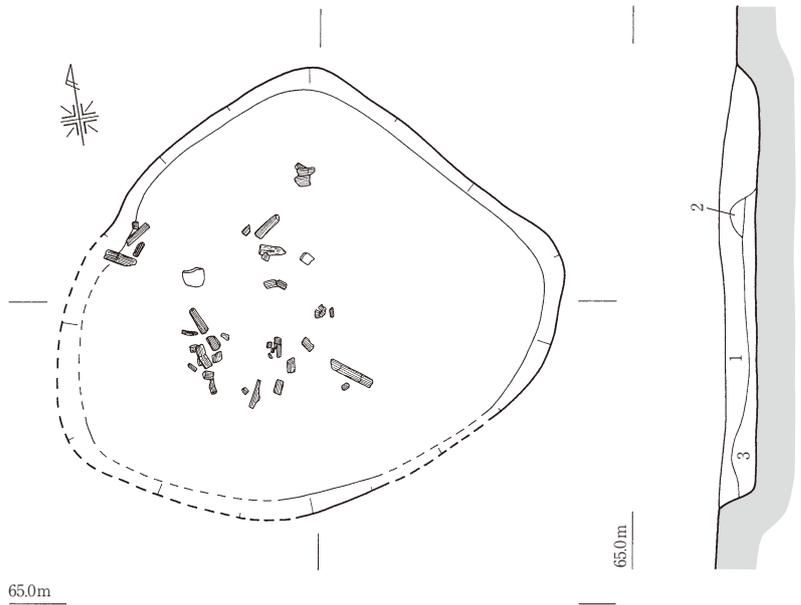
本遺構の性格に関しては、埋土中に炭化材や焼土が認められることから製炭土坑の可能性が考えられるが、形態等は本遺跡で確認される他の製炭土坑と異なる。近接した位置に近年の製炭土坑が存したことから、近年の製炭土坑に伴う廃棄坑などの可能性も考えられる。帰属時期は不明である。(野口)

SK160(第97図、PL.33)

H42グリッド北東隅、標高約68.9～69.0mの北向き緩斜面に位置する。北東約1mにSK167が存する。西尾根基本層序の2層(褐色土)上面で円形の暗褐色土プランとして検出した。規模は長軸90cm、短軸82cm、深さは最深部で検出面から13cmを測る。底面の形状は浅い掘り鉢状を呈する。

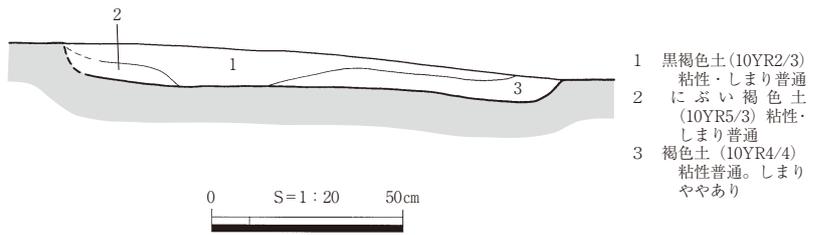
埋土は暗褐色土1層で、埋土中に径3cm以下の炭化物を多量に含んでいた。底面や壁面の被熱赤化は認められなかった。形態・規模から製炭土坑と考えられる

本遺構から出土した炭化材のうち3点について放射性炭素年代測定と樹種同定を実施している(第5章)。その結果、炭化材の年代は11世紀初頭から12世紀中頃の年代が得られた。炭化材の樹種はいずれもコナラ節であった。(濱本)

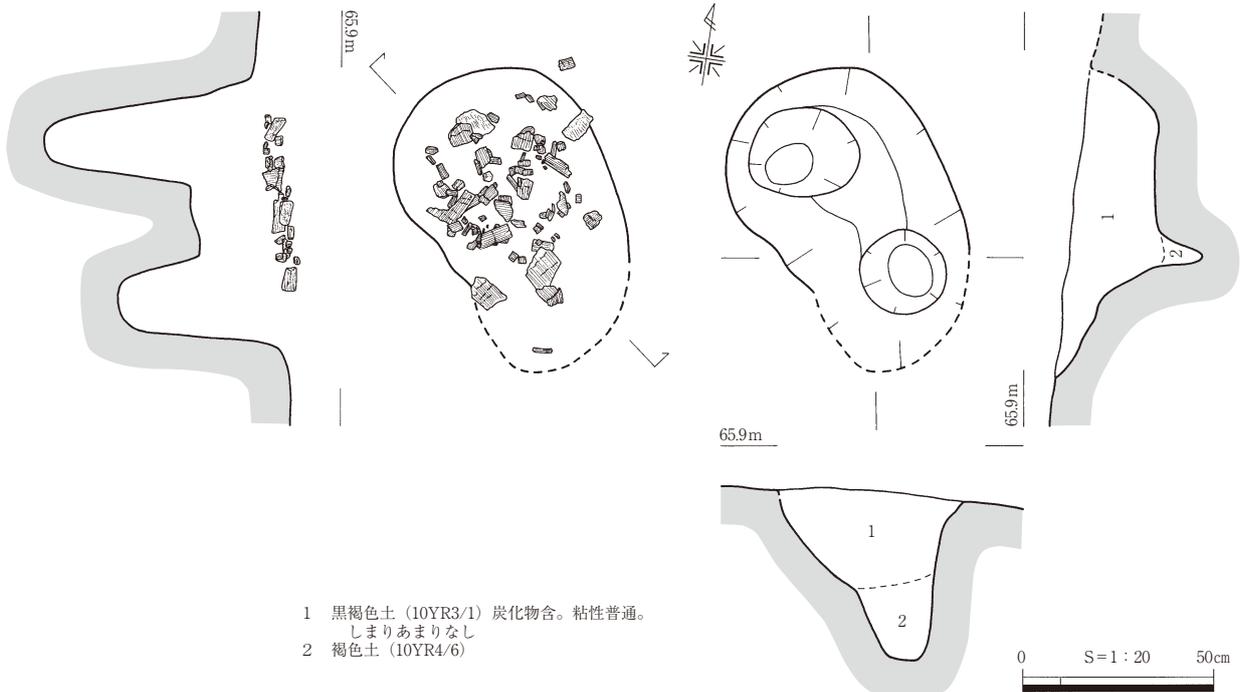


SK172(第98図、PL.33)

L37グリッド、調査区南側の緩斜面地、標高およそ64.8mの高さに立地する。本遺構は南側から西側にかけて根攪乱等を受けるため、詳らかにできないところもある



第98図 SK172



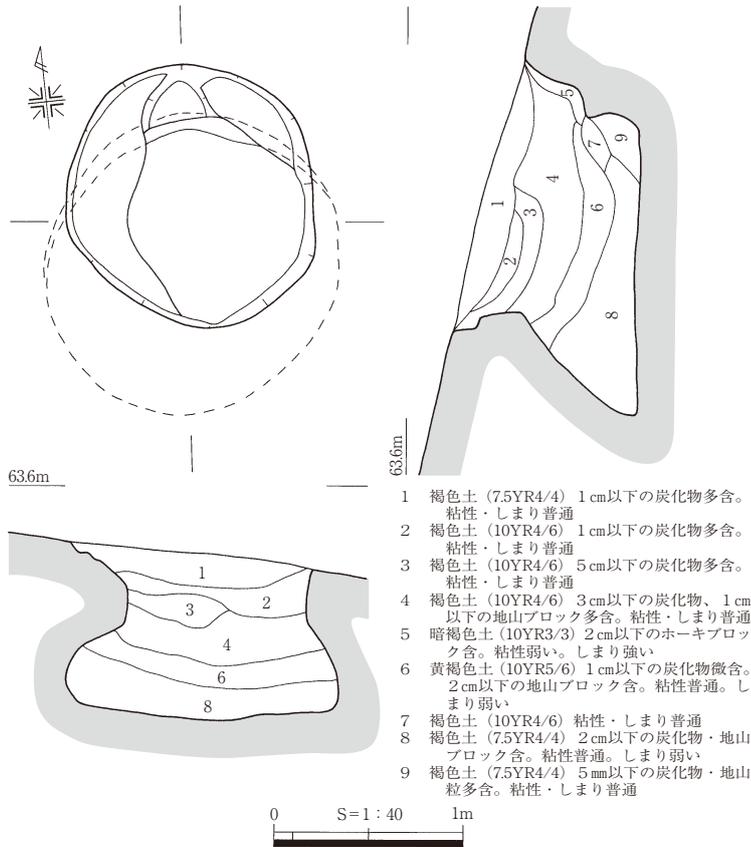
第99図 SK176

るが、平面形は、北東側は方形、南西側が円形と思われる不整な形を呈する。その規模は長軸1.23m、短軸1.14m、検出面からの深さは0.12mを測る。

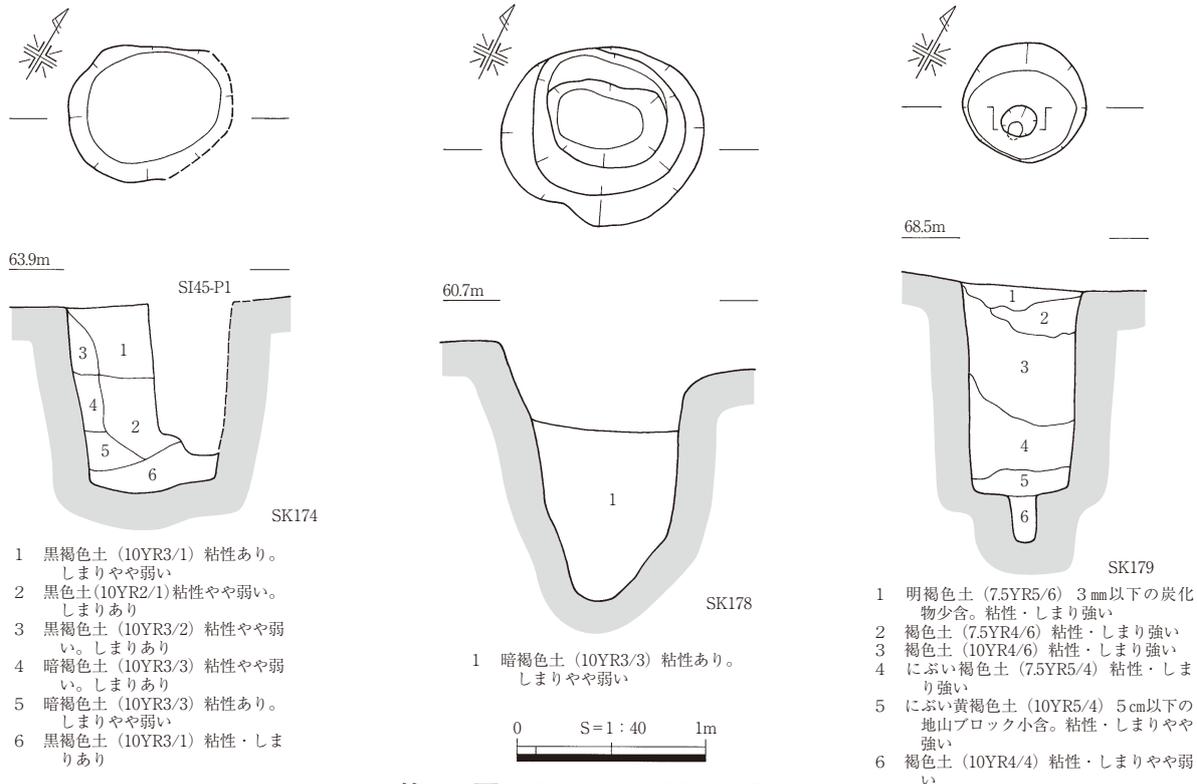
本遺構の埋土は、3層に分けられるが、最上層の1層中からは2～25cmの多くの炭化材が出土した。

炭化材の出土状況には一定の方向を向くなどの規則性は認められなかったが、炭化材には大きく分けて、太さ2～3cmの小枝状のものと4～5cmの棒状のものが認められる。

本遺構の性格に関しては、埋土中に炭化材が認められることから製炭土坑の可能性が考えられるが、上述のとおり炭化材の状況は不規則であることから、作った木炭を取り去った後のものと考えられる。また、炭化材の太さの違いは、小枝状のものが燃焼材、もしくは被覆材、棒状のものが製品であったと思われる。帰属時期は明らかでないが、本遺跡で確認される他の製炭土坑が飛鳥・奈良時代、もしくは平安時代であることからそれらと同様の時期の可能性がある。（野口）



第100図 SK159



第101図 SK174・178・179

SK176(第99図、PL.34)

J40グリッド、調査区南側の斜面地、標高およそ65.9mの高さに立地する。本遺構は、平面楕円形で、長軸83cm、短軸48cmを測る。深さは検出面から25cmほどで、底面には2箇所でピット状の落ち込みが認められる。

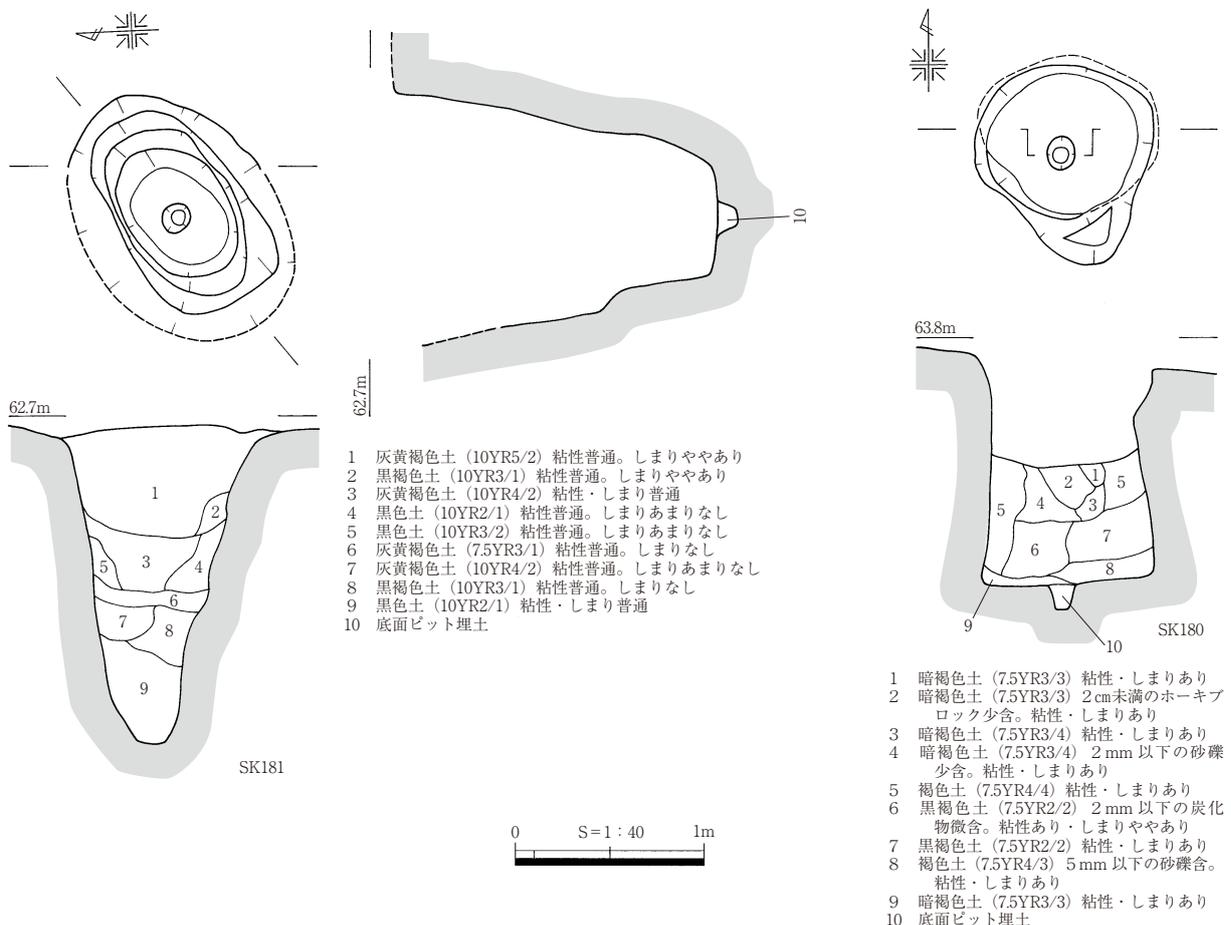
本遺構の埋土中には、検出面からすでに多量の炭化材が認められた。出土した炭化材には、大きく分けて太さ1～2cm程度の小枝状ものと、4～10cmの棒状、板状のものが確認されるが、棒状、板状の炭化材はその多くが、北西-南東方向、もしくは北東-南西方向に主軸を向ける。

本遺構の性格に関しては、炭化材の出土状況から製炭土坑と考えられるが、出土した炭化材は小枝状のものが燃焼材、もしくは被覆材、棒状、板状のものが製品であったと思われる。帰属時期は明らかでないが、本遺跡で確認される他の製炭土坑が飛鳥・奈良時代、もしくは平安時代であることからそれらと同様の時期の可能性はある。(野口)

(4)貯蔵穴

SK159(第100図、PL.34)

G38グリッド南端、標高63.0～63.4mの北向き斜面に位置する。北東6mにSK184、西4mにSK165がある。遺構面精査中に炭化物を多量に含む円形の褐色土プランとして検出した。規模は開口部径1.3m、底部最大径1.5m、検出面からの深さは0.9mを測る。断面がフラスコ状を呈しており、袋状貯蔵穴と考えられる。底面および開口部周辺にピットは認められなかった。



第102図 SK180・181

埋土は9層に分けられる。1～4層には径1cm以下の炭化物を多量に含んでいた。7・9層は周辺の地山と近似する土質、土色であることから廃絶後に壁面が崩落し混入したものであろう。概ねレンズ状に堆積しており、廃絶後に自然堆積によって埋没したと考えられる。

遺物は出土しておらず、本遺構と関連すると思われる住居跡等も周辺に認められないため、遺構の時期は不明である。(濱本)

(5) 落とし穴

SK174(第101図、PL.34)

K36グリッド、調査区南側中央のSI45貼床除去後に検出された平面楕円形の落とし穴である。SI45と重複することから、本来の掘り込み面の高さは不明であるが、確認された高さは標高約63.5mである。

規模は、東側がSI45の柱穴により掘削されるため明確にはできないが、長軸は0.9m程度であったと思われる。短軸は0.72mで、深さは1mである。埋土は6層に分けられ、壁際から埋まっていったようであるが、本遺跡内での基本土層としてはあまり認められない黒色系(黒ボク)の埋土であった。出土遺物は認められない。

本遺構の時期、および性格に関しては、出土遺物等見られなかったため詳細は明らかでないが、古墳時代中期後半のSI45との切り合い関係から、古墳時代中期後半以前の遺構である。ただし、埋土に見られる黒系の土が、本遺跡の弥生時代以降の遺構埋土に認められないことからすれば、黒系の土は弥生時代以前に流失した土であり、黒系の土を埋土に持つSK174もそれ以前であったと考えられる。性格等は掘方の形態などから落とし穴であったと考えられる。(野口)

SK178(第101図、PL.34)

E37グリッド、調査区東側の谷部傾斜地に位置する。標高およそ60.5mの高さにある。SS15と切り合い関係にあり、南東側の上部分はSS15によって削平される。

本遺構は、長軸1.08m、短軸0.96mの平面楕円形を呈する落とし穴である。検出面から底面までの深さは1.38mを測り、底部付近は腐れ礫の礫層を掘削する。埋土には暗褐色土が堆積するが、検出の段階では木の根による攪乱と判断し、掘り下げてしまったため、上半部の埋土は明らかでない。出土遺物は見られなかった。

本遺構の時期は、出土遺物等見られなかったため、詳細にはできないが、弥生時代後期末葉のSS15との切り合い関係により、弥生時代後期後葉以前の遺構である。また性格は、底面ピットなどは検出されなかったが掘方の形状から落とし穴であったと考えられる。(野口)

SK179(第101図、PL.34)

G41グリッドの南西端、標高68.2mの傾斜変換点付近に位置する。南西約3mにSK167が、約4mにSK160が隣接する。

平面形は上縁部が円形、底面が楕円形を呈し、上縁部が長軸66cm、短軸63cm、底面が長軸52cm、短軸46cmを測る。検出面から底面までの深さは1.11mである。断面はほぼ長方形を呈する。底面中央付近にはピットが1基認められ、その規模は長軸20cm、短軸18cm、深さ25cmである。

埋土は6層に分けられる。地山由来の褐色系の粘質土からなり、粘性・しまりともに強い。遺物の出土はなく、本遺構の時期は不明である。形態の特徴から落とし穴と想定される。(原田)

SK180(第102図、PL.35)

H38グリッド、標高63.7m付近の谷部南斜面に位置する。検出当初は根攪乱によるものと判断し、埋土上半部を掘り下げてしまったが、長軸1.1m、短軸0.9mの不整円形を呈する遺構と判明した。遺構の掘り込みは南西部を除いて袋状になり、検出面から底面までの深さは最大1.2mを測る。

底面中央には径、深さともに14cmのピットが確認された。

遺物が出土しておらず時期は不明である。形態の特徴から、本遺構は落とし穴と思われる。(前田)

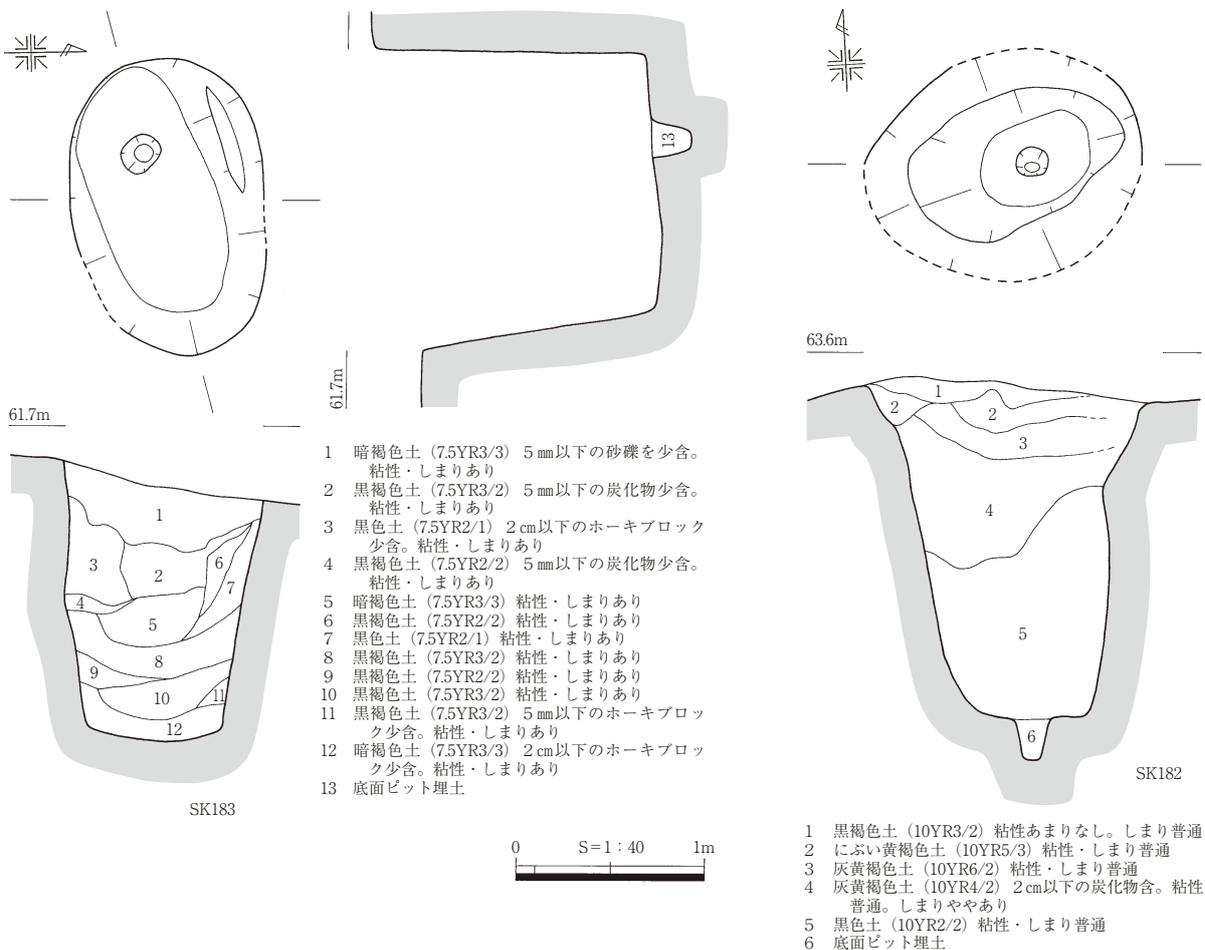
SK181(第102図、PL.35)

H37グリッド、標高62.6m付近の谷部中央に位置する。谷部の土層堆積を確認するために設けたトレンチ断面の観察で、遺構の存在を確認した。

長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形を呈するものと思われる。検出面から底面までの深さは最大1.7mを測る。

底面中央には径16cm、深さ12cmのピットが確認された。

遺物が出土しておらず時期は不明である。形態の特徴から、本遺構は落とし穴と思われる。(前田)



第103図 SK182・183

SK182(第103図、PL.35)

I 37グリッド、標高63.4m付近の谷部西側に位置する。SK181同様、谷部の土層堆積を確認するために設けたトレンチ断面の観察で、遺構の存在を確認した。

周辺の遺構精査に伴い埋土上層の一部を掘り下げてしまったが、長軸1.3m、短軸1.2mの楕円形を呈するものと思われる。土層観察用に残したベルト上面が検出面と想定され、そこから底面までの深さは最大1.8mを測る。掘り込みは一部袋状となる。

底面中央には径18cm、深さ22cmのピットが確認された。

遺物が出土しておらず時期は不明である。形態的特徴から、本遺構は落とし穴と思われる。(前田)

SK183(第103図、PL.35)

F 38グリッド、標高61.4m付近の谷部南斜面に位置する。西にSK184が近接する。

平面形は不整な楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.0m、検出面から底面までの深さは最大1.4mを測る。遺構の掘り込みは逆台形となり、黒色土、黒褐色土を主体とする13層の埋土が確認された。

底面やや西寄りには径、深さともに20cmのピットが確認された。

遺物が出土しておらず時期は不明である。形態的特徴から、本遺構は落とし穴と思われる。(前田)

SK184(第104図、PL.35)

G 38グリッド、標高62m付近の谷部南斜面に位置する。東にSK183が近接する。

長軸90cm、短軸80cmのほぼ円形を呈する。検出面から底面までの深さは最大1.2mを測る。遺構の掘り込みは袋状となっている。検出当初は根攪乱によるものと判断し、埋土上半部を掘り下げてしまったが、褐色土を主体とする8層の埋土を確認した。

底面中央には径、深さともに20cmのピットが確認された。

遺物が出土しておらず時期は不明である。形態的特徴から、本遺構は落とし穴と思われる。(前田)

SK185(第104図、PL.35)

M36グリッド、調査区西側の緩斜面地、標高およそ65.0mの高さで確認された落とし穴である。SI49と切り合い関係にあり、南側の上部分はSI49によって掘削される。

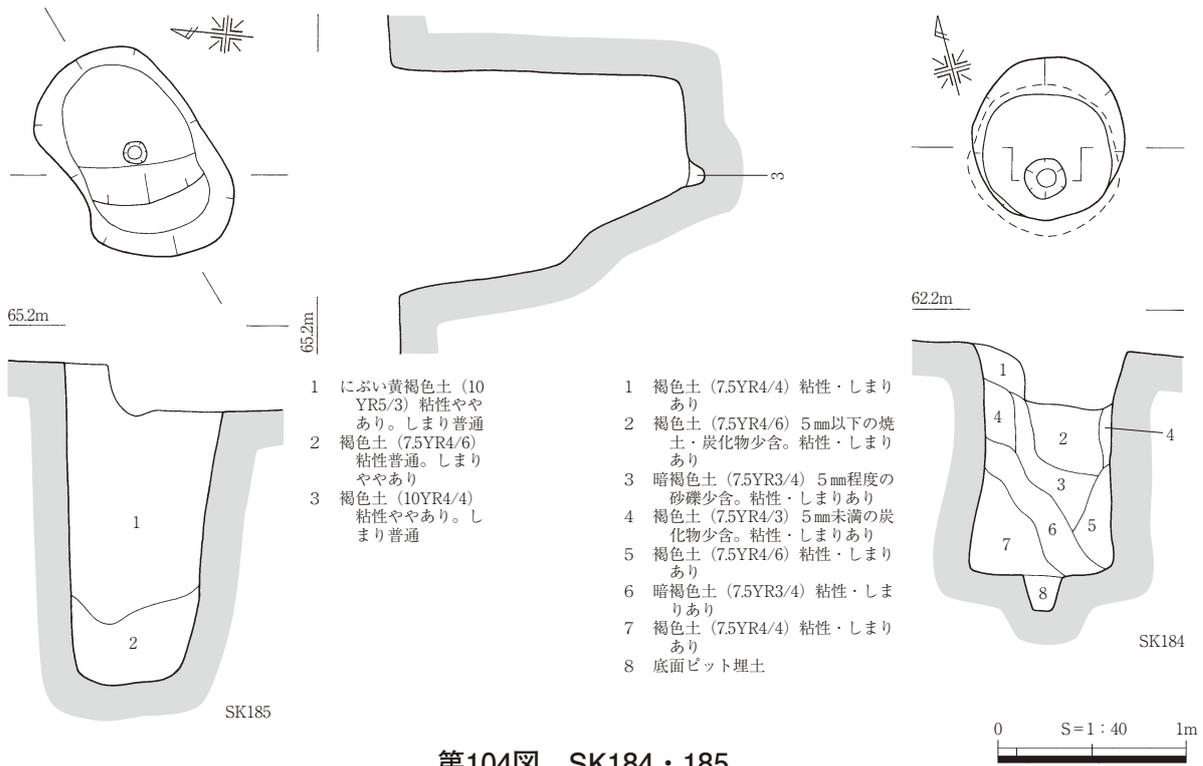
本遺構は、長軸1.2m、短軸0.72mの平面楕円形を呈する。検出面から底面までの深さは1.76mを測り、埋土にはにぶい黄褐色土と褐色土の2層が堆積する。また底面中央では径13cm、深さ10cmほどの底面ピットが確認された。遺物の出土はなかった。

本遺構の時期に関しては、出土遺物等見られなかったため、詳細は不明であるが、弥生時代後期中葉のSI49との切り合い関係により、弥生時代後期中葉以前の遺構である。性格等は上述のとおり、底面ピットが配される状況などから落とし穴であったと考えられる。(野口)

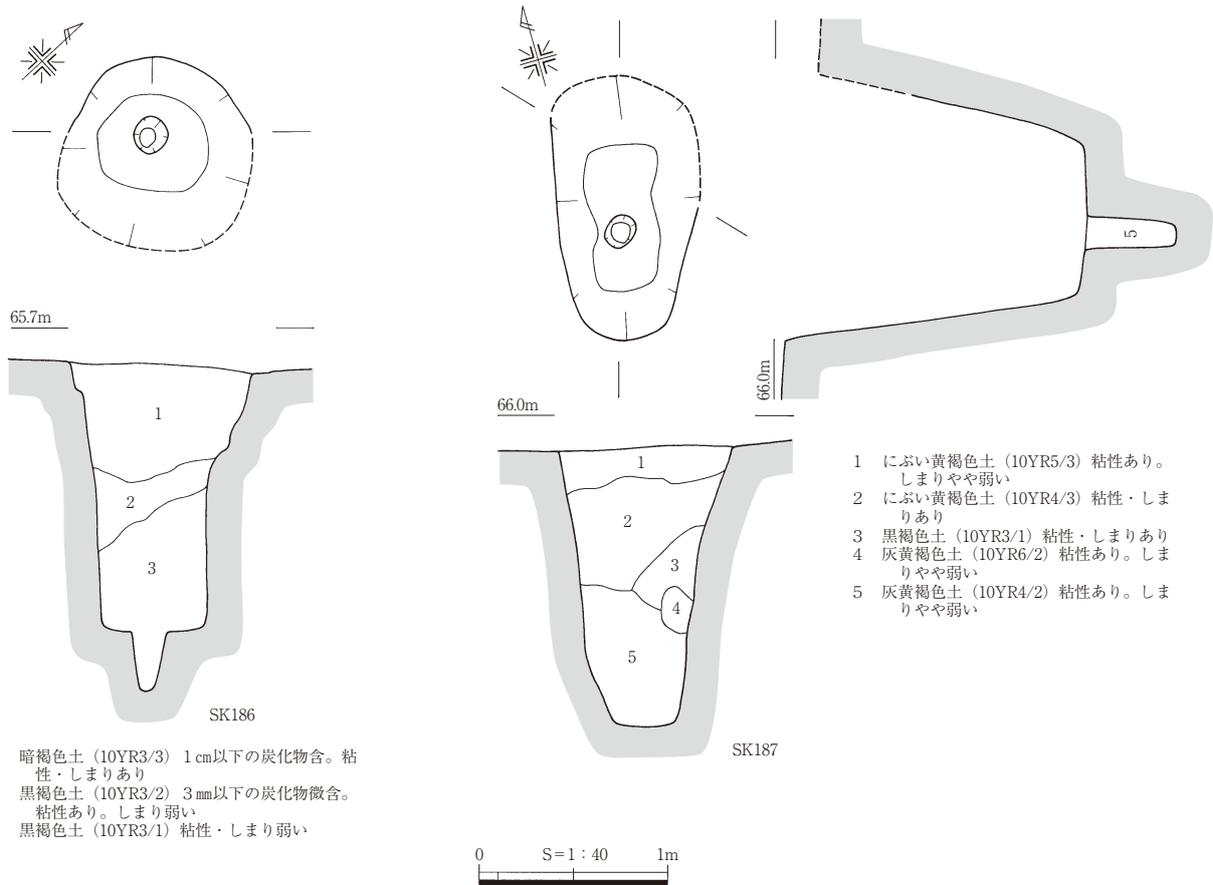
SK186(第105図、PL.36)

L39グリッドのほぼ中央、標高65.5m付近の北東方向の谷へと繋がる緩斜面に位置する。南東約7mにSK187が隣接する。

平面形は上縁部南東側が失われているため推定となるが、不整円形を呈するものと思われる。上縁



第104図 SK184・185



第105図 SK186・187

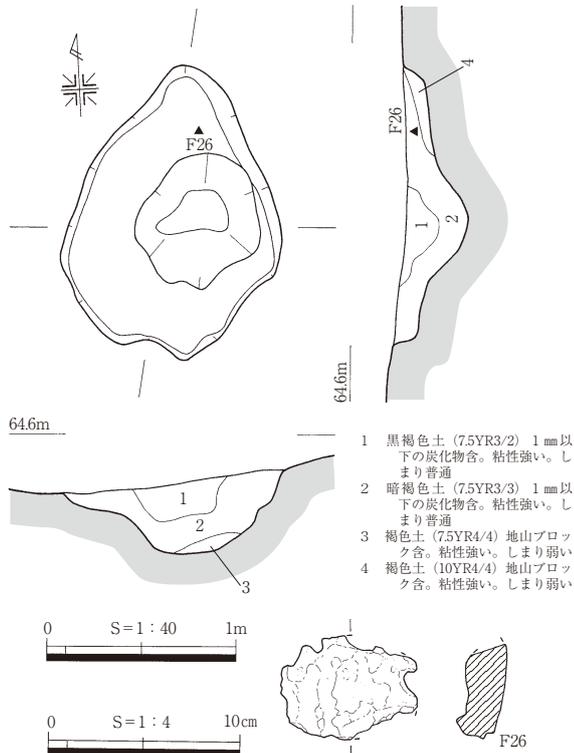
部の径は推定で1m、底面も不整形で長軸0.6m、短軸0.51m、検出面から底面までの深さは1.43mを測る。断面はほぼ逆長台形を呈する。底面中央付近にピットが1基認められ、その規模は長軸21cm、短軸18cm、深さ29cmである。

埋土は3層に分けられる。上層は暗褐色系、中層以下は黒褐色系の土で構成される。1層は、2・3層にくらべ粘性、しまりともに強い。1・2層には炭化物を含む。

遺物の出土はなく、本遺構の時期は不明である。形態的特徴から落とし穴と想定される。(原田)

SK187(第105図、PL.36)

L40グリッドの北東端、標高65.8m付近の北東方向の谷へと繋がる緩斜面に位置する。北西約7mにSK186が隣接する。

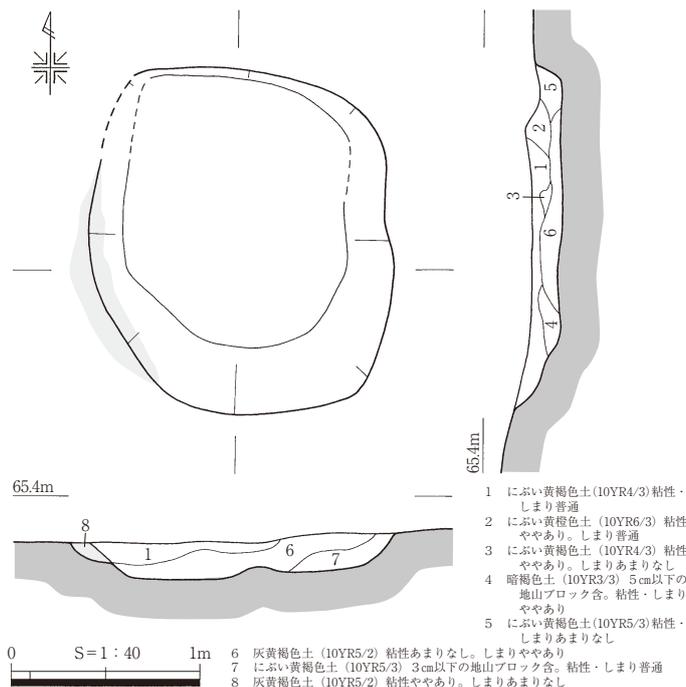


平面形は上縁部北側が失われているため推定となるが、長楕円形を呈するものと思われる。上縁部の径は推定で1.4m、底面も長楕円形で長軸0.77m、短軸0.35m、検出面から底面までの深さは1.52mを測る。断面は逆長台形を呈する。底面中央付近にピットが1基認められ、その規模は長軸18cm、短軸15cm、深さ49cmである。

埋土は大きく3層に分けられ、上層はにぶい黄褐色土、中間に一部黒褐色土をはさみ、下層は灰黄褐色土で構成される。全体的に粘性が強く、2・3層はしまりもよい。

遺物の出土はなく、本遺構の時期は不明である。形態的特徴から落とし穴と想定される。(原田)

第106図 SK156および出土遺物



(6) その他の土坑

SK156(第106図、PL.36)

N29グリッド中央やや南寄り、標高64.4mに位置する。南東2mにSK142がある。平面プランは長軸1.5m、短軸1.1mの西洋梨形を呈する。埋土は4層に分層でき、炭化物を含む1・2層を主体とする。炭化物の大半は径3mm以下の微細な粒であるが、2層中には全体で10点以下と少量であるものの、径1cm程度のものも含む。焼土粒は認められなかった。2層中では鉄滓F26を検出した。底面や壁面への被熱赤化は認められない。規模・形態から製炭土坑の可能性も考えられる。(濱本)

第107図 SK161

SK161(第107図、PL.36)

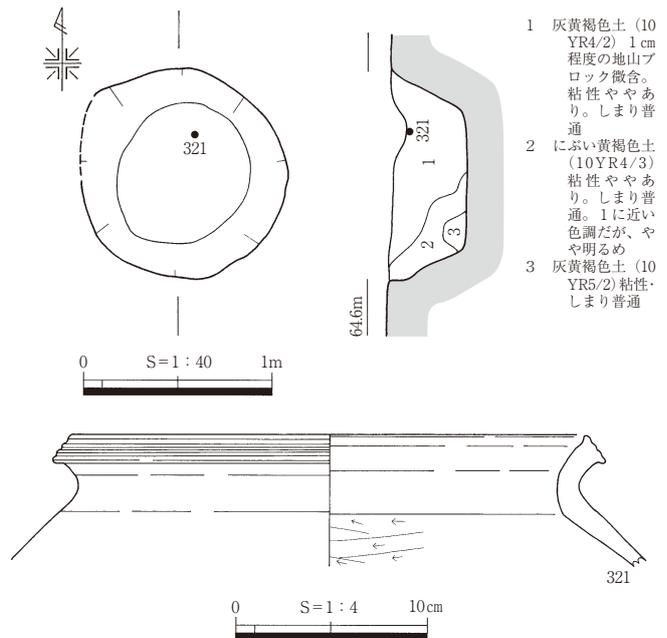
O35グリッド、調査区西側の南から北に向

い下る緩斜面地に位置する。検出面の標高はおよそ65.2mである。本遺構の平面形は、北西側に角を持った歪な楕円形を呈し、規模は長軸1.84m、短軸1.60mである。断面形は西側がやや深い皿状で、検出面からの深さは、20cmを測る。

本遺構の調査の状況としては、埋土は7層に分けられ、東側から6・7層を中心とした堆積の様相が窺えた。また、西側の壁面には120cmの範囲において、本遺跡の住居貼床で用いられる土に近似する灰黄褐色土(8層)によって壁が整形される箇所が認められた。

本遺構の時期、および性格に関しては、出土遺物等認められなかったため不明である。

(野口)



第108図 SK163および出土遺物

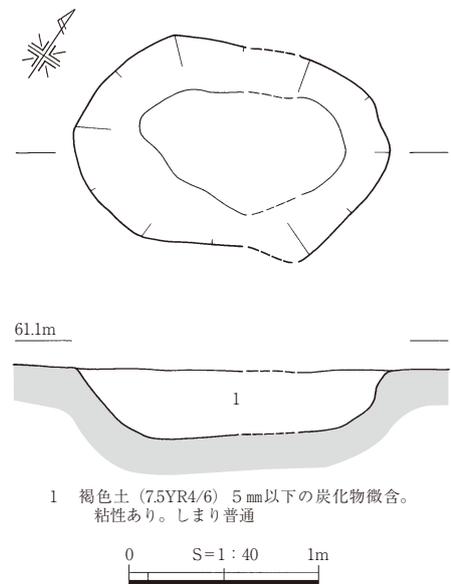
SK163(第108図、PL.36・101)

N33グリッド、標高64.5mの緩斜面に位置する。北西側は攪乱を受けていたが、径1.1mの円形を呈する土坑である。断面形は逆台形で、底面までの深さは最大40cmを測る。

埋土は灰黄褐色土を主体とし、堆積状況は南から北に向かい自然に埋没した状況を示している。

埋土中から若干の土器片が出土している。321は弥生土器で、あまり拡張されない口縁端部に凹線文が施され、内面のケズリ調整は頸部に達している。この土器の特徴は弥生時代後期前葉を示すが、埋土のかなり高い位置から出土しているため、遺構の時期を決定するものではないと考えている。

(前田)



第109図 SK164

SK164(第109図、PL.36)

F37グリッド、標高61m付近の谷部東側に位置する。北にはSS14が近接する。長軸1.7m、短軸1.1mの不整楕円形を呈する土坑である。断面形は逆台形で、底面までの深さは最大38cmを測る。

埋土は炭化物を少量含む褐色土の単層であった。

遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

(前田)

SK165(第110図、PL.37)

G38グリッドからH38グリッドにかけての、谷に向かう傾斜地に築かれている。

長軸4.2m、短軸3.3mの不整形な大型土坑で、斜面上方側の壁面にはテラス状の平坦面がある。深

さは最大で0.7mを測り、底面は平坦に仕上げられている。ピット等は認められない。

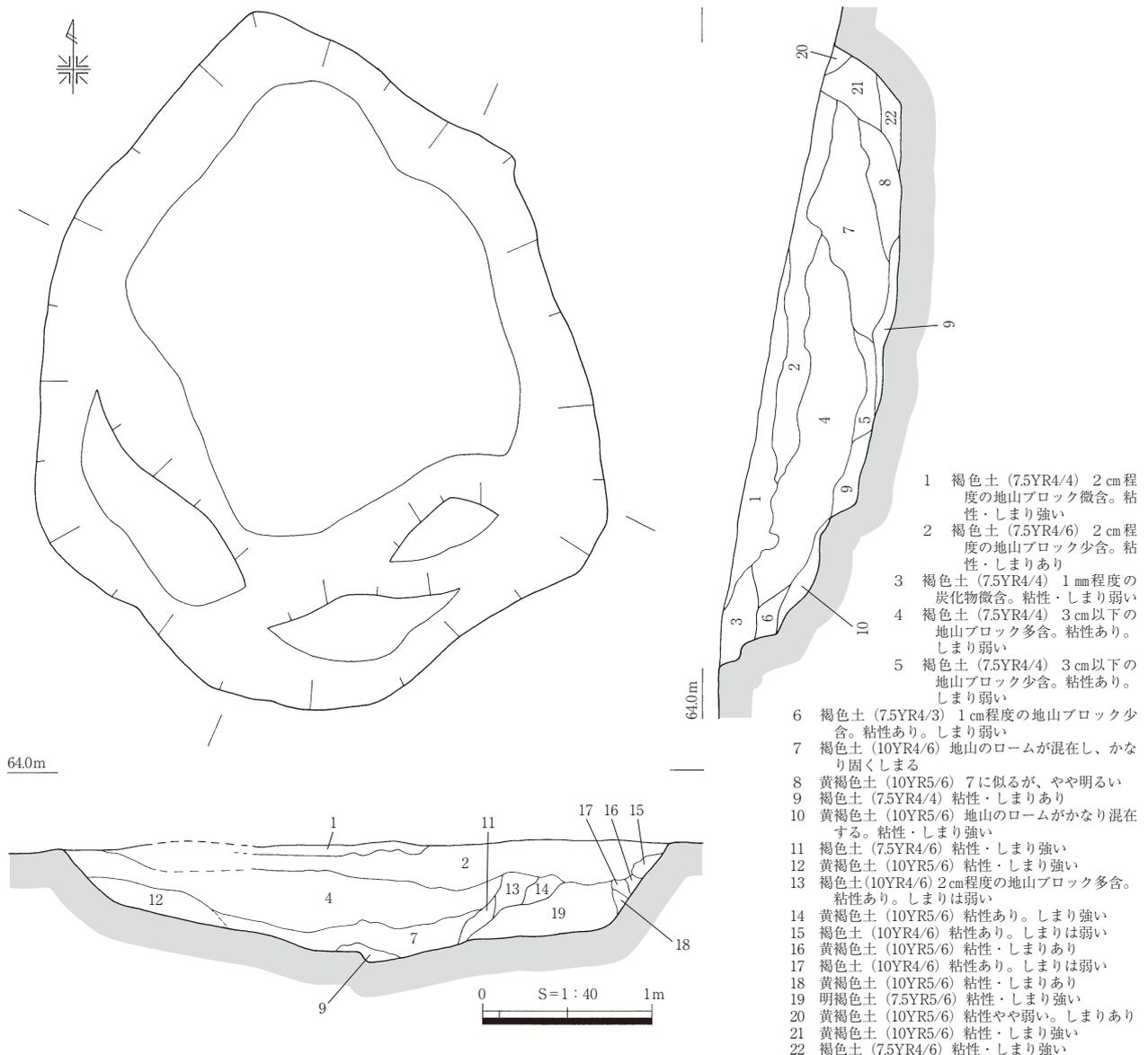
埋土の観察から21・22層を埋土とする部分と、それ以外を埋土とする部分に分けられそうである。前者は斜面下方側に堆積しており、平面形を見てもそのあたりが歪な形となっており、異なる遺構が重なっていた可能性もある。

また埋土の堆積状況を見ると、傾斜の強い斜面に築かれているにもかかわらず、上層の1・2層以下は斜面の傾斜に沿った堆積を示していない。7・8・21・22層は他の埋土と異なり特に粘性が強く、硬くしまる土であり、人為的に埋め戻された可能性もある。

遺物は埋土中から土器小片が1点出土したのみで、時期は不明である。 (湯村)

SK167(第111図、PL.37)

H42グリッド北東隅、標高68.8～68.9mの北向き緩斜面に位置する。南西1mにSK160が存する。2層(褐色土)上面で黒褐色土の円形プランとして検出した。規模は長軸82cm、短軸70cm、深さは最深部で検出面から13cmを測る。底面の形状は浅い播り鉢状を呈する。



第110図 SK165

埋土は黒褐色土と褐色土の2層に分層できた。1層中には径1cm以下の微細な炭化物粒を含んでおり、調査途中では製炭土坑の可能性も考えられたが、埋土中に焼土や径1cmを超えるような炭化材等は認められず、底面や壁面に被熱赤化した痕跡も認められなかったため、その可能性は低いと判断した。

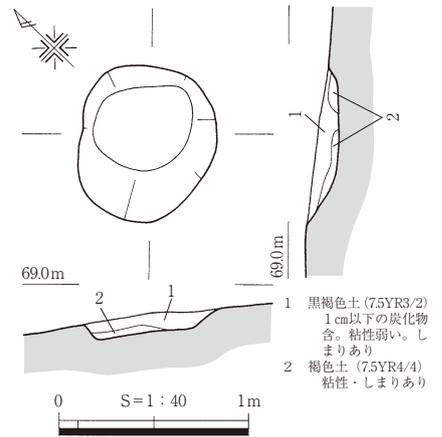
遺物は出土しておらず、本遺構の時期、用途は不明である。

(濱本)

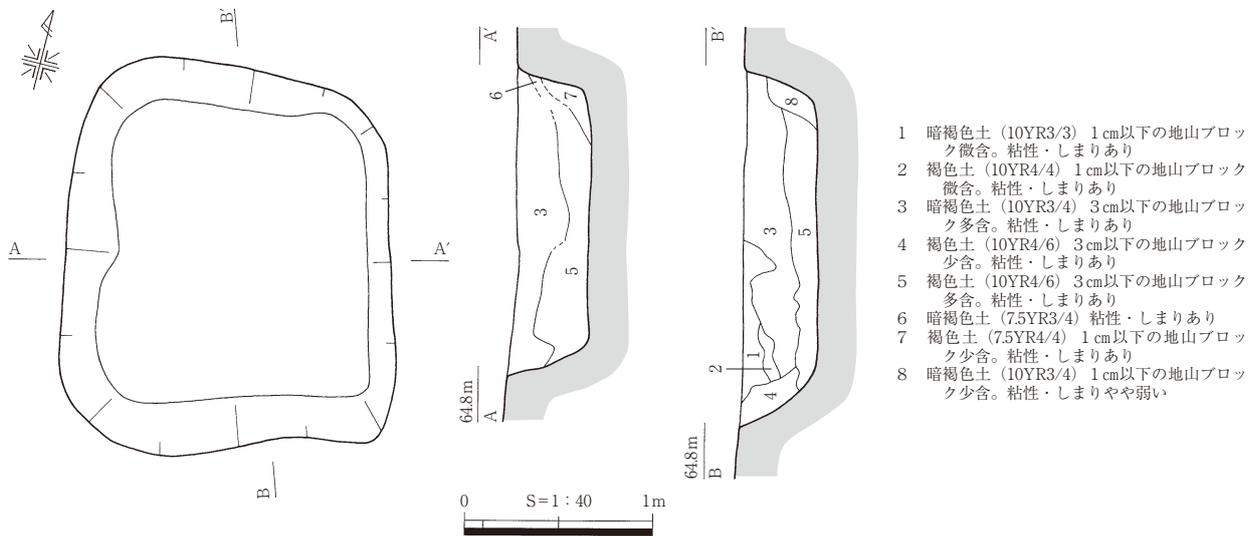
SK175(第112図、PL.37・100)

N34グリッドに位置し、比較的平坦なところに築かれた土坑である。

長軸2.1m、短軸1.7mの方形を呈する。深さは0.4mで、壁の立



第111図 SK167



第112図 SK175および出土遺物

ち上がりはしっかりとしており、底面も平坦に仕上げられ、よく整えられた印象を受ける。ピット等は伴っていない。埋土の状況は自然堆積を示していると思われる。

遺構の検出面で土師器甕322が出土したが、それ以外に遺物は認められなかった。322が示す奈良時代以前の遺構であろうが、時期は確定できない。(湯村)

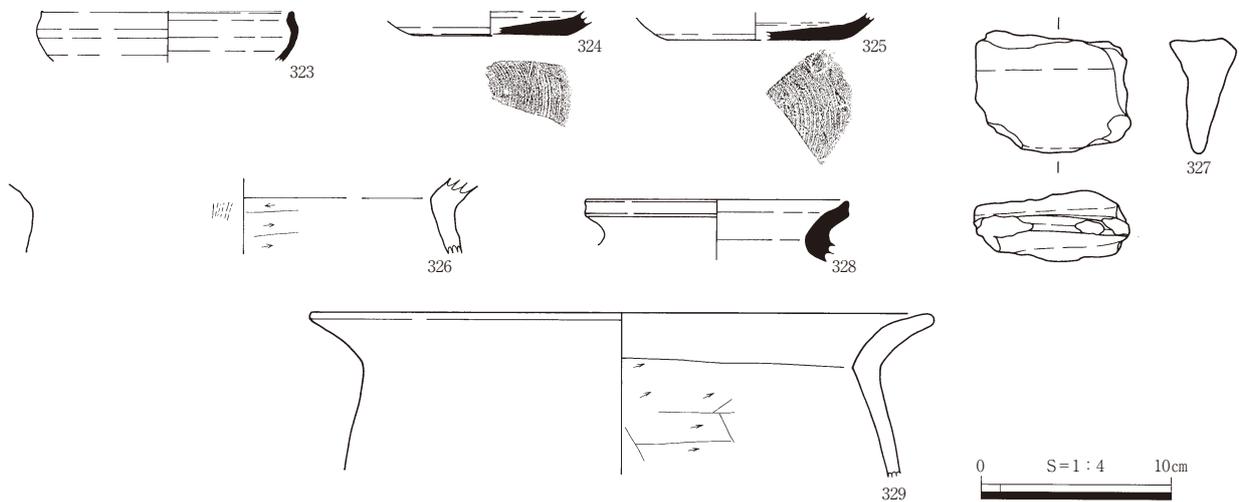
(7)溝、耕作痕

SD7～30(第14・113図、PL.37・38・101)

梅田萱峯遺跡6区南側の調査区では表4に示した溝が確認された。このうちSD8・10・13・16・17・18は主軸を東北東に、SD9・15は西北西にとる。切り合い関係ではSD10と15の切り合いは不明であったが、SD9と10の切り合い関係より、SD9の方が新しい時期であることがわかった。このことから敷衍すれば、東北東方向に主軸を向ける溝よりも西北西に向ける溝の方が新しいものかもしれない。そのほかではSD11と後述の耕作痕が切り合っており、SD11が新しい時期のものである。

上記溝の性格であるが、SD16や17などは埋土にシルトが堆積することから帯水した溝もあったと思われる。またSD7は後述の耕作痕が中に並んで存するが、耕作痕と異なり、東側に長くのびることから耕作を区画するような溝であったかもしれない。しかし、そのほかに関しては、SD27、28がその方位から耕作痕の可能性のあるものの、多くは性格が不明である。出土遺物には323～328のほか弥生土器や土師器、須恵器の細片が出土するが、奈良時代のものを下限とする。

SD7～30の帰属時期であるが、出土遺物は奈良時代以降のものを下限として認められるものの、本遺跡6区の出土遺物がほぼ奈良時代の遺物を下限とすることから、出土遺物からこれらの溝の時期を特定することはできない。(野口)



第113図 SD7・8、P234出土遺物

耕作痕(第14図、PL.38)

梅田萱峯遺跡6区南側では、4区に引き続き二箇所耕作痕を確認した。このうち調査区南側中央G～K36～38グリッドの耕作痕は南北方向、西側M・N32・33グリッドの耕作痕は4区と同様東西方向をとる。南東側の耕作痕は、畝間と思われる掘削が深く及んだところを溝として20条確認した。谷部の深いところは後世の削平を受けるが南北斜面にまたがり認められ、等高線とは直交する。長さ6.8～26.4m、幅10～50cm、深さ2.1～18cmの規模で確認され、埋土には褐色土、暗褐色土が見られる。

北西側の耕作痕も畝間と思われる掘削が深く及んだところが9条の溝として確認されたが、なかほどにあるSD7に関しては他の耕作痕と比べ東側にも延びて認められることから耕作を区画するようなものであったかもしれない。規模は長さ3.6～14.6m、幅30～100cm、深さ1.2～13.8cmを測り、埋土には灰黄褐色土や暗褐色土などが堆積する。

耕作痕の時期であるが、SD11と南東側耕作痕で切り合い関係が認められ、SD11よりも古い時期であるが、前述のとおりSDの時期の下限が不明であるため、本耕作痕も不明である。(野口)

(8)ピット

調査区内で検出した単発的なピットは87基を数える。位置や規模は第14図、表5に譲る。ここでは特徴的なピット、あるいは出土遺物に限って述べることとする。

P300(第114・115図、巻頭図版2-2、PL.105)

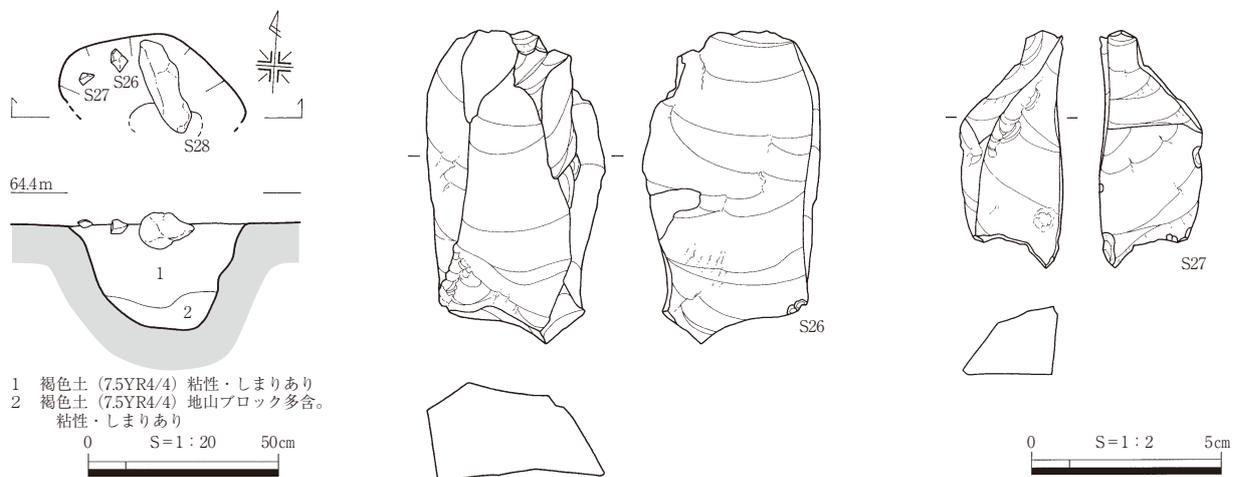
L34グリッドに位置する。黒曜石製の大型石核が出土したためその周囲を精査したところ、推定で長軸50cm、短軸35cm、深さ30cmのピットに伴うことが判明した。石核S28は長軸が北西から南東方向を向くように、やや傾いた状態で出土し、その西側に黒曜石製剥片S26・27が器体を立てた状態で認められた。いずれも埋土上層のものである。

S26は分厚い剥片であるが、この左側面にS27が接合する。S28は長さ26.9cmの石核である。全面剥離面に覆われるが、稜線には摩滅あるいは潰れが認められる。目的的な剥片を剥離したのは表面のみで、ここにS26・27が接合する。すべて合わせた重量は2,113gである。

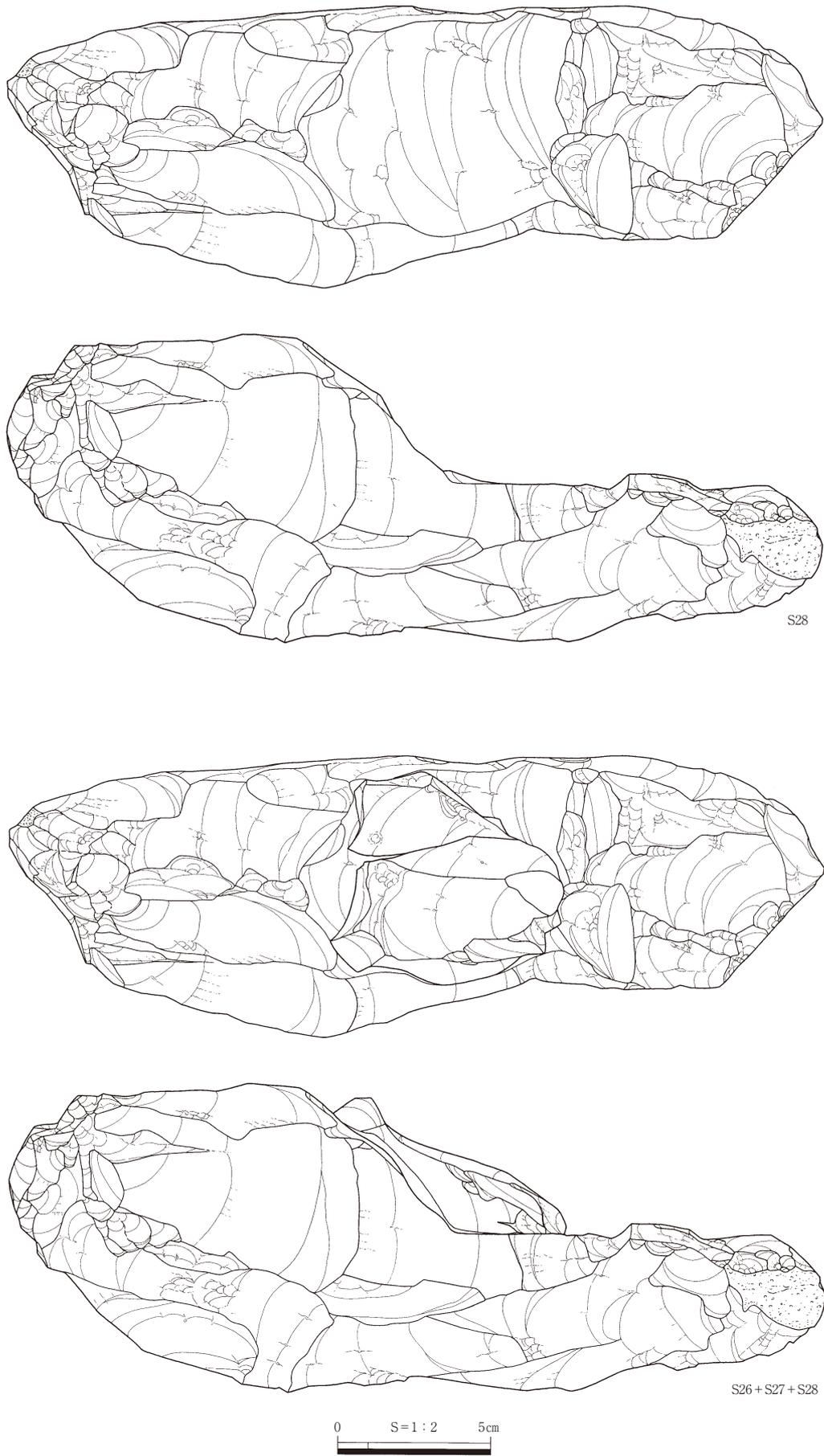
接合状態におけるS26の打点位置は不自然で、おそらく偶発的な割れに伴うものであろう。この3点に残された剥離面を見てもかなりウェーブしていたり、末端部が蝶番剥離を起こしていたりと、素材となった黒曜石の質があまり良くないことを示している。(湯村)

P234(第113図、PL.101)

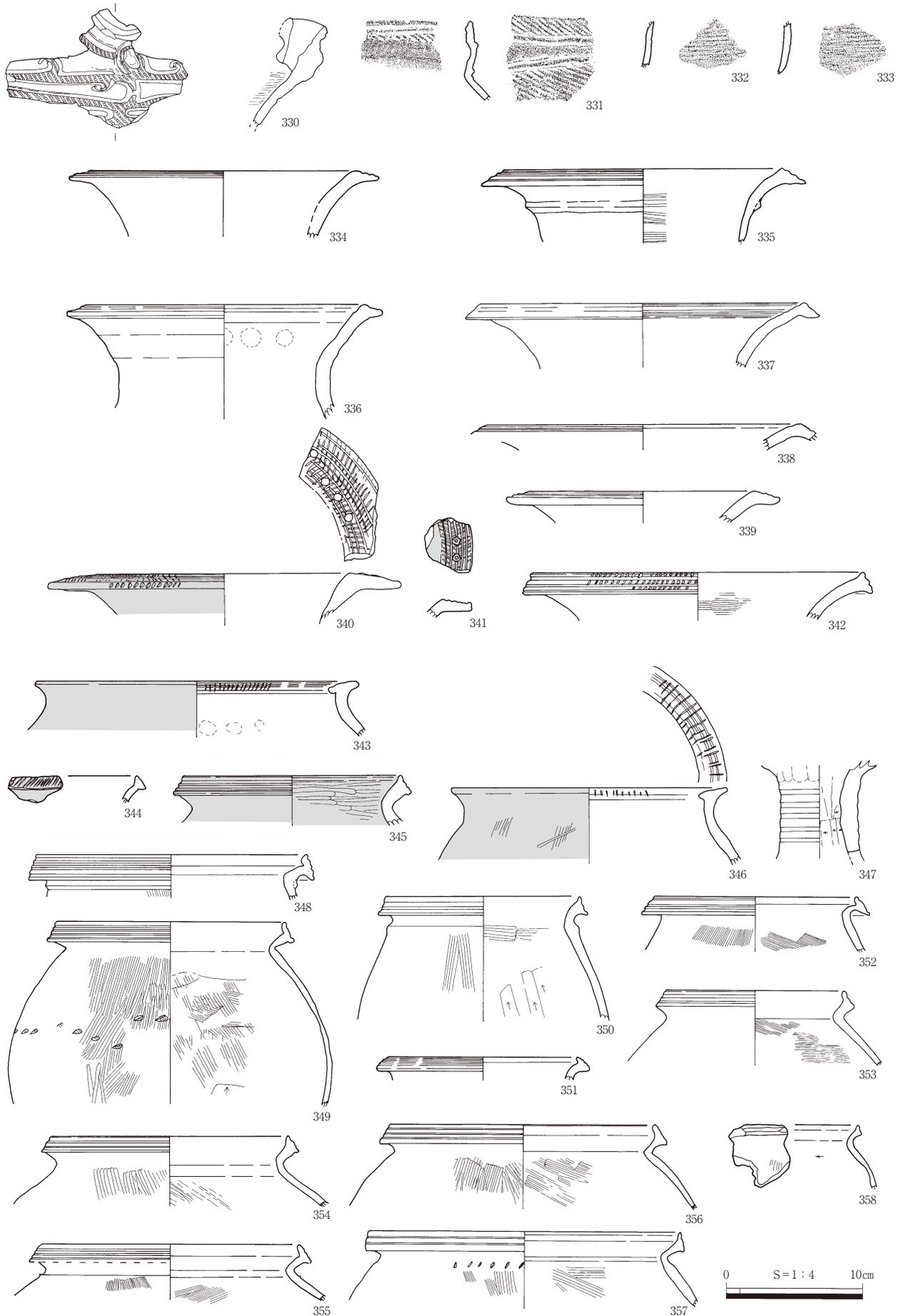
N30グリッドで検出されたSB5に近接する。埋土上層から土師器甕329が出土した。大きく開く単純口縁を持つ。この甕は奈良時代の特徴を示し、SB5も同時期であるため、P234はSB5に関連するものかもしれない。(湯村)



第114図 P300および出土遺物(1)



第115図 P300出土遺物(2)

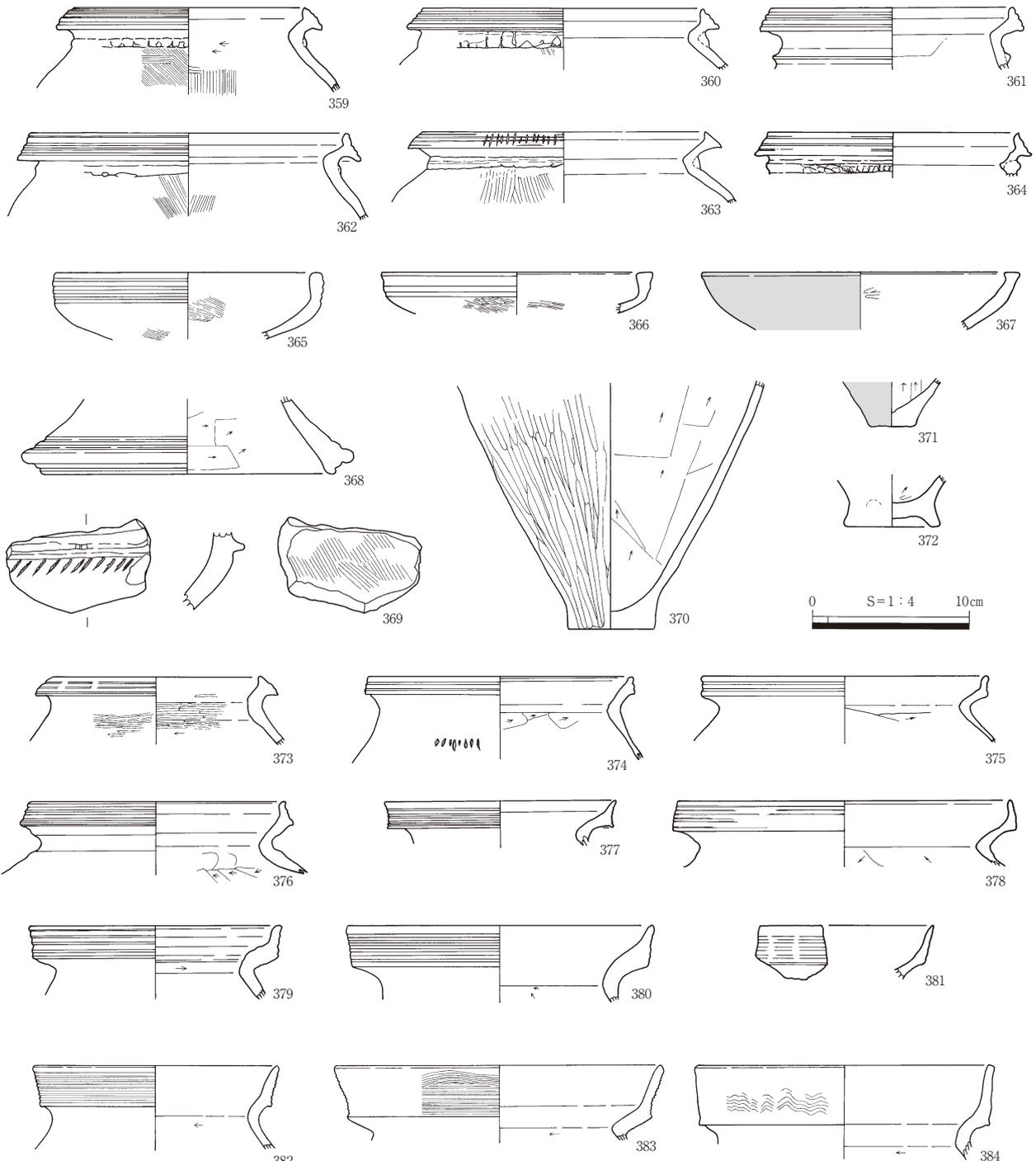


第116図 遺構外出土遺物(1)

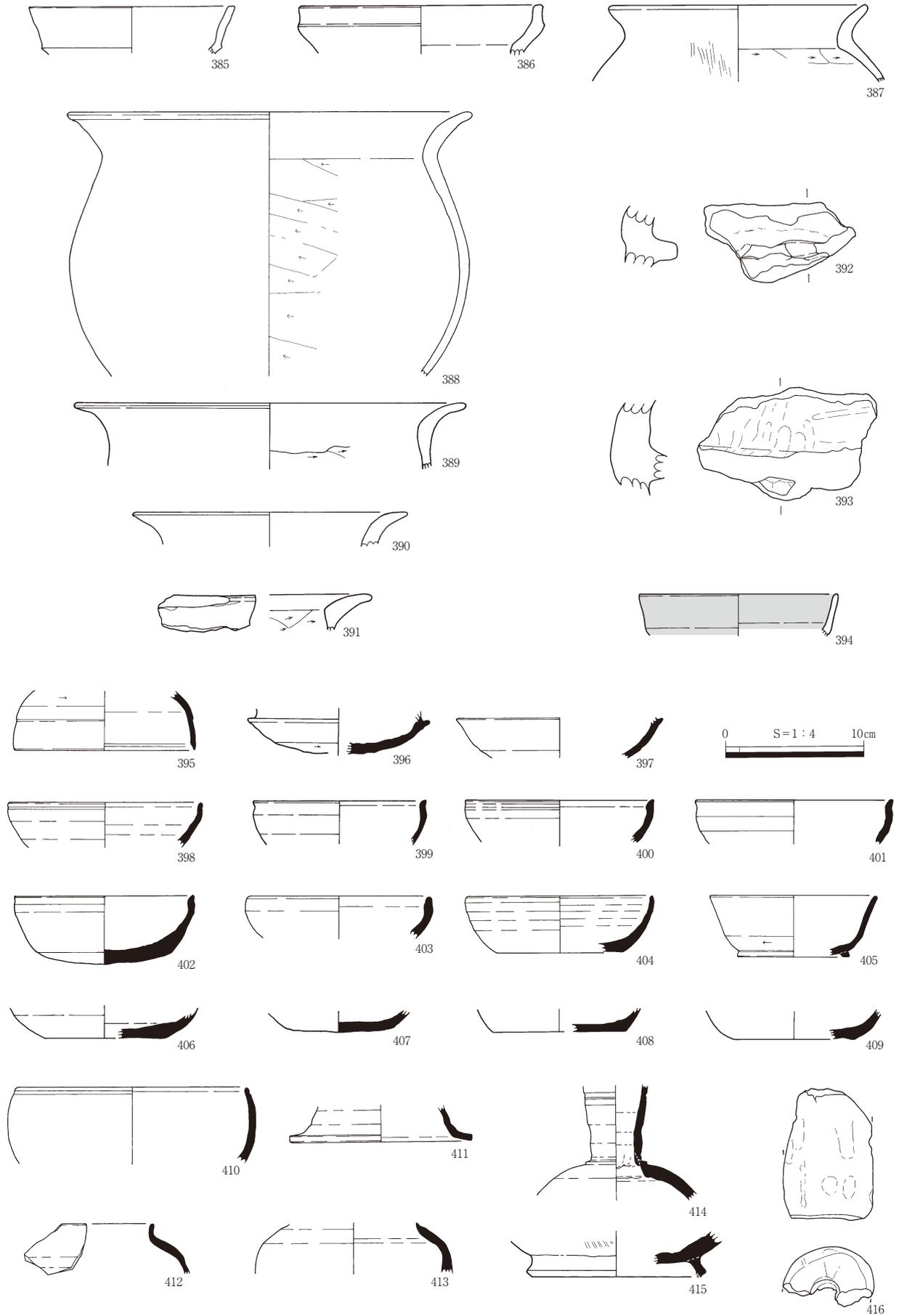
第5節 遺構外出土遺物(第116～119図、PL.100～104・109)

330～333は縄文土器である。330は深鉢の口縁部で磨消縄文が見られ縄文時代後期前葉の福田KⅡ式に相当すると思われる。331は波状口縁をもつ深鉢の口縁部で、口縁端部に半裁竹管による押引文がみられる。また横位に巡る隆線上を半裁竹管によりナデている。中期前半の船元式と思われる。332・333は縄文が施された体部破片である。

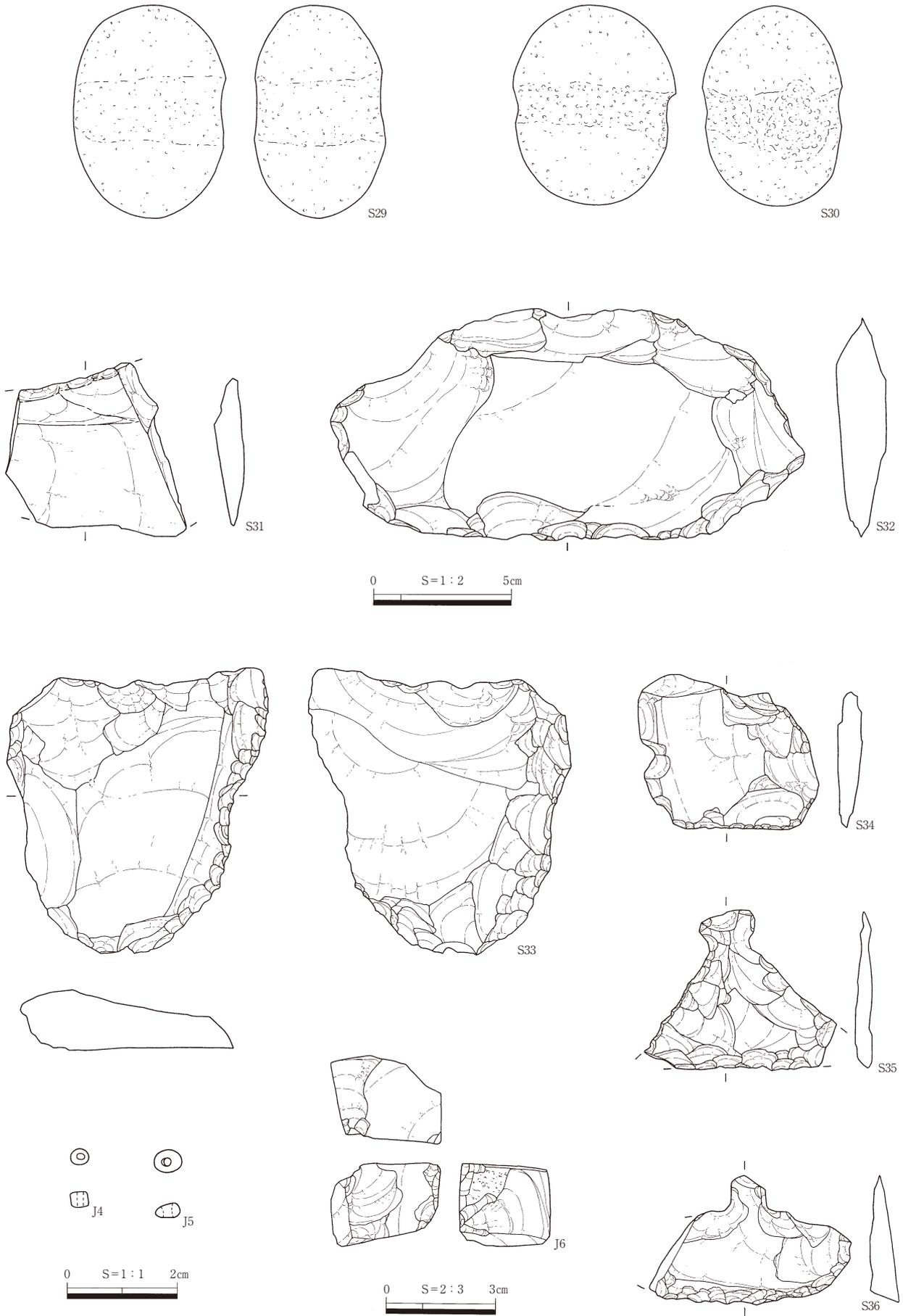
334～384は弥生土器である。372までは弥生時代中期後葉のものを掲載した。334～342は広口壺で、凹線文以外にキザミや円形浮文を加えるものもある。343・346は口縁端部を肥厚させ、凹線文とキザミを施す直口壺。いずれも外面に赤色塗彩を施す。344は端部にキザミと円形浮文を施した口縁部破



第117図 遺構外出土遺物(2)



第118図 遺構外出土遺物(3)



第119図 遺構外出土遺物(4)

片であるが、赤色塗彩されており壺の可能性はある。345も形態的には甕としていいだろうが、内面をヘラミガキで仕上げ、内外面が赤色塗彩されるので壺と思われる。347は脚付壺の脚部か。

348～364は口縁端部を拡張し凹線文を施す甕で、359～364は頸部に貼付突帯を巡らせる。貼付突帯はナデが加えられる。

365～367は高坏の坏部。368は脚付壺か高坏または器台の脚裾部である。369は突帯を貼り付けた下に刺突文を巡らせる。破片のため径は復元できないが大型品と思われ、器壁も厚い。高坏の坏部または鉢か。370～372は壺または甕の体部下半から底部である。371は外面に赤色塗彩が施される。372は低い脚を持つ。

373～384は弥生時代後期の土器である。373～376は口縁部外面に凹線文が施されるが、内面のケズリ調整が頸部に達しており、後期前葉(V-1)に位置づけられる。377～384は後期中葉(V-2)及び後期後葉(V-3)の土器で、口縁部が上方に拡張され、端部に貝殻腹縁または櫛状工具による沈線文が施される。384は波状の沈線文を施した後、上半をナデ消している。

385～388は古墳時代の土師器甕である。385は複合口縁で下端の突出はにぶい。前期中葉(天神川Ⅲ期)と思われる。386も複合口縁であるが、上方への立ち上がりが短い。後期(天神川Ⅹ期)と思われる。387・388は単純口縁の甕である。体部の張りは強い。

389～391は奈良時代の土師器甕である。394は坏。内外面赤色塗彩が施される。392・393は竈の底のあたりの破片である。

395～415は須恵器。395～397は6世紀代の坏蓋及び坏身である。398～409は8世紀代の坏。398は口縁部直下に沈線が巡り、やや古い様相を示す。399～403は口縁端部にくびれを持つ。405は底部に高台を貼り付ける。406～409は底部資料で、409が静止糸切りのほかは回転糸切り痕を残す。410は鉢、411は脚付坏の脚部か。414は長頸壺、412・413は短頸壺である。

S29・30は瀬戸内型石錘で、器体中央を横位に巡る溝を作り出す。S31は大型石庖丁。S32～34はサヌカイト製の石庖丁未製品あるいは欠損品などである。石器製作のための素材として持ち込まれたものだろう。S35・36はサヌカイト製の石匙。

J6は緑色凝灰岩を用いた管玉製作に伴う直方体素材である。大ぶりの剥離でサイコロ状に整えられている。擦り切り痕は見られない。J4・5はガラス小玉。SI20、SK153周辺で遺構精査中に近接して出土した。
(湯村)

表4 溝一覧表

遺構名	位置	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土
SD 7	K~N33	32.8	115.0	13.0	黒褐色土(10YR3/1)粘性普通、しまりやあり
SD 8	K34	10.0	56.0	10.3	褐色土(10YR4/4)粘性あまりなし、しまりややあり
SD 9	L34	12.7	44.0	9.3	暗褐色土(10YR3/3)粘性・しまり普通
SD10	L34	6.2	40.0	9.2	褐色土(10YR4/4)粘性普通、しまりややあり
SD11	J34~37、K38~41	75.5	80.0	10.0	黒褐色土(10YR2/3)粘性・しまりややあり
SD12	M・N35	19.8	54.0	21.2	暗褐色土(10YR3/3)粘性・しまり普通
SD13	M33	7.0	42.0	4.0	灰黄褐色土(10YR4/2)粘性・しまり普通
SD14	K34	6.3	74.0	6.7	暗褐色土(10YR3/3)粘性あまりなし、しまり普通
SD15	L35	9.2	45.0	9.1	灰黄褐色土(10YR5/2)粘性・しまり普通
SD16	L35	6.6	67.0	11.9	にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性普通、しまりややあり、シルト混入
SD17	L35	9.9	60.0	12.2	にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性・しまり普通、シルト混入
SD18	L35	11.7	68.0	14.3	褐色土(10YR4/4)粘性・しまり普通
SD19	N35	3.4	50.0	6.3	灰黄褐色土(10YR4/2)粘性普通、しまりややあり
SD20	N35	2.9	34.0	8.3	灰黄褐色土(10YR4/2)粘性普通、しまりややあり
SD21	L35	1.4	36.0	12.2	褐色土(10YR4/4)粘性・しまり普通
SD22	L35	4.4	64.0	15.1	暗褐色土(10YR3/3)粘性・しまり普通
SD23	L36	2.8	49.0	6.1	暗褐色土(10YR3/4)粘性・しまり普通
SD24	L36	2.0	27.0	7.0	暗褐色土(10YR3/4)粘性・しまり普通
SD25	L35	2.5	66.0	13.6	暗褐色土(10YR3/3)粘性普通、しまりあまりなし
SD26	L35	1.9	37.0	15.0	暗褐色土(10YR3/3)粘性・しまり普通
SD27	K36	2.3	57.0	9.8	暗褐色土(10YR3/4)粘性普通、しまりあまりなし
SD28	K36	2.2	30.0	9.9	にぶい黄褐色土(10YR4/3)粘性・しまり普通
SD29	G・H35、H36	17.7	50.0	10.7	褐灰色土(10YR4/1)
SD30	J40、K40・41	26.3	57.0	19.2	褐色土(10YR4/6)粘性あまりなし、しまりややあり

表5 ピット一覧表

ピット番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	ピット番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P234	N30	53.0	47.0	36.3	P278	L39	35.0	25.0	32.4
P235	L23	70.0	60.0	28.0	P279	L39	40.0	40.0	28.6
P236	M25	60.0	50.0	25.0	P280	L39	45.0	40.0	22.0
P237	N27	35.0	30.0	32.0	P281	G34	30.0	25.0	15.6
P238	L26	66.0	40.0	57.0	P282	G34	35.0	25.0	17.3
P239	N27	30.0	30.0	23.9	P283	G34	30.0	25.0	33.3
P240	N27	20.0	15.0	23.4	P284	J35	30.0	25.0	14.6
P241	N28	35.0	35.0	29.9	P285	H35	25.0	25.0	25.1
P242	N28	40.0	40.0	21.8	P286	H35	40.0	35.0	13.5
P243	N28	40.0	35.0	23.5	P287	G35	30.0	20.0	20.1
P244	N28	35.0	30.0	21.1	P288	F35	30.0	25.0	25.4
P245	N30	60.0	55.0	15.9	P289	F35	35.0	25.0	24.3
P246	N30	25.0	20.0	15.5	P290	J36	35.0	35.0	32.4
P247	N31	45.0	35.0	30.5	P291	J36	35.0	30.0	28.1
P248	N31	30.0	25.0	20.8	P292	J36	45.0	30.0	32.8
P249	N33	35.0	35.0	53.7	P293	J36	30.0	30.0	29.4
P250	M34	40.0	40.0	35.0	P294	J36	30.0	25.0	23.0
P251	M34	50.0	35.0	51.7	P295	J36	40.0	30.0	24.0
P252	K34	45.0	40.0	32.3	P296	J36	25.0	25.0	43.7
P253	K34	40.0	30.0	37.1	P297	J36	25.0	20.0	33.1
P254	N35	45.0	40.0	39.3	P298	I36	35.0	30.0	45.4
P255	N35	35.0	30.0	40.5	P299	I36	30.0	30.0	35.0
P256	L35	40.0	20.0	23.5	P300	L34	※50.0	※35.0	30.0
P257	L35	40.0	30.0	26.0	P301	I36	54.0	47.0	45.4
P258	M36	40.0	35.0	20.6	P302	I36	46.0	36.0	41.8
P259	M36	50.0	45.0	22.9	P303	I36	52.0	44.0	49.7
P260	M36	45.0	35.0	22.4	P304	I36	60.0	46.0	29.1
P261	M36	35.0	35.0	21.5	P305	J37	45.0	40.0	32.0
P262	M36	30.0	25.0	27.1	P306	I37	34.0	31.0	23.4
P263	L36	35.0	35.0	17.3	P307	I37	58.0	38.0	36.1
P264	L36	45.0	35.0	21.7	P308	G37	60.0	55.0	61.5
P265	L37	40.0	30.0	22.0	P309	F37	25.0	25.0	25.7
P266	L37	45.0	35.0	22.6	P310	J38	40.0	35.0	36.6
P267	N38	40.0	35.0	71.2	P311	I38	44.0	33.0	35.3
P268	N38	※55.0	50.0	79.2	P312	J39	30.0	25.0	29.6
P269	L38	40.0	25.0	39.6	P313	J39	35.0	25.0	26.4
P270	L38	40.0	35.0	78.9	P314	J39	25.0	25.0	31.4
P271	L38	30.0	25.0	34.6	P315	J39	35.0	30.0	21.3
P272	L38	40.0	30.0	15.9	P316	J39	30.0	25.0	17.9
P273	L38	25.0	25.0	23.1	P317	J39	35.0	25.0	32.9
P274	L38	40.0	35.0	38.9	P318	H39	35.0	30.0	43.4
P275	K38	35.0	30.0	27.3	P319	H39	30.0	30.0	27.3
P276	K38	30.0	25.0	23.0	P320	H40	55.0	45.0	27.9
P277	L39	30.0	30.0	30.5					